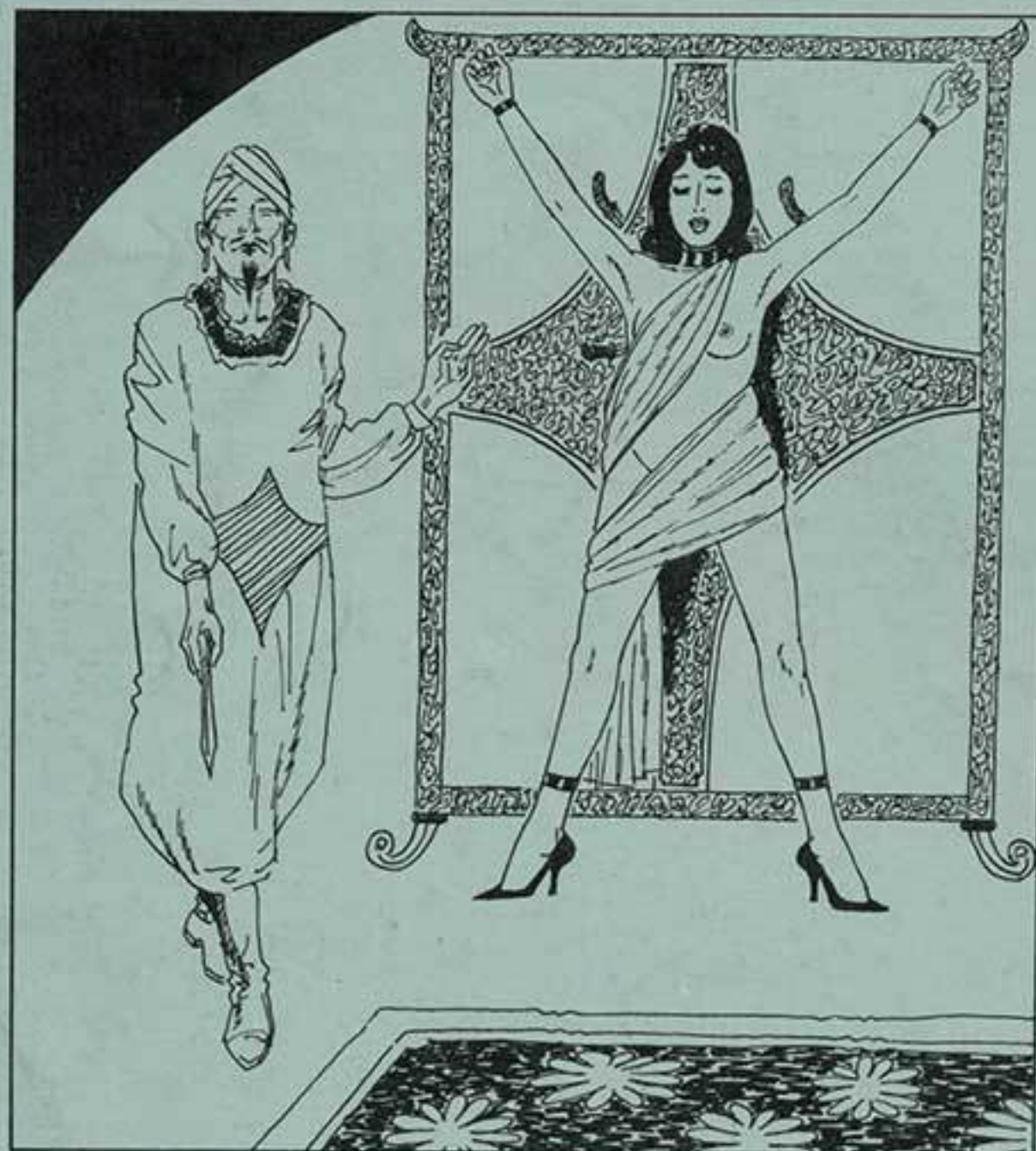


奇譚クラス

新しい風俗文獻誌

1964・12



12月号

昭和三十九年十一月二十日印刷昭和三十九年十二月一日発行十二月分第十八巻第一号毎月一回一日発行昭和三十一年四月二十日第三巻第三号雑誌認可昭和三十一年六月十七日国書刊行局特別頒布承認第一二二二号

奇譚クラス

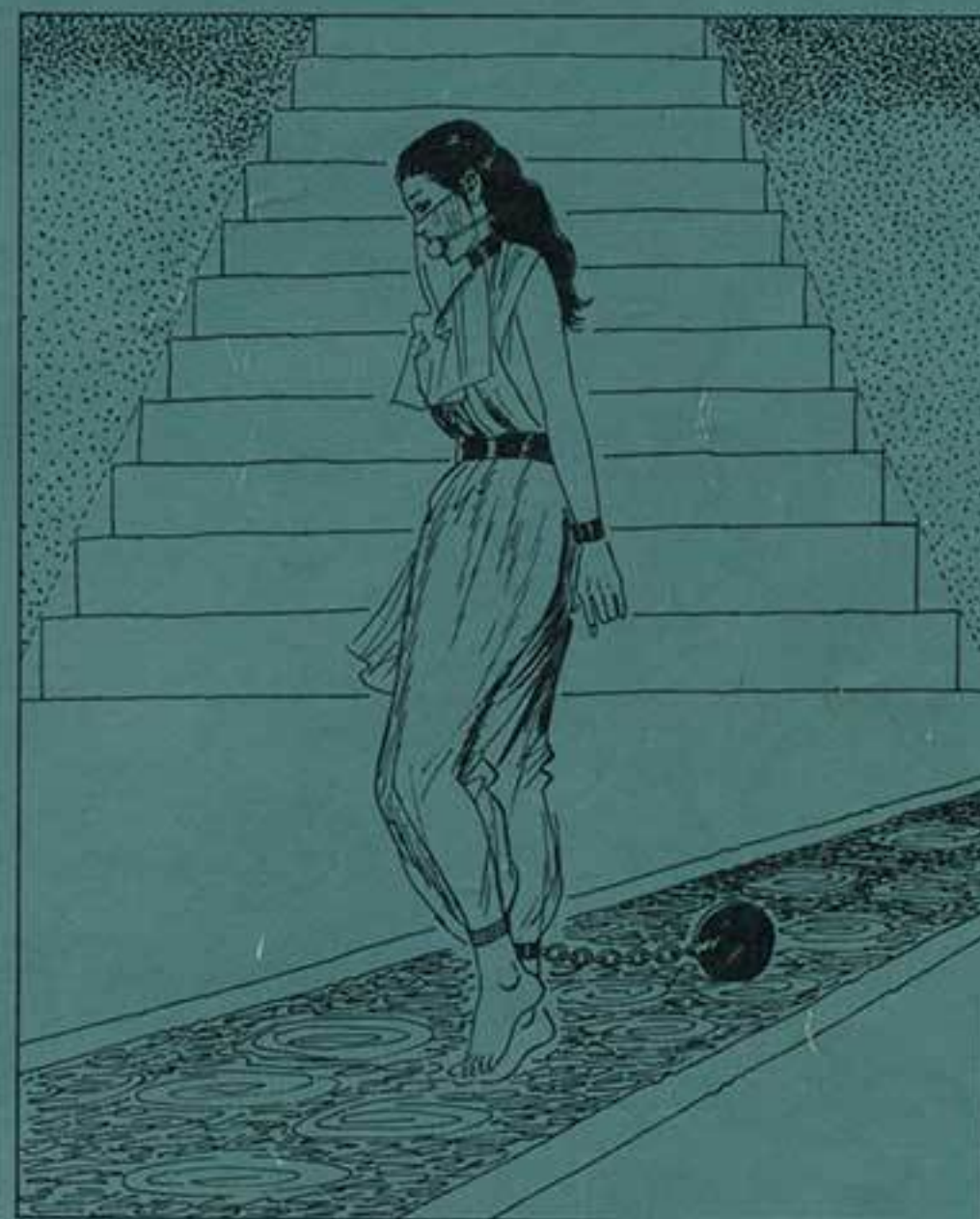
12月号

定価三〇〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



12月号

¥300

「最新版」 女体悦虐写真集印画紙版

G組百姿集

大手札型印画紙 (9×13 ㎝) 焼付

各組一枚一組 (送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

12	全裸しぼりと浣腸器 (玉田)
11	浣腸器に脅びえる女 (玉田)
10	恐怖のいたぶり (新井)
9	手吊り全裸さらし (玉田)
8	全身ガンジガラメ (大塚)
7	煙草責と荒縄緊縛 (大塚)
6	縄に羞らう裸しぼり (長野)
5	敷布に悶える白い肌 (玉田)
4	一糸まとわぬ晒し者 (玉田)
3	豊臀と足首と後手縛 (玉田)
2	アグラで縛られる (玉田)
1	顔面から全身嚴重縛 (東浦)

38	柔肌は縄にくびれて (玉田)
37	裸を誇りの椅子縛り (玉田)
36	写真に埋れた全裸姿 (大塚)
35	美貌と豊胸を誇る女 (長野)
34	典型的な股間しぼり (大塚)
33	足でなぶられる鼻 (大塚)
32	踊子の緊縛ポーズ (絹川)
31	肥り肉を晒らす女 (東浦)
30	逆エビと浣腸器 (大塚)
29	緊縛裸身を誇る足 (長野)
28	白肌は縄にくびれて (大塚)
27	革の猿轡で責める (新井)
26	机の脚に縛られる (新井)
25	肌に刺さる荒縄 (大塚)
24	豊胸に黒紐の輝やき (長野)
23	後手縛全裸椅子跨ぎ (東浦)
22	縛られて鼻を任す (大塚)
21	二つの乳房アップ (長野)
20	足首と後手首と (玉田)
19	椅子に縛られた全裸 (玉田)
18	諦観の後手しぼり (玉田)
17	責写真に埋れた緊縛 (大塚)
16	黒フンで縛られる女 (玉田)
15	そりかえる鼻の頭 (大塚)
14	美しき全裸強調縛り (大塚)
13	踏みつけられる美貌 (大塚)

69	木馬責め斜め後姿 (大塚)
68	首枷のさらしもの (大塚)
67	目かくしのハリツケ (大塚)
66	手吊り足縛り仰臥 (新井)
65	猿ぐっわの婉な表情 (新井)
64	後手縛全裸の美しさ (大塚)
63	強奪されたパンティ (大塚)
62	責めぬかれた表情美 (大塚)
61	可憐ないじめられ様 (大塚)
60	両手吊りの猿ぐっわ (新井)
59	無抵抗の裸いじめ (大塚)
58	不安定な台上股間縛 (大塚)
57	色魔に脱がされる (新井)
56	後手縛りで寝室へ (絹川)
55	椅子に跨がされた女 (新井)
54	後手吊り全裸の美 (玉田)
53	全裸後手吊り晒し (玉田)
52	後手首縄膝頭一括縛 (木村)
51	全裸胴絞め首縄猿轡 (木村)
50	全裸正面強烈亀甲縛 (木村)
49	嚴重荷造縛りの全裸 (玉田)
48	股間縛り全裸重量感 (大塚)
47	後手逆エビ強烈鼻責 (大塚)
46	裸身の美を誇る縛り (長野)
45	荒縄と豆絞りの猿轡 (大塚)
44	トイレを前にして (大塚)
43	庭の見える部屋にて (大塚)
42	オシメカバー縛り (大塚)
41	女囚縛られ姿 (宇治)
40	女囚哀欲 (宇治)
39	全裸の肌は縄まかせ (玉田)

100	膨大な臀部を眼前に (大塚)
99	反りかえる緊縛裸身 (長野)
98	台上の緊縛裸身像 (長野)
97	股間縛り全裸の膝立 (大塚)
96	臍乳房強調喰込む縄 (大塚)
95	白肌に映える光の縞 (玉田)
94	全裸アグラ坐り縛り (玉田)
93	裸身を晒す両手縛り (大塚)
92	六尺禪巨大臀部虐め (大塚)
91	白布の猿轡と白肌責 (木村)
90	奴隷の裸身を捧げる (木村)
89	後手縛り裸立姿晒し (木村)
88	美麗の全裸に嚴重縄 (玉田)
87	豊満裸身を誇る緊縛 (玉田)
86	全裸でしやがむ後手 (玉田)
85	ヤンチャ娘開股縛り (長野)
84	膨隆見事な乳房責め (長野)
83	巨大な臀部全裸後手 (大塚)
82	首縄開股強烈縛り (木村)
81	蒲団上に転がった女 (遠藤)
80	全裸後手足首連繫縛 (玉田)
79	両手開き吊り顔虐め (新井)
78	首吊りの責め (新井)
77	美貌をいためつける (絹川)
76	縄にもだえる美女 (絹川)
75	白肌で縄にうそぶく (長野)
74	豊満を誇る露出癖 (長野)
73	長髪垂らし全裸縛り (長野)
72	火あぶりにあう女 (大塚)
71	革全頭マスクと手錠 (大塚)
70	木馬責め斜め前姿 (大塚)



奇譚クラブ 12月号 目次

緊縛フォトのアルバム 本誌写真部撮影

＜グラビヤ＞

芸妓姿の愛読者を縛る
可憐な表情の縛られ姿
刺青の魅力を強調
徹しい縄目に微笑む玉取姫
三面鏡にもだえる美女
発散する妖美と猟奇
鼻孔開口器のいたずら
猿ぐつわ四態(ゴムカバー利用)
腰ミノをつけた土人娘

アイデア画 顔の雑巾がけ 四馬孝・画

四馬孝画集 美しくて可憐な実験台 四馬孝・画

女体切腹 恋人のあとを追って果てる娘 四馬孝・画

M画 尻の下に敷かれる 春川ナミオ・画

娘相撲 「小股すくい」 雪崎京人・提供

責画 ホステスの受難 四馬孝・画

◆奇クサロン◆

編集部編 (33)

残酷な交通事故 編集部 (33) ○「おしめカバーと私」 竹野ひろ子 (34)
妊娠マニアの期待 瀬沼四郎 (35) ○サロンの楽我記 辻村隆 (38) ○桃色攻勢続く
の責め方 宝塚三夫 (37) ○「流腸通信」 検便と流腸 本間喜一郎 (40) ○ボク
映画界 丸井真次 (39) ○「流腸通信」 検便と流腸 本間喜一郎 (40) ○ボク
家族制度 残酷物語 悲恋の情死 森田敬三 (41) ○「流腸通信」 検便と流腸 本間喜一郎 (40) ○ボク
食卓 (42) ○「流腸通信」 検便と流腸 森田敬三 (41) ○「流腸通信」 検便と流腸 本間喜一郎 (40) ○ボク
「断片」性的前衛 栗瀬長 (44) ○「妻の妊娠と見たい」 S・T生 (43) ○「マ
ニヤ通信」デラックスの五日間 伊豆得三 (48) ○SMのダブル・プレイ
三隅良信 (47) ○「流腸通信」 伊豆得三 (48) ○SMのダブル・プレイ

奇クサロンに寄せて 芳野眉美 (50)

「花と蛇」回顧讃 畑村信一 (54)

△団鬼六先生に捧ぐ△

ラテン音楽と奴隷の血と 原辺露光 (67)

手記 蛙腹女体解剖 高野原美 (72)

妖異女斗美八景 (女体解剖マニヤの夢) 佐藤健児 (80)

サド・サスベンス・シリーズ 佐藤健児 (80)

深夜の市長 (オリオン星座の捧げもの) 佐原陽一郎 (90)

奇譚三十九夜物語 (大団円) 辻村隆 (96)

小説にあらわれた女の殺人 (山田風太郎忍法全集より) 黒田寿 (102)

贗作・悩ましのサディズム 芳野眉美 (106)

女斗美ファンタジック・シリーズ 芳野眉美 (106)

節子さんとのレスリング (俊子の打明け話) 芦浦素舞夫 (131)

訊問 (じんもん) 栗瀬長 (112)

血に咲く花 (殉国勇女伝) 田島直士 (118)

告白 私の理想の女性像 田村清彦 (156)

連載小説 花と蛇 続篇第二回 団鬼六 (158)

「奇譚三十九夜物語」完結記念 文責 辻村隆 (170)

「わが体験を語る」座談会 辻村隆 (178)

「緊縛野外撮影会」 辻村隆 (178)

ガン作・マニヤのノート 芳野眉美 (182)

SM・カメラ・ハント 芳野眉美 (182)

刺青の美 めぐり合った謎の女 辻村隆 (190)

娘相撲物語 海野美津男 (196)

南方アブ随筆 女と臍 南方佳男 (204)

読者通信 編集部選 (208)

四馬 孝秘蔵版画面集

大中判 (13×18 厘) 印画紙焼付↓コレクション専用

口絵の制約によって十分その腕を揮うことのできない髀肉の嘆をかこっていた四馬孝氏が、登場の女主人公をすべて全裸に剥いで、美しく目ざましい秘蔵版をものしました。

△責められる美女波津子の痴態▽

大中判五枚一組 一〇〇〇円 略号(しお)

一、恐怖の浣腸責め

ベッドの上には、白く輝やくような肌にとす黒い縄が無惨にも喰い込んでいる。厳しい後手しぼりに身動きもできない波津子、伸びやかな脚を逆エビに持ちあげられし猿ぐつわの下で苦痛にあえいでいる。男の手にした30ccのガラスシリンダーは、今まさにアヌスに迫るとしている恐怖。

二、柱抱きの責め

斜めに立てかけられた五寸柱をアグラに組んだ足で抱くようにしてあらもなく縛られた波津子。豊かに肉のついた胸や腹が、じかに柱に密着して、大きく開ききった両方の太腿のアグラ縛りも恥しい妙齢の女性にとっても、最もむいたらしい責めである。それだけにS的ムード満点である。

三、庭のハダカ責め

夏草の生い茂る庭の棒杭に、両手をひろげ、左足を高々と頭の位置まで挙げて縛られた奇妙な晒しものポーズ。叢から蚊や蟻が白い

△可憐な少女加奈子の羞恥責め▽

大中判五枚一組 一〇〇〇円 略号(しる)

一、ロウソク責め

可憐な美少女加奈子が、この屋敷に囚われの身となって、すでに幾日経つてあるのか。なよなよとした青い実の裸身には、麻縄がむごたらしく肌を痛めつけ、火のついた百匁ロウソクの焰が、テレビの前で足挙げポーズで縛られた加奈子の頬を襲ってくる。嗜虐的な男の眼が恐ろしい。

二、アンヨは上手!

加奈子は男の可愛いペットである。全裸に剥かれて、後手高小手に縛られた上、首と膝頭とを革紐で繋がれ、ヨチヨチと部屋の中を歩かされる。ピンク色に染った繊細な足の指先に力をこめて、転ろげないようと、懸命に歩こうとするが、縛られた身体は遅々として前へ進もうとはしない。

三、逆エビ柱吊り

夜の縁側の柱に、加奈子の白い身体が逆エビ縛りにされて、柱に宙吊りになっている。スタンドの

四、被虐の絶叫

後手高小手縛りの上に、革のベルトの股間縛りで締めつけられて喘ぐ加奈子の右足を無理矢理に挙げて固定しようとする、いやらしい禿頭の暴虐。可憐な加奈子は、あまりのことに悲鳴をあげて絶叫すれば、一層の被虐の念が全身を戦慄させる。そして男には快い音楽と聞えただろう。

五、美しき犠の鑑賞

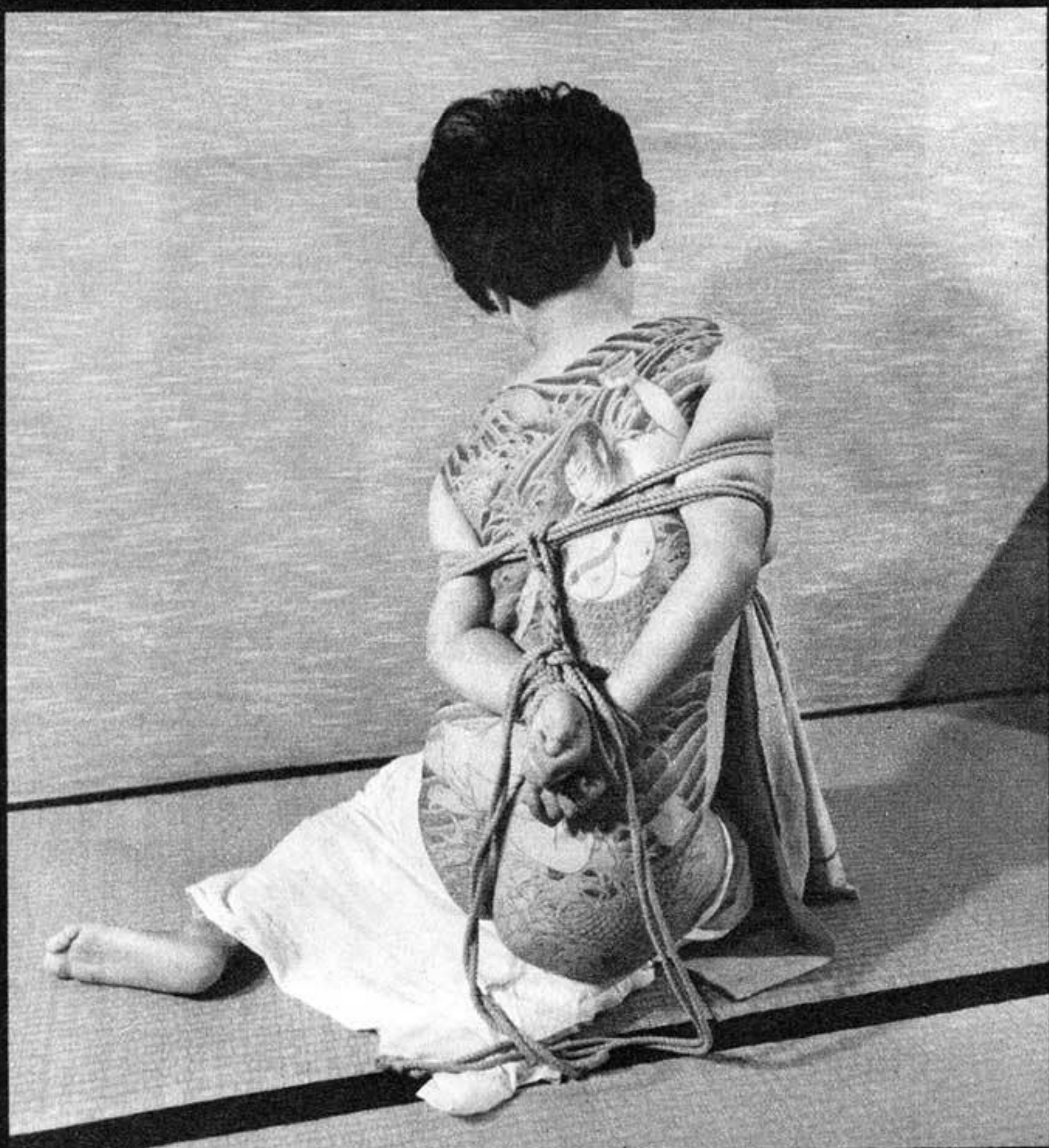
美しい宝石のような加奈子の身動きも出来ない全身を、それこそ足の爪先から髪の毛の一本一本に至るまで、刻明に観察しようという野卑な男の欲望は、彼女をして部屋に柱に晒しもののような恰好で括りあげてしまったのである。好じろじろとナメクジのような目で全身を眺められる気味悪さ。



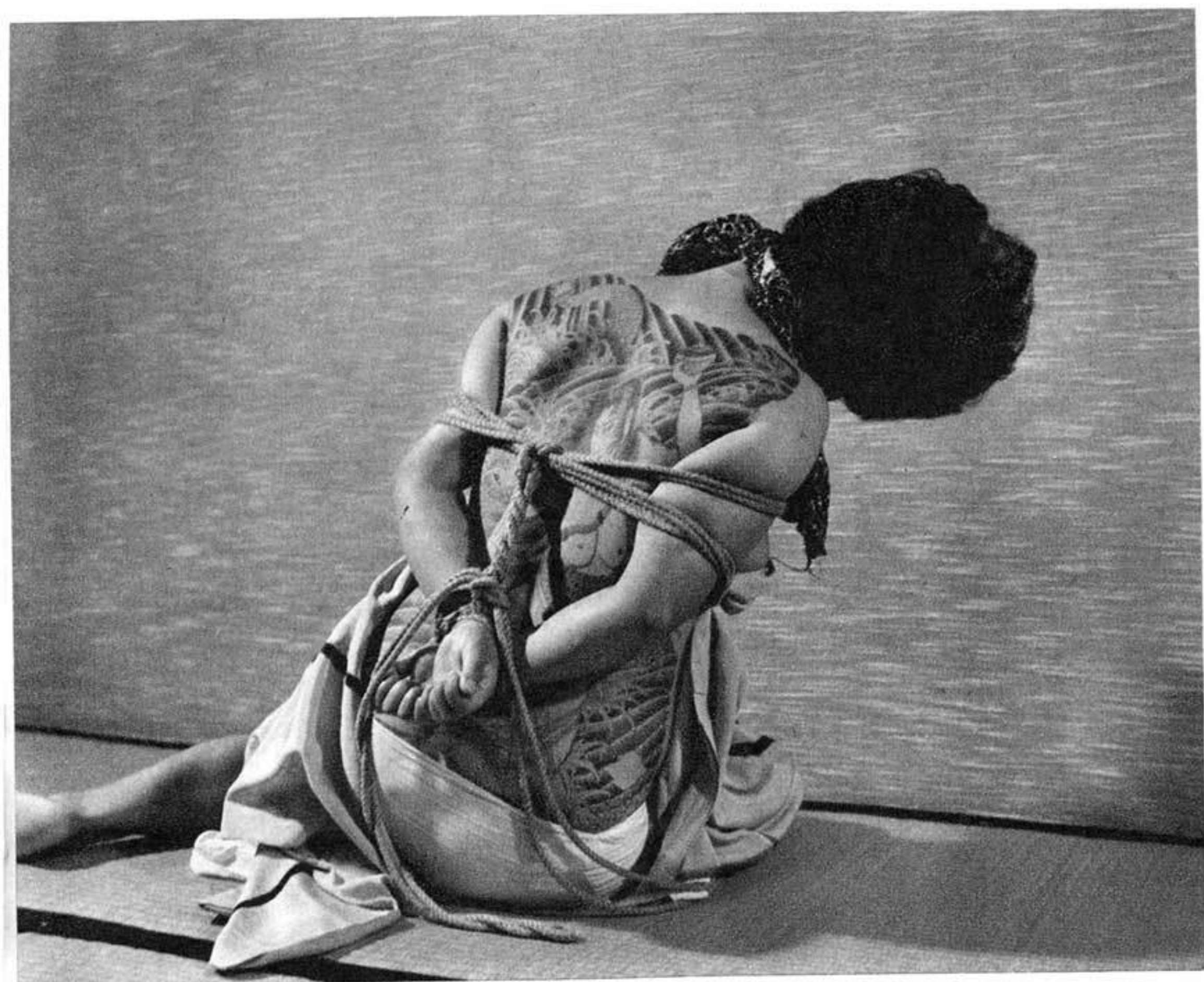


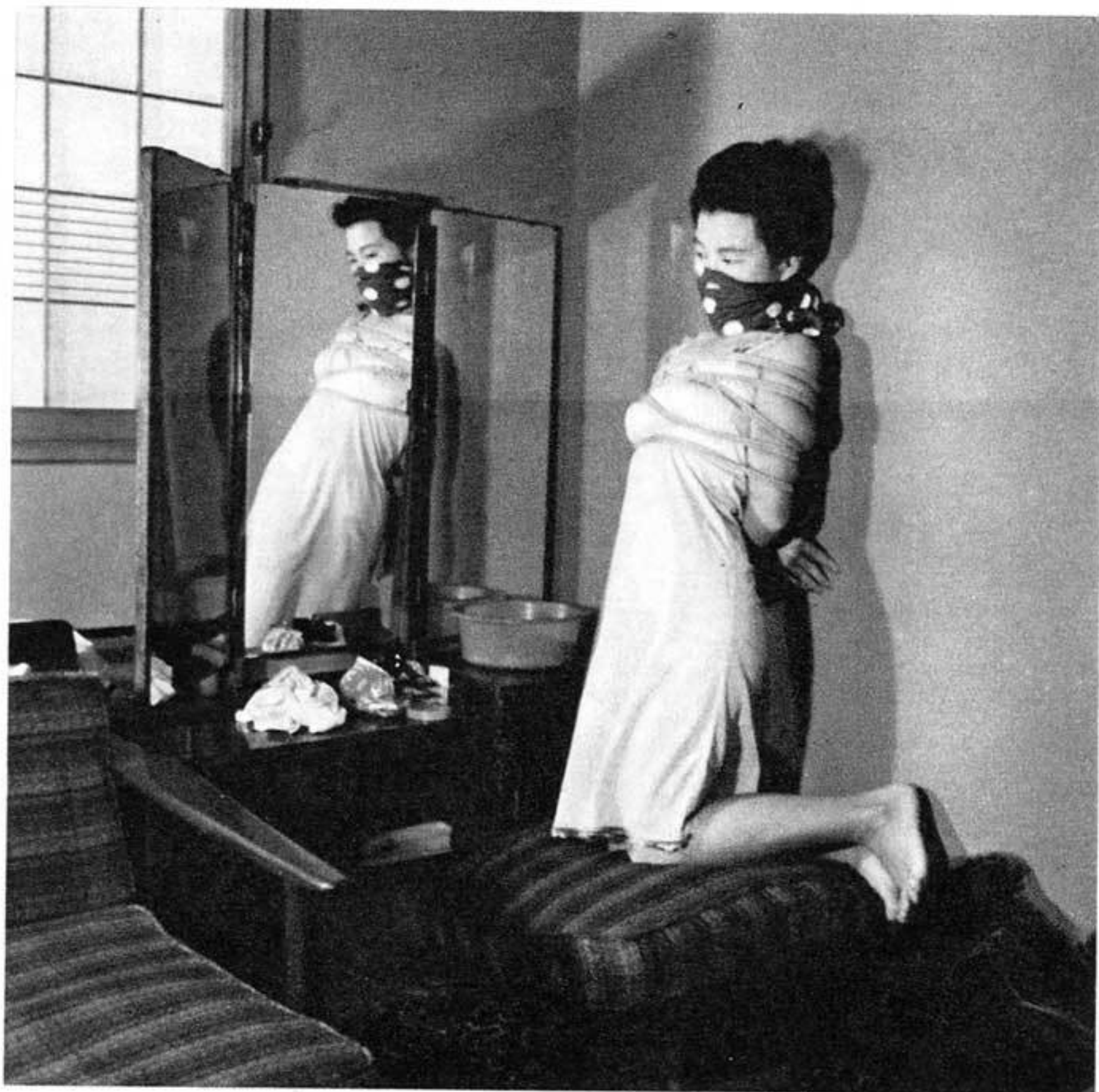


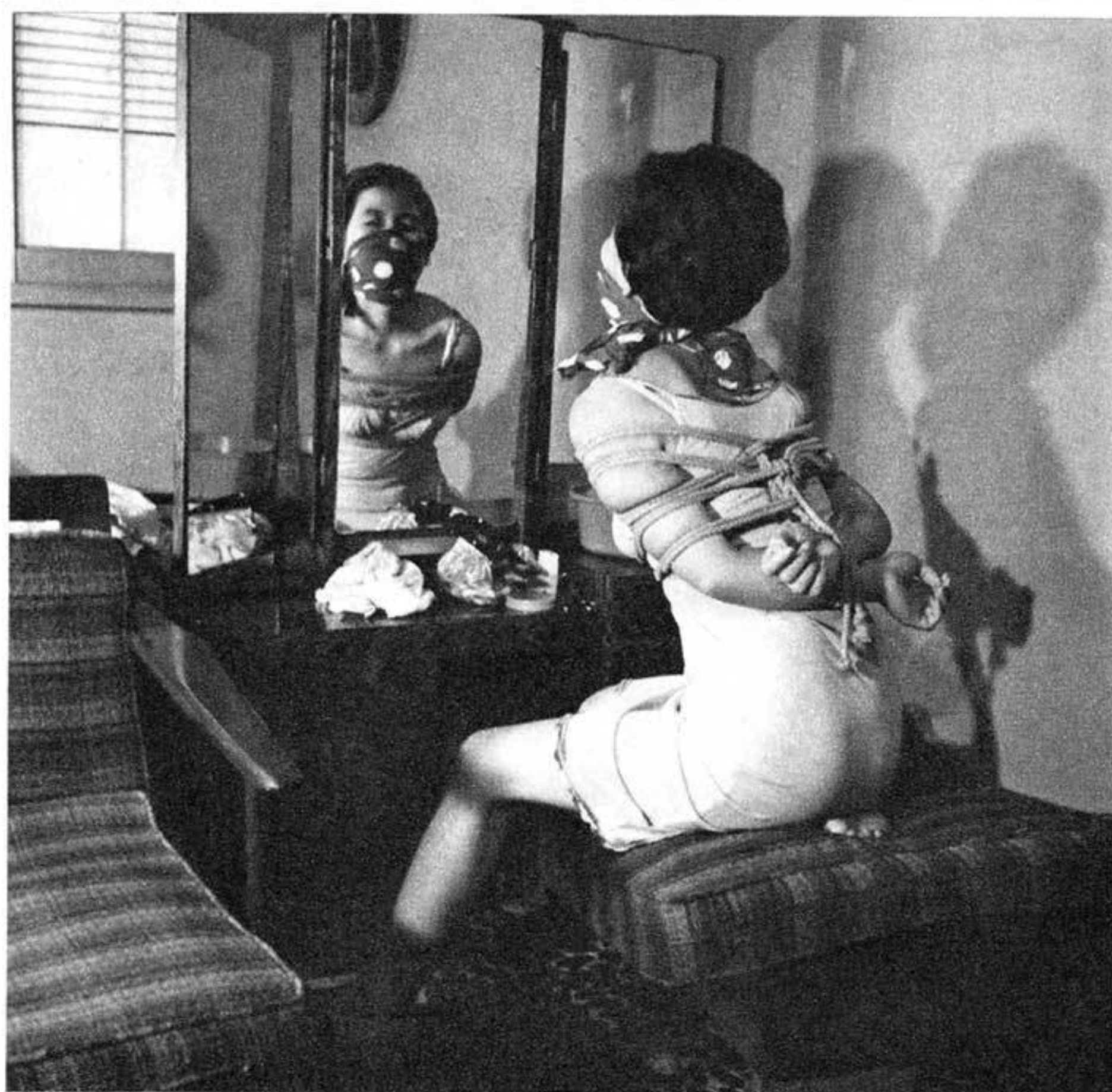










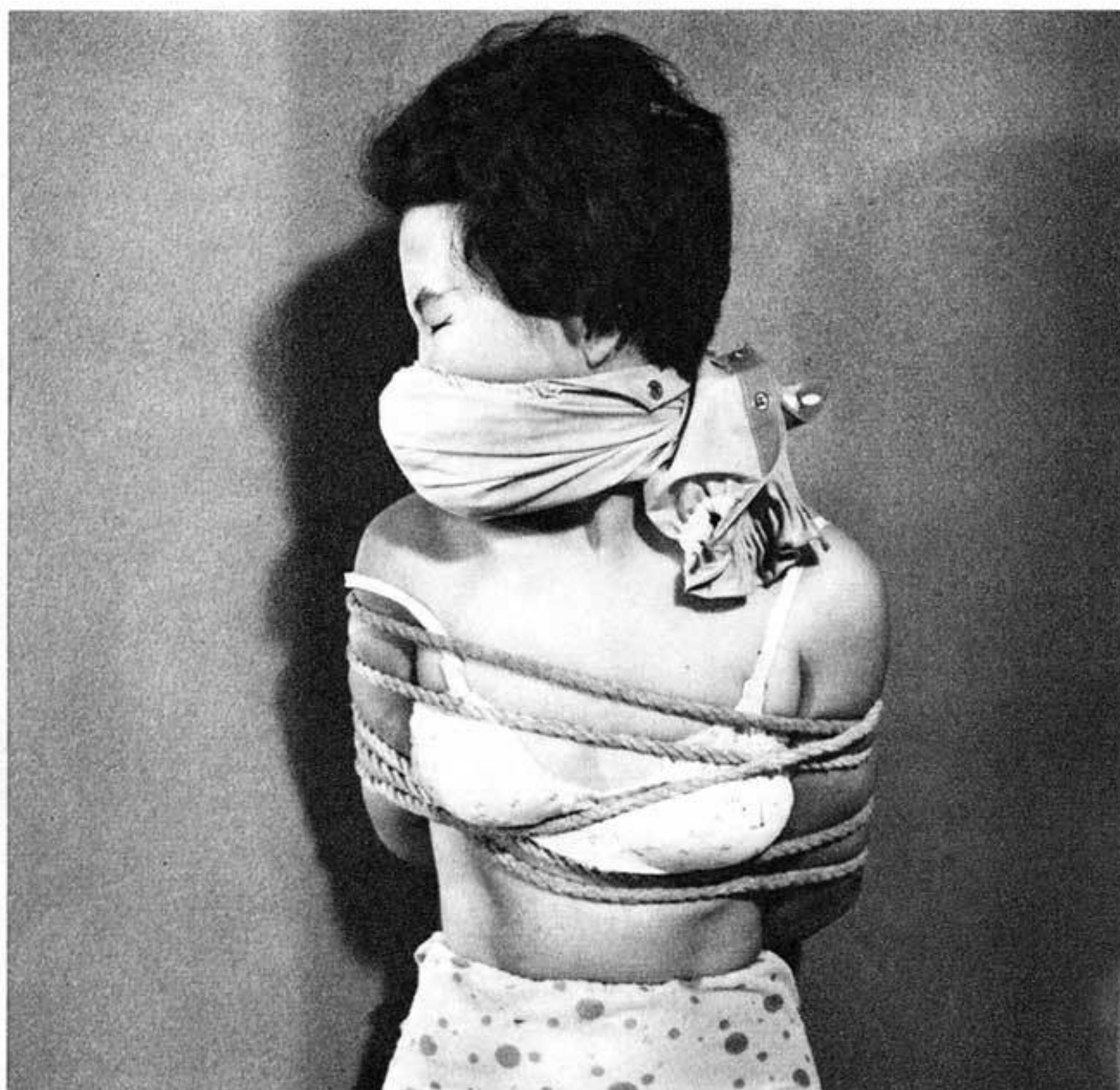
















顔の雑巾がけ

四馬孝・画



美しくて可憐な実験台

四馬孝・画



革製拘束衣による調教

四馬孝・画



恋人のあとを追って果てる娘

四馬孝・画



女間者真夜中の切腹

四馬孝・画



尻の下に敷かれる

春川ナミオ・画



娘相撲「小股すくい」

雪崎京人・提供





ホステス受難

四馬孝・画



和歌山市在住の一読者の方から戦前から蒐集した資料が土蔵一杯あるから見に来てくれないか、という便りを貰ったので私は早速和歌山市目ざして車を走らせた。

大阪市と和歌山市とを結ぶ国道二十六号線の制限速度は岡田浦の南海本線の陸橋までが四十軒、それより県境の孝子峠までが五十軒ときまっている。私はスピード・メーターが四十軒をオーバーしないうちに注意しながら慎重に運転していた。ところが、驚いたことには、制限速度の四十軒ぎりぎりいっぱいまで走らせている私の車をトラック、乗用車は勿論のこと、軽自動車までがほとんど追い越してゆく。中には遊覧客を満載した観光バスが地ひびきをたてて六十軒以上は十分出ているスピードで追い越してゆく。

殊に七台も八台も、珠数つなぎになって同じグループの団体を乗

せている観光バスなどは、先頭の一台が先の車を追い越しすると、後に続く車までが、抜かなければ損のようにして追い越してゆく。

路傍で白バイにつかまった車を運が悪かったのだと横目で睨みながら、陸続といずれも制限速度を遥かにオーバーした猛スピードで次から次へと疾走してゆく。まことに見事なものである。堂々たるものである。一台や二台の白バイでは、この威容を誇る集団には、とても歯が立ちそうにない。

和歌山へ着くまで何台に追い抜かれたらうか。きくと免許証と取りたてのホヤホヤが運転しているとでも思ったに違いない。二十年前には、敵機の機銃掃射を受けて飛

行場に通ずる道路を気違いのようになぶっ飛ばしたこともあるのだがその時の恐怖よりも、二車線の道路で観光バスに追い越しされる方が気持がわるい。

先方へ着いて、その事を話したら、その読者の方も四輪のトラックに乗っているとかで、制限速度に五キロぐらいの超過だったら検挙されないと教えてくれた。すると、さしずめ私なんかは、馬鹿正直だったわけだ。しかし、四〇キロ制限の標識が立っている道路をみすみす速度超過して走る気持になれないので、帰途も又、追い越され追い越されしながら大阪へ戻ってきた。

センター・ラインをオーバーしてはならないと規定してあるが、先ずは国道二十六号線のような狭い道では、それでは追い越しは覚束ない。それにしても、追い越しをするときのドライバーの緊張度疲労度はどんなものだろうか。当るを幸いと目の前にある車を次々と追い越していったって、そう何

分も早く着けるとは思えないのだが、そこは時間だけでは計られないスリルがあるのだろう。

友人が昨日の日曜は八十キロで飛ばしてきたというので、そんなに走らすとスピード違反で罰金だぞと威かすと、あんなに気持よく走らせてきたんだから、罰金の一万円位は安いもんだ、と言うのである。最近では神風族、カミナリ族、マッハ族なんて言葉も、も早や陳腐になってしまった程、スピード狂も日常茶飯事のこととなつてしまったのだろうか。

先日、琵琶湖沿いの国道八号線の八日市の十字路でオートバイの青年がトラックと接触して路上に投げ出され即死するという事故を目撃した。途の真中に蛙を叩き潰したように血を流して転っている被害者は完全に息絶えていて、オートバイのフラッシュ・ライトの点滅と腕時計の秒針の動きが殊に哀れさを誘っていた。

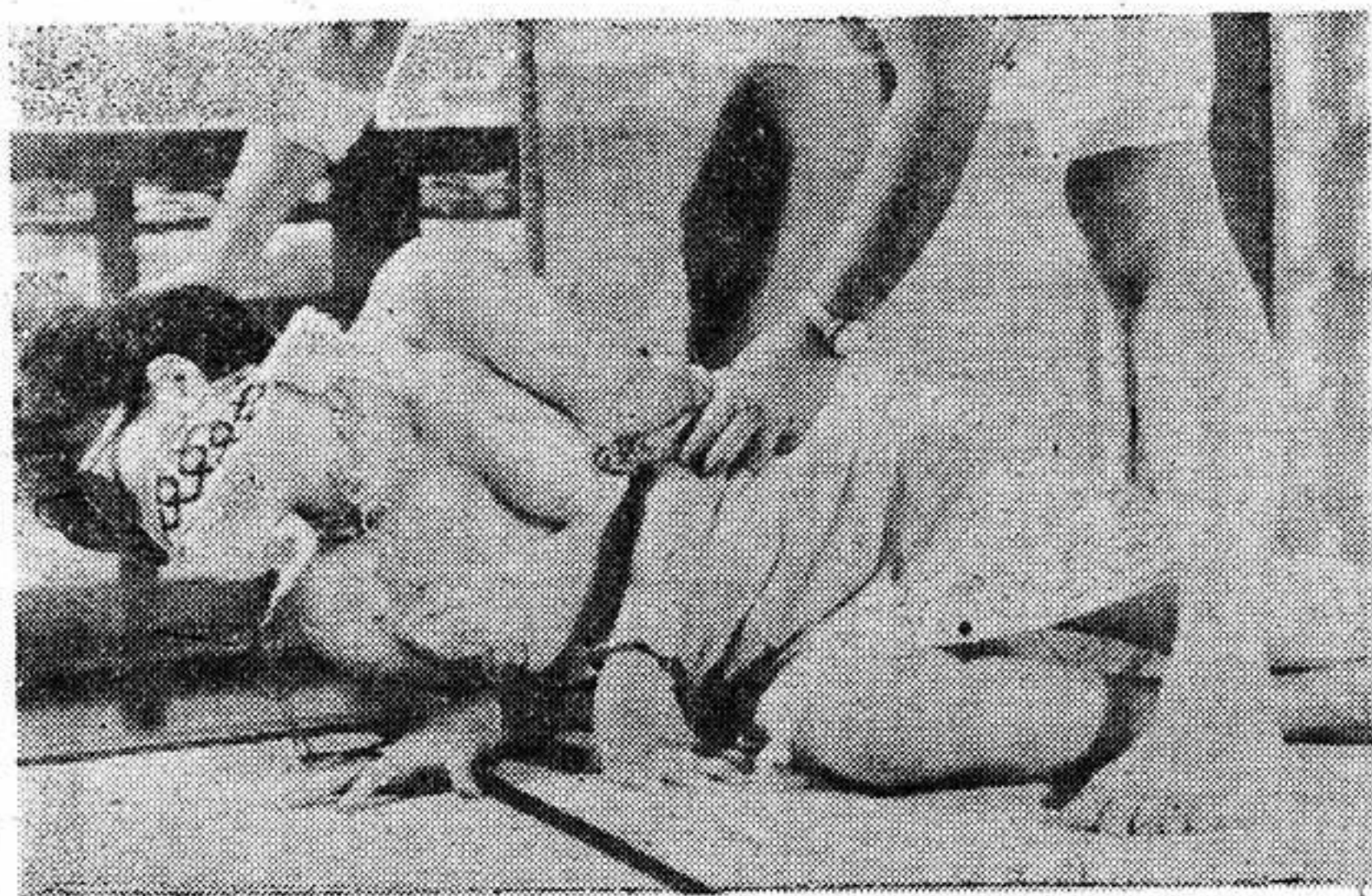
初秋の陽を浴びて路上に血まみれで転った被害者の屍体は、庭一枚掛けてもらえず、黒山の見物人の中に放置されていた。パトカーがサイレンを鳴らして駆けつけたのは、事故が起ってから二十数分経ってからだった。

残酷な交通事故

編集子

「おしめカバーと私」

竹野ひろ子



今迄沢山の方々が、私にお呼び
掛け下さっており、沈黙
を続けていた私――。

……御免なさいね。今更あやまっ
たって、許されるかしら……。
あれ程堅い約束をし乍ら、遂々
籍を入れず同棲に終った一年半。
身勝手で我儘で、気紛れな私……

ひたすらに私を求めるからこそ、
遂に許したのに、彼は私を裏切っ
て、私達の仲は日に日に冷めたく
なる許りです。判っきり別れる決
心をして、急に気が軽くなり、フ
ト書いて見たくなった。でももう
私の体はすっかり崩れてしまいま
したわ。二度も彼の子を始末して
いるんですもの……。辻村隆様御
免なさいね。一度ならず二度三度
お便り頂き乍ら、スッポかした私
……。でもあの頃は彼と夢中だっ
たのですもの。辻村様とミナミで
ばったり出会ったのもあの頃でし
た。

今の傷心の私ならすぐにでも仰
せに従って、モデルになるのです
が、もう忘れられた存在の私など
に、辻村様は、興味ないでしょう
ね。でも辻村様があの時、もう少
し私の性癖を理解して下さつ
たら、或いは出掛けたかも知れま
せん事よ。

あのヌメヌメしたゴムの感触、
肌にべっとりとまつわるむれた匂
い。私は彼との交際中に、大切な
忘れものをしていました。

今独り、古びたおしめカバーを
押入れの奥からそっととり出して
それを思わず口にあてがい、微臭
い匂いの中に、昔の頃の私の体臭

をじかに伝える、懐かしいかおり
に、私は忘れかけていた、あの頃
の、ゴムの感触に憑かれていた頃
を思い出して見るのでした。

アンネナプキンを当てがい、そ
の上からやや硬化したおしめカバ
ーをぴっちり締めつけて私は床につ
きます。何時間我慢出来るかしら
と、私は腕時計を見て寝につくの
です。夜明け方御不浄に立ちたく
なって、私はカバーの存在に気付
き、幼ない頃の安堵感を覚えて、
半醒半睡で洩らすのです。じめじ
めと温かくくすぐったく、私のお
しりがしめって行きます。その尽
じつといつ迄も一人切りで横たわ
っている、二、三年前のおしめ
カバーに耽溺し、ゴムのレインコ
ートの内側をわざと濡らして、べ
ったりと肌にへばりつけ、雨の舗
道を歩いた頃が泌々と懐かしく蘇
がえります。

和歌山市内のおらくり町を、私
はおしめカバーをぬらし、レイン
コートをもとって、何度散策した
ことでしょう。そして思い余って
奇巧の読者通信に投稿し、辻村様
と出逢いました。辻村様は色々と
私を縛りましたが、エバースフト
のビニール袋を蔽せられて縛られ
たのが最高でした。

妖婦マニアの期待

瀬沼四郎

私と彼との同棲の間、私は変な女だと思われたくない許りに、本とも縁を切り、私がゴムの感触に憑かれた女であることなど、気振りにも見せませんでした。しかし再び私は自由です。私の様な変わった女でもよかったら、同じ趣味の方があれば御交際してもいいと思

います。住所は編集部には知らせてあります。但し、唯、サジストとして私を縛りたいだけの方は困ります。若し縛るのであれば裸で縛った私の体に、レインコートを纏わせて、心齋橋でも一緒に散歩してくれる方——。勿論おしめカバーを着用して、私は決して御不

浄へは行きません。判っきり申しますと、私を喜ばせて下さる方、そんな男性はいらっしゃいません。現在大阪市内で月曜から金曜まで、午前九時から午後五時まで勤めております。土、日曜なればいつでも、それ以外なら、午後五時から十時頃まで自由です。午後

十時を過ぎると、南海電車で和歌山へ帰れませんので——。あらッ何もかもすっかり喋ってしまいましたわ。気持がラクになった証拠でしょうね。彼に面当てめいた気もあってウンと遊んで、まかり間違えば浮気して見たい——そんな気持の、今の私です。

十一月号を読む。今年一月号で「『臨月腹』に寄せて——ふたたび妊婦マニアへのアピール」をのせてもらってからはほぼ一年、ふたたび新しい年を迎えようとしている。今年の収穫は何といっても田中美佐子夫人の臨月腹妊婦フォトだった。十一月号のサロンに（臨月腹妊婦フォトモデル）「出産後のわたくし」を見ると、五月十日、三・一キログラムの女児を分娩されたとのこと、ではあの写真は何日にとったものか、六月号が出たのが四月二十五日で、それにご主人の通信がのり、七月号の発行日が五月二十五日として、それにはもう分譲広告が出ていたの

だから、現像し焼付けして組み合わせたをこしらえ、広告文を書いて印刷するのに要する日数や、郵送のための時間などを考えると、おそらく四月中だろう、それでもよく電光石火、間に合ったものだ、などといういろいろ考えてたのしかった。

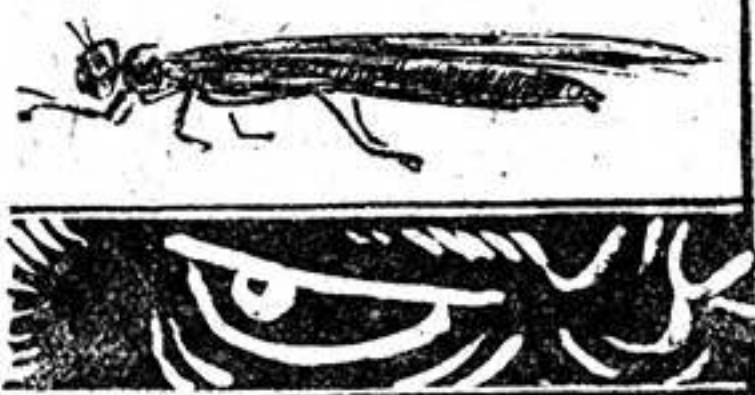
それよりもうれしいのは同じサロンで、芥川一夫氏が「妻よ奴隷のように」の中で、奥さんが現在妊娠六カ月で、臨月までずっと順序を追ってカメラにおさめられる予定とのこと、今から奥さんに臨月妊婦の逆さ吊りを納得させ、約束しておられると聞いては、いやでも大いに期待をもたざるをえな

い。辻村氏やその他専門家の協力もえられれば、その出来ばえたるや、一そうすばらしいものである。いずれにしても来年の春がたのしみである。こういうことを公表される以上は、その写真はかならず発表されるのでしようね。奇クも今度は分譲品としてはもとより、すばらしい臨月妊婦の裸像でグラビアを飾ってほしいものである。まさかマニアに匂いだけ嗅がせてあとはチョンというようなことにならないでしようね。

「白日夢」「紅閨夢」などの残酷ばやりで、本誌でもいよいよマゾヒスト・ストリップパー、青木順子が、糸島氏と辻村氏の二人によって、偶然にも同時に紹介されることとなった。ことに辻村氏のは、本人とじかに接触されての体験記だけにすごい。小生も町かどなん

かで「サディスティック・ショウ」と銘うったストリップの立看板を見かけたりした。どの程度のものか、見ないからわからないけれども、九月号「妊娠七カ月のストリップパー」に書いたように、「プレグナント・ショウ」などというのもあっていいと思う。どなたか見聞記を書いて下さいませんか。戦後医学的なお産の映画がバカにはやったことがあったが、オリンピックの年がすんだら、妊婦ショウがやはり出した、なんてことにならないものか。一九六五年は妊婦ブームの年でありますように、今から願わないではいられない気持ちである。

十一月号を読んで、以上のよう



世相診断室

木戸川 健

戦争がおわってから、早いもので来年は二十年になる。終戦の年に生まれた子供が成年に達するのである。日本の民主主義も、いよいよ大人になるわけである。

大人は子供に比較すれば世事万端自由のはずである。もちろん、義務責任を遂行する能力を認められての、自由である。日本人にはそれを遂行する能力がrippにあら。その事は、アジアで最初の、そして史上最高のオリンピックピックを主催した事でも立証されよう。

東西の対立、朝鮮戦争等の好機があったにしても、これだけ見事に敗戦の傷手から立ちなおり、これだけはなやかにデモクラシーの

ホモフォニーをアレンジしたわれわれ日本人はえらい。われわれは自身を誇ってもよからう。

私もあなたも勲章はもらえないだろう。しかし、あなたの功績は勲一等に伝いする。何故ならば、名神高速道路も東海道新幹線も、われわれの血税がそそぎこまれていたのだから。あなたがもしいなかったら、名神高速道路の長さは一ミリぐらい短くなっていただかもしれないのだ。冗談でなく、私はそう信じている。あなたもそう信じ、おたがい日本人としての誇りをもとうではないか。

ところで、こんな大上段にふりかざした愛国論と、われわれのK

誌とはどういう関係があるのだろうか。(関係ないじゃないの)という声に答えるのが、この拙文の主旨である。

前述の如く、われわれの社会も来年は成人式をあげるまでに、その核とする民主主義が成長したものであるから、そういう大人の社会にK誌のようなマニア誌が存在したとして何の指弾される理由はない。われわれは大人の社会の、大人である。税金を納めるという、最大の義務は果しているし、又、家族を養い己自身を養うという責任もりっぱに果している。われわれはいわば個々に独立国なのである。K誌を読もうと読むまいと、それは独立国の自由であり、それにイチヤモンをつけるのは、実に内政干渉というべきである。

たまたま、K誌がそこにあるのは、山や川があるのと同じで、自然である。山があるから登山家は登る。K誌はいわば人間性の谷であり、自然の産物というべきである。K誌がなくなっても、SMという性の谷がなくなるわけではない。たまたまK誌が、そこにあるのは、いいかえれば、谷のない山はないからである。

その事を八良識の社会Vという

ものがあつて、多分山に谷があるのは、不自然だと思ふ人人の構成だろう、連合を組んで攻撃する。K誌はけしからん、善良な風俗に違反する、断固廃刊すべきだ、と——。この場合、K誌支持の個々の独立国も連合を組めば、これは戦争になるのだが、この方がいいとも、おとなしいときている。というより、連合する事がきらいなのだ。所詮、戦争にはならないのである。

しかし、連合国が独立国の個々の主権を侵すようになれば、戦う事を辞さないかもしれない。そして、勝つのはどちらだろう。民主主義の社会が敗れるのである。つまり、八良識の社会Vという連合国も、その良識の故に負けるのである。民主主義という、三百万英霊の血の結晶である。われわれの二十年間の努力がである。

良識というものは、戦ってはならないのだ。良識の社会には、戦うという文字は存在しないのである。良識の勝利とは、戦わざる勝利である。それを、もし、法律という楯を矛に交えてわれわれに戦を挑むとすれば、後世それを良識の勝利だと誰がいうだろう。

法律を矛にされればわれわれは

ボクの責め方

宝塚二三夫

敗れるにきまっている。と、同時に良識の社会も敗れるのである。民主主義の社会は崩壊するのである。言論の自由はなくなるのである。K誌が消滅した時それは民主主義社会の一步後退を意味する。良識の勝利では決してない。くり返していうが、われわれは

日本国というものは子供ではない民主主義国の、りっぱな大人である。K誌は大人の雑誌である。大人とは、社会に対して義務を遂行し、自身及び近辺に対して責任を完遂する、能力のある者である。K誌は、そういう人々の雑誌なのである。

多少、強い筆を最後に置こう。もとより、反論覚悟である。「働かざる者は、納税の義務を果しえない者は、K誌を読むべきではない」——何故なら、あなたは独立国ではないのだから……。

「K誌を読んで、他人に迷惑を及ぼすような者は、それを読むべきではない」——何故なら、あなたは大人ではないのだから……。

つまり、私がいつている事、それが良識Vの線というものではないだろうか。

(横浜市鶴見区八木戸川健V)

清純な処女のすべすべとした脛には、ボクの心をすさぶる神秘性がかくされている。これから豊富

なフォトを提供しつつ、バラエティに富んだボクのまにあ業跡を紹介することにしよう。

愛読者の皆さん、今日は。

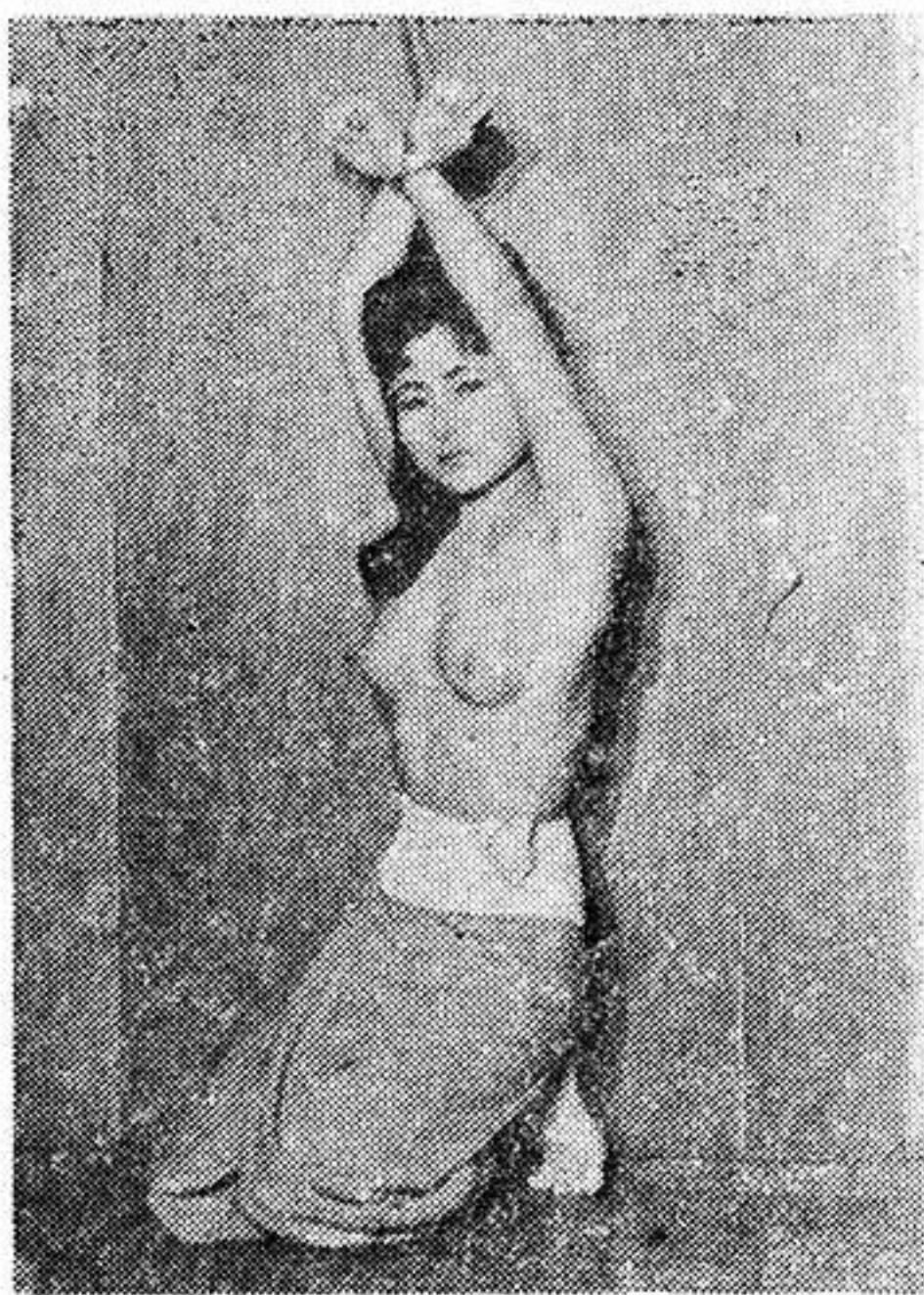
長らく御無沙汰——といってもボクの方は欠かさず雑誌は見ていました。でも、その後ペンをとる気がなくて、長らく皆さんに親んでいただいた「ボクの責め方」も尻切れトンボで終わってしまった。どうも気がかりでならなかった次第。

材料の方は、これ又、ハイテするホド、これはちょっとオーバー。とにかく、こと欠かないくらいあるので、仕事の合間を見て筆のすさびならぬペンの走り書きを

やらかそうと思いたったわけ。

相も変らぬフット・フェチのボクは女の足を追っている。完全処女の肌——生れて初めて——全く全身が真赤になることは、十五年前に和子の時、ボクの責め方で書いたが、今日亦よし子で改めて知った。

処女の足の美しさ。脛えくぼの魅力。足のまにあにとつて、これほど垂涎の逸品はないだろう。はぎえくぼのキッスの甘味は、知人ぞ知る。まにあならではの醍醐味とは、このことだろう。



ボクに責められる
痛々しくも可憐な娘の姿

サロシ楽我記

(第六回)

辻村 隆

偶然の面白さなんて、何時何処に転がっているものであるか分らないものだ。

これもアブの御用で神戸に出掛けた帰り、阪神電車の元町駅から大阪行の急行に乗った。午後十時頃だったろうか——。暑いので車窓は殆んど開いている。週刊誌も読み飽きて、車窓に凭れ、も一つ

変りばえもしない夜の沿線を見るともなしに眺めていたが、尼崎を越えて少し電車が徐行した時、暗い家並の、部屋だけポツリポツリと明るい風景が、次々と消えてゆく中で、一瞬、私はSMプレイの瞬間をみてハッとされた。二階のすだれ越しに歴々と、若いパンティ一枚の女が両手を吊られ、傍らで男が女の胸の辺りに手をかけていたのを……。それは忽ち私の視野から消えた。見たのは私一人だったろうか——。五輻連結の進行方向に向って左側に座席を占め、漫然と車窓から暗い外界を眺めていた人があったとすれば、そのプ

レイの刹那のワンカットは、私と同じ様に見たに違いあるまい。

うかつなのか、大胆なのか、それとも電車の走り過ぎる瞬間などテンデ問題にしていけないのか。しかしこのシーンは恐らく、何度ここを走っても二度とはお目にかかれないかもしれない。

× × ×

三十九夜でいろいろの趣好を書いたせいかな近頃すっかり「何でも屋」になってしまった。私自身矢張りサジストだと自認するのだが、先月もこの欄で、女装のフォトを発表した事から、神戸のKという人から、やいのやいのとフォトを撮ることを頼まれ、かくは、先にも述べた神戸行になったのである。

夕方私が指定された元町の高架下の美容院に到着すると、早くもK氏は花嫁姿の正装で私を待ち構えていた。この暑いのに随分御苦労様と思うが、請われる俚に十数枚正装をとった。重いかつらを脱



いだあと、K氏は美容師さんに退出して貰い、拝む様にして緊縛ポーズを撮って欲しいと仰有る。私は赤いしごきで極く簡単に縛ったのを数枚とったが、K氏御本人は自己陶醉でうっとりとしておられるが、撮るこちらはさして面白くない。

奇クを通じて知合った、神奈川県同好の方が、女装フォトを送ってきたので、そのお返しとの事。分れ際、是非奇クにフォトを掲載してほしいとの御言葉でここに二枚許り掲載したが、専ら

自分本位である。暑いさなかをわざわざ出張して、フィルム費ってお茶一杯ごちそうにもならず礼をいわれただけであつた。少々中ッ腹だったが、案外こんなお人が多いのである。

× × ×

福岡の田中美佐子さん(姪婦フォト)からお便り戴いて御主人のお話では、私に機会があれば、旅費を負担するから九州まで来てもらって、自分達夫婦のSMプレイを是非撮って欲しいとの手紙だっ

た。この御主人はどうも書くことが苦手と見えて、美佐子さんに書かせているらしい。

誠に結構なお招きだが、九州となるとそうあっさり腰も上らず、私もそのお気持ちを謝し、必らず折あらば実現したい旨のお返事をした。出産後の、あの脂ののりきつた美佐子夫人を心行くまで緊縛出来たらと、心は逸るくせに仲々体のあく暇がない。

「……自分の縛るのは、いつも似たりよつたりだから、一度辻村さ



んにでも縛って貰ったら、お前も満足するだろうと主人が申します。とっても羞かしいような、その癖主人の公認で縛られるのだった。一度この美佐子をくたくたになるまで虐めて欲しい、とそんな矛盾した気持ちで御座います……

(原文のまま)

彼女の文の一節であるが、私の心を掻き乱す美佐子さん——。もう暫らく待って下さい。気の変らぬように……。

桃色攻勢続く映画界

丸井真次

愚民政策の一貫としての三S政策は、戦時中のアメリカが日本に対する謀略として用いられたと、よく言われたものだ。

即ち三Sとは、スクリーン、スポーツ、セックス、の三つのSである。最近ではテレビも一億総白痴化運動には、大分役割りを果たしているようだ。

さて、その三Sの一つの映画だが、このところ、青少年の非行化防止でやかましく言われているながら、中々活発な動きで女のハダカやきわどいベッド・シーンなどで、たっぷり見せ場をつくらせている。もともと映画は教材でなく娯楽だと割り切っているためだろうが、内田吐夢監督の「鮫」ではヌード・モデルが豊かな胸をあらわにし、大映の「花」では、岸田今日子と若尾文子が同性愛で抱き合うシーン演技している。

大映の「眠狂四郎女妖剣」で

は清純スターの藤村志保をはじめ、久保菜穂子、春川ますみ、根岸明美、毛利郁子などグラマ—女優のハダカを売り物にして客を釣っている。更にこの映画では、將軍家のサジスチックな姫や媚薬を使って新婚はやの男女の運命を狂わせる巫女、自分の肉体を賭けてバテレンを誘惑する町娘、身をまかせながら夫に狂四郎を狙わせる鳥追いななど、お色気の中にもアブ的な趣向をサービスしている。

東映の「くノ一忍法」も芳村真理、野川由美子、中原早苗、三島ゆり子、金子勝美、葵三津子などの六人の女優の肌をさらけ出し、これでもか、これでもかと色気の押しつけに専念している。松竹「コレラの城」でも伊藤弘子扮する村娘が無頼の徒に襲われようとするせつな、丹波哲郎に救われるというサービスを加えている。



検便

と

浣腸

本間喜一郎

「コレラ発生地区にほど近い、大久保小学校の校庭には、この日、大きなテントがはりめぐらされ、一般市民を対象とする大がかりな検便がはじまっていた。三日間に全住民一万余人を検便してしまおうという計画だ。

採便方法は、医学的にみて容器採便より正確な直接採便とした。その場で四つんばいになって行う方法で受ける者にとっては、最もいやなやり方だ。」（サンデー毎日）

オリンピックを間近かに控え私

達食品関係者も、つい先日検便を受けました。理くつからいつて、能率的にいつても、又、分量とか乾いてしまふとか、又、他人の間に合わせるというような、ごまかしの出来ない点でも、直接採便するのは最も正確なやり方と思われまふ。

私達の場合、保健所の一室で順にベッドに上り、とにかくお尻を出して、ガラス棒の挿入をうけました。その棒には少し便がつくわけ、これを液の入った試験管に移すのですから清潔です。

コレラ発生の習志野市で検便を受けた方には、コレラの恐怖で恥しいどころではなかったでしょうが、私のような健康な者にとって直接採便方式は、特に若い女性の場合、かなり抵抗があったようです。女性の場合、直接採便は希望によって、容器に自分でとってもよかったそうです。しかし、二十人の女子のうち（皆十九歳から二十二歳まで）自分で採ったのは三人で、N子はどうしてもとれなくて——保健所へきて急にそう言われても無理なのは当然です。——それで浣腸してもらったとのことでした。

私は保健係をしていたので、これは彼女達の健康状態をきいていけるうち分ったことです。でも、いくら浣腸のムードを愛する私でもつい立のしたベッドと試験管だけの室の中で、若い看護婦さんに、いざ口で「次の方、ベッドに横になって」とか、「お尻を出して下さい」とか、「口をあけて、お腹の力を抜いて」とか、「すぐ出来るようにズボンをおろせるようにして下さい」とか言われると、全く恥しくなってしまう。赤痢で入院すると、毎日このような検便があるそうで、二、三回

は大い直腸鏡の検査もあるそうです。女学生や女子寮などの検便もやり方は全く同様とのことだそうです。（一九六三年九月号、栗瀬氏へ）

とにかく赤痢が出た場合は有無を云わさず直接採便となり、女性だからといって容赦なく男の医師によって行なわれる場合もあります。女学生の場合、さぞにぎやかなことだろうと思います。

ところで、食品関係の製造工場では従業員採用に当って、保健所で採便してもらい、身体検査（レントゲン等）を受けてから入社試験が行なわれるようです。そして年二回検便があります。Y乳業に勤務している女性保健係の話によると、勿論強制的な検査ですが、各人トイレでガラス棒を挿入して取らせるとのことですが、初めての子や、どうしても自分で出来ない子には、彼女がとってやるとのことです。

最初保健所でする時は、勿論直接採便ですから、食品関係に勤める若い女性は、きつと浣腸に対しても理解を持っていると思われ、医務室に勤める医師や看護婦さんがうらやましく思われます。もしあなたが直接採便による検

家族制度残酷物語

悲恋の情死

森 田 敬 三

便を受けたかったら、保健所でや
ってもらふことをおすすめていたし
ます。手数料は大体五十円ぐらい
です。大きい病院の内科へ行くの

も手です。これも直接お尻からの
採便です。健康保険があると、初
診料百円也。毎日の採便を望む方
は、診療所から疑似赤痢として都

立病院へ送ってもらったら、どう
でしょう。入院料、治療無料で毎
日検便の他、前記直腸鏡や浣洗腸
の特典もあることと思います。

私は時折り、保健所や病院は利
用しておりますが、皆さんも試み
られは加何ですか。

(東京N食品工場勤務)

此の世を、最後の愛を、激しく
契い合った二人は、今はこれまで
と、たった今愛し愛された喜びの
はつきり残っている下腹を、鋭く
冷たい刃に、深く大きく切り裂か
れて、のたうち、呻めき、悶えな
がら、引き出した腸を結び合わ
せ、更に、見事十文字に切り下げ
て、折り重って倒れ、溢れる内
臓、鮮血の中に埋もれて、最大の
苦痛を味わい、純粹の恋愛を許さ
ない明治憲法、因習的な家族制度
に万斛の恨みを残して絶命する。

悲慘な自殺の中にも、情死だけ
は恋を得た喜びがあるとは言ふも
の、人間の尊厳よりも『家』を
重んじた明治憲法の家族制度の下
では、斯うした惨憺たる情死事件
が、稀ではなかった。今日の青年
諸君の思いも及ばない処である。
甚しきは、両親共に結婚を許し
てくれたが、法律がこれを許さな
かった。二人共に一人息子、一人
娘の場合、彼は嫁を取って家を立
てねばならず、彼女も又婿を取っ
て家を立てねばならなかった。

結局二人が結婚すれば、どちら
かの家が絶えることになり、それ
は家族制度の許さないとところであ
った。斯くして二人は、哀れにも
遂に「死」を選び、それも無念さ
を表現するために、最も苦しい切
腹自殺を遂げ、両方の家も絶えて
『腸を結び合せて、十文字に腹を
切る』という構想
は、大竹武男氏の
「切腹心中体験
記」から得たもの
ですが、氏の一文
は、どうやら実録
らしいので、原文
の通りに描くこと
は遠慮しました。
私如き幼稚な素人
が、勝手な想像か
ら原文の場面を描
くことは、氏並に
故人に対して礼を
欠くと思ったから
です。

二人共に裾を乱





投稿のあとのたわごと

大 倉 肇

10年近くも△愛読者▽を自負している小生が、思い切って、始めて△読者通信▽欄に投稿してみた。この9月号に掲載された。8月号の冬野尚子嬢に呼びかけてみたのである。そして、10月号の誌上で、あっさり、「野卑な人は嫌い」と、ヒジデッポウを喰らわされた。女心を解せぬボンクラと思われたらしい。

同じ10月号に、大阪のMというS女性の呼びかけに応じたら、1万円も盗られたらしいM男性の手記が載っている。しかも、同号にそのMなる女性をモデルにした随想めいた一文が掲載されているのだから面白い。編集子の警告によると、他にも被害にかかった男性が、相当数いるらしい。以前には、山辺何とかというM女性がやはりヒドイ目に会って、読者欄は、あくまで△文通のみ▽の場所にしたかったといっていたようである。何というべきなのか？

△読者通信▽も△手紙の転送▽もいっさい止めなければならぬかも知れない、とは、全く情けない話である。それでなくても、世の中は、いっそうツマライ方向へ逆行していく一方である。この広い空の下どこかでは、真面目

な？ S Mの男女たちが、ほんとうに、心の交換をできるトコロがあるという。しかし、ごく限られた一部の人たちだけで、しかも、大金が必要とか。誌上でさえ、私たちの夢を満足させることができないとしたら、いったい、私たちは、どうすればいいのだろうか？

確かに、悪く利用する側からすれば、私たちは恰好の獲物である。しかしそれを恐れていたなら、何にもできない。私は、これまでその△恐れ▽から、投稿することをためらっていた。しかし、始めて掲載された自分の文を活字で読んでみて、相手の返信を見て、これからは、どしどし、呼びかけをしていこうと、考えだしたので。

会員制の△通信誌▽にしろというアイデアがある。公開誌では、どうにもならない壁を破り、最近のウルサイ世情からも逃げようというのである。しかし、S Mには限界がないとさえいえる。社会という枠の中で、とくに、私たち平々凡々たる△小人▽には、せめてものS M誌であった。それが、世に入れられないからといって、地下にモグッテシマウ必要があるだろうか？

ヒヤカシやキョウハクやダマシ

【短信往来】

○十月号の本誌のこの欄で、能登光氏が投稿された「ジュース一杯一万円也」という文章で浅香Mという女性のことと言及してありましたが、その後能登氏からの連絡によると、「あの一万円は、もっと早く返すつもりだったが、大変おそくなつてすまなかった」と手紙を添えて返金してきたそうです。

○あの十月号の能登光氏の文章の反響の一つ。或るM傾向の人から——。僅か一万円ぐらいのこと、ぎゃあぎゃあ騒ぎたてて、みっともない。そんなに金が惜しいんなら、最初からMプレイなんか望まなきゃいいんだよ。みみっちいたら、ありゃしない。M派の風上にもおけやしねえ。——ときた。

○それもそうだが、プレイもしないで、只とりとは、ちょっとヒドクはありませんか、てんだと聞いてみると。実は内緒で白状するが、ボクも浅香Mという女性に二万円イカれたんだ。もっともプレイは、やってもらったがネ。——と、その中年の好紳士はつるりと顔を撫ぜたも

を恐れて、読者通信を止めることもナンセンスである。一流新聞の読者欄でさえ、利用者に事故があるという。文通だけでは満足できなくなった者たちは、自然に、その相手に会いたくなるのは当り前である。会ってみようではないか。何回か会っている内には、相手が本物かニセ物かは判明する筈だ。これで被害にかかるのは、本人の責任だというしかない。

SM誌は、Kクラブは、私たちの夢の、入口の扉の役目を果たして呉れるだけで、良いのではなからうか。あくまでも、導入部なの

逢いたい見たい

S・T生

へ逢いたい見たい、顔見たい、顔見りゃ、どうにしかしてみたい。

といった俗語がありますが、私のようなアブマニヤは、先ず文通を試みたい、というささやかな願いを持つものです。嘗てG誌の誌友欄で文通したい人は、全国の男女会員の名簿を送るから、二百円を送れと通信が載っていたので

だ。その次の要求を満たすには、自分自身しかない。どんどん、通信欄を利用しよう。そして、どんどん、いろんな人たちに会ってみよう。その中から、本当の相手を見つけたせば良いのだ。バケの皮は、すぐにハガレルもの。私たちは自身を信用しよう。

芦屋の八小島芳子Vさんノいちど私と会ってみて呉れませんか。お手紙をお待ちします。私のことは、9月号の通信欄の八大阪亜武男Vをご参照ください。その他のM女性やS女性のお便りも、期待しています。小生S7分、M3分

早速金を速達で送ったが、梨の礫なので、半月程してハガキで督促したら、ハガキだけ転居先不明で戻ってきました。

大体そんな名簿なんて、ある筈もないのに、空頼みした私が馬鹿だったんですが、しかし、文通をきっかけに、あわよくば逢って話をしてみたい、そして更に運がよければ、もっと親密な間柄になりたい。そして、相手の人は若くて美しい人で……と空想はかぎりなく続くのです。

くらいの性向の持ち主です。

冬野尚子さんノいいお相手が見つかった様で、良かったですね。でも、もし、貴女が、文通だけで満足できるとしたら、8月号の一文はウソだと思えますが、如何でしょう。セツカチと思われたり、怖がられたりする気持は、十二分に判るけれども、唯、会ったからといって、この法治国家の人ゴミの中で、何を恐れているのだらう。SMは、本来ロマンだ。はれどおセンチではない。あなたのM性は、そんな小さいものなのか。気が向いたら、お便りください。

市立の結婚相談所での話。男性の求婚者は、相手の女性に若くて美しく女らしい人を望み、女性の求婚者は、相手の男性に生活力があつて(月収は多い程よろしい)遅ましく男性的な人を望むと。それでは、女性は若くて美しくなければならぬし、男性は遅ましくても何よりも金を持っていないと、どうにもなりません。あわよくば、あわよくばとて、暮れにけり。アーメン。

のだ。

○満更でもないナ、一つ聞きだしてやろう。と、さりげなく、で、そのプレイというのは、どんなだった? 如何にも興味ありそうに話をもちかけた。

○最初の手附金が一万円、プレイ料が二万円、計三万円という浅香マミ女史のプレイなるものは、果してどんなものだったのか、これは私ならずとも興味があるだろう。

○いや、玄関のタタキの上へ正座させられてネ、そのままほっておくんだヨ。彼女は中へ入ったまま出て来ないんだ。参ったヨ。それでボク、彼女に言っちゃったんだ。——あんな、ボクだからいいよ、こんなことさせて。他の人にはあんまりだよ。と、——

○その好紳士、その後二度と浅香マミ女史とプレイなるものをやろうと思わなかったそうだから、余り後味はよくなかったらしい。自分の趣味のためには、いくら金を使っても惜しくないと言っている彼のことから、三万円ぐらいの端金は、なんとも思っちゃ、いねえだろうけれど……さ。

断片

性的前衛

栗瀬長



最近、私は趣味を同じうする同志を数人得て、それが図らずも皆長年にわたる奇クの愛読者であった関係から、奇クを中心に話はずんだ事であった。

たまたま話題がアブノーマルの世界ということに及んで、われわれは自己中心的な段階から一つステップを踏み出すことができないでいるのではないか。フロイドの言う如く、子供のときの性的コンプレックスが、今こうして成人してから克服出来ないでいるのではないか。いいかえれば、社会的にも臆病となつて、自分たちのグループを閉鎖して、なかへなかへと閉じこもつてゆく傾向は、ありはしないかという話題が出たのである。

こうした自己批判的な考え方に對して、私の思いついた事を記して、大方の御批判を仰ぎたいと思う。

私達アブノーマルな世界を趣味として耽溺する者は、自己閉鎖的でも臆病でもない、いやむしろ勇敢であると考えたいのである。ないか。たしかに、子供のときの性的コンプレックスが大人になつても克服されていないというのはフロイド以来のパターンであった。しかし、現代の現実生活ではそうではないと思う。

私達は、ごく一般的にいつて、女性と性的関係をもつのはずっと容易であり、現に私達趣味を同じうする者同志も皆、よき家庭生活を営み、そこには何の抵抗も迫害

「妻の妊娠と緊縛」

巽 良 一

燥しました。

私は妻嘉江と結婚する四年前より奇クファンでしたが、今回妻が始めて妊娠し、現在既に八カ月になっておりますので、この機会を逃せば、或いは二度とチャンスは巡り来ないかも知れないと思ひ思い切つて妻の妊婦フォトを撮って見ました。妻は最初、容易に承服致しませんでした、十日位毎日口説いてやつと口説き落しました。結婚して一年四カ月経ち、嘉江は二十三才で、小生は三十一才です。現像、焼付が心配でしたので、その目的の為に、友人に頼んで、風景人物のネガを二度許り、教えてもらつてDPEしました。嘉江の第一回の妊婦フォトは、縛りはなく単なるヌードだけで、三六枚撮りの中で、五枚許りとりDPEの時、うまく友人に分らぬ様自分で焼いて、そのフォトだけビニール袋に入れて、持ち帰って水洗し、乾燥機にかけず、自然乾

第二回目はかなりSMプレイを含めたものを撮り、これは二〇枚撮りフィルム一本を費やしました。友人に頼んで、引伸機やタンクを借りて帰り、これは二人きりで、何の心配もなくDPEしました。同封しました妊娠の妻の、首縄後手縛りと、柱縛りの二枚はその時のものです。掲載されても差支えありませんが素人のカメラいじりでうまく撮れていません。夫婦間の何もかも許し合った仲だけに、フォトは殆んど全裸で、かなり露骨ですから、それ以外のものは送るのを御遠慮します。妻は始めはなか／＼私の気持を理解して呉れませんでした、思ひ切つて奇クを見せますと、どうか私の嗜好も分つた様です。九カ月、臨月と撮り続ける予定ですが、伊藤晴雨氏が試みられた

を受けておらない。それなのに、この日常的な性生活を超えて、更に全責任を自分自身に対して負わねばならない。アブノーマルを趣味としてもつということは、勇気のいることだと思う。

私達同志数名は、具体的に調べてみれば、全員大学卒で、社会的に頗る活動的な方ばかりである。そうした方達が、立派に家庭生活を営み、妻を愛し、子女をもうけながらも、もっとすばらしい性的なものを求めようとして、アブノーマルな世界に耽溺しているのが今日の形ではないかと思う。

そこで、私はノーマン・メーラーの言葉を借りて、性的前衛と自分達を呼びたいと思うのである。勿論アブノーマルを志向する者には二つのタイプがあるように思う。

アブノーマルへの志向が、単なる反復である、言ってみれば、プロトでも言ったらいいような、極言すれば性的異常者と、アブノーマルの世界を経験する度に、新しい人間的な発見をしてゆく、前進的な人達があると思う。

この後者の場合は、所謂家族制度、殊に我が国にまだみられる閉鎖的な家族制度の中で常に性的な

欲求不満に耐えさせられている所謂正常者、一般的にノーマルと言われる人達よりも、はるかに社会的であるし、同時に人間的、人格的でさえあると思う。

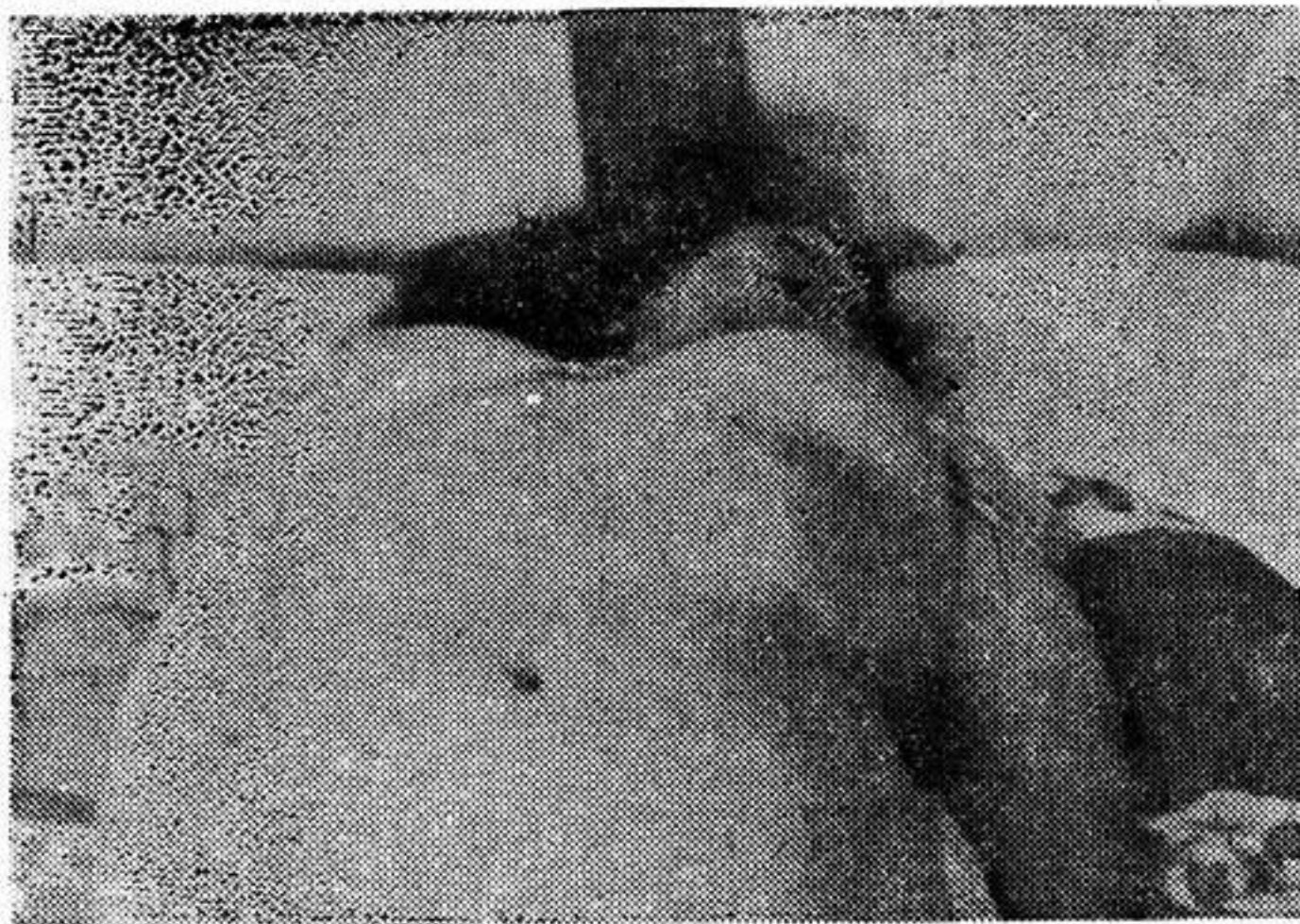
芸術家の中でも、アブノーマルなものに多大の関心を示すアンドレ・ジイド、ジャン・コクトーなど、いろんな人があるが、たいていは前衛的な仕事をしているように思う。

勿論、アブノーマルな面に趣味のある人がすべて芸術的に前衛であるなどとは言わないが、アブノーマルを好む者が、自己執着から逃れられない後向きの人間であるという考え方は、すでに克服されていると考えていいのではないだろうか。

性的なものを、日常的な反復活動におきかえてしまった人間こそ、性的に頹廢していると見えるのである。

夫婦生活には、愛もあり、妊娠もあり、出産あり、そして育児もある。そして更にアブノーマルな世界がある、それらが、情性的頹廢から私達を救う。

自分の個性を前面に押し出し、しかも他人を積極的に許容してゆく態度を、私は趣味の世界を前向きにしてゆく態度だと思う。



ますが、福岡の田中氏も夫人の妊娠と同時に撮られた様に思われますので私だけではない様です。

緊縛の時、妻の腹部をかなり強く縛る癖に、日常は妻にうるさい位喧ましく、体に注意する様申しますのでそれなら、あんな事なさねばよいのにと妻に笑われました。

現在、団地暮らしです。で、SMプレイは密室で行なっている様なもので、何ら心配いりませんが、逆吊りは部屋の構造上どうすればやれるかと、色々首をひねっております。部屋の両隅に鉄製の折畳椅子を伸ばしてそれに太い竹を渡すことも考え、天井からの距離を計りましたら、逆吊りで、妻の頭が、たたみより十二センチ離れますが、竹や二脚の椅子の処置する場所がなく、団地住いの方で、いいお智慧があれば拝借させていただきます。

△編集部より▽掲載の写真は全身が写っていましたが、特に下半身をカットいたしました。



デラックス病院の五日間

《川崎進一》

人間も中年を過ぎる頃ともなれば、生理的には中古品であろうか。そろそろ、あちこちの箱がゆるんでくる。

にもかかわらず、一家の柱だとか何とかおだて上げられ、もったいなく稼いで下さいよとばかり、カアチャンに叱咤激励され、さながら馬車馬の如く、この不景気な世の荒波の中に、毎日追い出されるのである。

そして、カアチャンは言う

「あなた、体だけが資本なのよ、病氣しちゃ駄目よ。そろそろ人間ドックに入ってみたらどう？」と来る。亭主が大事なのか、亭主の財布に必要な身体の方が大切なのであろう。しかし僻むな僻むな、

確に体あつての物種という訳で、小生も人間ドックなるものを考えないではない。

で何か参考になるものはないかと考えていた折も折、週刊朝日に開高健氏——「ずばり東京——」デラックス病院の五日間——の記事が出た。通読して大いに参考となること多大皆様にもその極く一部の抜萃をもって、何等かの御参考にもなればと思ふ次第である。

涼しい目ヲシタ医者ト看護婦ガ現レテ、予ヲベッドニ寝カシタ。ソノウチ浴室ヘツレコマレ、御叱呼ト雲古ヲヌキ取ラレタ。

ツイデ十二指腸液ヲ見ルノダトイッテゴム管ヲ六十センチモ吞ミ

ゴマサレタ。予ハ涙ヲ流シ、ハナ汁ヲ垂ラシ、唾液ト黄水デ顔中ネトネトニナリ、オウオウ、ゲエゲエ、タマラン、タマラン、勘忍シテクレナドト叫ビツツ悶エ苦シンダガ、医者ト看護婦ハ、微動モセズ涼シカッタ。コノ経験ニヨリ、ハッキリト自己克服ハ、マゾヒズムノ一種デアルト悟ッタノデア

ル。糖尿病検査トイッテ御叱呼モヌキ取ラレル。午後、六〇号室ニ入院中ノ有吉佐和子ガ電話ヲカケテキタ。

「ココノドックナンテオ医者サンゴッコヨ。ホカノ病院ダトモットモットヤルワヨ。教エタゲマシヨウカ」

或ル病院デ或ル若イ女性ガドックニ入ッタトコロ、オ尻ノ穴カラバリユウムヲ注ギコマレタ。医者ハソレカラレントゲンヲトリ半分ダケバリウムヲ出シナサイトイウ。ソナ器用ナコトガデキルモノジャナイト抗議シタラ、トイレデイキバラズニ腰カケタラ半分デタル。イキバツタラ全部デルト答エタソウデアアル。ソシテ、マタ、オ尻ノ穴カラ空気ヲ、ポンプデ入レタ。腸ノ検査ノタメデアアル。ソウシテ、風船玉ミタイニオナカラフ

クラマセテオイテ、「七分間辛抱シテクダサイ」トイウ。イワレルマニ辛抱シタガ、医者ガ「ウン」トイワナイノデ、モウ世界ガ碎ケテモイイト思ッテ泣声デ「ヤリマスワヨ！」ト叫ンダラ、医者ハ大變恐縮シ、「スミマセン、スミマセン、栓ヲ抜クノヲ忘レマシタ」ト答エタ。ト。

ジョナサン・スィフトノ「ガリバー旅行記」ハ大傑作ダガ、ソノ第三篇、空飛ブ国ノ学士院ヲ訪ネル一節ニ次ノ描写ガアル。

「ここに一人の大先生がいて、彼は細長い象牙の口のついた大きなフイゴをもっていた。彼はこれを肛門から八インチばかり差し込んで、空気を吸いこませると、腹はまるで乾いた膀胱のようにしぼんでしまう。だがもし病氣が激しくて頑強なれば、今度は逆に一杯に膨らませて口の中にさしこむのだ。そして空気を全部患者の体内に吹きこむと再びぬいて空気を吸入する。むろんその間は、拇指で肛門の口を力いっぱい押さえているのだが、こうした操作を三、四度繰り返すと、その中に猛然として空気が噴出し、同時に、ちょうどポンプに入れた水のように、有毒物を一時に押し出して、患者は見

事治るといふのである。」

(筆者注・中野好夫訳)

夜、医者がキテ、明日が最後ノ日デアルガ、第一通用門ト第二通用門ヲ調べヨウト思ウトイイダシタ。前ト後ノ穴ノ工合ヲ見ヨウトイウノダ。説明ヲ聞イテ予ハ恐慌ヲキタシアラヌコトヲ口走ッタノ

デアル。

「ソナ場所ハ、女房ト恋人以外ニ見セルベキモノデハナイジヤナイデスカ。ソレニ大体人間ニハ未知ノ謎トイウモノヲ残シテオカナイコトニハ、ヤリキレンジヤナイデスカ。」

恐ロシイ注射ヲ二本。三十分オ、キニ御叱呼ノ検査ヲサレル。昨日ノバリウムガ第二通用門ノトコロデ固マツテ石膏ミタイニナリ、カチンカチン。苦心惨胆デ押シ出シタラ、ミyunヘンデ食ベタ白ソーセイジニ色モ形モノノママノ逸品ガ飛び出シ、第二通用門ガ切レテ

血ガ落ちタ。

といった具合である。こうした慎重な検査がなされるとなれば、早速にも人間ドックに申込まねばなるまい。そして、もっと懇切丁寧な手記を、奇ク誌上に発表しようと思う。

「SMのダブル・プレイ」

三 隅 良 信

勇気を鼓して奇クに発表したお蔭で、早速数人の方から御連絡頂き、やはり世の中には、私達のような夫婦のSMプレイが沢山行なわれていることを知り、大いに意を強くしました。

今回は大阪八尾の、山口氏夫妻とのダブルプレイの實際を、拙文ですが皆様に御紹介します。

山口氏と私は二、三度大阪で目にかかり、プレイの方法や、日時、場所について打合せしましたが、お互いの妻同志は初対面です。その初対面の気拙さや、重苦しさ、恥かしさを除去する事が当面の問題です。

双方の仕事の都合や環境の相違

もあって、出逢えたのは、暑い陽も沈んだ、午後七時、近鉄奈良線の「花園駅」でした。四人が旅館に行く面映ゆさもあって、山口氏の特別な知人の方のアパートを午後十一時まで開放してもらったのでした。扇風機も二台フルに廻っておりませんが、何しろ残暑のきびしさは格別で、私達はすぐ裸になり、家内同志も少し遠慮しながらもシューミズだけになりました。コトがコトです。窓を開けるわけにもゆかず、室内は昼間の余熱でムウーとむせかえっています。

私達はめいめいのバッグから、縄や道具をとり出しました。かねての約束通り、私が山口氏の奥さ

んを、彼は私の家内を縛るのです。人には皆それ〴〵縛り方にも特徴があつて、変った縛り方をされれば女達もハッスルすると思つたのです。山口氏の奥さんも彼の説得が上手だったのか神妙でした。私はいつもの様に後手縛りと首縄縛りの二本の縄を使って、胸許で亀甲型にしてしめ上げ、脇の辺りから余った縄を二本合せて股縛りにして後手につないでしめ上げました。

私の妻は未だ緊縛されている最中でした。後手縛りの縄を二の腕で絞、縄のはしを尻から前へ廻して胸でとめます。胸の辺りが少々淋しい感じでした。私も彼も二人の妻を一個所に据えてパチ／＼カメラをとりました。

部屋の構造上吊りは出来ませんでした。連縛はしました。山口

氏の奥さんはボリュウムがあつて私の家内が痩ぎすです。不均衡で、妻の方が見劣りします。やはりもう少し涼しくならなければ本格的なSMプレイは出来ません。私達は汗みずくで、反って縛られた女性の方がラクな様に見受けられ、男二人は何か奉仕している様に思われました。最初の計画では、あれもこれもと思つたのにいざ實際にやってみると、考えていた半分も出来ず、暑さに負けて中止しました。

本当はこれから面白くなる予定だったのですが、SMプレイ後の醍醐味を味わう事なく、私達は再会を約して別れました。しかし、女達同志で、気持が打ち解け合つたのが収穫でした。同病知憐れむ或いはそんな微妙な心理だったかも相れません。



虐 被 窩 臍

三 得 豆 伊

編集室の皆様、めっきり秋らしくなつて参りました。益々御誌発展の為精力的にお励みある事と存じます。

さて、小生はもう十余年以前からの愛読者ですが、今日始めてお便りさせて頂きます。私も一部の方と同じ被虐性の性向で特にお臍に對する被虐を渴望する者です。Mとしての傾向、例えば被縛、鞭打ちに對する希求も勿論ありますけれど、特にお臍へのそれが強いのです。こんな性向はすでに小学生の頃から、その萌芽が現われていたようです。

放課後、教室の片隅で或いは便所のかげで松葉やソテツの尖った先でそつと自分のお臍を突いて不思議な胸のときめきを覚えた記憶がありますし、中学に入ってから

は化学に使う試験管に蜘蛛や毛虫等の気味の悪い昆虫を入れて、お臍に当てふる程の興奮を味つた覚えがあります。

高校時代には既に紅燈の巷にも足を踏み入れていましたので、女達に私の性向を知られ、種々とからかわれたり、いたずらされたりもしました。当時は、そんな程度で満足していたようです。やがて社会に出るに及んで、益々その性向を強め、又はっきりとそれを自覚するようになりました。それから現在まで約十五年、実に種々の体験を致しました。

最初のうちは深い山の中で、夕暮れの河原の茂みの中で、又或る時は朽ち果てた野中の藁小屋の中で、さらさら輝く真夏の太陽の下で、或る時は銀一色に包まれた真

冬の寒風の中で、あらゆる道具を使い、あらゆる方法で、私は自分のお臍を責め続けました。しかしそれが次第に一人ではあきたらなくなり、徐々に人里に近くなり、紡績工場の女子寮の近くの畑中や洋裁学校の校舎に近い木かげ等で行うようになりました。

又、少し経済的に余裕が出来ましてからは、バーの女給や芸者に金を与えて目的を達したこともあります。でも、やはりこうした性向を理解して呉れる女性にはなかなかめぐり逢えず、何時もあき足らぬ空しさをのみ感じています。

現在私は、こうした自虐を選んだ幾つかの旅館で行っています。或る旅館の窓からは、すぐ隣りに並んで建つアパートの美しい新妻や飲食店に通っているらしい女性の姿が見えますし、或る旅館では紡績に通ずる道路に面していて、何時も下の通りを若い女性が行き交います。又或る旅館はパチンコ屋の女子店員の居宅に面しています。

私はそれらの旅館の最も見られやすい部屋を借り、そちらに向い窓を開け放ちます。最初のうちはそんな行為を「見られるかも知れない」という不安で切ないしげきを求めていたのですが、現在では

実際に見られるまで行かなければ最後の悦楽が得られなくなりました。そんな私の行為を見つけた幾十人、いや幾百人の女性の反応は実に多種多様でした。でも幸いな事に、まだ軽犯罪として連行された事もありませんでしたので、女性には案外寛大なのだな、と感心したりしています。

編集の皆様さん、長々とくだらぬ告白をお聞かせして誠に申し訳ありません。私も一部の読者の方々のように、自分の体験を小説風に書き始めましたが、その度に自分の文学的素養の無さを知らされただけで、遂に諦めました。いずれ暇が出来ましたら、下手乍ら「私の告白」として種々の体験も綴ってみたいと思っています。

私のお臍は或る女に焼火箸で折檻されて（実は金を与えてして貰ったのですが）形が変わってしまったのです。度重なる責めでタコが出来て少しの責めでは痛みも感じないようになりました。若しそんな写真が編集に役立ちますなら写して頂いても結構です。但し私はやせていますので、体に自信はありませんけれど、実験台参考品として御利用いただければ、嬉しいと思います。

愛読者の
みなさまへ
おねがい



私ども三誌では、この数年間の世情にかんがみ、かねてから編集面の自粛刷新を計ってまいりました。

元来、私どもの雑誌は、けっして単なる性雑誌ではなく、特殊な専門誌を自負して発行してきたのですが、青少年保護育成に関する論議が、とみに高まりつつある現今の情勢に対処すべく、いっそうの自主規制を、このたび申し合しました。

愛読者の各位におかれましては、いろいろとご不満もございましたが、なにとぞ、事情おくみとりの上、今後ともご愛読のほど、ここに、改めてお願い申し上げます。

「裏窓」

発行所 あまとりあ社

「風俗奇譚」

発行所 文献資料刊行会

「奇譚クラブ」

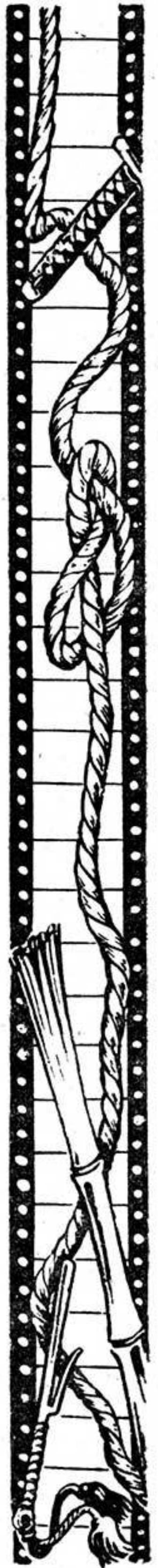
発行所 天星社

奇 譚 ク ラ ブ

昭和39年12月号

1964・12月号（第18巻 第13号）通刊196号

奇 ク サ ロ ン に 寄 せ て



芳 野 眉 美

告白であれ小説であれ、現実ばなれのした

作品は好きではない。各個人の性傾向をそれぞれ自分の実生活の中にいかに応用しているのか、ということが興味があるので、その意味で（失礼だが）本文より奇クサロンや読者通信のほうが私は面白い。

といって、必要以上に観念的になったり、戯文化した通信はいただけない。いたずらに誇張した通信が多いのは、どうしたわけなのだろう。自分の生活を放棄することなどできやしないのに。

最近の奇クサロンが楽しみなのは、読者の

SMプレイが写真つきで掲載されることだ。私の好きな通信をピックアップすると……

A 夫婦のSMプレイ

(1) 長田 実氏

「もっとひろくSM全般に亘って（夫婦）のプレイが誌上に紹介されたら、と常々考えている一人でした」

私もそう思います。

「妻を相手に写真をものしているマニヤですが、本日はここに近作の中、数点をごらんに入れます」

誌上に掲載された二葉の写真は最高だ。編集部の評として、

「モデルになられた方も若くて中々の美人なので、緊縛フォトとしては、立派な作品となっております」

できれば、分譲作品に加えていただきたいものである。美しい写真である。

「私の作品をごらん頂いて、その上で次々と愛読者の作品がのりますことを心から願っております」

と長田氏は結んでいる。

三十九年五月号「私のうつした写真」より

長田夫妻の勇氣と理解に敬服します。

(2) 三隅良信氏

「大阪の山本氏ご夫婦、京都の岡本氏ご夫婦をご紹介します有難うございました。両氏に直ちにご連絡申上げました上、それぞれお目にかかり、いろいろの夫婦プレイについてお話を交歓しました」

プレイの話をできる友人を得たことは幸福であり、うらやましく思います。

「岡本氏は現在フोटを稽古中にて、奥様が非常に協力的で、進んで被縛を申し出られる位です」

これだから夫婦のプレイは好きなんだ。

「が、DPEの処置に困る」

とあるのは、考えていただきたい問題のようである。

「東京の関氏ご夫婦は、いつでも上阪するからとのご熱心なお手紙でしたが、関氏のご発案が余りにも奇抜と極端ですので、私の家内の方が恐れをなしてしまいました」

恐れをなした、のは『鼻の穿孔』のことらしいが、関氏のくわしい報告をお聞きしたいものである。

夫婦のプレイもいろいろと複雑の様子。

さて三隅氏自身は、

「家内とのSMプレイのフोटは、全部自分でDPE致しておりますので、家内も安心して撮らせてくれます」

「家内ですと、何枚とるという制約もありませんので、プレイの緊縛にうんと時間をかけて縛りますので、かなり強烈な緊縛フोटが出来ます」

とあり、

「私はどちらかというと、伊藤晴雨さんがお撮りになった様な、残酷味を発揮したものに興味をそそられます」

残酷に緊縛された三隅夫人は、さぞ美しいことだろう。

「第三者を交えてのSMプレイは急には実行出来ないようです。しかし、お互いが相手をよく知って理解し合えたら、数カ月後にはきっと、楽しいSMプレイが出来ると確信します」

三十九年八月号「夫婦SMプレイの実際」より。成功を祈ります。

通信によると、三隅氏はガイドクラブの女性を口説いて緊縛フोटを撮ったことがあるらしい。

口説いてみるものですね。

(3) 山本成友氏

「汚辱的な思いきった羞しめ責めで、形だけでなく実際に嫌がり苦しむ責めに興味をそそられます」

とあり、

「婦人用の高い枕に使ったスポンジゴム（非常に臭いの強いもの）を口一杯に詰め込み、その上をゴムのチューブでおさえ、更にその上から小生の古いレインシューズで掩いました。このレインシューズは、現在は風呂場で洗濯の時、お手伝いさんが穿くもので、それだけ一層家内をみじめで不潔な気分させ大変嫌がります」

山本氏は、ゴムの臭いの強い粘着性のある汚れた猿ぐつわに最も興味があるという。

三十九年十月号「夫婦のSMプレイを」より。（写真は発表できないのですか）

得難い通信だと思います。

三隅氏の通信によると、山本氏は、「乳房責めに対しては仲々造詣深く、東京の下着会社のニュースを集められて、その会社の乳房責めの用具も秘かに購入されておられます」

とある。

乳房責めにされた山本夫人は、さぞなやましいことだろう。(失礼)

とにかく夫婦生活において

「極力家内をその方面に誘導中」

とはいうことありません。

(4) 水野 弘氏

三十九年十月号「ダンボール箱の生首」の
フォト掲載。その他数多く発表。

「モデルは私の妻であり決して演技に経験のあるものでもありません。平凡な家庭の主婦ですが、妻が非常に積極的に撮影になったり、協力的になってきましたし、投稿フォトもあり気にしなくなりました」

御発展を祈ります。

「生首ものばかり撮影している訳ではなく首無し胴体縛り、責め、浣腸、処刑等コレクションしております」

幸福な夫婦生活の見本。

「新宮氏の御好意により、文通作品の交換を続け、御交際させて戴いており喜んでおります」

(5) 新宮明夫氏

三十九年七月号「夫婦のSMプレー写真」

より「磔刑」のフォトを掲載。

生首ものではすでに有名すぎるけれど、夫婦のSMプレーがどのような行なわれているか、覗いてみるのも参考になります。

「磔刑をテーマにして、フィルム一本を消費したのですが、妻を全裸にしての撮影ですから、全部をサロンに発表することができません」

「十字縛り、開股大字縛り、槍での刺突、首筋への止め刺し、死体晒し等を組み入れた簡単なストーリーを組み、一こま一こまの下絵を画き、それに基いて撮影したのですが、約三時間近くを要し撮影の終わった時には、二人とも完全にグロッキー状態でした」

生首ものには興味がないし、オカシナのが好きなんだなと思っと思っていますが、私が女性の神酒崇拜者であることに、新宮氏の外皆々様もオカシナのが好きなんだと思っっています。やるだろうから、人様の性傾向は、そのまま理解したほうがいいのじゃないかと考えています。いちいちナンクセをつけることはないですよ。

(6) 剣持逸人氏

「四帖半の中央が、掘りごたつにしてあるの

で、ここへ妻の体を入れ、むしろを敷いてそのむしろの中央を首の寸法だけ丸く切りとり、後半に縦目にきりめを入れて首をさし込ませると、まるで、首がたたみに転がったように写ります」

このフォト掲載。

「妻は二十八才、私でよかったら撮ってもいいと笑って言いました」

いうことありませんね。

「今度思い切って引伸機を始め、DPE一切の道具を買いました」

それでこそ円満な夫婦生活の真随というべきでしょう。怒力しましょう。

三十九年七月号「生首フォト礼讃」より。

この通信はノロケすぎる。

B 同性のSMプレイ

松永景子さんとS子さん。

三十九年七月号「私の撮ったS子」のフォト掲載。

「私、S子を縛って、滅茶苦茶に抱きしめて可愛がってあげたくなったわ。ねえ、縛らせて——、S子の綺麗な肌をカメラで永久にのこさせて」

名文です。

「S子を説き伏せて裸にし、あり合せの縄で後手に縛りましたが、ほんの初歩です」

このフォト、グラビヤにしたいですね。

「S子は二十一才、一六二センチ、五六キロ私の眼から見ても美人の部類」

「私は二十四才、二人とも未だに独身で、幸か不幸か男性は知りません」

「小さなアパートに同居しております。私達二人の間柄は御想像にお任せします」

三十九年八月号は、反対に「S子の撮った私」のフォト掲載。

「私もS子に、お仕置をうける羽目になりました」

とあり、

「S子は奇クの写真を見よう見まねで、私をパンティ一枚にして、何とか縛りました」

ほほえましいプレイではありませんか。

「五六枚撮ったうち、これといったフォトもなかったのですが、比較的マシな一枚です。」

ご掲載下さっても結構です」

有難う御座居ます。

この二作品、私は好きです。

C 人間トイレを求む

「週二回位、私のドレイとして奉仕して下さい方はいないでしょうか」

というのは、津田亜紀子さん。

「自分一人では、どうしても出来ない人間トイレもぜひ使ってみたいのです」

と私としてはショックな通信であり、「もちろんユニンの方だけで結構です」

名文です。

「太ももまでのゴム長をはいたまま、思いきり浮輪や水枕、円座などの量感を取り入れた人間トイレのプレイを楽しんだら、ほんとうに嬉しいと思います」

外国商社のOG、三十才、ミス短大、独身、現在アパートで一人住いのよし。

私の趣味だからよけいに気になっているのですが、人間トイレになった人はいないんですか、その後の通信に見受けられません。

「ドレイには、私のつくったゴムパンティを

制服としてはかせてあげますし、ゴム長ぐつを穿いた足で踏んだり跨ったりしてタップリいじめてあげます」

とやさしく、

「私を楽しませてくれれば、ドレイの奉仕次第できっとヒーヒーうれし泣きがでるほどのきついいじめ方をして差し上げます」

ゴムマニヤである津田さんのプレイを覗いてみると、

「大体毎日ゴムプレイを楽しんでいます」とあり、

「椅子にエヤーマットをしぼりつけ、クッションの上に空気を入れた円座と水を入れた水枕をおいて、その上にひろげたゴム合羽をカバリーのようにかぶせて、ゴム椅子に裸になって、ゴム長を穿いただけで後向きに馬のり跨って楽しむ『ゴム椅子のプレイ』を愛用しています」

三十九年五月号「奴隷募集」より。

津田亜紀子さんのユニンを飲んでみたいものだ。



花と蛇回顧讃

團鬼六先生に捧ぐ

畑村 信 一

奇ク八月号社告で「花と蛇」続編御執筆中との朗報に小躍りする思いで筆をとります。

「花と蛇」のない奇ク誌は火の消えた様なもので、思えば一昨年七月より足かけ三年間、途中の永い中断こそあれ、毎月々々次号の進展に胸躍らせて発売日を待ち焦れた心境は、遠い幼少年時代の連載読物を思い出し、独り微苦笑を禁じ得なかったものです。

「花と蛇特集号」を一般の大好評に応えて、臨時増刊として刊行された、奇ク当局の英断は、団先生の麗筆もさることながら、まさに企画の勝利といえましよう。

奇ク愛読者にとっては、今更「花と蛇」讃

歌など、口に出すことさえ不必要な程、この上ない満足感に浸っておられると思います。併し、悲しいかな人間の慾望には限りがありません。団先生の作品が素晴しければ素晴らしい程、読者としては、くめども尽きぬ夢想の泉を求めてやまないのです。

特集号の『あとがき』で先生も書いておられます。（私も四美女を責め疲れた。この辺で休息したい）と。また奇ク四月号に、「小説作法」を執筆された中にも、色々原作者としての抱負、偶感を述べておられます。（や

はり自分としては他の人の作品を読む方が楽

しい）と。団先生にして、この言あり。まことに御尤もと同感を禁じ得ない思いも致します。併し我々の空想には、おのずから限度があります。例えば、暗がりの室内で煙草を喫んでも、又、眼をつぶって美酒を傾けても、満されざる感興は如何ともなりません。吾々平凡な現代人にとって、残されたファンタジックなゴールデンタイムは、目の前の一流作家の芸術作品に接するより道はないのです。読者は、より一層の期待をこめて続編の登場を待って居ります。

先生は、こんな御経験はないでしょうか。

小生の庭の一隅に、蜘蛛の巣があります。

一匹の蟻をつまんで投げ入れてみます。突如そこに展開される蜘蛛と蟻との死斗。そこには一点の虚偽も、遊びもありません。自ら張りめぐらした巣窟の中で、存分に魔力を恣にする蜘蛛、抵抗すればする程緊縛の深みにはまるばかり、我と我が身を悶えさせながら、徹底的に生血を吸い続けられる受難の蟻の姿。ふとこの光景に接したとき、どんな正常な所謂常識人でも、あやしい胸のときめきと共に、心を動かされない人はありますまい。

SといいMというも、人は皆その要素は充分持っている筈で、生れたばかりの赤ん坊や悟り澄した哲人なら兎も角、この要素のない人間は、正に生ける屍でしょう。加虐者は、自らの行為の完璧を期するためには、受虐者が一〇〇%受難の淵に悶え苦しむ様に、凡ゆる智力、労力を惜しみません。良くその苦しみを知るほど、よくその楽しみを味うと云います。悪辣無情の加虐者と雖も、或いは一瞬絶世の美女たる受虐者の身に、我が身を置きかえて見ているのではないのでしょうか。

よく「奇ク」読者通信欄に、（私はSが八〇%位云々）と述べておられる先輩方が居ま

すが、些か暴論かも知れませんが、小生の考えとしては、大多数の人はS及びMが精々夫々四〇%乃至六〇%の範囲内で、双方の要素がその時機、状態を占めているのではないかと思うのです。所謂正常なる常識人が、SとMが五〇%宛、イコール零の均衡を保っていると考えざるはかないとすれば、以上の見方も成立つと思います。一体Sが九〇%ということになれば、その人には人間味というものが残されて居るでしょうか？ まるで人を見れば嘔みつく狂犬の如き加虐者に襲われる受難者にはただ本能としての恐怖あるのみ、ここには所謂S小説の成立つ余地など全くありません。（尚、小生の自己診断によれば、小生はSが五一%位、Mが四九%位で、まるで先頃の何処かの国の自民党総裁選挙の様な数字が出ました）

脱線しましたが、小生はここであやふやなパーセンテージ論など振りかざす積りは毛頭ありません。ただ団先生の作品が、近時流行の、凡百のエログロナンセンス小説に比べて、S小説の正道を往く極めて密度の高い珠玉の名篇だということを言いたいのです。

単なる斬った張った、血が出たの、むき出しのバリバリズムや、荒唐無稽なセックスの

氾濫に情さず、構成の緻密さ、流麗の場面転換、精選された豊富な語彙から生れるつきつめた緊迫の状景描写は、推理小説に例えるならば、恰も本格派の味でしょう。今「特集号」を読み返してみても、初期の頃の構成の乱れ、編集部のカットの影響などを危惧したのですが、どうしてもして、まことに首尾一貫、毛ほどの乱れもないのには、改めて感嘆させられました。正に「花と蛇」こそ昭和三十年代後期の傑作として永く後世に記憶さるべき作品でしょう。

人間の深奥に宿るやむにやまれぬ心理と心理の斗いが、S小説の真随とすれば、作者と読者との心のふれあいこそ、原作者の喜びであり望まれるところかもしれません。我々はいま団先生のもつ無限の泉の横溢を待つて筆をとらずにはいられないのです。もう一杯もう一度と、美酒に酔って、ないものねだりをしていく訳ではありません。嘗て奇ク誌に、「責め場面の空想的読書法」を投稿された真奈部氏の言を俟つまでもなく、目の前に夢の成る樹を与えられなければ、我々はどうしようもないのです。また作品を読んでいて、そのスタイル、好み等から作者団先生は或は相当の御年配かなと思うときもある。極めてオ

「ソドックスな、重厚な作風は、まるで斯界の類似誌と比較しての奇ク誌そのものの姿の様な錯覚さえ覚えることがある。これも近來奇クイコル、「花と蛇」と思いつめて來た小生の錯覚だろうか。(殊に最近の奇ク表紙は、四馬画伯の明らかに『「花と蛇」その後』を思わせる素晴らしい幻想画で飾られている)だが団先生の作品の内容は、無駄のない展開でグイ／＼と要所を畳みかけてゆく逞しい筆力、つやのある描写力を見ると、反対に若々しいエネルギーを感じるもの事実である。

どうか団先生、「疲れた」などと仰言らず、ます／＼健筆に磨きをかけて欲しいと願わずにはられません。

今更ながらと思いつつも、筆は「花と蛇」回顧讃を綴ってやみません。篇中の、名場面の数々は、思い返しても胸をしめつけられる様な素晴らしさです。

深窓の令夫人、令嬢、女探偵、女学生と、S小説お馴染みの美しい受難の主人公達が、一度び、葉桜団、森田組の魔窟に捕えられるや、もはや悪鬼共の意の如く操られるのみ、言語を絶した数々の受難場面、巧みな人物配置と因縁の糸を織り込んで、最終の『スター誕生』まで息もつがせぬ展開——殊に作者の



構成に舌を捲くのは、各登場人物の配役設定のスキのなさである。S小説での人物描写が、如何に大切であるかを痛感させられる。「好敵手」という言葉がある。篇中の四美女と悪鬼共は、立場こそ違えお互いに深い因縁の糸に結ばれ、宿命的なものさえ感じさせる。そ

れだからこそ、そこから生れる相剋の各シーンは真剣で、一点の無駄もなく、ある非情な美しさを感じさせるのであろう。

最終の『スター誕生』の場面をとっても、遂に剃髮式の祭壇に立たされた静子と京子が、名実共に新しく生れ変わるに至る経緯が如

実にそれを物語っている。女性として最も恥しい剃髪の刑を受け、神秘的深窓の貴婦人としての世界から引きずり出されてしまった静子夫人は、葉桜団、森田組の幹部達の見守る中で、かつての使用人、恨み重なる吸血鬼川田の巧みなリードのもとに、遂に自ら進んで彼等の待つ罠の中に飛込んで行き、甘美な更生を果す。また京子は、昨日徹底的な浣腸を我が身に加えた恐ろしい吉沢の登場の前に、もはや抵抗する気力も失せて、長い剃髪式の間にじゆう自由に屈伏寸前まで攻め続けられてしまう。

そして愛する妹美津子が、自分の示す数々の反応のために今宵どれ程苦しめられるかも知らずに、周到な吉沢の奸計に乗って恐ろしい敵に凡ゆる資料を教えてしまう。北叟えむ吉沢にかわって登場したのが葉桜団の副将格の朱実。単身潜入した敵の牙城だったが、遂に武運つたなく捕えられた戦国の女武将の如く、敵将の居並ぶ中で華々しく討死を遂げる。同性として、女の弱点を知りつくしている朱実の容赦ない責めの中で、屈辱の混濁のうちに葉桜団の捕虜としての忠誠を誓わせられた揚句、一気に昇天させられた京子の悲壮な姿は、まことに読者に深い感銘を与えずにはお

かないでしょう。完全に死命を制せられて、朱実の思うさまに屈辱の峠をさまよわされては、さすがの京子も心からの赦しを哀願するばかり静子令夫人と対照的に派手に狂乱の頂上を極めてガックリと敵の腕の中に倒れ込んだ姿は、或いは女斗美、美女奮戦切腹、打首場面マニヤをも満足させるものがある様な気がします。

名場面等のクライマックス・シーンとして次に忘れられないのは、何といっても地下室の残虐図、京子、美津子の浣腸競演場面でしょう。美しい姉妹を、すばらしい姿態で二つの台の上に並べるといふ卓越したアイデア。魂も凍る姿で、処刑台上に仲良く並んで恐ろしい御馳走を待っている年若い二人を救う為に、静子夫人の数々の犠牲的名演技を前奏曲として、緊張感をますます盛上げます。殊に静子令夫人責めは、日本舞踊の素踊り、小うたの披露、紫輝の御使用をピークに、後始末、川田式股間縛りに至るまで、作者の筆はまことに流麗、凄いまでに冴えかえっていた様だと思います。

羞恥心も人一倍強く、また最も感受性の鋭い年頃の美津子が、自分と同年配のチンピラ共に好きな様に浣腸されるという気持は如何

ばかりであったでしょう。学校一、二の美貌と才智に輝く可愛いお嬢さんは、生れて始めての御馳走をして貰い、髪のリボンをふるわせ乍ら、素直に、たあいなく屈伏して、見物一同の目を充分満足させてくれます。

また京子は、悪辣な吉沢の復讐に身も心もさいなまれつつも、堪え忍んだ結果が反って敵の思う壺で、続いて二本目を受けると聞いては、張りつめた気力も一ぺんに衰え、今迄の勝気もどこへやら、ひたすら吉沢の名を連呼して赦しを乞います。施す者と施される者との呼吸がぴったり合った緊迫のシーン。

「待って、お願い、赦して」との悲痛な叫びも空しく、又もやタップリと止めの石鹼水を送り込まれては、堪ったものではありません。今や理性の自制も失い、悩乱の極、「駄目、もう出ます」と頼まれもしないのに自ら最後のときを告げつつ、「便器をく」と叫び乍ら華やかに屈伏した姿は、美しくも哀れといえましょう。

まことに女体強制浣腸こそは、美女羞恥責めの極致でしょう。あられもなく素晴らしい恰好で衆目の眼前に据えられた姐上のいけにえに出来ることは、ただ小刻みに顫えおののくばかり。絶対の優位にたつ執行者は、美しき

もの気高きものを今こそ自らの手で、一挙に排泄という汚辱の地獄へ追いおとそうと、やおらその魔手を揮い始めます。自分の最も恥しい行為を衆目のうちに自演させられるという思いもかけぬ怖しい絶対絶命のピンチに、哀れな犠牲者の「嫌、ああ嫌」とかすかに挙げる絶望の叫びとはうらはらに、早くも目標に擬せられた白蛇のガラスシリンダーの前で身悶える双丘は、恰も一刻も早くその侵入を迎え入れようと待ち焦れているかの如き錯覚さえ見る者に感じさせます。だが決して決してその侵入は許してはならないのです。許せばどんな結果を招来するか。併し、緊縛された上、生殺与奪の実権をすべて相手に委ねてしまった彼女には、一体何が出来るというのでしょうか。

非情の嘴管を受け入れた瞬間から、そのままジッと身動きもならず、ただ施術者の思うがままの緩急自在のポンプ捌きを甘受しているいけにえの姿。執行者は目の前の肢体の反応、表情の微妙な動き、かすかな呻ぎの伴奏をゆっくりと楽しみ乍らも、手馴れた冷静さでそのまま魔液をタップリと一滴あまさず送り込みます。奇ク七月号目次口絵を御覧下さい。今まさに大量の薬液を送り込まれ横たえ

られた犠牲者のあやしくも切々たる姿を。勝者と敗者の姿の、これ程までの鮮かな対照は他にありません。そうです、勝負はそこで終わったのです。施術者は、あとは煙草でも一服して待っていればよいのです。

嘴管が静かに引抜かれたとき、長い屈辱の姿勢と、物言わぬ魔手の揉りんから、やっと解放された安らぎを見出したと思ったのも束の間、やがて彼女は独り敗北の階段を、破滅に向って降り始めねばなりません。処刑は未だ終ったのではないのです。処刑の結果を立会人一同にはっきり確認して貰う仕事が残っているのです。たとえやむにやまれぬ生理の断崖とは云え、自らのものを自らの自制も及ばず、存分に衆目にさらけ出す失態だけは見られたくないと、うら若い麗人が白磁の裸身を朱に染めて、必死に耐えに耐える可憐な自制のおのきも、徒らに見る者の期待と亢奮を昂めるばかり。絶世の美女の深奥に入った魔液は、執行者の必殺の意志、観察者の或いは読者諸兄姉の期待と願望をこめて存分にその威力を発揮するでしょう。今や逃れられぬ絶望の深淵に近ずいて、理性の支えを失い、はかない自制も遂に及ばず切羽つまって、恥も外聞もなく取り乱す令夫人、令嬢、美少女ら

の口からは、凡そ正気ではいえない様なこともはっきり聞かせて貰えましょうし、各人各様の華麗な最後のシーンと共に、羞恥責めの極致を展開して呉れるでしょう。

思い返せば名場面の想い出は限りなく走馬灯の様に流れます。始めて葉桜団に捕えられた静子夫人が、ズベ公達の軍門に降り、嘗て顎で使った運転手川田に思いを遂げられる隠れ家での一夜、我が娘桂子の手による浣腸を断るに断りきれぬ辛さ、続いて森田組に売られ、早速全員の居並ぶ座敷の真中での派手な排泄のお披露目場面（このあたり当時の客観状況が偲ばれてカットが多く残念）田代、森田の斯道のベテラン二人がかりで気を失うまで責め抜かれる静子夫人など潜入したスパイへの怒りをこめて徹底的に京子をいたぶるズベ公達の恐ろしさ。殊に見逃せない点は、今や悪魔団のスターとして、鬼源という一流の調教師の手によって飼育されている静子、京子が夫婦プレーを強要されるなど、近代欧米先進国（？）並みに漸く識者の間で流行（？）し始めている同性愛プレーを折込んだ作者のソツのなさです。

次に接吻場面の秀逸さも忘れられません。緊縛の静子、京子が衆目の前で川田から受け

る接吻の場面は、或いは上気して周囲の嘲笑も耳に入らず、或いは相手の為すがままに、此の道の達人川田に征服され泣いて従属を誓った前夜の落花狼藉と女の弱さ哀れさが偲ばれて、甘く美しい悲壮感を漂わせます。空手二段の女探偵京子を、一夜にして沈黙させてしまった初物喰いの川田は、次には生れて始めての怖しいお仕置のあと、恥しい後始末を受けて放心状態の美津子よりも接吻を奪い、あやしい野心のときめきを覚える。また美津子の甘ずっぱい裸身に口づけの雨をふらせる吉沢の姿も、これからの加虐の場面展開を思わせて読者の血を躍らせる。また鬼源の苛借なき調教の前に、今や何もかも忘れて本気で接吻し合う京子、静子は、やがてお互いに忘れられぬ存在となってしまう。これなども、これまでに互いに悪鬼共のお仕置きを、身を以てかばい合った二人の間柄について、作者の周到な伏線のさえが生きています。

それにしても京子の大往生場面は悲壮でした。緊縛の美女の人の字失禁場面の一部始終をゆっくり観賞しようという鬼共の恐ろしさもさることながら、自分の救出が失敗した為に蒙った静子夫人の受難をかばおうと、自ら進んで此のお仕置を承認せざるを得ない羽目

に追込まれた京子ですが、近附いてくる撮影機のカメラを意識しては、果せる訳もありません。失禁場面といえ、静子夫人も、ことあるうに皆の見守る中で紫禪のおしめを使って見事に出してみせて呉れますが、京子のお仕置の方がやはり罰が重いのでしょうか。一度は死ぬ思いで決心しても、あの恰好、あの小道具、一瞬の満場の緊張を感じては、さすがの活潑なお嬢さんもこの足を踏むのは当然です。命じたことは必らずやり遂げさせるというドライに徹し切った鬼共から、遂に塩水を鱈腹のまされては何れも堪りましよう。戦慄する火柱から迸り落ちる熱湯の火瀑布は、空手で痛めつけられた鬼共の溜飲を漸くさげさせてくれるでしょう。

ただ此の場合一寸気付いたこと——団先生好みの鉄火な小町娘責めの悲壮感もさることながら、やはり京子嬢も最後の瞬間には、切齒扼腕口惜しさに泣き叫ぶだけでなく、気丈な気持の「はり」が崩れた、無垢な乙名の羞じらいにむせび泣きつつ果す哀切の屈伏描写があれば、更に錦上花を添えたのではないでしょう。その意味では、くどい様ですが地下室での姉妹競演の場で、京子が愈々最後の最高潮場面で、「早く——」ともう何も彼も

忘れて夢中になって便器を催促する迫真の名演技、最後の一点に思念を集中して、加虐者に対する恨みも何処へやら、鬼共の思うがままの狂態を見せる。いや鬼共の期待した以上の「協力」を見せる可憐さ、うい／＼しさは圧巻でした。此の時の切羽つまったいらしい京子の心情を思うとき、思わず頬ずりしたくなる程の身近な人間らしさを感じた読者が多かったのではないのでしょうか。作者はここで吾々の胸の中に生きた一個の女性を創造したのです。寸毫の描写に於ても作者の心血を注いだ配慮を見出せばこそ、本篇に対する巷間の好評も亦、当然のことだと思います。

ここまで書き連ねて来たとき、待ちに待った十月号奇ク発売、早速買い求めてみると、あった、あった「鬼六談義」続稿鋭意御執筆中とのこと、正にこれに過ぐる喜びはありません。作者と読者、編集者と愛読者との固い心の繋りこそ、約束は必らず果すという紳士の盟約に似て、奇クに対する小生の信頼、愛着の念は、ます／＼高まるばかりです。

扱「続花と蛇」ですが、近時の御時勢からいって用語、描写等益々制約を加えられるとの御苦衷、充分お察し申し上げます。まこと

に、近頃の出版事情は、一流の雑誌、週刊誌や、映画、テレビ等でも、文字通り人間の劣情をあてこんだ際物や、「さわり」描写を売物に、氾濫その極に達しております。小生は此の反動は必らずや遠からず現れて来ると思います。殊に、憎むべきは無責任な報道マスコミであります。伝統ある文献誌としての奇ク誌が、細く(?)長く、秩序ある出版活動を続けているとき、ただ金にさえなれば、良きネタにさえなればとの火事場泥的根性で本誌などを引合いに出されるのは、誠に心外の限りです。劣情とみるか、人間性の探求とみるか、究極の真理を求めて、我々が人間である限り、重き荷を背負って細く長く歩かねばならぬ宿命ではないでしょうか。世に、傑作推理小説を読んで、殺人を志した人間が居たでしょうか? 探偵小説発祥の国イギリス人は皆殺人鬼でしょうか?

戦後漸く平和というものの有難さが身にしみて感ぜられる昨今、楽しい炉辺の読物として、英国人の最大の楽しみの様にパイプとウイスキーを片手に繙く数刻、或は社会の矛盾に傷つき、独り自らへの逃避と安息を求めて、ストレス解消に資する伴侶としての奇ク誌は、芯に良識という柱が一本存する限り、何

で有害不良と断じ得ましょう。「人は世につれ、世は人につれ」と社会全般の罪が、前途ある青少年の教導にはね返ってくるとの反省ならば、勿論双手をあげて賛成です。本誌当局の自粛自戒及びたゆまざる生成脱皮は当然といえましょう。思わず憤懣を当り散らしてしまいました。が、団先生に申しても詮なきこと。小生の言い度いことは、団先生ならば勿論幾多の制約をはらいのけて、新しい続編の創作に於ても、すばらしい傑作をものされる筆力をお持ちだと深く御信頼申上げて居るということ。いや窮屈な制約の下にあってこそ、新しいスタイルの磨きあげられた芸術品が生れるものと期待して居るのです。

例えばクライマックスの描写に於ても、「ハァ」とか「あー」とかの三文エロ小説的の表現をもっと簡潔に、直載な暗示(仲々注文が難しい?)を主力に、また新しい『用語』を使用されては如何? 「風が吹けば桶屋が儲る」式の難しい三題噺式のものでなくても、いくら頭脳程度の低い小生でも、「施す」「一体何を施そうというんだ?」「御神酒」「神さまがどうしたって?」「洗面器」(何でここで顔を洗わねばならんだ?)等々の魅力的な用語に接したとき、沈黙考数分にし

て漸くハタと思い当り(嘘を吐け)などする望外の楽しみも生じて来ます。何れにしても、団先生作品には、マンネリズムなど有り得ません。オーソドックスな、何時如何なる時代でも我々の胸をうつ責め場面でも、先生の手には掛れば我々に充分な満足を与えてくれるからです。

殊に小生が先生の意図に全幅の敬意を惜しまないのは、先生があくまでも美女羞恥責めに「美」を追求され、極端なサドや殺伐な描写を少くされている点です。我々の愛する篇中の四美女が、気の短いアツサリした気性の御仁にバツサリ首を斬り落とされたり、白いなめらかなお腹に短刀を突き刺したり、揃ってラージボンボンにされたりしたら、全く幻滅此の上もありません。小生など、四美女が、どうか今のままの彼女達であってくれ、永遠に今の俤の麗姿を保って受難の主人公達であってくれ、願わくばいつまでも処女であってくれ(これはムリな相談かも知れませんが)とまで祈って居るといふのに。最近の奇ク誌の読者通信欄の賑い振りはどうでしょう。名論卓説入り乱れ、正に百家争鳴(失礼、小生も含めて)の感があります。

小生はここで何も、斯道の諸先達方のお説

を批ぼうしうなどという気は毛頭ありません。斯道を極めれば、実証マニア、プレイマニア、その他諸々の道へ通ずるのでしようし、また啓発される処も多々あります。何分にもSが五一%の未熟者のたわ言と御寛恕願いたいのですが、小生としては、いつまでも今の俚の自分でありたい、はしなくも踏み入れた夢のパラダイスで一刻も永くとまどい、ひきまわされ、目眩めくS小説の三昧境に浸りたい思いに掛られているのも事実なのです。十人十色、内容豊富な文献誌の広汎な愛読者層に揃って満足を当えるのは誠に大へんな御労苦と存じますが、此処は一番団先生にお任せしましょう。

扱、続編「花と蛇」ですが、先生のお言葉に甘えて、希望、意見等もう少し書き連ねてみます。捕われの四美女に更に加えられる悪魔共のあくなき責めが益々苛烈さを増すことと思えば、月並な言葉ですが、正に血湧き肉躍る思いです。

新鮮な生贄としての美津子は、どの様にして毒牙の餌食になるのだらう。思ってもみない悪の別天地で開花する蕾の美しさは、次代のスターの地位を約束している様です。また鬼源の調教に益々みがきをかけられた令夫人

と京子のびったりイキのあった濃艶華麗な夫婦プレイ・ショーは参観者一同を唸らせずにはおかenないことでしょう。此の二人を本命とすれば予備軍としては美津子、桂子のお嬢さんコンビが控えて居ります。時には趣向をかえて、京子と桂子、静子と美津子を夫々組ませるのも一興でしょう。昨今映画やテレビで静かなる流行を見せている同性愛プレイを、京子桂子組の青春発刺コンビは途中から凡てを忘れて夢中になってお互を責め合うでしょうし、今や立派な更生を遂げた静子おばさまが、未熟さととまどう女学生美津子を如何に優しくリードするかも見逃せぬところでしょう。

提案ですが、続編には二、三の新しい登場人物を加えたら如何でしょう。先ず美しい深窓の令嬢を一人（極めて定石通りで陳腐かも知れませんが、これは京子にも桂子にも或は美津子にもないものを求めたいからです。桂子も遠山財閥令嬢で申分ないが些かズベがかっているし、京子姐さんは空手二段と聞くと、やはりオッカナイ）御登場願って、稿を新たにした機会に、団先生に彼女を徹底的に責め抜いて欲しいのです。

設定としては、旧華族の名家の令嬢で、静

子夫人の遠縁に当り、上品で慎しみ深く、羞恥心に富み知性と教養にみちた絶世の美女、優雅さと近代的な健康さを併せもつ英文科在学中の女子大生——という処では如何？ 無論彼女も、一味にかどわかされて、手の早い川田の味見、田代森田等の好餌となること云うまでもない。そしてこの新しいスター要員は、一味作製の怪映画の女主人公として、凡ゆるお仕置場面を一貫してフィルムに撮影、録音されて行く。何も知らぬ深窓の美女は、ただ悪魔共の操る糸のままに我と我が身を焼け焦しつつ、素直に、また切なくむせび泣くだけであろう。この気高く知性あふれるお嬢さんの着衣剥奪は、強制や緊縛の方法をとらず、太陽と風神の偶話にある如く、悪魔共の奸智の陥穽におちて、自らやむにやまれず脱いで行くという方法がふさわしいかも知れない。何れにせよ、あの手この手と悪魔共に翻奔され、のっぴきならぬ羽目まで追込まれて行く。殊に此の令嬢に浣腸の御馳走を差しあげるときは、四馬孝先生画く『女体浣腸嗜虐名場面集（分譲フォト略号か6）』のアイデアを使用して下さい。開脚膝挙柱宙ぶりという素晴らしい着想は、四馬画伯近來の最高傑作の一つと信じます。特にあの「表情」のす



ばらしさは未だに忘れることが出来ません。
念入りに御馳走を施された挙句が思ってもみ
ない姿で排泄に耐えに耐える絶世の美女。
そして此の気高い無垢の処女が、深夜の嵐
の祭壇に横たえられるとき、美津子の科白で
はないが「何から何までお世話になる」の

は、一体誰の腕の中であろうか。
次々と掘り出し物の絶品を幹部連中にとり
あげられて些か欲求不満のチンピラ達の為
に、美貌の婦人補導官を登場させたら如何？
かねてから葉桜、村田の非行グループを内偵
していた婦人補導官が、たま／＼彼等の奸計

におびよせられ、よってたかつて捕えられて
しまう。飛んで火に入る夏の虫と待ち構えた
ズベ公達に早速数々のお仕置をされた上、遂
にチンピラ共に逆にさま／＼の「補導」を受
ける身となってしまう。屈辱の裏の別世界に、
崇高な使命も忘れて悩乱する美しい虜囚は、
妙齡の大柄な裸身をふるわせ乍ら、「やめて、
お願い」と必死に哀願するも許されず、年下
の鼻たれチンピラ共の達者な責めに、あられ
もなく声をあげて泣き出してしまう。此の倒
錯の悲壮感、緊迫した倒錯感は、S小説には
欠かせぬ要素でしょう。

美女と野獣、強盗と若妻、女教師と生徒、
はては巴御前と若武者などの例を喋々するま
でもなく、泰平ムードに明け暮れる我々に、
思わずハツとするショック、スリルとサスペ
ンスを与える倒錯した緊迫場面は、本篇にも
充分盛り込まれております。今や運転手の川
田に完全に征服された静子若奥様は、夫の商
敵田代にも存分に復讐の魔手を恣にされ、昨
日まで女ボスとして君臨していた桂子が、今
日は銀子や朱実に徹底的なはずかしめを受け
るし、敵の首領にあえなく返り討ちにされる
京子、はては学校一の優等生美津子がことも
あろうに、お仕置のあと始末を下等なチンピ

ラに入念にして貰うなど、勿論団先生の筆にソツのあろう筈はありません。

男は元来ロマンチストで、女はリアリストであるという説が正しいとすれば、これは悦虐の別天地にも通用することかも知れません。川田を始めとする鬼共は、自分達の遠く及ばぬ高嶺の花の美女群を自らの腕の中で征服したとき、相手のよろこびを我がよろよびとする野心があればこそ、あの様にハッスルするのだろうし、また銀子を始めとするズベ公のお歴々は、自分達の到底もたぬ気高さ、美しさや、とりすました上品さを一挙に自分達と同じ線までひきずり落す為に、羞恥責めの秘術を尽して同性を苦しめるのだろうか。まことに男と女で織りなす此の世の葛藤は考えれば魔訶不思議なものであります。

テメエが最低の野郎であるとの事実とは別にしても、小生には女性の不可思議さ、怖ろしさが思われてなりません。男性にはSが多くて女性にはMが多い、これはそれ程簡単に云えることでしょうか？ 逞しい男性にトコトンまでしいたげられることに、最高の悦虐を味うといわれる女性のM性向なるものも、或いはその一瞬には自分にはない強さ、逞しさに憧れ、それを自分のものにしようという隠れ

た貪婪さがあるのではないのでしょうか。醜くて彼女等が、自分よりも力弱く、美しいものに対したとき、どんな性向を示すのでしょうか？

随分昔のことですが、小生がある映画館に坐っていたときのことです。前の座席に二人の年若い女性が連れ立って坐りました。画面は時代劇、折しも凌辱場面でした。瞞されて南蠻渡来の眠り薬を飲まされ正体を失った美しい武家の一人娘が、いやらしい高利貸に抱えられて今しも別室へ運ばれて行く処、シーンとした暗い場内の小生の直ぐ前で、「ああ可哀そうに、ああ、ああ可哀想に」と、前の女性の一人がもう一人の腕を掴んで、身をよじって呻ぐ様に囁き続けるのです。映画はそこで暗転、朝床の上でハッと眼を覚した娘が、湯文字一枚の姿でよよと泣き崩れる、又もや姿を現した俳々親爺が、再び改めて襲いかかる、床の間の一輪挿しの花びらがガツクリと落ちる——暗転、と勘の鈍い小生には何がどうなったのやらサッパリ訳が判りませんでしたが、映画の筋はさておき、前の座席の女性の異様な興奮ぶりを見たとき、小生はそこに女性の複雑な心の深奥を垣間見た思いがしたのです。

彼女は果して心からの同情を以て画面の女主人公の境遇にハラ／＼と胸を痛めていたのでしょうか、端正な顔立ちの武家娘が好色な金貸しの腕の中でその術中に陥って悶え抜くとき、思わず身を固くして隣の女性の腕を強く握りしめた様子は、或いは我が身を猥々親爺におきかえて、（自分ならこうしてこう責めて、ここで声をあげても絶対許さない、徹底的に責めて責めて責めなぶってやるワ）と怖い快感に酔っていたのではないのでしょうか。そのくせ相変らず口では「可哀想に」と呟いている女心の複雑さ、小生にはどうしても判らないのです。彼女は一体SなのかMなのか、連れの女性とはどんな間柄なのだろうか？ 女性はメロドラマ映画がお好きと聞く。

これでもかこれでもかと悲運に責め抜かれる薄倅のヒロインに寄せる涙は、もつと／＼苛めてやって頂戴という期待も込められているのではないのでしょうか。映画の責め場面に於ける女性の緊張と興奮、ホッと出る溜息は、我々男性の単純な征服慾より、もつとリアルな奥深い願望を秘めているのではないのでしょうか。団先生、奇ク愛読者の中に占める女性の声なき声は無視し得ませんゾ。

特に小生は、葉桜団の女ボス銀子の陰険さ、

底意地悪いまでの言動をみるとき、「ああ女性性は怖い」と率直に天を仰がずにはいられないのです。と云う訳で次には葉桜団のお姐さん方へのサービスに、前記の婦人補導官の弟という設定で、高校一、二年生位のかわいい美少年を登場させたら如何？、捕えられた弟が、地獄の魔窟でみたものは、あられもない姿をさらしてむせび泣く姉の姿。勝てば姉を救けてやるといわれて、朱実の挑戦をうけた弟は、赤禪姿も甲斐々々しくプロレス一本勝負。未だ身体が出来上っていない少年は大柄なグラマーの朱実に敵う筈もなく、飛行機投げ、岩石おとしと足腰たたぬまでにマットに叩きつけられる。既に起き上る力もない程疲れきった少年に飛びかかった朱実は、その尽すかさず得意の体固め、逞しい朱実の腕の中に包まれてムリヤリ元服の刑を執行される。自分を助けようと奮戦する最愛の弟に何も手をかけてやれぬ口惜しさもどかしさに緊縛の美人補導官は、姉さん姉さんと呼ぶ弟の哀れな声に思わず顔をそむけるばかり。勝ち誇った朱実の容赦ない手荒な攻めに、無残にも少年のかあいい誇りも、地におちて、グッタリ敗北する。やがてレフェリーの悦子が両者をわけて勝負判定。手を延ばして入念にあらた

め終った悦子は、やおら朱実の手を高くさし挙げる。

見守るズベ公達のヤンヤの拍手喝采、姉そっくりの紅唇、かあいい口を開いて失神してしまった少年は、数人のズベ公達に担がれて、別室へ運ばれて行く。今宵は残酷陰険な女親分銀子による成人式の祭壇に立たされるのだ。かくて女の怖しさをいやという程知らされた少年は、そのまま日夜葉桜団のペットとして団員のお姉様方に奉仕しなければならなくなる。勿論あの怖い朱実も手ぐすねひいて順番を待っている。――

団先生の生んだ四美女に決して不満というわけではありません。以上の新登場人物を俟たずともまだ／＼続編には期待十分なものがありますし、先生もこれ以上スターが増えたら迎もまとめて面倒みきれないと仰言るかも知れません。どんな展開になるか、先生に代ったつもりで想像してみるのも楽しいものです。失ず差当ってのハイライトは風前の灯の清純な美津子の運命でしょう。苛酷なお仕置を拒んだばかりに、吉沢との結婚を皆の前で約束させられた美津子は、その意志とは逆に周囲のお膳立ては着々と進行して居ります。やがて迫り来る毒牙、捕われの身に逃れるす

べもなく、妖しく開花する美少女美津子。殊に吉沢は周到な奸智をめぐらして、まず京子の身体から姉妹共通の弱点を前以て調べてあります。悪どい吉沢の攻めの前に、美津子は言語に絶する苦難を味わわれることでしょう。

また美津子には、例の川田が亦虎視眈々と野心をもやして居るのも忘れることは出来ません。京子、静子を責めるのに美津子をもっと利用しようと考えているらしい銀子の腹のうちにも不気味です。そうです美津子の「お水取り」場面が未だ済んでいませんでしたね。屹度彼女も京子お姉さん流に、心ゆくばかり観衆の前で妙技を見せてくれることでしょう。又、京子に、こっぴどい目に遭わされた田代、森田のボス達の復讐もまだ済んでいません。今度は京子が、かつての静子夫人の様に二人がかりで責めさいなまれる番です。鬼共の怖しさを骨身にしみて知らされた京子は、歩一歩更生の道を歩みつつけることでしょう。また嘗て商敵遠山財閥に煮湯を吞まされた恨みを忘れぬ田代は、遠山夫人静子をはずかしめるだけでは嫌らず、毒牙をその一人娘桂子に向けて来ます。

親娘ほども年の違う好色親爺田代に狙われた桂子は、これまでの度々の責めにも見る通

り何事にも忖え性のないお嬢さん育ち、その執拗な責めにあったらひとたまりもありませんまい。もぎたての白桃の様ななめらかな肌からムン／＼と発散する若き乙女の香り、すんなりと発達した四肢、宿敵遠山に対する復讐の森の中へ顔を埋めた田代は、身も世もあらず悲運暴虐にすすり泣く桂子の甘い樹液の涙を心ゆくばかり満喫します。

次には優美壮烈な女斗美ファンの為にサービス。何事か怖しい命令を受けた受難の美津子は、それを逃れる為にグラマーな硬派専門の朱実と部屋の真中で角力をとらねばならぬ羽目に追込まれます。ズベ公達に手取り足とり真白な禪をキリツと締め込まれた姿も凛々しく、黒禪の朱実とボタンボタンと大熱演。だが女ボス銀子は秘かに取組み直前の食事の際にいまわしい利尿剤を美津子に飲ませておいたのです。張りめぐらされた罠とも知らず、負けてはならじと健気にも渡り合っていた美津子の力が急激に抜けて行くのを知った朱実は、得たりや応と双差しのみわしを引きつけて意地悪くも櫓投げ数回、思いの外よく利いて土俵際ふらつく足でとどまるのを内掛け一番、見事に極めて座敷の中央へドウと重ね餅、仰向けに尻もちをついた途端「ああア—ッ」

と絹をさく美津子の絶叫、何も知らずに女斗美を楽しんでいた見物一同の目を奪う意外な光景が展開されました。みる／＼色が変わってゆく純白の布、堰を切った健康な青春の奔流はとどまるところを知らず溢れ出ます。非情の対戦相手の肩に必死に縋りついて忘我の境地に喘ぎつづける美津子、心得きった朱実は、その美しい顔、わななく肢体を観衆の目に向けるサービスも忘れません。

余りにも鮮かな朱実の勝利、完膚なきまでの美津子の敗北に、見物一同声もなく見守る許り。やがて正気に返った美津子は取り返しつかない惨状に、身動きすることも出来ない。リングの真中でKOされたボクサーの様に倒れた俣の美津子は、バラ／＼と駆け寄った附添いのズベ公達に、応急後始末を受けた後、静かに部屋から運ばれて行く。漸くホッと洩れる見物一同の感嘆の溜息――。

次には血なまぐさい修羅場のお嫌いなムード派の為に斯様な場面は如何？ 同じく知らぬ間に睡眠薬と利尿剤の混合液を飲まされた美津子が、ベッドのシーツの上で昏々と眠っている。静かに流れる小守唄の名曲。ここで奇ク九月号原田女史の傑作、赤ちゃん用品作製の実験台に、十七才の高校生の大柄なお嬢

さんに眠った俣登場して貰うという魅力的なアイデアを借用されたら如何でしょう。

ベッドの廻りで見守る銀子、朱実、悦子、マリ等の葉桜団の幹部たちは、尤もらしく白衣を着込んでいます。可愛い寝顔を見せて美津子はどんな夢を見ているのでしょうか。柔いベッドで目に見えぬ大波小波の襲来に喘ぎ出した彼女は、はや大海原へ乗り出したのか服の乱れも気付きません。「え？ 何がどうしたの？ はっきり仰言い」と執拗に問いつめる銀子の声に思わず切ない気持を告白させられ「いいから、いいから」と耳許で妖しくそそのかされては、溷濁の意識、限界の身に忪えられよう筈ありません。いつの間にかセーラー服の制服も下着も、悦子、マリ達に手際よく脱がされ、最後の純白の砦も何の抵抗もなく静かに取り払われたあとには、ピンク色のビニールのおしめだけがピッチリと装着されて居たのです。銀子、朱実の腕にかかえられ悪魔の誘導の囁きに身を任せてしまった美津子は、思いきりのび／＼と長い解放の旅に身をのけぞらせます。夢のまた夢の中で嵐に翻弄される美津子の顔は、恍惚として解放の快感に酔っているかの様です。併し数分後ハッと目覚めた彼女は、現実の失態をハッキリ

りと覚らねばなりません。裸身を真っ赤に染めて死ぬ程の恥しさにうちふるえる美津子の耳には、「まアまアこんなにおねしよをして。仕様のないお嬢さんね。私達が気付いておしめをしてあげなかったら、どんな事になったと思つて? もうすっかり大人のくせに何時迄もネンネで困るわねえ。此のおしめは森田組のお兄哥さん方の希望者に、乾かないうちに差し上げましょうね。」綺麗に拭きあげてあげますからジツとして居るんですよ。」と責めたてる言葉がいやでも耳へ入ります。「そんなに駄々をこねるなら田代社長を呼んで悪いところをよく診て貰いましょうか。田代さんは昔兵隊時代看護兵だったそうだから、それはそれは熱心に診察して呉れるわよ。それがいやなら粗相をした罰に悦子姉さんに浣腸して貰う?」悦子は浣腸が逆も上手だから屹度よく利くわよ。花恥しいお嬢様が良い年をしてこんな失敗をしたのに私達が親切に後始末をしてあげようというのが判らないの? サア両足をあげるのよ」とあの手この手でおどかさされては、優しいお姉様方の手に身を任さない訳にはゆきません。生れたまんまの赤ん坊の様に、いや立派に成人したお嬢さんが恥しさに消えもいりなん風情とはこのことか、

鮮かに相手を軍門に降した銀子達のお手並は誠に見事で、もうこのあとは美津子は葉桜団のお姐さん方には金輪際頭があらがないことでしょう。

更に、艶麗の美女静子夫人の運命は?

凡ゆる責道具、静子の想像も及ばない数々のいまわしい責め析檻道具の完備した特別室で、鬼源と二人きりで更に調教の磨きをかけられている静子夫人は一体どんな目にあっているのでしょうか。鬼共の見守る中で、自ら進んで彼等の待つ別世界の桃源境へ飛び込み、妖しく切なく更生の嬌態を実演して見せた静子「満足したんだろ?」と云われてハッキリとうなずいてみせた静子、漸く新しい境地を発見したればこそ、これからの鬼共の暴虐の責苦は益々苛烈さを加えることでしょう。鬼源ならぬ鬼六調教師の腕前に期待すること誠に大なるものがあります。あとに続く京子、桂子、美津子の美女群では誰が一番早く静子夫人の境地にまで到達するのでしょうか。思っても胸躍る彼女等の更生場面への夢は尽きるところがありません。若きが故に、美しきが故に、日毎夜毎捕われの美女群があげる逆上悩乱の悲鳴感泣は、一体いつまで続くことでしょうか。些かの妥協も許さずドライに割り切っ

たハードボイルドな鬼共の所業、最後まで誇りと優雅な羞恥心を失わず懊悩惑乱する哀切極まりない美女群の姿、我々はここに現代人に欠けた壮快優美へのコンプレックスを見事に解消させると共に、夢のオアシスとしてのS小説の醍醐味を味わうのであります。

いみじくも静子夫人が「何故私はこんなに苛められなければいけないの」と数々の責めに耐えかねて訴えたとき、「それは奥さんが美し過ぎるからさ」と答えた川田の言葉は、すべてを物語っている様です。魔窟に泣く美女達の姿は、果して美しきが故の悲劇だろうか? 類いまれなる美しさを持っているからこそ、川田らベテラン達の練達の責苦にのちの絶頂を極めつくされ、銀子ら同性のしつとを浴びて身もよもらぬ羞恥地獄にのたうち廻る、目くるめく戦慄の境地、排泄の充実感等々を考えれば、まこと名士の筆になった彼女等は、別の意味では幸福といえるのではないかと思われるのである。そして川田や銀子達も、人間として永遠に変わらぬ「美」の探究者として、極めて身近に感ぜられて来るのである。珠玉の名篇「花と蛇」、生きとし生ける者すべて幸あれと、此の世に生あるよろこびに浸るのである。

(完)

ラテン音楽と奴隷の血と

原 辺 露 光

ラテン音楽——正確にはラテン・アメリカ音楽——これはラテン・アメリカで演奏されたり作られたりしている音楽の総称である。

よく知られたところでルンバ、マンボ、チャチャ、アルゼンチンのタンゴと近年わが国でも流行の「ラ・マラゲニャ」「ククルク・パロマ」などメヒコ（メキシコ）のウァパンゴ、一時「デーオ・ブーム」をまきおこしたカリブソなどがあるが、これらのいくつかが奴隷制度と深い関連があることをご存知であろうか。

と言っても私はラテン・アメリカの民族史

や民族学を研究したわけではなく、単にラテン音楽が好きならば、その音楽の中にひそむ奴隷の悲哀について、少々お固い話でもしようかと言うわけである。

ご存知の如くラテン・アメリカの開拓者はクリストファ・コロンブスである。この時から土着民（インディオ）とアフリカ黒人の屈辱的な何世紀かの歴史が始まる。

スペイン人は現地民を牛馬の如くこき使った。このことはあらゆる史実が証明しているのだが、特に砂糖と今や動乱の島キューバのインディオ、シボネイ族に至っては絶滅の

うれいを見た。このシボネイなる名は先年世を去ったキューバの大作曲家エルネスト・レクオナの名曲のタイトルになっているのでご存知の方もあらずである。

労力を失ったスペイン人が次に打った手はアフリカ黒人の輸入であった。人間の輸入などとは何とも不敬な表現であるとしても、それは正に「輸入」以外の何ものでもなかったはずである。

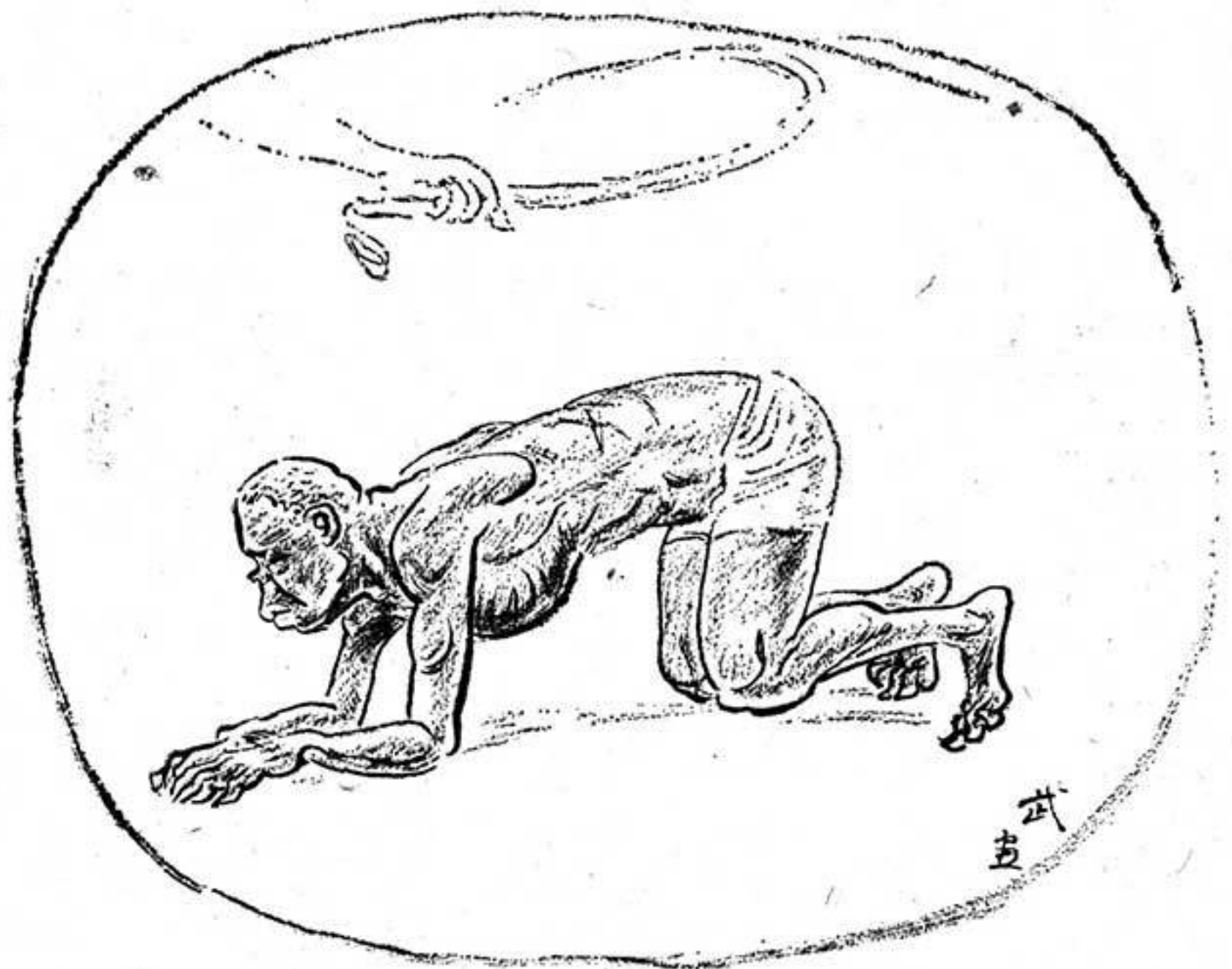
この時、黒人たちは自分たちの唯一つの土産物として彼らの音楽を持ち込んで来、それが、スペイン人の音楽、さらに現地民の音楽

と結びついたのが今日のラテン音楽で、この三つはその三要素である（但し、二つの要素から成るものもある、例えばウァパングなどはその例でスペイン音楽をメヒコ現地化したものである）

と、ここまでは大変面倒なお話で、本誌とは何の関連もないじゃないかとおかんむりの方もあるかも知れない。それでは本筋に入るとしよう。

「タブー」と言うことばがある。これはわが国でもよく知られたことばだが、もとはスペイン語で「禁制」と言うこと、そして奴隷たちにとっては生活のすべてにおいてタブーまたタブーであった。仕事中に話すことすらタブー、勿論手足には鎖、そしてなまけたりタブーを犯したり——時には単に監督官の気まぐれからも——何ごとによらずムチがその背に、腰に打ちおろされた。

カラバリーよ



私と共に持って来た心は失われた。

カラバリーよ

お前のなぐさめはただ死ぬことだけ。

カラバリーよ

ボンゴの音にも喜びは消え
お前の声はすすり泣く。

カラバリーよ

お前の希望はただ死を願うだけ。

カラバリーよ

自由を失った非人よ

愛の喜びはお前の柄（がら）じゃない。

残忍なムチの鳴りひびく下で、

孤独と苦しみの中に

お前の人生は過ぎて行く。

これは「カント・カラバリー（カラバリーの歌。カラバリーはアフリカ黒人の一種族名）」と言うエルネスト・レクオナ作のアフロ・クバーノである。このアフロ・クバーノ（ソン・アフロとも言う）と言うのは一つのフィーリングでキューバに連れて来られた黒人奴隷をテーマにしたものが多い。その焦点はやはり彼らの悲しみ苦しみであるが子守歌の類もある。なお右の曲はわが国では「ジャングル・ドラムス」として有名である。

大体右の曲から彼ら奴隷たちの生活と言うものも伺えるのではないだろうか。禁制と言え「タブー」と言うソノモノズバリの題の曲がわが国でもよく知られているものの、こちらは前掲のものとは異って黒人奴隷が遠い

アフリカをしのび、何ごともタブーだと嘆く
テーマがついている。暗い影の中にもノスタ
ルジックな美しさがあるから、故郷を離れて
気の狂った都会の中で社会と言うオリにはめ
こまれあえいでいる人には共感を呼ぶかも知
れない。

はるけき国アフリカの魂は

私の風前の灯にも似た心に満つる。

哀れなコンゴ奴隷の息子は

いつも恋慕う

あのしゅろの椰子の林を

猛き神々の閉ざした原始林を

恋しきアフリカの空

川は青き空をうつして流る。

ここでもしもネグロ（黒人）が

白人のメスに逢えたのなら

タブーノ タブーノ

このあとにアフリカの神々の名が呪文よろ
しく続くが割愛した。なおメスと訳したのは
原語では「エンブラ」で「女」と言う意味も
あるが、一般に「女」は「ムヘール」を用い
ジプシー（スペインの）がよく使う位なので
メスと訳したわけであるが、この一言ピリリ
と効いている。

ところでこれらは奴隷制度なんてものが廃

止になってから作られた曲である。前述の如
く奴隷たちは何の喜びもなく牛馬の如く文字
通りこき使われたのだが彼らの歌と宗教は失
わなかった。

これは奴隷制度廃止後にまで尾を引いたも
のである。所詮この屈辱的な制度に終止符が
打たれたとしても支配者と被支配者間に出来
たのは金銭関係だけ、そして鎖こそなくなっ
たが相も変わらずムチは使われた。とにかく世
の中は支配者と被支配者に完全に別れており
被支配者は八〇パーセント奴隷（収入がある
以上百パーセントとは言えない）的存在、そ
してその子もまた半奴隷として生まれながら
に宿命づけられてしまう。北米合衆国に於る
制度と何ら変わるところはないわけだ。

世に労働歌はメーデーの「聞け万国の労働
者」を持ち出さぬまでも沢山例があるが、南
米大陸の東北端にあるトリニダード島の労働
歌は世界でも珍しいゆりかごに生れた。

この島はスペインの手を放れ英領になって
いたが英国人もまたこれら半奴隷をきびしく
扱ったものである。彼らの主な仕事は荷役で
あるが何と仕事上の会話は一切タブーになっ
ていた。ちよつとでもおしゃべりをすれば番
人の冷酷なムチが飛んで来るのだ。勿論労働

組合などと言う民主的なものは一切存在しな
い。こうして会話を禁じたのは一つには仕事
の能率向上、一つには暴動防止のためであっ
た。つまり彼らが結束することが怖ろしかっ
たわけである。

そこで彼らが考えついたのが歌だった。し
ゃべっちゃいけないなら歌で行こう、これな
ら文句あるめえ、おしゃべりじゃねえやと言
うわけ、正しくものの道理、即ち「昨日、隣
の娘と町で逢ってよお」とか「俺のカカアに
十番目の子供が出来た」とか世間一般に言う
井戸端話を即興で歌うものでこれには支配者
側も文句は言えなかったらしい。但し仕事が
キツイとか、あの番人は嫌な奴なんて歌を歌
ったら大変なことになるので、そう言うもの
は存在しなかったようだ。

ところでこの労働歌こそ何をおかくし申し
ましょう、かのカリプソなのである。一見楽
しそうで、ちよつと哀愁を秘めたカリプソの
由来はこんな生活にあった。勿論現在のカリ
プソはもう大分変わって来ているけれど、その
精神だけは生かされていて実に愉快な井戸端
会談的テーマが多い。曰く「男と女とどっち
が世渡り上手（マン・スマート、ウーマン・
スマーター）」とか「ママはブーブルー（ママ

ルッカ・ブーブー」等々、まったく愉快の上もない歌詞が軽いリズムとメロディに乗っかっている。

こんな中であって例のデーオは非常に深い意味を持っている。トリニダードは人も知るトロピカル、従って労働は夜するもので昼間は寝る時間、つまりわれわれの生活とは正反對なのだ。仕事につかれ、やがて日が昇ればこれで仕事はおしまい、昇る太陽に叫ぶ喜びの声、それが他ならぬ「デーオ！」従って日本のカリプソ・ブームなんてものもともと、お話にならなかったわけ、妙なセミ・ヌードの女が髪をバラリとやって「デーオ」とわめても何の意味もない。

これでカリプソが何と奴隷生活を背景にして生まれたと言うことがお判りになる。ところがどっこい、話はまだまだ続きがあるのだ。これはカリプソ以上に聞くも涙の物語。

まずその第一はリンボである。これは映画などでごらんになった方も多いと思うが地に二本の棒を立て、それに横棒をわたし、その下を言うなれば「逆さ海老」の形でくぐりぬけるもので今では立派なショウになってしまっている。この誕生については二つの説があるが共に奴隷生活に結びついている。

第一説は戦争で二つの種族が戦った時、敗者に対して勝者の加えるリンチとの説。敗者の男たちを集め——女はどうせ手ごめにしたりしてしまうのだから無関係——これを行わせる。もしくぐれたら自由の身、くぐれなければ死刑、又は奴隷にすると言うわけ、そして「もしくぐれたら」と言っても一回くぐるごとにバーは段々低くなるのだから大抵は死刑にされてしまう。(奴隷をお持ちの方、ためされてはいかが？ ただし、あまり無理をさせると胃腸に悪いそうな)。

第二説、これは奴隷たちの遊びである。遊びとは申せ意味は深い。即ち横棒は他ならぬ支配者たちの支配を示している、そしてそれをすりぬけると言う意味があるのだ。だからここには奴隷の悲しみがチャンと秘められているわけ。このリンボ、数年前前に合衆国で美容によいとかで流行したが、前述の如く胃腸にかえって害を与える。第一美容にいいと言っても女性がリンボをやっている姿はエロを通りこしてグロに近い。男性にしてもまた然りである。

続いて第二の問題、即ち支配者の下におかれた半奴隷的労働者の悲哀は楽器にも現われている。昨年(一九六三年)八月にトリニダ

ード・スチール・バンドと言うグループが来日した。スチール・バンドとはスチール・ドラムを演奏するバンドだが、この楽器たるやこうした生活から生れたものなのである。

一応スチール・ドラムについて説明しておきたい。工事場などによく転っているドラムカンこそ、その原料、それをフタから二十から三十センチ位の所で輪切りにする、言うなれば大盃以上の大コップが出来る。そのフタの部分に熱処理を加えて凸凹を作り、さらに金ずちを用いてトントんと叩いて凸凹を上手に調節する。もうお判りと思うが凸凹の出来具合によって、その場所を叩けば異った音が生じるわけだ。こうして輪切りにしたドラムカンのフタの部分に凸凹による音程をつけたものがスチール・ドラム、何とも原始的な楽器、そして独特の音を持つ楽器なのである。

話をもとに戻そう。トリニダードで奴隷制度が廃止になったのは史実によれば一八三八年(アメリカ合衆国のリンカーンの宣言は一八六三年)であった。とは言え支配者(イギリス人)は黒人たちの復讐を怖れた結果、まず彼らにドラムの使用を禁止した。

アメリカ合衆国の西部劇をごらんになっても判ることくドラムは部族間の通信にも使わ

れるのである。打叩く右手、押さえる左手によって種々の音が生じ、その音色によって、ドラムは会話も出来るのだ。言わばこれは原始的無線通信と言うわけ、こうしたわけで黒人たちは仕方なしにドラムの代理としてバンブー（竹）を用いてバンブー・タンブーなるものを作成した。

コップを並べ、それに適当に水をつぎ、その量の多いか少いかで音階を作ることが出来るのはどなたもご存知のこと、そしてバンブー・タンブーもこれに類したもので、長さの異なる竹を並べたものである。ところが支配者

△愛読者の皆様へ▽

○読者通信をはじめ編集部への便り、並びに御注文の手紙など、すべてタテ書きにお願い致します。

○切手を貼らずに投函されますと、入手に手間どり遷延のもとになりますし、場合によっては「受取拒絶」することがありますから、御留意願います。

○電話にてのお問合せや照会並に直接の御訪問は固くお断り致します。ご連絡はすべ

は一九二〇年代（つまり今世紀の出来ごと）にバンブー・タンブーもまたタブーにしまった。こうして三度目に生まれたのが他ならぬスチール・ドラムだった。これは第二次大戦中に発明されたもの、そして現代に及んでいるのだが、こんな時代にまで半奴隷的生活、そしてタブーなるものが存在したと言うことは大変に興味のあることと言わねばなるまい。それも一国内の或る会社と言う例ならいくらかもあるが、一国全体に及んだと言うのだから。

元来、中南米を牛耳っているのは米合衆国

て書面にてお願い致します。必要のある方は編集部から、電話連絡或は面会の日時などをお知らせ致します。面識のない方の直接のご連絡は御容赦願います。

○若し編集部に対して、御依頼又は御相談などがございましたら、事前に通信にてその旨お申出下されば、時間の余裕ある限りつとめてお逢いするよう致しておりますからご遠慮なくお便りを下さい。

○分譲品のお問合せも、必ず通信にてお寄せ下さるよう、お願い致します。

や英国などアングロ・アメリカ系民族であり私は別に共産党には共鳴しないものの、最近のキューバ、パナマの行き方には同感出来るものがある。それは長年つちかわれた支配者と被支配者の斗争と言うものだ。

ラテン・リズムに表現された奴隷生活の影響の第三はキューバのダンス「コンガ」に見られる。このダンスは一、二、三と三步、歩いて四歩目をキックするものなのだが、このダンスのステップは鎖につながれてよろめく奴隷の姿をモチーフとしたものであることはあまり知られていない。それだけでなくこのダンスはカルナバル（カーニバル）で沢山の人が行列を組んで踊るためのもの、沢山の人が一所によろめくあたり、何となく奴隷の姿をホーフツさせるものである。

これら代表的な例をあげたが、おなじみのラテン・リズムにはこれほどに奴隷的なものが要素になっているわけだ。この他メキシコの有名なダンス「ハラベ・タパティオ（メキシカン・ハット・ダンス）」にも奴隷なしには生まれ得なかったものがあるし、メキシコの先住民マヤ、アステカの奴隷の姿にも興味あるものがあるが、それはまたの機会にゆずりたい。お固い話でご退屈さまでした。

手記

蛙腹女体解剖

女体解剖マニアの夢

高野原 美

(一)

真夏の強い太陽の光が薄いカーテンを通して室内に射し込んでうだる様な暑さである。私は土曜日の午後、一人で畳に寝転んで奇く編集部から送られて来た、田中美佐子さんの臨月妊娠腹フォトを眺めていた。眺めるといふより穴のあく程、真剣な熱っぽい眼差しで

観賞していたと云うべきであろう。

妊娠予定日の十日程前のフォトということであり、その丸く膨れた腹部の隆起は見事であり、双の乳房の直ぐ下から、まん丸く豊かに孤を描いて膨隆している腹部は、二十二才の初産という彼女の豊かに張り切った新鮮な身体とともに、可愛いく愛嬌がある。むき出されたその姿が恥しいのか、突出した腹部の頂



よりやや下で、うつ向きかげんに突出している臍も又、可愛いものである。これ程美しい臨月腹が、今迄は女性だけの独占によって腹部マニアの眼に触れることなく、腹帯と着衣の奥に隠されていたのだと思うと残念であり、唯でさえ大きく膨れた動物的なお腹を恥しく隠そうとする女性でありながら、その初産の初々しくも愛らしい、お腹のヌード・フォトを、私達の前に堂々と見せ、充分に観賞の機会を与えて呉れたことを感謝していた。

胸の上に、そのフォトを置いて眼を閉じる。脳裡に強烈に灼き付けられた丸い臨月腹は暗闇の中で白く輝き、くつきりと浮き上って来るのだった。私は、眼を閉じたまま空想し、愛らしい西瓜のような腹を愛撫しているうちに、私の心の中で眠っていた腹部のサディズムが妖しく芽を吹き初めて来たのである。私は、この憎いほど美しく誇らし気に膨れている腹部を、無残に切り裂き痛め付けたい欲望に駆られだした。空想の中で私は短刀を取り、白く冷たく光る刃を、右手に逆手に持っていた。

「田中さん。あなたは、私達妊娠ファンのために、その美しい臨月腹を、その神秘を秘めた女性特有の動物的なお腹を提供してください」

った。しかし、私はそれだけでは、もう満足できないのです。奇クの読者の前に裸身を曝したあなたは、充分に覚悟できてるでしょう。私はこの手で思い切りそのお腹を切り裂きたいのです」と私は懇願していた。

と、もう一人の私が「田中さんは羞恥を乗り越えて、私達のために臨月腹を観賞させてくれた。しかし、彼女は腹部マゾの気持は、それ程強くないのだ。ただ、この美しい神秘的な腹部を独り占めにするに耐えず、ただ観賞にその裸身を見せてくれたんだよ」

「彼女は、きっと我々のためには、喜んでお腹を切り裂かしてくれるよ。何を云うんだ」「君はまだ美しいお腹を痛めつけようとするのかい。妊娠腹の美、この妖美を観賞するだけでは駄目だと云うのかい？」

「私は、もうたまらないのだ。丸い大きなお腹を鋭利な刀でグサリと……」

「だめだ、それは無理というものだよ。何故って？ 妊娠腹ヌードのモデルは、彼女で三人目だろう。奇クの読者が妊娠腹ファンは、臨月腹切腹や生体解剖を強く望んでいることは知っている筈だ。それに緊縛フォトは撮らして、切腹フォトを撮らしてないのは、彼女が腹部マゾでない証拠ではないか」

「違う、私はそうとは思わない。フォトを撮影した編集部が悪いのだ。恐らく、あれだけのフォトを撮るには長時間要した筈だ。それで大きな腹をした彼女にとっては体力の限界でもあり、意志に反して撮られなかったのだと思うな」

「彼女にその気持があれば、編集部に臨月腹ヌードを発表したいと云って来てから撮影までは相当の時間があるのだから、腹部マゾの気持があれば、彼女自身でポーズ等も決め、充分に準備して待っていて、自ら希望して是非とって貰っているよ、どうだ」

「うーん、そうだろうか。俺のこの右手の短刀は、むなしく宙を切るだけとなるのかい」私は空想の中で押え切れぬ腹部サディズムの気持と斗い、田中さんの美事なお腹の鳩尾に思い切りグサッと刀を突き立て、丸い円を描く腹壁をズブズブと切り裂きたい思いを断ち切ることが出来ず、自問自答して苦しんでいた。

その時、私は遠いところから、美しい女性の声が聞えてくるのに気がついた。私は耳を傾けて、その声を意識を集中した。

「高野さん、私は何んて申し訳のないことをしてしまったのでしよう。私はあなたの方のお

役に立てばと思って、羞恥に耐えて勇気を出して臨月腹ヌードを撮って貰いました。しかし、私は半分しか、あなたの方のお役に立っていないことに気が付きました、私とても決して腹部マゾの心理が無いとは申しません。私も毎日のように姿見に、自分のお腹を映しては、愛らしいお腹を愛撫して来ました。私は毎日々々膨らみを見せるお腹を鏡に映し、見下しながら観賞しつつ、このお腹を皆様にせめて写真でも見て貰い、喜びを分かちたいと思って来ました。しかし、私には若い女性の身で中々決心が付きませんでした。よく私は夢の中で帝王切開されている自分をみたものです。私は、その翌日には、お腹を鏡に映して小刀で正中線を大きく切り裂くポーズなどもしてみ、多くの男性の前でこのお腹を断ち裂かれたら、どれ程嬉しく満足できることでしょうか。その時のあなたの方の女性の神秘を目の前に見て驚き、この私に感謝する顔を見たかと思っただけ分りません。私は編集部の方に自分の大きな臨月腹をお見せして、ひしひしとおそって来る羞恥と、これで私の腹部はあなたの方のお眼にとまると同時に永遠に記録をとじこめることができるのだと思うと、うれしくなってしまう……私はただ云われるま

まのポーズを取っていたのです。高野さん、私の臨月ヌード・フォトを前にして空想の中で、ご自由に好きなだけ、私のお腹を痛めつけて下さい。私は多くの方が、そうして妊婦刑罰の空想の収獲を発表して下さいれば、どれ程嬉しいでしょう。私のお腹に……その短刀を……」

私には、どこまでが現実で、どこまでが夢の中かわからない。とにかく白い臨月腹と冷たく光る短刀を交錯させ、その豊かに丸く張り切ったお腹を切り裂こう、切り裂きたいと思っていたことは確かである。私は安心したのか、そのまま眠りにおち入ったようである。

(二)

私は何時間眠っていたのであろうか。突然、やさしく肩を叩く女の手の感触で眠りから覚された。私は眼を開けて、あたりの光景が異様なのに驚いた。美しい広やかな洋間のソファの上に私は眠っていて、道具を片付けられた室の中央に白布を敷いた大きな机があり、その横の小卓の上に短刀と浣腸道具が整理されてのっているのである。壁の四面にはテレビ映写機がはめ込まれており、そのレンズが中央の机の方を向いている。

一体私はどうしたのであろう。と驚きながら上体を起して女の顔をみて、再び電気に触れたように驚いた。私の隣に居るのは、奇ク誌上で、その豊麗な妖姿を観賞させてくれている、私の最も愛する大塚啓子さんであったのである。しかも、私が驚いて眼を伏せた時、服の上からも判る程大きなお腹をしているではないか。私が夢にまで見た啓子さんの妊娠腹が眼の前にあるではないか。

「あなたは奇クの大塚啓子さんでは……」私の声はうわずっていた。

「ええ啓子です」と親しみのある声で微笑みながら、

「い、いったい、僕はどうしたと云うのですか。何故、僕があなたの前に……」

「理由はお聞きにならないで……唯、私はこの妊娠腹をあなたに捧げるために、奇ク編集部から派遣されて来たのです。私はあなたが私のお腹を愛し、私の切腹擬態を愛して下さい、ということを厚く感謝していたのです。それでこの待望の臨月腹を、あなたに捧げよう。私はあなたの処刑の前に、肉体を生贄として捧げようと決心したのです」

と彼女は一息に静かな口調で云うと肩で、大きい溜息をついた。

「では僕は……啓子さんの、この大きな臨月腹の裸身を見せていただけるのですか」

私は何と幸せであろう。啓子さんの臨月腹を見れると思うと胸がどきどきして顔に血が上るのを感じていた。

「ええ、あなたの心ゆくまで遠慮なく観賞して下さい」

啓子さんは室の隅で、私の方に背を向けて衣服を脱ぎ初めた。動作は大きなお腹のため苦しいのかゆっくりであるが、遅いほど私は妖しく亢奮し、もっとゆっくりと願うのであった。妊婦服、シュミーズを足もとにずらすと、ブラジャーを外して、パンティ一枚の姿となり、私の方に歩み寄った。そうして「どうぞ、自由に観賞して下さい。私は、あなたの奴隷となって云われるままのポーズを取りますわ。私に命令して下さい」

私の前に大きく丸く突出した腹部を誇らし気に向けて立った。啓子の固く縛って若々しく張り切った肉体は、妊娠のために豊かに皮下脂肪をつけて艶々しく豊満に輝いている。丸く恰好のよかった半円の蕾であった乳房も乳腺の発達のため乳汁を含んで大きく、その厚い胸からこぼれんばかりに大きく、丸い豊かな膨みをもって突出し、乳首はやや黒ずん

で、薄く青い静脈の網の中央で蕾をつけていた。きゅっと真中でくびれたウエストは、形をとどめず見事に大きく、膨れた腹部は薄いパンティの中で神秘を秘めて大きく息づいていた。私はこのパンティの中に隠されたお腹が早く見たくなくて

「パンティを取ってもよろしいですか」と急ぎ込むように云った。

「どうぞ、あなたの手で脱がして、充分に見て下さい」ヌードには慣れている筈の啓子ではあったが、一瞬羞恥心が心をかすめた。だが、すぐ平常に戻り、手を後に廻してどうぞ自由に、と云う態度をとった。私は震える手でパンティを脱がし、上から順に露出されてくる啓子さんの豊かな腹部をゆっくり眺めながら下腹部で一寸ためらったが足もとまで下してしまった。

啓子さんの生まれたままの臨月腹ヌードが、やや肉感性を帯びて私の前に露出された。何んと見事な豊かな隆起であろう。正中線に妊娠腺がうすく走り、あれほど私の心を妖しく悩ませた魅惑的な豊かな丸い臍の窪みはみられずに、臍はまくれ上って、その全貌を見せていた。

私は、前から横から、後から啓子さんの美

事な腹を飽くことなく眺め、遂には啓子さんの前に膝をついて弾力性を失って固くぱんぱんに張り切ったお腹の感じを味わっていた。

啓子さんは私の手を握りしめて、「どうぞ、ご満足いただけて……」

と、暖かい眼差しで私の顔を見ながら云った。

私は夢にまで見た啓子さんの臨月腹を目の前にして、その感触までを楽しみ、どうして不満足な筈があるう。

「心から感謝していますよ」

「もっと動物的なポーズを命じて下さい。私は貴男の家畜なのです」

啓子さん自身、穴のあく程その臨月腹を見られている内に、マゾ心理が強く芽を吹きだしたのであるう。私は啓子を四つ這いにし室を這い廻らせ、ソファの背に脚をかけ逆吊りにしたりして、あらゆるポーズをさせ、あらゆる角度から臨月腹を観賞した。啓子さんの額には汗がにじみ、苦しいのか肩で荒い息をつき、その度びに大きいお腹が揺れ動いていた。

私も啓子も夢中になっていたため並んでソファに腰をおろし、私は腰から手を廻して静かにお腹をさすっていた。何時間、私は啓子

のお腹を見ていたのであろう。ふと我れに返って煙草を一口喫った。その煙をボンヤリ眼で迫っていた啓子は、

「では、ぼつぼつ始めましょう」と私を促した。

「え、何を？」

「あら、私、さっき云ったでしょう。私の肉体を、あなたの思のまま切り裂いて欲しいの、このお腹を血汐に染めて……」

啓子は平然として云った。

「何、なんですって。僕がそのお腹を、切り裂くというのですか」

私は煙草を取り落し胸は早鐘をつき唇がやけに乾く。妊婦ヌードを觀賞するだけでなく、生体解剖までするのだと思うと、身体が亢奮のため小刻みに震えた。

啓子さんは、もう立ち上って室の中央の台の方へ歩んでいた。そうして慣れた手つきで百CCの浣腸液を入れると、私に手渡しながら云った。

「私は、今から、あなたの手によって生体解剖を受けます。でも、その前に私の願いを聞いて欲しいのです。一つは、解剖される前に私の腸の内容を全て浣腸によって排泄して置きたいということ。二つめは、出来る限り私

の生命を長くとどめておいてもらいたいということ。私は切腹フォートを撮って貰う時、真に迫ったような表情を演技しつつ、お腹を自分の手で切り裂く疼痛と苦悶を何度も想像の中で考えて来ました。私は女性として生身の肉体が刃で切り裂かれる疼痛に、どれ程耐えられるか、十分に味わい、これで良いと云うまで味わいつくして死にたいのです。もし失神したら、小卓の上の赤い包の薬を飲ませて下さい。では、お願いします」

啓子さんは、死の苦痛をのりこえて、生体解剖を受ける欲びに浸っているようであった。さすがは啓子さんであると、私はその心に感じいていた。

啓子さんは、白布を敷いた台の上に上ると四つ這いになり、豊満に臀部を高く下げて浣腸を待った。美しいが何んと動物的なポーズであろう。丸いお腹は重みのためにやや垂れ下り、より大きく見せている。

「十分に注入して下さい。少しでも腸内容が残っていて腸が切られた時に、腹腔内に洩れたり、ぬるぬると出て来てあたりを汚す等と云うことを考えると私たまらないのです。私の肉体が美しいように、お腹の中の臓器も美しくあって欲しいのです。お願い」

啓子さんの気持は、良く判るような気がする。神秘性の魅力が、汚物のために損われることは許されない。女体は全てが神聖であり、美しいのが原則であるから……。

浣腸薬は何の抵抗もなく腸に吸収され、ただでさえ大きい腹部は腹壁を緊張させて苦しそうである。私は浣腸器を片付けると奇クモデルの中でも特によく飼育された天性マゾの気質を持った女性の浣腸苦悶の姿を一種の好奇心も手つだって、野次馬的な眼で凝視した。もはや下腹部がゴロゴロと鳴り腸の中を石が転がるような疼痛を伴って便意がおそって来たのであろう。懸命に突き上げる便意に耐える啓子の顔はいじらしいものがあるが、本人に取っては真剣であらう。額には脂汗がにじみ眼は血走って歯を喰いしばっている。下腹部の力を抜いて「うーんうっ……」と必死におそい来る疼痛と便意に耐え、今やもう全身が小刻みに震え顔が真青になっている。自分の意志で耐えられるだけ耐えようとするのであるが、意志ではもう制御できない生理である。「あっ」と声を上げると「便器を！」と悲鳴のような声が……。私が挿し込み便器を当てると同時だった。もう羞恥も何もなく腹の中のものを全部勢よ

く排泄した。啓子さんは長い苦痛から解放されて、うっとりした表情で排泄を続けた。その後、私は湯で尻を丁寧になぐり跡始末をしてあげたことは云うまでもない。

啓子さんは、大きく息をついて台上で臥っていたが、落着くと私に鏡を持っていて呉れと頼み薄化粧をはじめた。私は啓子さんの女らしい心遣いにますます感動した。私は化粧が終り「では、よろしくお願いします。上手くやって下さいね」と云う啓子の声を聞いた時、これ程、美しい臨月腹の女体が無惨にも消えて行くのを惜しむ心が湧き起った。惜しいことだ。啓子さんの姿は今日限り私達の目の前から消えて行くのだ。それに、どうして私一人がこの妖美を独占していいだろうと私は自問していた。

「啓子さん、私は余りの喜しさに忘れていたが、あなたを私一人で独占していました。私はせめて、あなたの臨月腹を奇巧の皆様にも永遠に型にとどめ残して置きたいと思うのですが、石膏なんかはないでしょうね」

私は不可能を承知で云うことにより責任を回避しようとしていた様である。

啓子さんは大いに喜び「石膏なら、その部屋の隅にありますわ。何といい案でしょう。」

私、これ程、あなたが私を愛して下さっているとは思わなかったわ。有難う」と。

私は早速石膏を溶いて、啓子さんを立たせ、その肌に直接塗りつけて美しい肉体の胴を型取った。私は編集部に頼んで立派な啓子の臨月腹、最後の姿を石膏像にして残して貰う積りであった。私は、ミロのヴィナス以上に問題になることは間違いないと妙な自信をもって汗を流して型を取っていた。

全部の準備を終えると、大きく盛り上った腹部を上に向け台上に臥った啓子の最後の肉体を飾るべく残っていた栄養クリームで全身をマッサージして皮膚を磨き、ただでさえ妖しく輝く魅惑的な美しい肌を手入れして、彼女の美しく死にたいと云う希望をかなえてあげた。

「では始めますよ。覚悟はできましたか？ 何か思い残すことはありませんか」

私は解剖台に縄で啓子の身体をしっかり縛りながら云った。両方の乳房の上下に二本づつと太腿と足首を股に喰い入る位緊めつけて固定した。

「もう何も無いわ。私はあなたの手で、この愛らしいお腹が思う存分切り開かれ、私は激痛に身をゆだね悶え苦しむのだと思うと幸福

です。あなたは女体の神秘を十分に確かめ、私の肉体が演ずる悲惨な美を、満喫して下さい。あなたの腹部サドの心理は満足の極致を味わい、私も生贄としてのマゾ心理を味わいつくすことでしょう。では私も腹部が切り開かれる模様を見たいので、その頭の上の紐を引いて下さい」

私は天井から吊れ下っている紐を引っばると天井板が左右に移動し、等身大の鏡が現われ啓子さんの全身を映し出した。この完璧なばかりの演技に驚いた。

「どうです、驚いた。啓子って人間が判った。私は鏡に映る自分の肉体に加えられる惨美をこの眼でも味わい、それからあの壁のところの映写機、ずっと二人の行動を写しているのよ、声も同時に入るの。私の苦悶の絶叫は映画とともに永遠に残るって訳ね。生体解剖が済んでから、私のトーキ入り映画をゆっくり見たい位よ。でも、それだけは無理ね。天国から見させて貰うわ。オシャベリが過ぎた様ね、では、お願いしますわ」

啓子はお腹が苦しいのか、身動きできぬ身体を、身悶えさせ、お腹で大きな呼吸を一つ二つして、じっと鏡に映る自分の最後の美しい腹部を見ていた。

「では、ご免！」

私は短刀を右逆手に取ると鳩尾に刃先を当てがった。心は千々に乱れる。切り裂いてしまうには余りにも惜しい豊かな美しい肉体である。啓子さんは息をのんでお腹に力を入れ刀が突き立てられるのを待っている。私はこの肉体を思う存分切り裂き、無惨に痛めつける義務があるのだ。この刃の下女体も、それを望んで待っているのだと決意をきめると、苦しみを長びかすため皮膚と皮下脂肪に突立つ様に浅く突き立てた。軽い抵抗が感じられたが、思ったより簡単に突立った。

「あっ痛い」との悲鳴。

両方の盛り上った乳房と臨月腹の谷間で白刃は冷たく光っている。私は一寸力を入れ、そのまま丸く弧を描いて盛り上る上腹部を脛まで一気に刃を走らせる。

「い、いたい、うーん」眉間にシワを寄せて叫んでいるが眼は鏡の中の刃を追っている。

「痛いですか」私は思わず尋ねる。

「いいのよ、これ位の痛み、辛抱できないことはないわ、切って」

切り口は大きく割れて口を開き、黄色い粒々の皮下脂肪が躍りだし、細い血の糸が丸いスロープを伝って流れる。私は、そのまま腹

部を縦にズツと刀を走らせた。縦に真二つに切られた皮膚は、ぱんぱんに張っていたために縮み、そのために益々大きな口を開いた。「まあ綺麗ね。私の白い肌を血の糸が……厚い皮下脂肪、私の肉体のゆるやかな曲線を形づくり豊かな膨らみを作ってくれていた脂肪ね、これが女の美の正体なのね」

啓子さんは始めて見る自分の肉体の内部の秘密を確認して、痛みも忘れて歓喜の声をあげていた。私は再び刀を取り直すと、大きく切り裂かれ黄色い皮下脂肪がむくれ上っている鳩尾にズブツと思ひ切って突き立てた。筋肉を突き刺す鈍いどっしりとした感触が手に伝わって来る。恐らく腹膜まで突き立てたのであろう。

「うーんい、いたい」と啓子さんは頭の心臓まで響く貫かれる様な激痛に、大きく身悶えし、悲痛な表情で苦痛に耐えている。やるせない耐え難いほどの疼痛がジンジン感じられるのであろう。眼は引き吊り、歯をギリギリ噛んで苦痛に耐えている。

私はそのまま脂肪の厚い層の下に大きく姿を見せている赤い筋肉を、ドシツとした手応えを感じながら、プリプリと切り裂いて行った。

いまや、啓子さんの魅力にみちた豊満な厚い腹部は、冷酷な白刃によって完全に縦に真二つに断ち割られつつあった。鮮血は、ほとばしり、切り口を満たし溢れて腹壁を伝い真赤に染めている。

「ウーン、ウーン、グアッ、ゲッ……」

おそい来る疼痛と、嘔吐感に悩まされながら、苦し気に腹部を大きく波うたせ激痛に耐えている。額には脂汗が流れ、眉の間に深いシワを寄せ、物凄表情である。若い女性の身で麻酔もされず生体解剖を受けているのであるから……。私はそのやや前の切り口のあるを追って一気に切り下した。その刃の通ったあとから筋肉を左右に開けるようにして、ぬめぬめと光る軟体動物のような小腸が躍り出して来た。

縛られたまま啓子さんの肉体は、腰を中心にして前後左右に揺れ動き、むっちりした厚い腰は縄を切り裂かんばかりに悶え動き、そのたびにドクドクと腸が体外に溢れるように露出されてくる。私は短刀を置くと、啓子さんの耳もとで

「啓子さん、しっかりして、啓子さんともあろう女性が、これ位切り開かれた痛みにも耐えられないのですか。女性切腹は到底望めませ

んよ。しっかりして、あなたのお腹を、お腹を見るのです。しっかりと確認するんですよ」

と云うと、思い切り平手で頬を叩いた。

想像も絶する激痛に、ただのたうち廻り、死を待つほどの肉体であったが、私の心が通じたのか、彼女の生贄としての執念が、うっすらと眼を開け

「あっ、これが、わ、たたしの内臓、腸ね。

す、すばらしいわ。遂に、あ、あなは見事にわたしの、お腹を、き、っ、た、のね。うれしいわ、まんぞくよ」

息も絶え絶えに云うと、鏡にうつる妖しいばかりに、ぬめぬめと光り輝いている内臓をみつめていた。私は啓子さんの喜びに溢れたその顔をみながら、しっかりと右手を握りしめ細りゆく脈をうかがっていた。

顔は次第に赤味を失い眼の縁に暗い影がただよい、脈はかすかになんてきたので、彼女の生命のあるうちにとまって、短刀をとり下腹部の方にまわると、腹腔の中で充血して大きく膨れている子宮を、縦にサッと切り裂いた。ザッと大量の羊水が溢れる。一瞬、私はハッとした。カラなのである。大きく膨れ上った子宮は水だけだったのである。凝妊娠である。

啓子さんが「何も聞かないで……」と云ったのは……、今となってはつきりと判った。

彼女は奇クの読者のため妊娠腹を提供したいと熱望していた。その執念とも云うべき欲求が、啓子さんのお腹を膨らし妊娠状態にしたのであった。私は凝妊娠というものがあることは本で読んで知っていた。しかし、啓子さんの肉体を通じて確認するとは……。

もう彼女は肩で浅い息をし、生命の火も絶え絶えである。私は膨らみを失ったお腹を祈るような眼でみながら、啓子さんに感謝していた。

気を鎮めると啓子さんの臓器を取り出して確認するため、腸を手にとるとズルズルと引き取り取した。実にくねくねと長い。もつれた糸をたぐるようでも手間がかかるので適当に短刀で切って取り出した。腸の切り口からは少量のねばった液が出ただけで美しい状態であり、必死の思いで浣腸にこらえていた啓子さんのいじらしいばかりに美しかった排便の苦悶に耐える顔を思い出していた。しかし、もうあの美しい肉体は無惨な姿をとどめているのである。

私は彼女の臓器を完全に取り出すと、この神秘的な内臓に頬を寄せ、啓子さんの美しい

豊かな下腹部と厚い腰を思い出していた。

薄化粧をした美しい顔からは苦悶の表情は消え、生前のままの豊かに盛り上った丸い乳房をのせた胸と太い弾力を秘めた太腿が、無惨に口を開いた腹部とは対象的で妖しいばかりの悲愴美を演出していた。

私は血にぬれた手をあわせ彼女に厚く感謝し冥福を祈ると血刀をズブリと自分の腹に突きたてた。「あっ」痺れるような痛み、これ位の痛み、啓子さんのことを思ってみろ、と叫んだ時、長い楽しい眠りから覚めた。

私の枕もとに妻が座っていて

「一体どうなさったのです。エラクうなされていきましたよ」と意味あり気な微笑を投げかける。

「うん、楽しい夢を見てな……」

「そうでしょう。こんなフォトを胸の上におやすみになっているんですものね。でも美しい妊娠ヌードね。裸になるだけでも恥しいのに、妊娠姿を裸で撮らすなんて、心憎いばかりの覚悟ね。羨しいわ」

と首をすくめ、いたづらっぽい眼を私の方に向けて微笑んだ。

それにしても、私にとって思いがけぬ楽しい土曜日の午後であった。

妖異女斗美八景

佐藤健児

第五景 月姫討死

配役 月姫……松山容子
美和……高田美和

「フム、霧ヶ城とはよく名附けたものじゃ。こう霧が深くては、案内知らぬわが兵は進むことも退くことも出来ぬ。たかが小城一押しと思うたにな。」

武田の部将で豪勇をもって鳴る小幡勘解由も太い腕を組んでうなった。

「さよう。それに加えて、じゃじゃ馬の月姫の鬼神のような働き。これでは味方の士気が挫けるのも必定、こう見込みが狂っては、大事にならぬうちに引き上げた方が無難でござろう。」

そう合槌を打ったのは近習の伊那左近。

「いや、それがそうはゆかぬ。霧ヶ城をおとして月姫を首にすることは、信玄公からのきついお達しじゃ。」

「ハテ、小娘の首一つ、何故にそのように信玄公がお望みになりまする。」

「そちは知らぬか。あの月姫、岩佐兵部の養女になってはいるが、実は信長と血のつながるいとこじゃ。」

「織田信長のでございますか。なるほど信長の血統は美人の聞えが高いが、それであの姫も鄙には稀なる器量よしというわけですな。」
「うん、そればかりではない、尾張にあった時には相愛の仲であったと聞く。とすれば今も信長の心にかかっているのは必定。」

「それで信長を怒らす御所存か？」

「月姫を討てば、こらえにこらえている信長も、勘忍袋の緒を切って合戦を仕掛けてこよう。しかも霧ヶ城はその折の戦略上の要点じゃ。一石二鳥とはこのこと。」

「その犠牲となる月姫こそ、哀れでございませぬ。」

「そうは云って居られん。月姫を討たずば、われわれの首があぶない。左近、霧ヶ城をおとす名案はないか？」

「さよう、そうでござりましたな、ここは一思案致さねば……」

考え込む左近はまだ二十を一つ二つ出たばかりの眉目秀麗な青年である。やがて「殿、所詮正面からの力押しに見込みないと

すれば、詭計を用いるの外は……」

「ウム、どのような？」

「月姫と霧ヶ城、この二つが組んでいればこそ強けれ、別々にひきはなしてしまえば、共に取るのは容易と存じます。」

「姫をおびき寄せるのか、そのようなうまい手だてがあるかな。」

「すこし混み入ったやりくちではありませんが、ちと、お耳を——」

と主人の耳に口を寄せる。聞いているうちにいかめしい勘解由の相好がくずれて

「何じゃ色仕掛ではないか、そちらしい考えだが、あのじゃじゃ馬姫が、のってくるかどうか。」

「そんな浮いた気で申して居るのではありませぬ。われわれにとっても、のるかそるかの瀬戸ぎわ。成就せねばすべては終りです。」

「汝の云う通りだ。手配致せ。」

時は元龜三年秋、西上を期す武田信玄とこれを阻まんとする織田、徳川連合軍との間は一触即発の危機をはらんでいた。

ここはその両者の国境、木曾は伊那の盆地から南の山系に分けいった分杭峠で、その一つへだてた西の尾根にそびえている城こそ、織田方岩佐兵部の守る霧ヶ城なのである。小

幡勘解由は分杭峠から北五里程にある武田方の高遠城を預かっていたが、今左近との対話にあるように、信玄の内意を受けて織田方の一拠点である霧ヶ城を攻略しようとしてここまで出張って来たのであるが、城の周囲に立ちこめる霧と兵部の養女月姫の奮戦になやまされて進退窮していたのである。

伊那左近は今は武田につき従っているが、もともと伊那領の名門の出であって、岩佐兵部ともかつては一族であり、今も姻戚の関係にあった。彼が小幡勘解由に授けた秘策は一旦和議を申し出て岩佐等を油断させ、自分と月姫の縁組みに事寄せて、彼女を城外へおびき出そうというのである。左近は自ら和議の使者に立って、月姫に目通りした上、兵部等と密談して、縁組成就のあかつきには、高遠城を織田方に寝返りさせる用意まであることをほのめかした。このような臨機応変は、大國の間にはさまる小領主の保身の術が習性となつたもので、同じむじなの岩佐兵部をもまんまとまるめこんだのである。

危いかな月姫。彼女は信長の母方の叔母の娘で、彼女の早く亡くなった父はやはり此所から遠からぬ恵那の領主であって、岩佐家との繋がりもあったので、信長の意図もあって

その養女となつたのである。

時に年はややつもって二十三。天の成せるその美貌は凜とした気品と相まって、早くから木曾に咲く白百合にも似た楚々とした風情を匂わせていたが、最近は更に女盛りの豊艶さを加えて、その姫武者振を見ただけで、武田方の将兵が、魂を奪われて為すところを知らなかったのも当然と云える。

和議の条件に伊那左近と自分の縁組話しがあることは姫の耳にも入らないではなかったが、それは正式に申しこまれたわけでもなし、拒む、拒まぬが和議の成否を決する状況でもなかったもので、まず小幡側から和議の使者が立って、両方から数回の往復があつて和議もまとまった後、退陣の名残りに月姫のお越しを願って、宴を張りたいという招きがあつた時、姫はそれを警戒する理由を持たなかったのである。近侍の中にはその軽挙を諫める者もないではなかったが、養父の兵部の勧めもあり、兵部の甥主馬之介と共に城を出た。そこには伊那左近を憎からずとする女心も動いていたのであろう。もとより岩佐方の警固も厳しく、姫も目も覚めるような錦の直垂に、小桜織の鎧という武装を忘れなかったのである。もしやと気を配っていた祝宴も無事に終

って帰途についた時には、岩佐方の誰の表情にもホッとしたものがあつたのはいなめなかつた。しかるに霧ヶ城も近くなつたと思う頃に突如伏兵が起つたのである。最初の伏兵は旗印も何もなく小幡方とは定め難かつたが、次々と起る統制ある駆引は紛う方なき小幡勢で、素破ノと防ぎに廻り、あるいは救出に向つた岩佐勢も、そこは不意を打たれた差、見る見る突き崩されて、姫を囲む主力も知らぬ間に隔てられ、城から遠ざかつてゆくばかり。

「おのれ、武田武士にあるまじき卑劣な振舞、まさかと許せしが身の不覚、このままでは、かえつて全滅になるばかり。一か八か、小幡勘解由の本陣へ斬り込んで卑怯者に思い知ら



してくれん。主馬殿は城へー」
柳眉を逆立てて激怒した月姫は、主馬介へ
そう言い捨てると、サッと馬首を返したので
ある。

「何となさる。月姫！」
主馬之介の声を背に自分の近習、侍女を従えて、月姫は一散に分杭峠を目指した。
「ややつ、敵は逆上したぞ」
「月姫を追え！ 月姫を逃すなっ！」
この捨身の行動はたしかに小幡勢をあわてさせて、その采配は乱れ、主馬之介等はたやすく血路を開くことが出来た。
しかし月姫の方には敵が群つた。最初不意を打たれて隊形も充分でなく、阿修羅の如き姫の武勇の前に斬り立てられたが、さすがに伊那左近が全力を挙げて手配りをした包囲網は厚かつた。次々と襲いかかる新手の敵と戦っているうちに、姫につき従う兵は悉く倒れ、姫も身に数創を受けていた。分杭峠を襲撃することはもはや望みがなかった。

（無念だが、しかし生きられるだけは生きたい——）

一方の囲みを破った姫は、漸く迫ってきた宵闇にまぎれ、馬を捨てて林の中へ走り込んだ。痛手をこらえて草叢から草叢へ——

（日が暮れてくれれば、何とか……）

それが一途の願いだった。

「目指すは月姫一人、逃すなッ！」

小幡方も必死だった。鉄砲を打ち込み、松明をかがけて、幾重にも包囲の輪をつくり、それを縮めていった。

月姫は地を這い草の間を縫って巧みにその輪をくぐり抜け、今度は霧ヶ城を目指した。

日がトッピー暮れたのと、敵の囲みを抜け出した気のゆるみから、姫は烈しい咽喉の渴きを覚え、とある池畔の葦の間に身をひそめた。

綿のように疲労した身体、それに太腿の突き傷の痛みのために、腹這いになって冷い水を貪り飲む月姫は、そこに思いもよらぬおそろしい危険が待ちかまえていようとは、神ならぬ身の察し得なかったのである。

突如、ビュッーと一条の白光が葦の葉蔭に閃いて、「アッ」と一声、はじかれたように姫の身体が水際に転んだ。いつの間にかのび寄ったのか、たしかに敵兵の繰り出した槍先

に右背部をしたたか突きさされたのである。

（不覚ッ！）いたでをこらえながら、さすがに男まさりの月姫、かさにかかってついてくる槍を二度、三度とはねのけたが、五体がバラバラになるような烈しい痛みに加えて、腿の傷のために身体が思うようにならない。

（妾もいよいよ最期か——）長い戦の疲れからそんな弱気がフツとわいて出て、それでも愛刀備前則光をたよりに懸命にわたり合う。しかし敵も敵だ、この重傷の女性を相手に歯がゆいほどその槍先には力がない。（戦場迷いの雑兵一人か……。それなら討たれたくない）、やや余裕をもった月姫。

「卑怯なッ、女相手に不意の闇討ち、月姫と知っての仕業であろう、名を名乗りやッ！」

そう呼びかけたが、相手は答えもせず、またしやにむに突きかかってくる。そのさして変化のない一本槍の手の内を読んだ姫は、気合をはかって、「ええいッ」技の妙を見せてカラリと槍のケラ先を千段巻のあたりから鮮かに斬りとばした。

「アッ」はじめて自分が斬られたような驚きの声を発して、後ずさったが、折れ柄を捨てて今度は刀をひき抜く。（妙に執念深い相手——）これだけ腕の差があれば、相手は動

けない敵、大声で叫ぶなり、走っていった同僚を連れてくるなりするのが当り前なのに、この敵はまた黙々と迫ってくる。

（あくまで妾を討つ手柄を一人占めにするつもりなのか、その手並で人一人容易に討て得ぬくせに……）

月姫は一寸張合い抜けがしたが、折しも森かげからポツカリと顔を出した十六夜月が相手の面を淡く照らし出したのを見て、姫は更におどろいて、「あッ、そなたは女ッ！」と思わず声をあげた。それは夕風に長い黒髪をなびかせたまだうら若い乙女なのだ。夜目にしかとは見定め難いが、皮胴にただこて、すねあての具足をつけただけの異様な姿ながら、その面差から衣裳の様子では、賤しいただの女兵ともみえない。そうと知っては急にぐったりして、横倒しにしたい身体を刀を杖にして支えた月姫は、

「乙女の身でこの月姫に一騎打を挑むとは定めし仔細があろう。そなたとて戦場の礼は知って居ろう。尋常に名乗って勝負しや。」

喘ぎつつ言うと、

「この合戦で姫に討たれた小幡の一将高野浩右エ門の娘美和。父の仇、お覚悟ッ！」はね返すように答える声は美しいが、語調

は極度の緊張に震えを帯びている。(ほう、高野浩右エ門……の娘——)、数日続いた激戦に月姫が挙げた兜首は数知れない。その名に記憶はないが、仇と呼ばれてさすがに姫の心も動揺した。

「それならそうと、正々堂々かかってくれ、討たれてやらいでもないに……よくよく武田は卑怯者の集いよな。」

あざ笑うように言ったが、何と思ったか今度は刀を投げ出して汀にどっかとあぐらをかいた。そしてまだかなりはるかの、霧ヶ城にあたる方角の夜空を眺めながら、

「まあよい、そなたに出会ったのが、何かの命運。卑怯者の小幡勘解由に今一度思い知らしてくれたいと思うたが、この手傷では所詮夜の明けるまでに城に帰り着くは覚束ない。なまじ他の雑兵の手にかかるよりは、ともあれ月姫に挑んだそちの健気さと孝心に愛でて、この首そなたに進ぜよう。それを手柄に高野の家を興せば、亡き父も浮ばれよう。」

言いつつしなやかな指を走らせて鎧の紐をとりにかかる。意外なこととなりゆきに少女の方はただ呆然と立ちつくすばかり。

「ああ重い、着馴れた鎧も今宵は馬鹿に重か



った。これでせいせいする」

言いながら草摺もはずしてゆく姫は、覚悟を決めて気持もさっぱりしたのか、傷の痛みも忘れたよう。少女の方をふりむいて、

「妾はここで生害します。そなた仇の首を介錯するかや？」

いわれて美和は更にびっくり。かかって来いといわれれば目をつむってでも突進して見

せるが、首をくれるといわれただけでも、はりつめた気が一時に抜けて、かえっておそろしさに手足がわなくなればかり、介錯など到底出来るわけではない。ただ首を振って後ずさりする様子に、月姫は唇を綻ばせて

「ホホ……、大へんな仇討じゃが、初めての戦場とあれば、無理もない。しかしそなたも武士の娘、やがて運つきて腹切る場合の手本に、よう妾の最期を目に留めておきや。」

今度は愛刀則光をとりあげて、池の水で血のりを洗い落した後、しばらくその砥ぎすまされた刀身を眺めていたが、（この則光で腹を切りたいが、この手傷では無理）とひとりつぶやいてパチリと鞘に収め、美和の方へおしやると、

「これは信長公からいただいた名刀じゃが、お返しする術もない。そなたにつかわす故、妾の首にこの太刀を添え、そなたが討った証拠とするがよい。」

そういつて今度はその信長のいる西の方に向って瞑目し、何やら念じていたが、それも長いことではなく、パチリと目を見開くと草摺を外しにかかる。

（この姫は男と同じように腹を切るつもりなのか、何という気の強い——）

月姫の一つ一つの仕草が、美和には何か現実とは信じられない、遠い夢の中の出来ごとのような気がしている。

姫の方は何のためらうところもなく、やがてぐいと襟を左右におし開く。夜目にもまぶしい程白い双肌があらわになって、腕を伏せたように形の良い両の乳房を惜しげもなく見せた様子に、美和は思わず固唾をのんだ。

脇差の鞘を払って皎々たる九寸五分の懐剣を逆手にとると、月姫は更に袴を押下げて、ふっくらと張っている下腹を静かに左手で撫で廻す。そしてもう一度美和の方を見ると、「霧ヶ城の女将岩佐月姫、武運つきてここに腹を切ります。生年二十三才、しかしそちに首を譲っても、今日の小幡の卑怯な仕打ちに對する恨は消ゆるものではない。魂魄この世にとどまって、小幡一味はもとより、武田家を滅ぼして、必ず信長様の世にして見せる。そう伝えるがよい。」

凄愴の気は辺りに満ちて、凜とした声音、澄んだ瞳に射すくめられて、それまで呆然と立ちつくしていた美和は、たまらずヘナヘナと草の上に崩れ落ちた。

月姫はぐつと背をのぼし、力を入れてふくらんだ左下腹に、懐剣の刃先をあてがい、じ

っと目を瞑る。サツと吹く一陣の秋の夜風が姫の黒髪を捲き、月光に照された観音像のように端正なその横顔は、まさしくこの世のものとも思われぬ美しくしさである。

「エッ」

低い気合とともに、プツリとおのれの腹に懐剣を突き立てた姫は、キュツと紅い唇を結んで苦痛をこらえながら、一気に右へ引き廻す。パツと飛ぶ血しぶき、さすがに烈しい衝撃に、前屈みになって首を横にねじらせたが、それでもなお右へ引き廻そうとする。しかし右背部の痛みのためにそれが出来なかったらしい。しばらくハッハッと喘いでいたが、遂にたえかねたか、懸命に身体を起して懐剣を抜きとると、左手でおのれの左乳房の下をまさぐり、そこへ血に染んだ刃先をおしあてると、のしかかるようにガバと前に身を伏せた。

「む……つ、うーん」と最後のうめき、二度、三度、身体が上下したが、あやまたず心臓を貫いたのだらう、そのまま汀に前のめりになると、もうピクとも動かなかった。切腹は充分でなかったのであらうが、いずれにせよ女武者に恥じぬ見事な最期であった。美和はもう目を掩うでもなく、まじまじとその壮絶な

光景を見つめていたのである。

（ああ、もう死んでしまったのであろうか、つい今までのように美しく勇ましかった姫、玉を転ばすような声音で話し、婉なる仕草をしていた姫が……）

深い静寂の中に死人とともにあるという恐怖に美和はしばらくガタガタと身体の震えがとまらなかった。しかし必死に、

（何も怖がることはない、月姫は死んでしまった。わたしはもう殺されることがない。そればかりか、父の仇を討ち、鬼神とうたわれた月姫の首がとれる、おそらく一番の手柄、山のような恩賞と、栄誉——。そうだ、早く、事をすましてしまわぬと、夜が明けて外の者にでも首を奪われたら、すべてが失なわれてしまう。今が大事、勇気を出して、落ちついて、わたしも女丈夫らしく振舞うのだ）
 声を出して自分を励まし、やっと立ち上った。抜いた刀を右手に身構えながら、恐る恐る、月姫の死骸に近づく。ほとんど水中につつまむように左足を後にのばして、前のめりにつつ伏している、その死体の横顔だけがのぞかれて、その抜けるように白い頸筋に月の光がしらじらと流れて、そのししむらが如何にも冷く美しい。美和は再び息をのんで、この

絢爛たる死体に見惚れたが、やがて我に返ると、おのれの脇差をひきぬいて、

「月姫様、お首級頂戴致します」

と左手で房々とした黒髪を握ったが、さてどうやって首を搔いてよいのか分らない。後れ毛のかかっている姫の細いうなじに刃先を押しあてて、鋸りのように引いて見たり、あるいは顎の下に刀身をさしいれて掻き上げて見たりしたが、いずれもうまくゆかない、そのたびに白百合がゆらぐように左右にかしぐ姫の首のなまめかしさ。「フーッ」と興奮に息をついた美和は、決心して、遂に短刀を持ち直し、姫のしなやかな咽喉首の真中ほどをググクッ——と柄元まで刺し貫いておいてから懸命に掌を左右に動かした。美女の皮肉を切り裂いてゆく手応えは快いが、細い姫の首筋も、少女の力で切り離すのは容易でなく、美和は途中で何度も手を止めて息をついた。
 「父上の霊も御照覧、仇月姫の首をこの通り美和の手で斬っています」
 それを力に最後の一片をグイグイと掻き切つて胴を離れた月姫の首がゴロリと砂上に転がると同時に、美和も草むらに尻餅をついて血にまみれた左手で額の汗をおしぬぐった。
 「討った、仇月姫を、私の手で——」

その興奮に彼女は、もうこわさを忘れていた。月姫の首を故郷の方向へ据えて、

「父上様、これにて御成仏を」

とその前へ坐つて念じ終ると、美和は月姫の髪を握って持ち上げようとしたが、思いの外に重さに、右手を死首の顎にかけて両手で抱え上げ、それを月にかざして見た。生きていた時の月姫とは違って、一面に蒼白に交じっていたが、その面差には苦痛や怨恨の表情は更になく、眠ったままのような生き生きとした美しくさをとどめていた。

（さすがに月姫、首になっても美しい——）
 それはもう無気味な生首といった感じはなく、非の打ちどころのない芸術品さながらの美しさで、人手に渡すのも惜しく、いつまでもこの首を眺めてここに居りたい気持ちを起させるのであった。

しかし、そうもして居られない。やがて小幡方の追手もここに至るかもしれないし、あるいは城方も姫を救うべくやってくるかも知れない。ともかくここは無事に小幡の陣屋に戻って、姫の首を討ったことを認めてもらわねば有終の美は飾り得ない。
 都合のよいことに目の前に池があるので、その水で月姫の首を洗い清め、錦の直垂れを

千切って幾重にもおし包んだ後、せめて姫を弔うつもりで、首のないその亡骸に脱いであった鎧を被せ、それを水中に押し放して、水底深く沈めてやった。

そして首は一旦折小櫓の先に結びつけて見たが、とても持ちきれないので、更に解かれてあった白帯の先へ結び変えて、地上を引き摺って持ち帰ることにした。

一方分杭峠の小幡の陣屋の外には焦燥し切った伊那左近の姿が見られた。あれほど入念に月姫擒殺の手配りをしていながら、もう夜が明けようとする頃になっても、月姫を討ったという朗報は入らぬのである。

（そんな筈はないのだが……、あのように神秘的に美しい姫には、並の人間とは違った奇蹟的な天の加護があるのだろうか？）

次々と帰ってくる伝令の報告からも、姫が霧ヶ城に帰った様子はないのだが、岩佐方はほとんどが討たれしも、姫その人の行方は杳として分らない。（夜が明ければ城中からも勢を備えておし出してこよう。そうなれば姫を獲ることは絶望だ。姫さえ討ってしまえば、この卑怯な闇討もどんなにでも云いつくろうことは出来るが、姫が生きていては何もかも明るみに出て、武田方の武士としての面目は

丸潰れ、小幡勘解由はおろか自分の首も危い）そう思うと居ても立ってもいられないのである。思いは同じ小幡勘解由も、

「左近、まだか？」

と苦り切って聞く。

「はは、この上は、私自ら出馬してまいります。鬼神の如きあの姫、何所から現われて襲撃してまいるかも知れませぬ故、殿には充分に御用心を。」

「いうにや及ぶ、一刻が勝負ぞ。」

「心得ました。」

今は決心した左近が馬を引きに出ようとした時である、転るように走って来た一人の部下が、

「殿、つ、月、月姫の首が届きましたっ。」

「何、月姫の首、まことか、それは。」

狂喜する左近、

「はい、いや、そう申して——」

「む、何所の手の者だ。でかしたぞ。」

「そ、それが殿、討ったのは女、そ、それも年端もゆかぬ乙女でござりまする。」

「な、なにっ、乙女……、あの姫が、乙女に討たれたと……」

また急に心配になった左近が、部下と共に飛んでいってみると、陣屋の門ぎわに錦の直

垂の首包みを前に、かしこまっているのは、まさに風にも堪えぬ風情の一少女である。

「そちが、月姫を討ったとな？」

「はい、父の仇として、たしかに——」

「まこと、月姫の首であろうな。」

とびつくようにして、解く手ももどかしく包みを開いた左近は、一目見て、

「む、まさしく月姫……」

ホッとした安堵感に、全身の力が抜けたように、しばしそれに見入ったが、眼は閉じ、唇も紫色になって変り果てた美姫の死首に、さすがに顔を背けて、

「男もかなわぬあの暴れ姫を、その細腕でよう討ちとれたな。拾い首とも思われぬが。」

美和は一部始終を語ったが、やはり欲心が動いたか、首を貰ったとは言いきり言えなかった。そうでなくとも、少女の言葉が信ぜられないのは無理もなく、月姫討死の真相は華やかな美女同士の一騎打として噂は噂を呼んだ。

いずれにせよ、月姫を討たれ、槍頭に懸けられたその首を見せつけられては、岩佐方は志気沮喪してまもなく霧ヶ城は落ち、小幡勘解由、伊那左近と美和は信玄に召されて、激賞を受けた。

月姫の首は信玄の実検を受けた後、更に信

長の許へ送られた。恋しと思う女の変わり果てた首に對面せねばならなかった青年武將信長の心中は如何許りであったか。

かくて月姫討死の悲劇を皮切りに、織田と武田とは手切れになり、ここに三方ヶ原および長篠の役の戦雲を巻き起すに至ったのである。

る。

(第五話終り)

圧倒的人氣！ 注文殺到！

サディズム文学の最高峰、S派必読の書

臨時増刊

花

と

蛇

小説、絵画、写真▽特集号

四馬孝画「花と蛇」各章クライマックス・シーン巻頭口絵十六葉
グラビヤ・フォト「花と蛇」各場面描写特別撮影写真三十六頁
長篇サディズム小説「花と蛇」第十五回完結まで一挙登載
オフセット印刷緊縛写真へ縛られた女体オンパレード▽

(乞直接お申込) 定価一部 五〇〇円 略号(花)

満天下Sファンの血を沸かせた団鬼六作の傑作サディズム長篇小説「花と蛇」は、皆様の声援により、ここに全篇一挙掲載の特集号として、堂々完成いたしました。冒頭に掲げ

ました巻頭口絵、グラビヤ写真の外に、豊富なオフセット写真を加えて、文字通りS派垂涎の特集号をお贈りします。未見の方は一刻も早く直接お申込みを――。

内 容

第一グラビヤ

【花と蛇】幻想 新作写真集

本誌写真部
特 写

- | | |
|---------------------|-------|
| 柱に縛られた美体…………… | 玉田美佐子 |
| 厳しき縛しめに喘ぐ…………… | 玉田美佐子 |
| 浣腸器による責めの幻想…………… | 大塚 啓子 |
| 美貌醜弄(鼻責めの幻想)…………… | 大塚 啓子 |
| 禪裸女緊縛の幻想…………… | 大塚 啓子 |
| 両手首くさり吊りの美女の幻想…………… | 大塚 啓子 |
| 美女手吊り晒し悶々の幻想…………… | 大塚 啓子 |
| ガラスシンダーと裸女責め幻想…………… | 玉田美佐子 |
| 柔肌と麻縄の織りなす幻想…………… | 玉田美佐子 |
| △花と蛇▽画集 四馬孝・画 | |
| 一、静子夫人捕わる | |
| 二、静子夫人と桂子の対面 | |
| 三、静子夫人に迫る魔手 | |
| 四、川田の悪どい企らみ | |
| 五、桂子と静子夫人のオシメ責め | |
| 六、令夫人に對する浣腸の洗礼 | |
| 七、深窓の美女夫人の晒しもの | |
| 八、あぐら縛りの特別席 | |
| 九、カメラに向けられる苦悶する美貌 | |

- 十、京子探偵への惨忍な報復
 十一、田代と森田にいたぶられる静子夫人
 十二、美人探偵京子頑張る
 十三、静子と京子の後手吊り
 十四、捕われた美津子の姿
 十五、京子と妹の美津子
 十六、受難の静子令夫人

私のアルバム

私の緊縛フォト・コレクション

- 私の可愛いペット……………梨花悠紀子
 明眸のいましめ……………大井小夜子
 美女の柱しぼり……………絹川 文代
 二女連縛 美しき羞らい……………大塚 啓子
 ………………絹川 文代
 着衣剥奪と緊縛シーン……………竹野ひろ子
 算盤責めのお仕置……………大塚 啓子
 乱れ裾緊縛絵模様……………愛川 悦子
 荒縄と竹竿の責め……………絹川 文代
 扉 淫蛇に襲われる美女 四馬孝・画

団鬼六作、四馬孝画

長篇「花と蛇」

第一章 発端…静子令夫人―誘拐

された令夫人―送られた着衣―ズベ公の本拠

第二章 陥穽…二度目の嫌がらせ

―運転手の正体―地獄の結婚式

第三章 美人探偵…落花紛々―美人探偵京子―浣腸地獄図

貴めに悶える女体の幻想

- 第四章 浣腸図…浣腸強制―屈伏
 第五章 救援者…羞恥地獄―観念の座―京子の活躍
 第六章 救援の失敗…逆転―颯りもの好餌…京子の屈伏―淫獣の餌
 第八章 悪魔の哄笑…毒牙は迫る―新鮮な生贄―悪魔の笑い―遂に美津子も
 第九章 地下室…悪鬼の饗宴―美津子のおとり
 第十章 翻弄…屈辱と羞恥―身代りに立つ夫人
 第十一章 蛇の執念…裸踊り―おしめを使う夫人―屈辱の挨拶
 第十二章 姉妹危し…屈辱の猿ぐつわ―浣腸競演
 第十三章 調教師…遂に京子も―土牢の中―調教師来る
 第十四章 美津子受難…二人の美女―調教師―狂乱の美津子
 第十五章 結末…美津子の屈伏―二つの肉塊―絶対絶命―美しい童女―スター誕生

第二グラビヤ

花と蛇 グラフィック・ファンタジー

貴めに悶える女体の幻想 大塚 啓子
 浣腸器の恐怖につかれた幻想 大塚 啓子

女体緊縛アルバム

- 玉簾越しの女体非情の幻想……………玉田美佐子
 両手首両足首連縛の幻想……………玉田美佐子
 苛められ尽した女体の幻想……………大塚 啓子
 羞恥さらし責めの幻想……………大塚 啓子
 柔肌に喰い込む縄の幻想……………大塚 啓子
 着衣剥奪と浣腸に悶える幻想……………大塚 啓子
 光と影による浣腸器の幻想……………大塚 啓子
 渾美といましめに泣く幻想……………大塚 啓子
 怨嗟と愁嘆、苦痛と忍耐……………大塚 啓子
 足吊りに至る過程の幻想……………大塚 啓子

- 美女姉妹仲よく縛られる……………絹川 文代
 手吊にもだえる八態……………桜井 葉子
 美しき捕われの餌物……………絹川 文代
 雨中泥まみれの折檻……………大塚 啓子
 伸びやかな四肢と縄目……………絹川 文代
 緊縛女体の優美ポーズ……………熱海 容子
 柱しぼり女体悦虐模様……………絹川 文代
 縄に憑かれた陶酔境……………梨花悠紀子
 ショート・パンツ哀感……………絹川 文代
 カメラに全身を晒して……………絹川 文代
 レインコートのかがやき……………絹川 文代
 紺色の囚衣をまとい……………絹川 文代
 団鬼六先生の力作、長篇小説「花と蛇」の麗筆は息もつがせず皆様を魅了するのは勿論のこと、特写フォトの華麗な緊縛写真と相俟って、四馬孝画伯描くところの画集が更に一層、この特集号の真価を高めております。未見の方は略号「花」とお書きになって今すぐお申込み下さい。

サド・サスペンス・シリーズ

深夜の市長

△オリオン星座への捧げもの▽

佐原陽一郎

深夜の市長

1

羽田空港には、その夜こまかな雨が降りつづいていた。

すでにエプロンに入っているムーンライトは軽くフェザリングしながら乗客の塔乗を待っていた。

私はロビーの隅に立って、ポケットの航空券に小さく記入された一行の文字をたよりにその夜の見知らぬ同行者を捜していた。

(白い手袋の女)

市長独特のくねくねしたペン書きの書体が私の眼の中で躍っていた。

国内線のロビーには蛍光灯の白っぽい光が充満し、行き来する乗客や見送人の私語にまじって塔乗ゲートを知らせるアナウンスが低く流れていた。

私の腕時計は午前一時二十五分をまわっていた。

市長から電話があったのは私が社から帰って間もなくであった。水の出ない東京の水道にすっかり慣れきった私は給水車が来てもバケツを持って走りだす気にもなれず、アパートの一室に寝ころんでテレビを見ていた。

そんな私を見すましていたかのように電話が鳴って市長のしわがれた声が、その夜のム

ーンライト機に乗るよう指示してさたのである。羽田空港の国内線フロントには私宛てのキップが手まわしよく預けられてあった。

あの六本木の奇妙な夜いらい市長は私の眼のとどく範囲から完全に姿を消していた。

「ダンテス」というクラブもあのあと数日して私がたずねてゆくと、かたくトビラをとぎして営業している様子はみられなかった。

しかし私は市長がいつか再び私の前にあらわれることを心のすみでひそかに期待していた。

夜の世界に君臨しながら、市長が時おりみせる暗いカゲのある微笑が私の心をとらえた

せいかも知れなかった。

私はもう一度ロビーの中を見まわした。ムーンライトの出発時刻は午前一時四十分である。乗客たちはすでにゲートの方へ移動しはじめていた。

スーツケースを提げた女性も数人まじって、いたが白い手袋をしているのは見あたらなかった。

「そろそ出発の時間ですな」

肩をたたかれてふりむくと、おどろいたことに市長はきちんとしたダブルの制服を着て私の後に立っていた。

腕には金スジがはいり航空会社のマークが胸に光っている。

「あははは、びっくりしましたか？キャビンアテンダント、つまり客室乗員の制服です。今夜のムーンライトは私が特別機をチャーターしました。ですから乗客はぜんぶ会員です。さあお待ちせしました。行きましょう」

市長にせかされるようにタラップを上るとき私は入口に立って会釈するエア・ホステスをみてあっと思った。

私は市長のメモの意味をやっと理解することができた。

白い手袋をしている女とはエア・ホステス

なのだ。それでは今夜の犠牲^{いけにえ}はあの美しい姿体を制服につつんだ二人のエア・ホステスののだろうか。

2

ムーンライトに使用するダグラスDCI6 Bはパシフィックアローという愛称を持ち優秀な性能のプロペラ機であるが、コンベア880、ダグラスDCI8など純ジェット機所以就航によっていまではその影もなくなった感じでキャビン内の色調や座席の配列などかはかつては太平洋路線の花形機として活躍した時代のなごりが感じられるだけである。

小さな窓から外をのぞくとランプウェイに添った航空灯が小雨の中にまたたき、グラウンドサービスの自動車がカブト虫のように飛行機の下を動きまわって出発時間のちかいことを告げていた。

「飛行機は今夜がはじめてですか」

市長が私にたずねた。

「いいえ、一度名古屋まで乗ったことがあります」

「その時のエア・ホステスはどうでした？」

「なんかつんつんして笑顔をみせず能面のような感じでした」

「彼女たちはえてしてそういうのが多いのです。エア・ホステスになったという満足感と私は美人なんだというナルチシズムが重なりあって実に不ゆかいな空の旅を味あわせてくれます。」

しかし今夜はそのホステスの魅力をじゅうぶん堪能させてくれるでしょう。角度を変えれば冷たい女性ほど男にはもろい。そしてそういう女ほど市長の私にとってもっとも価値ある大空への犠牲^{いけにえ}ともいえます」

四基のエンジンのひびきがひととき高まって飛行機は静かに滑走路の端へ動き出していた。「ファスン・ユア・シートベルト」のサインはすでにでていて乗客たちはあらためて自分のベルトをしめなおしたりしていた。

管制塔のクリアランス（飛行許可）が出る数分のあいだA滑走路に待機するムーンライトは赤いアラームライトを翼端に点滅させていた。

滑走路を走る車輪の振動が急になくなると座席がやや水平から上向になった感じがして空港の色とりどりの灯が眼下に消え去っていった。

「どうですか気分は？」

「大丈夫です。少し耳が変ですが……」



「気圧のせいですよ。すぐなおります」
飛行機は江ノ島の上空を大島沖へでてそれから大阪への直線コースをとるらしかった。
IFR（計器飛行）のダグラスDCI6Bには翼をたたく雨足もさほど気にならないらしく快調な飛行をつづけている。

しかしさっきから私が気になっていたのは機内のアナウンスが全然ないことである。
普通の国内線や国際線ならエア・ホステスのアナウンスが必ずあって乗客はベルトをしめたり外ずしたりするのである。
「ホステスはどうしているのですか？」

私は市長にたずねてみた。

「あそこにいますよ。いま姿をみせます」

市長は後方のギャレイ（調理室）の方へむかってなにか合図をした。するとギャレイの薄いカーテンがひらいてとつぜん二つのマネキン人形をころがすように制服をつけたエア・ホステスが通路の方へとびだしてきた。

紺のタイトスカートにシームレスの靴下がよく似合う二人のエア・ホステスは白手袋の両手に黒く光る前手錠をかけられ細引で腰のところを連結されていた。

二人のホステスは不自由な両手にキャンデー類の入ったバスケットを持たされていた。

赤、青、緑、銀色とバラエティーに富んだ包装紙につつまれたキャンデーが機内の照明にきらめき、黒いマスクをつけた会員に縄尻をとられてときおり高いハイヒールにつまづきながら彼女たちはサーヴィスをつづけた。

「それでは飛行機も水平飛行にうつって安定したようですから、本格的な機内ショーをお見せしましょう」

「彼女たちは本当に飛行機のホステスなのですか？」

「もちろんですとも。今夜の便のために契約したレギュラーのホステスです。特に会員の

ためにマゾの傾向がある女性を極秘に調べました」

「しかし……」

「わかっていますよ。とても信じられないというんでしょう。正真正銘のエア・ホステスを犠牲にもってくる、これが市長の腕ですよ。まあ記者なら記者らしく、だまって見てごらんなさい」

二人のホステスは手錠のいましめをやっと解かれたが今度は真新しい白い細引で後手高手小手にたくくヒジを上げた恰好で縄をかけられた。

明るい照明の下でホステスは端正な鼻すじの通った顔をやや上気させヒシヒシと身体をしめつける縄をおとなしく受けていた。

胸を縛った縄が首にかかって本格的な首縄の姿体となったが、黒マスクの会員は手慣れた縄さばきをみせてあまった細引をマエへまわし、タイトスカートの下から股間をとおして容赦なくひきしばった。

スカートの下からすんなり伸びていたストッキングに包まれたホステスの脚が太股の方まで、あらわれてシェミーズの白いレースがはなやかにまくれ上ったが会員はなおも追求の手をやめず、ストッキングを吊っているガ

ターの上にも縄をまわして足首の方へ縛りあげていった。

薄い肌色のストッキングに縄が食い込むとよじれた靴下が見るまに伝線してゆくのが私の眼にもよくわかった。

二人のホステスはときどき床に蹴たおされて小さな悲鳴をあげながら、ひしひしと縛り上げられて両脚も動かさなくなり観念したように眼をとじた。

市長はやがて私の傍から立ち上ってホステスの方へ近づいてゆくと客室内の天井を両手で押した。

すると非常用の酸素マスクが二つ長いビニール管といっしょに床に落ちてきた。

市長は二人のホステスの顔を上にむけさせもののしい酸素マスクをきわめて事務的にはめていった。

後手に縛られ股間に縄を通されているホステスたちはよちよち歩きで立ち上り、火星人のような姿体を会員の前にさらして機内をひきまわされた。

「どうです。ムンライトに乗せたオリオンへの捧げものは？」

「オリオン？」

「そうです。この会のシンボルはオリオン星

座です。ギリシアの神話にもある宇宙をつかさどる神々への捧げもの、それが今夜のエア・ホステスなのです」

機外をのぞくと、いつの間にか雨雲の中を通りぬけたらしく雨滴のついた窓ガラスのむこうに淡い星影が静かにまたたいていた。

機はやがて下降姿勢をとるらしく、エンジンの音が弱まってきたが、二人のホステスは異様な酸素マスクをつけさせられたまま、床の上どころがされていた。

3

飛行機は大きく半円をえがいて旋回をはじめたらしくキャビンが左にかたむいて小さな振動がつたわってきた。

しかし伊丹空港管制塔からの着陸許可がでないらしく、そのまま空港上空で待機^{スタンバイ}をつづけるらしい。

「まだ時間があるようですね。それじゃ最後の仕上げをしますか」

市長は後手に縛られたままフロアに倒れている二人のホステスに近づいて行き拍車のついた乗馬靴でいきなり頭を踏みつけた。

乗務前にきれいにセットしたらしい髪が市長の黒い靴底でぐらぐらゆれ、ホステスは肌

色のシームレスにつつまれた脚をばたつかせてかすかな悲鳴を上げた。

「ワゴンを用意して下さい」

市長の命令で後部のコントロールームに折りたたんであったワゴンが組み立てられた。

ジェット機のファストクラスで洋酒類やオードブルなどをサービスするときに使用する手押し車である。通常はパーサーが通路を押してあるき、乗客の好みをきいてキャビアやフォークグラ（いずれもオードブルの一種）などを適宜わけてゆくのであるが今夜に限ってワゴンの上に載せられるのは二人のピチピチしたエア・ホステスなのである。

「さあ早く立つんだ」

会員の一人に髪をつかまれ、よろけながら立ち上ったホステスは、市長の靴に踏みにじられた鉄のあとが白い頬にかすかに残っていた。ヘヤーセットもすっかり乱れ、ふだんは一分のスキもないほどきちんとしている彼女たちだけに襟あしのほつれ毛が、いっそうなまめかしさを増していた。

二人のホステスは制服を脱がされるため、ひとまず股間縛りの縄を解かれた。縄がよじれて素肌にくいこんでいた部分などは、赤い縄目がくっきりついて痛みがとれないらしく

二人のホステスは、すっかり縄を外ずされてからもしばらくの間床の上にヒザをついたきり立ち上れなかった。

自慢の制服も手きびしい縛りにあってすっかりシワが寄り、タイトスカートもまくれ上って太股もあらわな恰好だったが、身体中を責められてひと汗かいたばかりのホステスたちは乱れた裾を直す気力も失ったようはハイヒールも投げだし、床の上に両手をついたきり動かなかった。

「ワゴンは一台しかないから、一人を縛りつけ、もう一人は四つんばいに這わせてワゴンを引かせよう」

ひとりの会員の提案がすぐ全員に受け入れられ、制服を脱がされてパンティ一枚の姿になったホステスは後部座席の方へ歩かされていった。

「ワゴンに乗せてただ機内をひきまわすだけでは面白くない。ホステスたちの罪状を書いた札を立てよう」

ワゴンに縛りつけられながら名前と年令をきかれたホステスは蚊のなくような細い声で「水品涼子、21才」「浅見千枝子、23才」と答えた。

二人とも国際線客室乗務員の資格を持って

おり、浅見千枝子の方が二期ほど先輩にあたるらしいが身体はどちらも乳房のよく張ったきれいな肌をしていた。

まず水品涼子が三段になったワゴンのいちばん上の台に仰向けの姿勢で大の字に縛りつけられた。

ワゴンといってもあまり大きなものではないから両脚を少し開きかげんにくくりつけられると、どうしても腰をややつき出した不安定な恰好になる。

両手は頭の上に高く上げて固定され、水品涼子の身体全体としてはコの字型になった。

何の抵抗も許されなくなった二つの乳房がほんのり赤味を帯びて天井からの明るい光を受け、ときおりかすかにふるえながらこれからはじまる責めを待っているようであった。

浅見千枝子の方は無理やり四つん這いにさせられ、細引をくつわのようにルージュの唇に噛まされて腰を縛った縄をワゴンのアームに連結された。即席のワゴン用小馬^{ポニー}が出来上ったわけである。

ホステスの罪状を書くボール紙がワゴンの上につけられた。

会員が一人づつマジックインクで書きつけてゆく。

「最近のエア・ホステスは少しも笑顔をみせない。実にお高くとまっている」

「コーヒーを頼むとコーラを持ってくる。乗客をバカにしている」

「誠実さがぜんぜん感じられぬ。もっとあたたかな気持で乗客にサービスせよ」

このようなさまざまな書体で書かれた文字でホステスの罪状札はたちまち黒くうまっていった。

「ホステスになって男性にちやほやされるの

でいい気になっている。恥を知りなさい」これは特別参加の女性会員が書いたものらしい。

「それではホステスのお引きまわしをはじめましょう。わがオリオンの神々に捧げる二人のホステスに祝福のシャンパンを……」

黒いマスクをした会員がいきおいよくシャンパンをぬいた。あふれ落ちるアワが水晶涼子の大きく盛り上った乳房をぬらし、腰の方へ流れてゆく。

それにならって会員はつぎつぎと用意のシ

新発足 懸賞入告白、手記、体験▽原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文獻味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

手記、数短な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売と同時に、賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「懸賞」とお書き下さい。

シャンパンを景気よくぬきはじめた。

会員に高く上げたパンティのお尻をけられた浅見千枝子は、ワゴンをひいてそろそろと這い出した。

せまい通路を首につけられた鈴を鳴らしながらあわれな小馬^{ポニー}は重いワゴンを引っぱって何度も往復しなければならなかった。

「もっと早く歩け」

「ハイ」

浅見千枝子の背中に乗馬用の皮ムチが振りおろされた。ピチッ、ピチッとたてつづけに赤いムチあとが白い肌を縦横にはしった。

飛行機はいぜんとして一定の高度を保ったまま大阪の上空を飛びつづけていた。

色とりどりのネオンサインが自動車のヘッドライトにまじって夜の中に沈んでいる。

燃料をくうジェット機の優先発着で、プロペラ機の着陸はどうしても待機が多いものらしい。

しかし私はこの夜のすばらしい犠牲^{いけにえ}にすっかり魅了され、このままたまでも飛行機が飛びつづけることを秘かに願わずにはいられなかった。

シャンパンの洗礼をあげた水晶涼子のすんなり伸びた脚が私の目の前にある。私は自分の身体の中からわき上げてくるかすかな疼きにも似た衝動を感じ、傍のムチを手にとると力いっぱい打ちおろしていた。

奇譚三十九夜物語

△大団円—第三十九夜△

辻村隆

夜中じゅう浪音を耳にし乍らの、暑い寝苦しい一夜は明けて、朝

食までのひととき、三十九夜のメンメン、それにゲストの箕田、塚本、四馬、新宮、水野、瀬沼、長田、糸島、三隅の各氏、ホステスのA子、B子の一行は、雑賀崎から、奥和歌ヘルスセンターの辺りへと、それぞれ散策を試るも、記念撮影など行なっておりまして。

早くも太陽はガラガラと、暑い灼熱を地上にふりそそぎ、蟬の声はかしましく、緑蔭を縫う様にして、人々は三々伍々戻ってまいります。朝食にビールが出され、数台の扇風機が風を送り、やっと人々が雰囲気にとけ込んだ頃、昨夜に引続き、三十九夜の最後の語り手たるべきドクター氏が、コップを置いて、やおら改まりますと、口を切ったのです。

「弱い人間は、何らかの宗教に依存するものですが、一旦依存した

となると仲々それから脱けきれないものです。

私はこのお話を永年あたためていたのですが、三十九夜物語も、いよいよ私をもって最後となります。話は相当長くなるかも知れませんが、時間の許す限り続けて見たいと思います。このお話にモデルはありません。唯、新興宗教のうちでも、大宗教に発展するものにはこうしたことはありませんが、田舎の都市や一集落だけを対象とした、加治祈禱を行とする連中のうちには、これに類似したことは、なきにしもあらずです。謂わば、それらの教祖的存在の人々は医学的にいって、一種のパラノイア（偏執狂）といえ、いえなくもない輩がおるものです。では前置きはこれくらいにして……」

一同の視線を浴びてドクター氏は話し始めました。これが最後の物語という感懷が、何とはなしに居並ぶ人々の顔にただよいます。

第九十三話 穴に憑かれた男

法医学の権威、羽島博士の許に村田卓雄が訪れてきて、彼の妻奈都子の精神状態について、次の様な相談を受けたのは、八月初旬の暑い日が続く黄昏時の事でした。

× × ×

仲人を介しての見合結婚でしたが、彼女の心優しい素直な性質と、人並以上の美貌と、従順な人柄は、彼もすっかり奈都子を愛する様になり、謂わば平凡乍らも愉しい新婚家庭を営んでいたのです。

結婚して一年許りは夢の様に経ったのですが、その家庭に不幸が訪れたのは、今年の春の事でした。

京都の円山公園へ花見に行った帰り途、奈都子は、突然何の前触れもなく肛門に激しい痛みを覚えたのです。医師に早速診て貰った処、冷えからくる急性の痔疾との軽い診断で、坐薬を挿入して貰ったのですが、その夜から肛門の周囲は急激に腫張し、爛れ出し、排便に、死ぬ様な劇痛を伴う様になって、しかも出血すら見られる様になりました。

肛門科の医師も、彼女の症状には首をかしげ、手術する様にと奨めました。危ふや言葉に、手術する気にはなれず、とも角家庭療法や、坐薬、軟膏薬で手を尽して見ましたが、奈都子のそれは酷くなる一方でした。

排泄時の死に勝る苦痛を考える時、奈都子は食事も喉が通らず、追々と周囲は潰瘍になって、しかも爛れに爛れ、僅かな排便もバケツに薬を解いた微温湯に臀部を浸して、長時間を費やし、辛うじて湯の中に排泄するという厄介なことになったのです。

隣りの主婦が、立興会と称する浅間行者の祈禱を受ける様奨めた時、彼女は薬にも縋る気持で祈禱を受ける気になったのも無理からぬ事でした。

タクシーに身を横たえて、彼女の住むV住宅地から数キロ離れたR山麓の、立興会へ出掛けた彼女は、行者の使う巫女のお告げによって奈都子の建売りの家の鬼門に当たる個所に便所があり、それが障りをして肛門の患いを惹き起しているとの御託宜でした。

祈禱を絶対信頼すること、医師に一切かからぬという約束で、加治祈禱をして貰い、いわれた通りその便所を埋めて、新たな別の個所に便所を移し、毎日御祈禱を受けに通った処、不思議にも彼女のあの非道い潰瘍と苦痛が、薄紙を剥ぐように快方に向い、爛れは乾き、排便も嘘の様にラクに出来る様になったのです。

一旦、この様なあらたかな験しを見せられた奈都子は、行者の素晴らしい靈験にすっかり魅せられてしまい、暇さえあれば立興会に入り浸るようになりました。時にはお籠りと称して帰らぬ夜も屢々でした。

その頃から彼女は精神的にも非常な変化を示し、焦々と怒りっぽく落着かなくなり、夫を拒絶する様にさえなってきました。立興会で過す日の方が多くなり、偶に家に戻ってきてきても錯乱を起し、幻覚が生じるのか、とりとめもなくなくなり、うわ言のように、数匹の蝮蛇が自分を苦しめている——、そのために蝮蛇の出て行く穴を身体にあけねばならないなどと、とりとめもない事を、うるんだ眼で口走ったりする様になったのでした。

感情は著るしく鈍麻になり、独り言をいったり空返事をしたり、事々に彼に逆らったりして、確かに幻視幻聴の兆候が現われていた

のです。

大きい耳輪を嵌めたのもその頃だし、彼と顔が出合うとパツと鼻や唇に両手をあてて、彼の視線を避け、食事すら一緒にとらなくなつたのです。

この妻の変貌が果して祈禱や行によるものか——、迷信を過大評価し、過信した結果の精神の異常からきたものなのか——

村田卓雄は、妻のこの様な状態に対して羽島博士の診断を乞ひにきたのでした。

「先生——妻は立興会で誓つたのだと申して、診察を極度に嫌がりますが、インシュリンや電撃療法で、この状態を脱却し得る可能性はあるものでしょうか——治るようでしたら、首に縄をつけてでも引っ張ってくるのですが……」

彼は妻の身を案じ顔で訊ねました。

「迷信に凝り固まったものに、時折見受けられる症状で、宗教性妄想痴呆症の一種と思われます。とも角、奥さんにお目にかかつてからの事ですな——」

博士はそう応えざるを得なかつたのです。

× × ×

村田卓雄はその後パツタリと訪れてきませんでした。忘れるともなく忘れていた二カ月位経った頃、羽島博士の許に、可成り分厚い封書が届きました。裏書は唯、N子とのみ——。

封を切ると、便箋にビッシリと細かく書きこまれた村田奈都子の手記に、博士は急に興味を覚えて、深々とソファに体を埋め、煙草をくゆらし乍ら読み始めたのです。

（村田奈都子の手記——）

『先生——お願いでございます。何卒最後までお読み下さい。それで私が果して夫が申します様に、精神異常者であるかどうか、御判断下さいませ——。（これだけが便箋の欄外に新たに書き加えられてあつた）

.....

私は今、立興会の広い板敷の間で唯独り円座に坐っております。天地万物、総べて寝鎮まつたのか、死に絶えたように物音ひとつしないR山の麓——。

時間はもう午前二時か三時——。

微かに廊下を踏む足音……行者の冥主様みょうしやうでありましょうか——。いえ、吹き出した風も針のように神経の尖つた私には足音にきこえたのでしよう。

いよいよ今夜こそ、私は肉体の一部に、体内に巢喰う蝮蛇の出ずる穴を穿たれるときなのでございます。

期待と昂奮、恐怖と歓喜、戦慄と法悦が私の五体を駆け巡っているのです。

研ぎすまされた脳裡に、私は今夜に到るまでの出来事が、歴々と浮んでくるのです。

私の肛門にのさばった、あの忌わしい潰瘍が忽ち治り、筆舌に尽せぬ疼痛が薄紙をはぐ様に癒っていった時、私は如何ばかり驚喜した事でしよう。あの刹那から、私は冥主様の強い神通力を、絶対のもの信じ込んでしまったのです。

もうバケツにお湯を浸して、お臀を温める必要もなく、死ぬような恥かしさや痛みも訴える必要もなくなりました。

すべては冥主様のお蔭と、夫が強いて止めぬのをいいことに、そ

れからは暇さえあれば訪れまして、冥主様の有難い御祈禱や、巫女の千磨様の神がかりの声を、天の啓示と拝聴しまして、千天に降る慈雨のように、冥主様の偉大さに心酔して行つたのでございます。

冥主様を信奉する人々も一日中入れ替り立ち替りこられますが、広い立興会のお屋敷は冥主様と千磨様とお二人きりのお暮しでした。色々の雑用や、対外的なことは、当番に當つた信者の人々が殆んどなさいます。

冥主様が布教や人助けにお出掛けになったり、遠方の信者の家を訪れたりなされた日は別ですが、在宅の時はいつも千磨様と起居を共にしておられました。巫女の方、冥主様の何に當るかという事も私は日ならずして知り得ました。

信者のおこもりや、夜を徹しての御祈禱、御呪文を唱えられる日は、巫女も傍らにはべりますが、私がおこもりを致しました時、千磨様を引連れられて、冥主様が祈禱所を出られたあと、静かな空気をさいて、やがてお二人の居室の方から激しい鞭音が洩れきこえ、苦しげな呻き声が私の耳に流れてきたことがございます。信者の人々の噂から、千磨様が、厳しい戒律の下に、苦行、荒行を行なわせられておられることも、段々と知るようになりました。

私が祈禱所に参籠するようになりましてから、私一人の時には日ならずして冥主様は、祭壇の横に控えておられる千磨巫女様を、まるで犬でも追っ払うように去れと命じられることがございます。そんな時、悲しげに首を垂れ、しおしおと出て行かれる千磨様のうしろ姿に、私は女の哀れさを犇々と感じるのでございますが、矢張り冥主様と二人きりになって、御祈禱を受ける歓びの方がまさっております。

白絹の衣に緋の袴の千磨様の姿が消えますと、冥主様はお手ずから、祭壇中央の太い赤ローソクに火を点じられ、モンゴールからお持帰りになった、「ドグマの獣神像」に向われて、ひとしきり拭邪の呪文を唱えられるのです。呪文が終ると、私は祭壇前の紅殻塗りの加護台に俯伏せに寝かせられます。私が着物の裾をたくし上げますと、冥主様は剥き出しになった私の双丘を力強く握み上げ、撫でさすられ、御呪文を唱えられるのです。冥主様の前へ出ると、日頃の私の羞恥心はすっかり消えて、唯、もうなすが尽になっておりました。お潔めと称される祭壇のおローソクを潰瘍部に立てられ、冥主様は一心に祈られます。時と共にジリジリと蠟芯が減って行き、潰瘍部の周囲はとけた蠟があつたまっけて行きますが、熱さを感じるとつれて、私の法悦は強増し、忌わしい患部の膿み爛れは有難いお潔めによりまして、雲散霧消して行く思いでございました。

この有難い秘法を他人に口外した時、祈りは忽ち破られると冥主様は申され、呉々も施術の口外を禁じられておりましたので、私は身を案じてくれる優しい夫にすらも、この拭邪の行の事だけは話さずにおりました。

夫は日増しに快方に向う私を、我が事のように喜んでくれました。

この行の最後の夜、双丘に赤々とゆらぐ聖なるおローソクが、既に残り短かくなった頃、静かに祈禱所の扉が開き、千磨様の冷たい眼が私をじっと見つめておられました。

「くるなッ、去れッ——」

冥主様は激しく一喝され、千磨様は慌てて、緋の袴を蹴がえして立去れましたが、私にとっても、冥主様以外の者に、この様なあ

られもない姿は見られ
たくありませんでし
た。その時の私の気持
は冥主様のお言付けな
ら、どんな羞かしいこ
とでも、仰せでも嬉々
として従うに違いない
程、心酔しきっており
ました。冥主様がお側
におられるだけで、私
は心の安らかさと、狂
わしい様な慕わしさを
覚えてくるのでした。

蠟芯が私の皮膚に迫
っておりましたが、い
つになく、冥主様はロ
ーソクをおとりよけに
ならず、じっと火を見
つめておられました。
既に蠟涙は臀丘を伝っ
てポトポトと垂れ、あ
たりに滴たり、ドロドロの蠟の熱液の中に、辛ろうじて芯が燃え尽
す最後の炎を赤々とあげておりました。

熱さをこらえようと、私は加護台に必死に噛りつき、身を震わせ
ましたが、呻きはともすれば口から洩れました。



焼けつく痛みを肌にしか
に感じ、思わず悲鳴を挙げ
た時、蠟芯は傾むいて私の
皮膚の上で余燼をくすばら
せていました。

灼熱の苦痛が私の意識を
朦朧とさせました。

私の眼前近く冥主様の顔
がクローズアップされ、そ
れがいつの間にか夫の顔に
変わっていました。私は軽々
と夫に抱かれ、れんげ畑の
紫の毛せんを敷きつめた花
の丘に二人で子供の様に戯
むれていました。夫の手に
はいつの間にか、あの忌わ
しい潰瘍部の膿み爛れた腫
物が握られていて、れんげ
草をふみしだいて逃げ廻る
私に、押しつけようとして
何処までも何処までも追っ
かけてくるのでした。千里も二千里も逃げたのに、遂に私は夫に捕
まって押し倒され、その腫物を再びベタリと押しつけられました。
治った筈の個所が忽ち飛び上るように痛く、私はさめざめと涙を
流しました。涙はれんげ畑に細く小川をつくって流れ始めました。

貴方の様な非道い人は大嫌い——。私は助けて戴いた冥主様の処へ逃げてゆくわ……と、喘ぎ喘ぎ叫んでいました。

行け—— 勝手に行けと、夫は容赦もなく、私の最も痛む個所を執拗に抉るのです。

夫は私の涙で出来た小川の水を掬い上げると、私に口移しにのませました。涙はホロ苦い味になって、私は苦しくむせ、冥主様冥主様と無我夢中で叫んで、俄破々と、それを吐き出しておりました。

私の唇から洩れる涙の水が、口辺を伝う冷たさに、私の意識は蘇がえりました。双丘の蠟火は既に消えて、蠟骸が臀部を一面に冷えたまま埋めておりました。

治った筈の潰瘍部がズキズキと激しく痛んでおりました。夢と現実が錯そうし、攪乱した脳裡に、私はこの疼痛の原因を探ろうとしました。冥主様の白絹の裾が、日頃に似ず乱れているのに私は気づき、妖しい胸騒ぎに胸をときめかせました。いつになく冥主様は黒づんだ頬を紅潮させ、黙々と私の臀部の蠟骸をお剥ぎとりになっておられました。何事もなかった様に、私の着物の裾を元通りに足許まで下ろされましたが、フト声を荒げて

「蝮蛇に魅入られましたぞ——。恐ろしいことじゃ……」

冥主様の重苦しいお声に、

「えッ」と私は驚愕して、忽ちぶるぶると震え出しました。

「冥主様——、私は一体どうすればよろしいのでございましょう。何卒お救い下されませ」

「そなたは拭邪の行の聖なる最後に、不覚にも痴戯を夢見られた。怒られたドグマの神は、神体を蝮蛇と化せられてローソクの消滅の刹那、そなたの潰瘍部より体内に這いこんだのじゃ。放っておけば

毒が廻る——ああ、おそろしい事じゃ」

私は唇をわななかせ、冥主様の足許にひれ伏して、助けて下さいと哀願しました。

「そなたの体に、蝮蛇の出ずる穴を穿つことじゃ。穴を穿つことは何人たりとも他言すべからず——と共に、夫とは夫婦でなくなることにじゃ……出来るか——」

「ハイ、出来ます。でももし、お言付けに背きますと、どのような恐ろしいことになるのでございましょうか——」

「体が腐る——。五体の穴から、ドグマ像の形をした潰瘍が生じる……狂って死ぬ……」

私はその恐ろしさに、五体が震え

「ハ、ハイ。お言付けに背きませぬ。どうぞお救い下さいませ——」と冥主様に縋りつきました。

「よし、では今後、わしの言い付けに絶対背いてはならぬ。如何なる苦行荒行においても……分ったな？、よし、では三日後の深更、蝮蛇の出ずる穴をあけてやるから、きつと参籠せい——」

私は唯々うなづいていました。いつしか冥主様のお言葉が、威圧的な命令調に変わっているのすら私には反ってそれが神示ととれ、神々しく有難く、涙さえにじませ乍ら、ひたすら冥主様の御慈悲に縋る気持になり変っていたのでした。

私は、あの優しき夫と、夫婦でなくなることを、どれ程悲しく思ったことでしょうか。

でも、この戒律を破れば、恐ろしい破滅がくるのだと、苦しい気持を我慢して、審かる夫にわざと腹を立てて見せ、夫がいたわりの言葉を投げかければ、尚更に心苦しく反動的にわざと荒々しく、粗

野に振舞いました。

よそ目には、私のこのうって変った素振りが以前の私に較べて、まるでチグハグな人が変わったとしか見えなかったに違いないと思います。でも私は只管に戒律をおそれ、再びあの忌わしい、肛門腫瘍の二の舞は踏みたくありませんでした。

今の私にとって、冥主様は至上のものでございます。病める小羊を救われた方のお言い付けなら、例え裸になれと申されても、私はすぐ裸になりましょうし、四ッ這いではえと仰せられたなら、恥かしい恰好でひざまずいて這う事でしょう。私は冥主様のどんな仰せに対してでも、背けなくなっていたのです。

……………

廊下を踏む静かな足音に、私の瞑想は現実に取り戻されました。

冥主様が千磨様を引連れて現われました。

円座を滑って、ひれ伏した私の前に立ちはだかった冥主様は、厳そかに拭邪のお祓いをなさいました。

「お脱ぎなされませ——」

千磨様の冷めたい声に、私は反射的に身につけたものを解き出しておりました。

「蝮蛇の呪いから放してやるぞ——千磨、早速支度にとりかかれ……」

命ぜられた千磨様は、蒼白い顔をうなづかせて、祈禱所の祭壇の裏側の大きな押入れを開くと、白木造りの四角い机様のものを中央へ運んでこられ、祭壇の前の所定の位置に据えられました。机の真中が丁度頭が入る位の観音開きになっていて、首の大きさに半円ずつに割られていて、私は千磨様に誘導されて、机の下に跣み、観音

開きを頭で持上げると、首から上が机上に現われました。千磨様は差込みの蝶番で、左右の開きを固着されましたので、丁度梟首の様に、私の首だけが机上にのっていました。

千磨様は私の両脚を、前の机の脚に別々に結びつけられ、両手は後ろに開いて、後の机の左右に縛りつけて、非常に苦しい姿勢の俣身動きの出来ぬ様なされました。心なしか私を縛る手は邪慳に思われました。

冥主様は机上に、黒い皮ケースをとり出され、ピカピカ光ったメスや、数本の針のようなものをならべられて、

「唯今より蝮蛇をとり出すぞよ。そなたの両の耳朶に穿つ小孔が、蛇を追いつく穴となるのじゃ。千磨——鏡をおいてやれ……」と仰せられました。

最初に微細な針が、私の耳たぶを貫通しました。注射針を差し込まれた程の痛みでしたが、冥主様の針が、次々と太く変って行くにつれて、焼けつく様な痛みが全身に走りました。血をにじませた耳たぶに、冥主様は細いビニール紐を通されるのを私はこの眼で苦痛をこらえ乍ら、凝っと鏡に見入っておりました。穴だけあけておくとすぐ肉がもり上って穴を塞ぐのでしょうか、私の耳たぶは左右共、桃色のビニール紐が通っておりました。

穴あけの儀式を済ませて、机から解放された私は、穴の紐を抜いてはいけないという御命令に、やむなくズキズキする耳たぶを冷やし乍ら、板敷の間で朝を迎えました。

翌朝帰り際、千磨様は私の耳のビニール紐を耳たぶのところから切って、小さく耳穴に栓をなさいました。

夫になんと説明しようかと、散々なやんだ挙句、私は帰途、一入

大きい耳飾りを買求めて痛む耳にそれを嵌めてカムフラージュしました。夕刻帰ってきた夫は不審げに近寄ってきましたが、ソワソワし乍ら、耳を押えて逃げる様に茶の間を抜け出し、気分が悪いと偽って床にもぐりこんだのです。

参籠の度毎に、私の耳の穴は徐々に拡大されて行き、その穴にふさわしいものを栓にしてつめてこまれて帰りました。

耳穴の直径が三ミリにも達した時、私はいよいよ蝮蛇追出しの荒行をうけることになりました。

かねて千磨様からいわれました通り、その夜はすべてをぬいで素肌で祭壇にぬかずき、只管に冥主様のお出でを待っていたのです。

ひとしきりお祈りをすませた頃、冥主様は祭壇の裏のドグマ神の背後から音もなくお出ましになり、威厳をこめて、

「蝮蛇を追出す荒行を行なうが、辛抱出来るかどうか……」

「ハイ、冥主様の仰せなら、如何なることでも辛抱致します」

私は躊躇せず応えました。

「では始めよう。そこへ座りなさい……」

冥主様は、私を加護台に坐らせると、暫らく拭邪の袂と呪文を唱えられたのち、立上がられると、私の左右の耳たぶの穴に、紫絹の燃糸をそれぞれお通しになりました。

左耳の糸は左の苦行柱、右は懺悔柱の釘におかけになり、別にもう二本赤絹糸をとり出されると、親指をそれで固く縛られたのち、それぞれ左右の指を耳朵に密着させて、赤糸をも耳穴にお通しになりました。

顔を動かすと両耳が引きつれて痛み、耳穴につながれた親指のため手を下しもならず、私は必死にお祈りを口誦んで、一時も早く毒

蛇の追出しをなされる事を祈っていたのでした。

冥主様は口の中で御呪文をお唱えになり乍ら、こよりを太く太く巻いて編んだ拭邪のお鞭を手にならされて、発止と私の胸をお打ちになりました。皮肉を裂かれた様な激しい痛みには私は思わず、あっと声を挙げました。

「痛いのか——」

「はい、少し……」

「何のこれしき、辛抱出来ぬのか——」

「いえ、辛抱致します……」

「よし——」

冥主様は、更に激しく私の肩から、背、腰、胸、腹と打ちのめされ、私はどうにも我慢出来ず、ヒイヒイと声をあげて泣き叫ぶと、じっと私の苦悶を見下しておられた冥主様は、いきなりガラリとお鞭を床に投げ出され、剃刀で颯ッ颯ッと絹糸をお断ちになり、

「無駄じゃ、これ許りの辛抱が出来なくて、どうして蝮蛇が追い出せようぞ。もっと荒行に馴れぬと駄目じゃ。帰れ——」

と、語気激しくいわれ、必死に許しを乞う私をパッと足蹴になされて、ドグマ神の裏へお隠れになりました。

私がとりつく島もなく呆然としておりました時、千磨様が現われて、

「明夜、午前一時、再び行なうとの仰せです。今夜はお帰りなさい——」

とのお言付でした。明日こそは如何なる荒行にも歯を喰い縛り、絶対に堪えよう——私は深い覚悟をきめて、遅く家に戻りました。冥主様の面影をヒシと胸に抱きしめ、夫と離れ、独り三帖の玄関の

間で、僅かな眠りについたのでした。

私はそれこそ命限りの覚悟のもとに、冥主様の言語に絶する荒行に堪えておりました。

爪先き立ちの体は、苦行柱と懺悔柱の両環に左右の耳だけで吊られ、五体のどこをチョイと触られても飛び上りそうな痛みでした。

全身をお鞭で打擲され、やっとの思いで歯を喰いしばって、呻き声すらも洩らさず、この荒行に耐えてきたのですが、既に私の頭はもうろうとしておりました。冥主様が赤いもみの布を私の顔にかぶせられ、と同時に、全身に火のついた様な私の体は、荒々しく加護台上に投げ出されたのを、混沌とした脳裡にうっすらと覚えておりましたが、夢うつつ、幻に、鞭の生々しい痕がみみずと化して、体中をヌメヌメと這い廻り、私の必死の抵抗も空しく、みみずの群れは、によるにょろと私の鼻腔へと侵入し、払えど払えどみみずは殖える一方で、私はみみずで塞がった、詰った鼻を押えて、懸命に冥主様に救いを求めておりました。

ヒヤリとした意識を鼻に感じ、私は夢幻からハッと現実に引戻されました。途端に鼻にすうどい衝撃を覚え、もげそうに痛むのです。意識が私の眼を鼻にそそぎました時、私は呼吸もとまるかと思われ程の驚愕に撃たれました。激痛も道理、私の鼻下には、燦然と金色に輝やく一個の鼻輪が、鼻障子を穿孔して嵌められていたのです。

鼻孔を隔絶する軟骨の下が穿孔され、鼻をすすする度に、その個所が飛上るほどヒリつくのでした。

豆粒にも足りぬ小さな捻子で締められている黄金の環を、千磨様

は無表情に外され、穴が縮少して肉が盛り上らぬ様に、医薬品の小瓶のゴム栓を削ったようなものを、穿孔した穴に押しこまれ、鼻腔の両側より化膿どめの抗生物質の軟膏を塗布されました。

「私がよしというまで、その鼻栓を抜いてはならぬぞよ。では向後五日間、ゆっくり休養しなさい。蝮蛇はどうやらあらかた退散した模様じや。しかし、寸時も油断はなりませんぞ——、くれぐれも他言無用じや、いいか——」

私は優しい冥主様のお声をいただき、荒行に耐えぬいた、我が身自身のいとおしさに涙し乍ら、法悦にひたっておりました。

帰宅した私を出迎えに夫は、幸いにも鼻栓には気付きませんでした。が、私はともすれば無意識に鼻の辺りに手をあてがい、その個所を隠蔽する様になりました。

半病人の様になり、鼻声になって音声すら変った私を、流石に夫は怪しんだ様です。

優しく夫は、私に医師に見て貰う事をすすめました。が、それは私の秘密を曝すことになりますので強く拒絶しました。敢えて夫はすすめませんでした。が、その直後、私に内緒で、精神医学の権威の羽島博士の許へ、単独に訪れた様子でした。

私はどの様に奨められても、行きたくありませんでした。頑強に拒否するつもりでした。いいえ、拒否せざるを得なかったのです。

氣遣う夫の気持は痛いほどに分るのですが、今の私にとっては、冥主様こそ至上最高のお方なのです。私が羽島博士を訪れることによって、穿孔された穴の説明に困った時、迷惑されるのは冥主様でしょう。蝮蛇追出しのこの荒行を満足してうけている私の心境は、誰にも分ってもらえないと思うのです。

苦しい心の斗いの五日間でした。鼻をかむのにも細心の注意を払い乍ら、私はとうとう鼻栓を無事いれ通したのです。

五日間の経過を待ちかねて、私はスルスルと吸いよせられる様に立興会を訪れました。

「よしよし約束通り参ったな——。毒蛇追出しの拭邪の行を続けるでしょう。邪心、俗心、羞恥心、良心——一切の心を取り払って無になれ、よいか——。では身に纏うもの一切をとり去って、加護台の前に立て——」

私は待ち兼ねた様に、何のためらいもなくすべてを脱ぎ捨てました。冥主様はこよりのお鞭をおとり上げになると、二、三度空振りなされてから、

「すべての心を取り去ったそなたは、唯今より畜生になり切るのだ。その低い卑しい姿から、毒蛇を追出す真の苦行が生れてくる。わかったな——。ではこれよりは私の申し渡す言葉を復誦せよ——いいか……」

冥主様は眼を閉じられ、重々しく申されました。

「奈都は唯今より牛になり果て、鼻輪を嵌めて苦役につき、蹴られ、鞭打たれ、こきつかわれて苦行に服します……」

「奈都は唯今より……」

「それから……。早くいわぬか——」

私は涙ぐましい様な気持で、吃り、口ごもりつつ、どうにか冥主様の仰有られた通り復誦しました。

私は四ッ這いになると、紅白の絹糸のついた黄金の鼻輪を嵌められ、お鞭で臀部をパチリパチリ叩かれ乍ら、

「奈都牛よ、歩め——」

と仰せられる俚に、冥主様の引ッ張られる紐に随がって、ヨタヨタと祭壇を一巡し、板敷の祈禱場を出て、長い廊下を亘り、離れを堂々巡りして、庭園に降りる沓脱石から、樹立深い庭内の芝生へと這って行き、尚も庭園をぐるぐると引曳り廻されました。

夏とはいえ、山裾の夜は肌寒く、全身の毛穴は総毛立って鳥肌になり、掌や膝には血がにじみ、手足は疲れ切っていました。

冥主様の鞭は絶間なく飛び交い、のろくなると、鼻が裂けん許りに紐を引ッ張られました。私の双丘は腫れ上って肌すら裂けていたに違いありません。痛くともそこを撫でさすることは許されず、鞭の激しさに思わず呻き声を立てますと、冥主様は忽ち形相を変えられて、叱声を飛ばされます。

「この怠け牛奴が、人間の声を出す牛がどこにあるか——。牛は牛らしく痛ければモーッと鳴け、喚めけ——啼けッ、啼かぬか……」とお責めになられ、私に幾度となく、牛の啼声をお強いになられました。

私の体は冷えて、既に先刻から生理的な要求に、ウズウズと我慢に我慢を重ねておりましたが、もう辛抱しきれなくなりましたので、そのことを訴えました。

「牛だ——。その俚そこへせい——そなた未だ羞恥心が残っておるのか——」

と激しくお詰寄りになって、お臀を火の出るほどに蹴上げられました。私は横ざまに倒れ、よろよろと元の姿勢に返ると、申されました通り、今は見栄も体裁もなく、その場で用をすませたのです。

「蝮蛇が出るぞ、出るぞよ——今だ……」

突然冥主様は叫ばれて、狂ったように鼻輪の紐を引ッ張られて、

繁茂する山吹き根元に紐先をしっかり結びつけられると、四ッ這い姿の私に威猛高に仰有いました。

「いいか、呻くな、声を出すな。苦しかったらモーツと吠えるのだ。分ったな——」

「ハイ——」

「莫迦ッ、返事はモーツだッ」

「モーツ……」

「よしッ、うつぞ……それッ。出るわ出るわ……一匹……二匹……三匹……」

冥主様は渾身の力をふるわれて、力任せに私の臀部に鞭を打ち下され、五体が粉々に砕けちらん許りに、それは強烈そのものでした。私はモーツ、モーツ、モーツ、モーツと絶叫の牛声を立てて、哭き乍ら、三十五、六四位まで数えられた頃、ヘタヘタと気が遠くなつて、その場に這いつくばってしまいました。耳の遠くの方で、「終った——」と、冥主様の呟やかれる微かな声を、痺れた脳裡の奥底でききとり乍ら、私は昏々と、漆黒の暗冥へ陥ち込んでいったようです。

……………

二日間、私は奥の離れの一室で寝かされておりました。無惨に引裂かれた臀部の鞭傷は、千磨様の塗薬や湿布の介抱で、大分痛みが薄らいでいました。鼻輪は除去されて、あとに以前より少し大きい目のゴム栓がはめられてありました。

ふすまが開いて、冥主様が優しい笑顔で入ってこられました。

「どうじや、痛みは去ったか？。そなたの体に巣喰う毒蛇はすべて払い去ってやったぞ。潔められたそなたの体は、巫女としてふさわ

しい。どうじや、わずらわしき俗世界をすべて離脱して、巫女にならぬか——」

私はわっと感泣しておりました。唯、泣くのみで言葉は声にならず、僅かにうなづくのみでした。私は巫女の座を拒むどころか、今日までどれほど羨望したことか——。冥主様のお言葉を、如何に望外の歓びに感じたことか——巫女になれば、四六時中冥主様と起居を共に出来るのです。

この刹那、私の脳中には、夫のことも、親兄妹のことも、世間体も、すべては埒外でした。只管に私は冥主様を求め、熱愛している事を知ったのです。

荒行を強いられ、激しい鞭が我が身をさいなめばさいなむ程、私はそれに比例して冥主様を愛するようになっていたのです。

冥主様の、五十六才とも思われぬあの激しい活力と精力、それに威圧する神通力——。

それらの総てが渴仰的でした。荒行も苦行も、冥主様のお情を戴ける身になれたとすれば、その辛苦も微々たる些事に過ぎぬように思われました。今や私の心境は、夫のことなど、広い宇宙の中のけし粒にも足りぬ存在に過ぎません。それ程に私は、全身全霊を冥主様に捧げつくし、魅入られていたのです。

巫女となって、冥主様のお側に仕えるとき、その責苦、艱難は、今までとは比較にもならぬくらい強烈、凄惨を極めるものである事を、私は夙くより知っておりました。

それは恐らく、私の今までの苦業など、ものの数にも入らぬ、提灯と釣鐘ほどの違いのある事でしよう。

いつか何気なく垣間みた冥主様のお部屋で、千磨様が、両手脚を

背でひとつに縛られて、高々と吊り下げられ、舌端にあけられた穴に、一キロもあるうかと思われる錘を針金に通してぶら下げられ、舌が伸びきって、舌根で息をつまらせて喘いでいる千磨様のその真下に、寝具に大の字に仰向きになられた冥主様は、カッと眼を見開かれて、苦行の限界を凝っと見上げられていたのを、私は息をつめ体を震わせて見つめていた事もありました。

又、いつか祭壇の前で、左右の苦行柱、懺悔柱の、一番上の鉄環に、千磨様の脚を、股が裂けそうなくらいに、ぎりぎり引上げられて、逆さにお吊りになされ、ローソクを数本お持ちになって、全身に蠟涙を浴びせかけておられました。うっかり私が這入って、激しくお叱りを蒙ったこともありましたが。

巫女の役目が、並大抵のものでないことを知り過ぎる程知っていたら、それを拒まなかったのは、私は冥主様のためなら、たとえこの一命を捧げてでも、決して悔ゆることのない思いに、思いつめていたからです。

いかに水火の苦行、印度ダッタンの荒行をなさろうとも、耐え切るだけの必死の覚悟はしておりました。

冥主様の巫女に求められる艱難や辛苦の激しさは、未だ未だこれどころではございません。先程申し上げた千磨様の苦行などほんの一部で、私の知らない筆舌に尽しがたい責苦は放挙にいとまがない位でございました。

「巫女の試練を今日より始める。よいか——」

冥主様から申し渡された時、私はいよいよ覚悟をきめねばなりません。私は型通り冥主様の膝下に伏せ、お祈りを唱え乍ら、巫女就任の略儀を受けました。

「今日の布教に奈都は私に随行せい——千磨はここに残るのじや」千磨様は恨めし気に私を見ました。ツカツカと冥主様は千磨様にお近寄りになると、髪を驚擱みにして引寄せられ、私に千磨様を縛る様い付けられました。

私は冥主様のお言葉通り、千磨様を後ろ手に強く縛り、その縄を首に廻して、手が下れば首が締まる様に仕掛けた上、更に犇々と縄を巻きつけていきました。

冥主様は千磨様の白蛇を追い出した数多の穴のうち、唇に上下に穿たれた双つの小穴に、細い針金を通して唇を縫い合され、針金の先を鼻穴に通されてそこで振じられ、苦行柱の環に繋がれました。

私達が布教を済ませて、数時間後に戻ってまいりました時、千磨様は真蒼な顔に冷汗をにじませ、鼻穴にうっすら血をにじませて、ぐったりと苦行柱に凭れかかっておられました。

冥主様は普段の顔色の尽で、千磨様をお放ちになると、私を振返られ、

「奈都の番だ——いいか……」

と仰いました。いよいよ恐ろしい苦行が私を襲いそうです。無言でうなずきますと、冥主様は加護台の上に、ゴツゴツした丸太棒を数本お並べになり、私の両手を前縛りになさって、そこへ俯伏せに寝よと仰せられました。私の伏した背に、冥主様は白木の板をのせられて、それにドックとお坐りになり、体を前後左右に振り動かされました。メリメリと私の五体の骨という骨が、音を立ててきしむ激痛に、私は必死に唇をかんで呻きを耐えました。圧迫された体は、心臓も止り、五臓もはみ出すかと思われる許りの苦しさでした。

「苦しいか、どうだ苦しいだろう……。この苦行はよすか——」

「よ、よさない……」

千磨様の仰ぎ見る手前、私は喘ぎ喘ぎ頑張りました。

「この尻続けると、骨が折れるぞ……」

「お、おれても構わない……つ、づ、け、て……」

「止めておけ、死ぬぞ——死んでもいいか——」

「……………」

私はもう応える気力もなく、唯、首を横に振っていました。冥主様は更にゆさぶり続け、私の骨は今にも砕け散る許りに丸太棒の上でメリメリときしんでいました。

白木を外して、加護台から降り立たれた冥主様は、立つ事すら出来ず、えんえんと喘ぐ私を引曳り降され、千磨様と私と並べて、それぞれの鼻穴を針金で連結し、私達二人を後手に縛って、祈禱場を出て行かれました。

鼻つき合せた私達は、まるで死んだ様にみじろぎもせず、冥主様のこられるのをひたすらに待ち望んでいたのです。

翌々日のことです。千磨様に再び苛酷な責苦が待ち構えていました。

私を加護台のかたわらにはべらすと、暫らく呪文を唱えられておられました、やがて千磨様の髪を解く様申し渡されました。

私の髪は未だそう長くはございませんが、千磨様は太古式のみづらと申すのでしょうか、真中から分けた髪を、耳の両側で輪に結んでおりましたが、解けば腰まで届く長さでした。

冥主様はドグマ神の裏側の天井にしつらえた滑車にとりつけた太い鉄鉤をガラガラと降され、千磨様の両脚を縛って鉄鉤に掛け、滑車を捲き上げられて天井すれすれまで逆さに千磨様を吊り下げられ

ました。長く垂れた髪を二つに分けられてその先端を結び合わせ、そこへ四、五キロもあるうかと思われる、三角の鉄錘をロープでお繋なぎになったのです。尚その上、逆吊りの千磨様の両手に、灯芯皿をかかげさせ、両手が少しでも垂れると熱いと思しび油が顔にタラタラと振りそそぐのを、冷めたい眼で、凝っと見守っておられました。

力尽きた千磨様の両手が傾むき、熱い油がトロトロと顔面を伝って、髪の尖端から糸を曳いてたれて行きましたが、冥主様は滑車を下げようとなさいませんでした。そんな苦行の千磨様を私は妖しく心臓を昂ぶらせ、この同性の責苦をまたたきもせず眺めていたのです。

……………

いつしかこんな日のくることを予想していたのですが、遂に巫女の運命を決める日がやって参りました。今日の試練に勝った者が、冥主様の巫女の座に坐り、落伍したものは巫女の任務を剥奪されるのです。

私と千磨様は、冥主様のお申付け通り、晒の白衣を素肌に纏い、黙々のうちに心のうちでは対抗意識の激しい火花を散らし乍ら、蓮の葉のゆらぐ庭園の小さな池の傍らに跼んでおりました。

私は必ず千磨様から、今の位置を奪えろと信じていました。その確信の原因はいつどうしてなのか、私の記憶にはないのですが、私は冥主様の種を宿しておりました。

夫とは久しく交渉を絶っており、巫女になる以前、つまり拭邪の行の頃からは同衾すらないのです。正しくこれは神通力による冥主様のお種に違いないのでございます。

夫も最初のうちは、電話や便りや、又自身で出向いてきては説得しましたが、既に彼より心の離れた私にとっては優しい夫も今は煩わしき限りです。冥主様の虜となった私は、すべての俗世を忘れて、一途に冥主様にすべてを捧げる身になっていたのでした。

千磨様との暗黙の斗争は、日に日に激しくなっていました。いつの日か、何れか一方が消えねばならない運命にあると直感しておりました。それは一人の冥主様を巡って、内攻した女同志の心に巣喰う淫蛇、毒蛇の吐き出す嫉妬のほむらに、お互いが燃えていたからかも知れません。

冥主様の打振う鞭の痕、打擲なされたどす黒い痣の跡も、私は千磨様より多かれと望んでいたのです。冥主様を挟んで眼に見えぬ血みどろの戦いが続き、日増しに激化しておりました。冥主様は忽ち私達の心を見抜かれましたのか、以前は別々に苦行、責苦を致されましたのが、最近ではいつもどちらか一方が、冥主様のお手伝をする様になって参りました。

それだけに、千磨様が半死半生の恐ろしい苦行をうける時も、私の執拗な鞭は激しくいつまでも飛交い、冥主様のお申付けを上廻る行いに出ては、お叱りを蒙る時すらありました。この反応はすぐ私にも還って、千磨様はおのれッおのれッと叫び乍ら、皮肉が破れ鮮血の流れるまで、又見兼ねた冥主様がお止めになって、鞭をとり上げられるまで、一瞬の休む間もなく、私を打ちに打ちつくされました。そうされればされるほど、私は徐々に、責苦に対する陶醉、苦行への歓喜を覚えるようにすらなっていたのです。そして今日、その雌雄を決するときがやってきたのです。

冥主様が渡り廊下の方から、沢山の縄をかかえて庭に降り立って

こられた時、私も千磨様もビクリとした顔を挙げ、愈々きたるべきものがきたと、一種悲愴味を帯びた、その癖わけ知らぬ快感がぞくりと背筋を走り過ぎました。

「止むに止まれぬ仕儀により、唯今より新たなる巫女の位置を二人のうちより定める——。これからの試練、どちらが先か、その方ら二人で定めよ」

私達は、お互いに冷めたく冴え渡った顔を見合せ逸早く、

「私が先に苦行を受けたいと存じます」

と、私は思わず叫んでおりました。

これから始まろうとしている、底知れぬ荒行の苦難を思っ、私の身内はひきしまり、胸は早鐘を打つ様に激しく浪打ちしました。

思いは同じか千磨様も、蒼褪めた顔の、頬をピクピクけいれんさせ、眼を血走らせて、じっと両手で胸を抱えておられました。既に女の盛りを過ぎた三十半ばの顔には、醜くい小じわが漂よい、荒行につぐ荒行の果ての挙句、丸味のなくなった肉のそげた身体は、興奮と期待と恐怖に、小刻みに震えを帯びている様に見受けられました。

「如何なる難行苦行にも喜んで従います——と、二人共復誦しろ……」

私達は反射的に、我れ勝ちにそれを称えました。満足げに冥主様は聞かれ、私に近づかれますと、歓念した私の体を、その場に押し伏せ、足をあぐらに組み曲げ、腕も折れん許りに背に高々とへし曲げられて、忽ちの間に私を海老縛りになさってしまいました。

ついで千磨様も同様の肉塊に縛り上げられて、私には猿轡をなされ、千磨様には細いナイロン紐で、上唇、舌端、下唇の三つの穴を

きつくしめ上げられ、余った紐を鼻の穴に通して、唇全体が鼻先すれすれにつくほど強くお括りになりました。

冥主様は別の細引を取り出されると、私と千磨様の鼻の穴にそれを通され、二人の体をぐっと引寄せられて、鼻の穴の紐をしめられたので、うつむき加減に二人は鼻先と鼻先をすりつけるようになりました。

人間の耐久力を試すこの荒行が、如何に苦しく凄惨なものだったでしょうか——。

筋肉や関節のふしぶしがメリメリと鳴り、体中は紫色に変じて、タラタラ流れる脂汗に、フツと気の遠くなりそうになるのを私は必死になって耐えつつ、晩夏の夕暮れの残照を浴びて、息づまり、嘔吐しそうになるのをこらえにこらえて、この試練に耐えておりました。

私は苦痛の限界を超えた夢幻の境地から、ハッと我に返ったのは鼻穴に引きむしられそうな、瞬間の激痛を覚えたからです。鼻すりよせた千磨様の顔から、汗がスーッと引いて、真白くなり変って行くのを私はうつろな瞳孔の奥でボンヤリと見つめていました。

「八分経った——」

腕時計を見ておられた冥主様は気合を入れる様に叫ばれました。無限に長く思われた忍苦の荒行が、未だ僅か八分そこそこしか経っていないと知って、私はもうこれでは到底駄目かと悲しくなってきました。

「水行の試練じゃ——」

冥主様は叫ばれると、私達二人をずるずると引曳って、浅い小池に足蹴にされて投げ込まれました。芋虫さながらの私達は、鼻から

思い切り水を吸い、必死にもがいて、池の水面に顔を上げようと、この時許りは二人とも心を合せて、つながれた鼻面を二つ、辛うじて水面ストレスに浮かび上らせました。

私の体力にひかれて、一緒に鼻孔をつらねて浮んだ千磨様の眼は、既にどんよりと瞳孔が開き、断末魔に近い様相を呈していたのです。拷問に勝る苦行にさいなまれ乍ら、私はかすかな思考力で、勝ったと思いました。

冥主様は、水藻のように乱れて水面に浮ぶ私の髪を引っ握んで、近々と顔をよせ、

「解いてほしいか——」

と、快心の笑みを浮べて仰いました。

私は懸命にこらえ、五体がすっかり感覚のなくなった身で、無理にニツと笑って見せて、首を横に振りました。冥主様は私の猿轡を外されました。

「もっと縛られていたいのか——」

「はい——」

「池から揚げてやろうか——」

「この尽でいい……私は千磨に勝った……私は……」

「解いてやる」

「いいえ、もっと……縛られていたい……何時までも……私は勝った……冥主様が好き……死ぬほど好き……もっと……もっと……私は……縛られて……」

× × ×

村田奈都子の手記はそこでできていた。

羽島博士は一気に読み終り、余りにも妖しい悦楽の手記に、思わ

ず大きな溜息をつくと共に、この奈都子の告白が、何故自分の手許へ送られてきたかを検討してみた。

（夫には見せられない。そして誰にも——、彼女は、精神異常でない自分を知って貰いたかったのではなからうか——）

しかし、告白の文中の冥主なる行者も、千磨も、奈都子自体も、果してこれが狂っていない、正常な者の行為といえるであろうか——羽島博士は、もう一度大きく溜息をついたが、その時急に顔を引しめ、フト呟やいた。

△村田卓雄が一週間前、妻が飛込自殺したと電話で告げてきて、私もその日の夕刊でそれを知ったんだが、手記によると彼女は、千磨という女に勝ったといっている。勝った女が死を選んだとは、これは一体どういうわけだ。告白では千磨こそ瀕死の状態の筈だが……

羽島博士はやおらソファから立上ると、新聞の綴じ込みをとって、しきりにくり出した。

「あった——これだな」

その夕刊の三面記事の下段には、余り大きくない記事で次の様に報じてあった。

「若い女の飛込自殺」

十八日午後十一時四十分頃、大阪発下り博多行急行

列車Ⅱ吉本鉄三運転手（二九）Ⅱが、加古川鉄橋を通過した直後、若い和装の女が驚進中の列車目掛けて飛込み自殺を図り、五体はバラバラに飛散して即死した。警察の調べによると、線路わきに散らばった着衣、ハンドバッグなどの遺留品から女の身許はH県T市H町X丁目、村田奈都子さん（二四）と判明した。原因についてはT

署で取調中であるが、あるいは覚悟の自殺とも思われるが、かなり複雑な事情があるものと見て、同日死体は解剖に付される。

「フーン、矢張りおかしいな。遺留品からのみ、村田奈都子と判断している様だが、バラバラ屍体がどうも気になるて——」

羽島博士は、もう一度机上の分厚い手記に眼をやり、一寸思案した末、ゆるゆるとダイヤルを廻し始めた。T署の捜査課長を呼出すつもりである。

× × ×

「奇怪な地獄の行者捕わる」

暴行、拷問、リンチなど十数件

哀れ瀕死の同行の女信者」

第三面のトップを大きく飾った、その日の朝刊を手にした羽島博士は、報告がてら訪れてきた、T署のU捜査課長と並んでソファに腰を下した。

窓越しに繁る木立にも落葉が見え、爽やかな秋の気配が部屋にも流れ込んできた。清々しい涼けさは又格別であった。

U捜査課長は、ピースに火をつけてうまそうに一服、大きく天井に煙を吐くと、ぼつりぼつりと結末を語り出した。

「犯罪事件としては、比較的幼稚な手口でしたが、それでも一時はかなり迷わされましたよ。例の手記が捜査の上に、大層役立ちましてネ。こんなにも早く容疑者が挙ったことは、何と申しましても先生の御協力のお蔭です。当初、轢殺された女性の身許が村田奈都子と判り、署でも覚悟の投身自殺として扱って、あまり問題にして

いなかったのですが、念の為女を解剖に付した処、不審な点が次々と現われてきましたね。何分にもバラバラ屍体ですので、解剖も厄介で、拾い集めて復元し、調査しましたら、全身に打撲傷の痕、縄の痕、打擲の痕があり、その上体のいたる処に穴が穿たれているんですね。女性が相当の被虐状態にあることが分り、或いは凝装自殺ではないかと、急にいろめき立ちました。女性の夫である村田卓雄を参考人として呼んで、いろいろ調べました処、被害者が立興会と称する加治祈祷の新興宗教めいたものに凝っていて、別居同様の日を送っていたことが判明しました。精神的にも異常があったということです。死体を改めさせましたが、何分にも顔面や肉体がバラバラで相当非道いですから、村田卓雄も、判つきりは申せないが、持物が妻のものに間違いないから、本人だと思ふという、あやふやな返事でした。或いは村田が妻に折檻し、精神病を足手纏いにして、自殺をよそおわたのじやないかとも疑って見ましたが、近所の聞き込みや、会社での彼の評判から、そんな非道いことをする男とは考えられず、又飛込みの推定時間に、村田は



憂さ晴しでもありましょうか、友人宅で麻雀を囲み、その夜は徹夜しておりましたのでアリバイは完璧です。

どうもクサイとは思いつつも、きめ手のない俤、この一件は宙に浮いていたのですが、先生にあの手記を拝見させて戴き、あの女、村田奈都子は生きている確信を強め、とすれば自殺した女性は誰に

なるのか——。恐らくは千磨と称する巫女ではなからうかと、再鑑定を請求した次第です。

血液検査の結果によると死んだ女はA B型。奈都子の血液型は村田の家宅搜索をして、紙屑籠の底にへばりついていて、潰瘍の肛門の出血を拭いた塵紙のこびりついた血液を鑑定に廻してみると、これはO型でした。

手記と鑑定によって偽装殺人と断定した署内は色めき立ちまして、この事は新聞にも伏せておいて、立興会を直ちに手配した処、既に肝心の二人は藻抜けの殻で、何も知らずに参った信者がウロウロしておりました。

出血程度からみて死後轢断でなかったのですから、その時まで生きていた筈の女が、奈都子の持物を身につけて飛込んだか、或いは第三者の手によって自殺を装おわされたか——ということですが。これらの論議も、つづめる処奈都子の手記がすべて真実とすれば轢殺女は、相違なく瀕死の千磨ということになりそうです。

手記にあるその後を考えて見ますと、冥主という行者はかねての約束通り、奈都子に巫女的位置を与え、未だ微かに息のあった千磨を不要な者として葬むるため、今一つは、夫、村田卓雄から奈都子を永久に奪いとるため、それには奈都子自身を抹殺するのが、一番手っ取り早いと考えたのでしよう。

二人は共謀の上、奈都子の身代りとして、千磨に彼女の着物をきせ、ハンドバッグを持たせ、長い黒髪を奈都子に似せて切り、半死半生の千磨を二人で抱きかかえて、急行列車の通過する時期をねらい、列車が近づくと間髪を入れず千磨を線路上に投げ出した——とこう見るべきでしょう。

行者冥主と奈都子の足取りを追って、必死の聞き込みを続け、遂に殺人淫虐魔、行者冥主こと井関良太郎と、村田奈都子の変り果てた姿を姫路の木賃宿で発見し、逮捕しました。二人の逃避行は世にも凄まじく、まさに鬼気迫るものでありました。村田奈都子は殆んど廃人同様のひどさで、逃避中井関から如何にひどく加虐されたかを、その体が如実に物語っております。

これは彼の供述書の抜書ですが、淫虐魔井関良太郎（五六）が、立興会々長、冥主の仮面にかくれて、如何に強烈なサジスト振りを発揮してきたかがこれによってお分りになると思います」

捜査課長は羽島博士に一通の供述書を手渡した。

× × ×

（供述抜書は、行者冥主こと井関良太郎の悪魔の独白に変えておいた——）

「もう駄目だ——。そういつまでも冥主様でおられるものでもない。こちらでさっぱりと、俺の本性を曝露した方が、後腐れがなく、いいかも知れない。どうせ助かる命でないとするや、一つ言っても、二つ語るも、皆んな洗いざらいぶちまけるのも同じ事さ——。だが俺だって本気で人助けをして随喜の涙を流した人間も相当あるのだから、まさか差引したって、一概に地獄に墮ちるとは限らねえよ。

苦行だ、荒行だといったところで、こいつは俺の真底からのサジズムの血を沸き立たせる重宝な便法に過ぎないのは先刻承知のことだろう。

小平って野郎を始め、殺人鬼の殆んどは女を犯しちや殺しているが、俺はそんな下手なやり方はしない。女共が心の底から俺という

人間に心酔し、惚れ切って何をされてもどんなひどいめにあってもこれっぽっちの文句もいわない様に仕込んでおいて、好きな様にするんだから、我々が大した腕前よ。嘘だと思ふのなら、死にかけているあの奈都に聞いて見りや分ることだ。

もうこれ以上虐められない、とことんまで責めさいなんだ女が、俺のためなら尚命も惜しくないと、べた惚れに惚れきっている筈だ――。

俺がどうしてこんな男になったかって？ そりや理由はあるさ、どろぼうにも三分の理って奴でね――。

俺が軍にいて、中国広東のゲリラ隊を討伐に出掛けた時の事だ。スパイ容疑で引致してきた王秀麗という若い別嬪の姑娘の耳に穿たれていた耳輪の穴が、俺を底なしの「穴に憑かれた男」に仕立ててしまったのさ。

当時、憲兵伍長だった俺は、上官の命令に従がって王秀麗に拷問を加えた。拷問の手段は上司より一任された。

俺は先ず、この女の左右の耳に飾られてあった翡翠の耳輪をちぎりととり、そのあとへ針金をさしこんで、スチームの管に、ピンと張って左右の耳が引きつれるほどに繋ぎ止め、耳たぶを押えてもがく女の両手を背に振じ曲げて、高手小手に縛り上げた。

俺は泥をはかせようと、その姿勢の女に数度木剣をふらせたが、頑として口を割らない。敵が天ッ晴れな奴だった。美しい眉をひそめ、歯を喰いしばって必死に耐えていやがる。俺はそんな姿に尚更ムラムラとする。

第二の手段として、俺は女の両脚を揃えて縛り、有線電話の捲取機に縄を結びつけてジリジリと捲き上げていった。捲くにつれて女

の尻は徐々に、坐った硬い椅子から浮き上り、体はピンと伸びて硬直し、耳朵の針金が深々と肉に喰い込んで、ポトポトと血汐が両耳から滴り落ち始めた。それでも偉い女で、一言も白状せず、白い歯を懸命に喰いしばり、大粒の涙をポトポトこぼし乍らも、呻き声ひとつ挙げなかった――。

俺はそれでも捲く手を休めなかった。肉体の限界がきたことを、手の力で感じたが、女は既に体を宙に浮かした忍耐している。思い切ってぐいと一捲き、力を入れた瞬間、絶叫する悲鳴がワーンと狭い拷問室に反響を残し、女の体はズルズルと俺の手許に引き寄せられてきた。見れば針金が耳朵の小穴をきり裂いて左右の耳から流れる鮮血が、じわじわと冷めたいコンクリートの床をぬめらせていった――。

結局女は最後まで一言も吐かなかった。腹いせに鬨り殺し同様なひどさで、女の命をよってたかって奪ってしまったのだが……。

俺はこの時の耳の小穴をふっ切られた血まみれの映像が、心の奥深く強烈な印象となって焼きついた。穴に憑かれたサジスチックな狂血が、俺の体内に鬱積していたのだが、立興会をつくり、教主の身にのし上り、冥主と仰がれるに及んで、この狂血は沸々と堰をきって俺の五体を駆け巡り出したのだ。

俺が浅間に籠って、激しい修行をつんだのも元はといえば中国での憲兵の職責をかさにつんできた、数々の罪業を消滅させ、俺の五体に潜む穴に憑かれた嗜虐の想念を浄化させたかったからに外ならないのだが……。

しかし俺は人並以上の努力はした。その挙句、神通力も帯び、宇宙間の放射線も感知出来得る様になった。靈魂を蘇がえらせ、催眠

術を自在に施こして祈祷により、生命の芽生えすら伸縮させることが出来た。

正直、単純、鈍重な女は一発で俺の術に、力に同化した。

俺は事実、純粋な神の心で、幾十人の失なわれんとする生命を救ってきたことか——。

しかし、百善も一悪に及ばず——今更、俺は自己弁護はしないつもりだ。法の裁きを待つまでもなく、俺は薄れつつある神通力の最後の感応で俺の末路を予知している。

俺は神通力を得ると共に、サジストの狂血の噴流のままに、これを悪用したのが運命の岐路だった。善用これ努めていれば、俺は今頃新興宗教の教祖と崇められて、大宗教へと発展していったことだろうに——。

神通力なんてものは、特種な人間のみではなく、誰だって備えているのだ。宇宙の神はその点公平無私だ。その証拠は幾らでもある。

天災や突発的な事故の時、どうして持ち得たかと思われる程の重量のものを、弱い女がよく持出し得るのも神通力のせいだ。人間は修練によって、ある程度自在にこの神通力を適宜に発揮出来得る様になるのだ。しかし、衆の仙人だって、女の色香に迷って神通力を失なっているのだ。まして凡夫の俺においておやだ——。俺はあと三十六日で死刑になる身だ。ちゃんとわかつている。今更ゴタクを並べても始まるまいが、人間の放射線について、この事は俺の逮捕に関係があるから、一言いわせて貰うことにする。

救われ、治りたいと願う純粋な放射線が必らず救い、治してやるという放射線と、ピッタリ空間で合致した時、そこに奇蹟の神通力

が働いて足の立たぬ人間が立上り、盲が開眼し、不治の病が治るという現象も起きてくる。どんな人間にも放射線のある好い例は、「噂をすれば影」というあれだ。噂をする人間はその相手に放射線を放ち、それを受信した人間は、噂をした人間の事を考えるようになるから、思いもよらずそこへ引き寄せられるというわけで、何の不合理もないのだ。

刑事が群衆の中で、六感でピンときて、悪い奴を捕えるのも刑事の放射線が相手に受信し、悪い奴はその放射線を受けてドギマギするから、すぐに判る仕掛になっているに過ぎないのだ。近親の死ぬ間際、フト「虫がしらす」というのも、逢いたい、一目見たいとの切ない最後の放射線が、宇宙万物の霊力によって相手に通ずるからに外ならない。

つまらぬお喋り過ぎた様だ。俺の様な淫虐魔が、こんな神秘的な事を喋っても、ちっとも有難味はなからうて——。

俺自体も、放射線から発する神通力によって相手を屈服させ、これはと思った女は必らず俺に帰依した。

女達はこの俺に惚れたのではなく、この神通力に魅せられ、惹きよせられ、それが形を変えて俺の理想通りの女に仕上げさせていったのだ。

狙った女達——即ち、正直、単純、鈍重な女達は何れも尻尾を垂れ、随喜の涙を流して、マゾにマゾにとりたがった。

千磨^{ちま}しかり、奈都^{なつ}しかりだ——。

もうこうなれば、何もかも白状しよう……。

千磨^{ちま}の前にも亜栗^{あぐり}、甲満^{こま}、百瀬^{ももせ}と三人の巫女が、荒行、苦行に名を借る俺のサジズムの犠牲となって、言語に絶する責苦を甘受して

斃れていった。

その外一度、二度きりの嗜虐の対象として交渉のあった女は数え切れない――。

俺は自分でもドグマ像の醜惡と淫虐をうけついで惡魔の化身だと思っている。

肉体の惡魔は、容赦なく俺の善根、良心をむしばんで残るものは偽善と惡徳と加虐の悦樂の外何もなかった。

催眠術を悪用し、面倒臭ければ麻醉藥を浸した緋布で口を蔽って自由になる女をつくり上げていった。

亜栗に俺は何をしたか――。

初めて手なづけたこの巫女に、俺は惡徳と嗜虐の第一步を踏み出した。

修練の道士は、全身に数百本の針を立てても、疼痛を感じなくなるが、俺は亜栗を苦行によって修練させると共に、催眠術も併用して、この女の全身に八十八本の針を打込む事に成功した。

嚥下させた銀の玉に、細い絹糸をとりつけて、二日目に無事銀の玉が排泄された時は、俺は修練の力の恐ろしさを泌々と感じた。あの九十九折の腸内を無事にぐり抜けて、亜栗は口腔から肛門に到る長い体内の過程を僅か一本の絹糸によって直結し、見事に我と我が身を束縛したのだ。

俺は亜栗の全身に百数本の針を縫いつけた時、仮死の状態に陥った女に、この荒行を中止するかと訊いた。女は最後までそれを拒みつけ、もっと続けてくれと絶えだえに訴え乍ら、針鼠になって息絶えた。固太りの美しい女だったが、死んだ時は見る影もなくやつれ、哀れな姿に変わり果てていた。

甲満の場合はどうだったか――。

あの女の全身には、死を迎える直前に、十六カ所の穴が穿たれていた。両耳、両唇、鼻、舌、両頬、犬齒、それと深奥な個所に俺の暗示によって穴は次々とつくられていった。頬から犬齒へ、唇から舌へ、鼻から耳へと、縦横無尽に絹の撚糸を通し、ぐいぐい締めつけて荒行をさせた。当初十七貫もあった甲満がやがて骨と皮許りになっても、よくこの責苦に耐えていたが、両耳に三キロ、鼻に五キロ、舌に一キロの錘をつけて、苦行柱に縛りつけて半日の苦行に堪えさせた時、女は真赤な涎をたらし乍ら、喋れぬ口で辛うじて俺の名を呼びつけ、全身に恋慕の情を現わした末、ガクリと頸の骨を折ってことごとく死しまったのだ。

百瀬は、巫女の中では一番若く、十八才で健康そのものだった。陸上競技の選手とかで、よく体もしまっていた。

俺はこの女の美質の損なうのを避けて、穴開けだけは断念し、その代り荒行に精魂を傾むけた。

庭園の池に、窄衣をはめて浸らせたが、ジリジリと水を吸って締めつける皮革の強圧に、女は呻き喘ぎ乍らも、俺の唱える拭邪の祈りに微かな声で和していた。

俺は壮健な百瀬に対してはありとあらゆる苦行――即ち責めと拷問であるが――これを試みた挙句、最後に女を簀簀にして鼻孔に栓をし、重さ十貫匁以上もあるかと思われる重石を両脚にくくりつけ、女にゴム管を咥えさせて、池底に沈めた。ゴム管を通して往復する酸素が、僅かに外界との繋がりを保っているに過ぎない。水底に沈んだ百瀬は、まるで人魚のように妖しい美しさをたたえ、如来の如く気高く澄んで、ゆらゆらと池底でゆれうごめいていた。髪が

藻草のように散って漂よい、光の屈折でそれは生きもののように入水泳いでいた。

折から信者の来訪で、俺は祈禱所に戻り、再び庭園に還って池底を覗くと白蠟さながらの笑みをたたえた百瀬が、優しく俺をみつめていた。ゴム管はポツカリと水面に浮き上って無心にゆれていた。

何かの弾みに口から外れたゴム管が百瀬の最後だったのだ。

・巫女達はすべて満足と安心立命の下に死んで逝ったのだ。このことは知っておいて貰いたい。

千磨は長らく腎臓を患らって悩んでいた女だ。俺は誠意を以って、女の病いを治してやろうと、己れの持てる凡ゆる力を傾注してこの女にかかりきり努力した。

恢復した千磨の喜びは大きく、今までのどの女よりも献身的であり忍耐性が強かった。しかし奈都の出現に及んで均衡は破られた。

俺は相対する二人の女を、如何に処置すべきかと迷った。奈都は正直、単純なだけに、巫女としても感受性が強く最適の女であり、俺の暗示にも吸取紙のインキの如く魅きよせられてきた。それに女の盛りを越した千磨に比べ、奈都の美貌は輝やく許りで、若さに肉体はゴムまりの様に弾み切っていた。

俺はいつしか奈都に魅かれていた。女には夫があることも承知の上で、俺は宇宙の放射線と神通力を駆使し、且つ、時には麻醉と催眠によって、何なく奈都を掌中に納めることに成功した。

その上、事更に奈都に愛情を覚えたのは、今迄どの巫女も俺の子を孕まなかったのが、奈都に限って妊娠したという新らしい事実からでもあった。

千磨の焦燥と不安が手にとるように判った。女はしきりに苦行を望み、責苦を欲して俺の関心を惹こうとした。俺は含むところがあつて、千磨の苦行は真の苦行、いいかえれば拷問をもつてなし、容赦なく苛酷極まる方法で責め立てた。千磨は目に見えて衰弱していった。

苦行の黒白をきめた時、俺は千磨と奈都を同時に海老責め、鼻責めにしたが、奈都には手加減を加え、千磨は犇々と力一杯縛って、それこそ小指一本入らぬ緊縛でしめ上げた。

結果は俺の予想通りだった。千磨は半ば俺を恨み、半ばは信じて昏睡状態となり、遂に俺の手によって鉄路の露と散り果てた。

しかし、その刹那、俺は感応する放射線によって我が身の危機を予知した。一先ずここを立退かねば、数日ならずして俺の身に不慮の出来事が起ることを察知して、俺はその夜、心残りなく身辺を整理し、奈都を道連れに祈禱所を出た。町から村、村から町へ――谷から山へ、山から野へと漂泊の旅に出た俺達は、絶えず感応する放射線の力によって、巧みに危険を逃避しつつ旅を続けた。

その道中にも俺は、斯様にして掌中のものとした奈都を、嗜虐の対象として、俺独特の方法で旅先での苦行に就かせ続けた。

暴力とも、又強制ともいふべきこの責折檻の苦行を、奈都は体で受止め、嬉々として服従した。

山越えが始まると、俺は奈都を後手に縛り、その縄を首にかけ、鼻輪を嵌めて、紅白の紐を握り乍ら、人っ子一人通らぬ奥深い山中を素足にさせて鼻紐を引っ張って歩かせた。

縛られ、鼻輪を引っ張られて、山道をのぼる奈都は、息苦しくなるのか、喘ぎ、冷汗をにじませて気力で歩み続けた。時にはヘタヘ

タと崩折れてしまう事もあったが、俺は容赦なく荆の尖った杖で、ピシピシ臀を叩き乍ら追い立てた。

旅籠宿では一室から出ることを極度に嫌った俺は、雑用一切を奈都に任せ言いつけた。夜など手洗に立つ煩わしさに、奈都の口を借りることも再三であった。御神水といえ、女は恭々しく、供物を頂戴する気で便器の代りを果してくれた。

就寝の時は夜もすがら、俺の体中を揉ませ続け、女はこれも苦行の一つと考えてか、欣喜として朝まで撓むこともなく、もみつけられることも屢々だった。

眠気が奈都を襲うと、俺は女の体に針をさしてやった。既に二、三十本程度までさしても耐えうるよう、俺は徐々に仕込んであった。

「苦行の連続で、こんなに虐められても、私が嫌いにならないのか——。嫌になったら、何時でも私を捨てて、何処へでも行くかい。私は敢えて奈都を束縛はしない——」

勿論これは俺の本心ではない。本心ではないが、こういったも立去れない様に俺は随分女を飼育してきたのだ。俺に神通力の存する限り、女は俺から離れられないのだ。

奈都は頬や、腕や、唇に針を縫いつけてあるのでものがいえない。唯、うわうわと言葉にならない声を発して首を振っている。

俺は女の針を抜いてやり乍ら「どうだ、私が嫌になつたらう」

と俺は又こういつてやる。連鎖反応の反語の習練から——

「嫌になるなんて勿体ない——、冥主様の御為なら、どんな事でも致します。苦行はさらさら厭いません……。どうか私をお捨てにな

らないで……」

きまって奈都は、泣きべそをかいという。度々繰り返すが、これは奈都のいつもの極り文句である。俺は奈都を己れの半身にするため、烙印を女に作ってこさせた。

「この烙印でお前の体中に、私の名を焼つけてやろうか——どうだ……」

「嬉しいわ……焼いて——」

俺は何をなすにも、総て女の承認をとっている。これはどの巫女も皆同じことだった。

宿がかわる度毎に、この烙印は奈都の肌に一つ宛ふえていった。双丘に、腹に、胸に、背に、腕に、乳房に、股に、桃色に焼け爛れた火傷が未だ治りきらぬうちに、最早新たな烙印が身体のだこかの個所に、一生消えることのない焼跡を残していった。

肉の饒え、皮膚の焼き焦げる匂いが、絶えず俺の鼻をつく様になって、俺はこの烙印を捨てた。しかし既に奈都の肉体には、ところ狭しと冥主、冥主、冥主という二字が到るところに焼き込まれていた。

その幾つかは化膿し、ある個所は糜爛して、あの美しくみずみずしかった奈都の肌は、今は見るかげもなく醜くく変じていた。

しかも、鼻孔は山越えの無理がたたって拡大し、鼻梁の位置が下って垂れ下り、耳穴は錘を重くしていったため、深い亀裂をつくって殆んど千切れる寸前にあったし、上、下の唇に開けた穴からは、たえず涎や唾が洩れて流れていた。俺の目にも、奈都の肉体の荒廃ぶりは目に余り、旅館でも出逢う人々は異様な関心で奈都を見た。

既に五カ月を超えた腹は、多少のふくらみを見せていたが、俺は

尚も容赦なく荒行を続けさせていたのだ。腹部の膨張につれて、海老責めの苦行は一層苦しいらしく、脚が頭部につく迄折り曲げて、団子のように犇々と縛り上げると、黄色い匂いのする汗をかいて、唇を紫色に腫れ上らせ、眼を引きつらせて喘息持ちの様に、ヒイヒイと唸って呻いた。

「止すか——」

「止さない……もっと続けて……ウウツ、く、くるしい……」

どっと出血を見たのはこの時である。荒行が崇って胎児が流産したのであった。

嫌な予感がした——。予感はず俺の放射線につながり、ジリジリと今、追捕の手が俺の周りに近づいてくる事を激しく感知した。

俺は奈都を元の姿にしてやった。ぐったりと女は死んだ様に、その場に打伏していた。

奈都をこの場に捨てる気なら逃げられぬこともあるまい——。俺の心の中に果喰うドグマ神が、（何を躊躇する、去れッ、逃げろ——）と俺の心に呼びかけていた。

よしッ、俺は腹をきめ、奈都をここへおいて逃げる決心をつけ、歩を一步進めた時、俄破と奈都が俺の足にしがみついた。

俺の逃げようとする想念が、放射線となって奈都にピンと感知したのだ。俺の足を瀕死の両手で握って離さない。

追手の発する放射線は増々強大になって感応してくる。近づいてくるからだ——。

俺は狼狽し、思わず奈都を蹴り上げ、擲りつけて、流産直後の女に暴力を振って逃れようと焦った。

万事休す——。放射線が俺の体内で跳ねかえったと見るや、数人

の刑事がドカドカと踏みこんできて、ガチリと俺の手に冷たい手錠を嵌めた。

俺を捕えたのは誰だろう、この瀕死の奈都に外ならなかった。

俺は奈都を恨む気はサラサラない。悪徳の限りをつくしたなれの果ての今だ。

永劫の眠りにつく日も近いことであろう

× × ×

続き終って羽島博士は暗然たる眼をあげた。博士の経営する精神病院の一室で、おそらく奈都子は昏々と眠っているに違いない。

狂人でないと自負した彼女は、告白の手記まで送ってよこしたが、相違なく宗教性妄想痴呆症の病状を呈していた。

肉体の損傷はある程度回復しても、冥主を想う神経は変えようもないであろう。

（穴に憑かれた、恐るべきパラノイアだ——）

羽島博士はひとり呟やいて、供述調書を片手に鞆を抱えて去って行く捜査課長の後ろ姿を窓越しに見送っていた。

× × ×

ドクター氏の長い話は終わりました。おそらく三十九夜物語、九十三話中の最も長い話だったでしょう。『穴に憑かれた男』の嗜虐に徹した半生を人々は反芻するの、暫らくは誰一人立ち上りませんでした。

「では皆さん、三年半に亘った三十九夜物語は一応これをもって完結しました。近い将来再び構想を新たにしてお目見えするかも知れません……」

昼食後、我々三十九夜のメンバーは、オブザーバーとして列席し、

本日お越しの九氏を中心に座談会を一時間許り開催したいと思ひます。座談会のあと昨夜来から座をとりもっていただいた二人のホステスの方にモデルになって頂いて、この別荘の庭園を拝借して、撮影会を行ないたいと存じますので、カメラご持参の方は、ご遠慮なく撮影していただいて結構です。ではこれで……」

スバル氏の閉会をかねた挨拶で、人々はぞろぞろと立上りました。

退屈男達の顔に等しく過ぎこし方の感懐が流れます。或いは三十九夜のメンバーだけで最後の夜を心行くまでしみじみと味わいたかったのではないでしょうか——。

四人の美女の縛られポーズの代表的作品集

女体緊縛写真のアルバム 限定版グラビヤ印刷写真集

豊満と清楚

一般書店には一切市販しません。是非直接発行所へお申込を！

限定版頒価一部一〇〇〇円（送共） 略号「限二」

〔モデル〕 長野 良子——大塚 啓子——五月亜紀子——新井マリ子

限定版第一号として、グラビヤ写真集の「美しき縛しめ」第三集、略号（美3）を本年二月に刊行しましたところ、多数のマニヤの方々のお求めを頂き有難うございました。嘗て十数年前コロタイプ印刷の女体

緊縛写真アルバムとして刊行いたしました「美しき縛しめ」第一集、第二集は忽ちのうちに売切れとなり、今では見ることもさえないわね稀少な文献となっています。皆様のご熱心な要望によりまして、ここ

（辻村隆より。三年半の長きに亘り拙文をご愛読賜わり厚く厚く衷心より感謝致します。その間、ご叱正やご鞭励のお便り戴きました方々、又数々のアイデア、構想等をご教示下さった方々にも誌上をかりて厚くお礼申し上げます。

一応この奇譚三十九夜物語は、三十九夜、九十三話を以って終りいたしますが、こういった会合を求める方々も多い様子です。で、いずれ機会を改めて、紳士淑女の集いをもちたいと思っております。その暁は又稿を改めて皆様に誌上でおまみえ出来るだろうと楽しみにしております。どうか、その節もよろしくご声援のほどお願い致します。永らくのご愛読本当に有難うございました。では皆さん、さようなら。）

に限定版グラビヤ写真集刊行に踏み切りました。本誌グラビヤ口絵では種々な制約のため、思いきった企画編集を遂行できませんので、直接販売の限定版写真集によってファンの方々のご期待に応えたいと思ひます。

今度、限定版第二号として、前集とは、いささか趣を変えた緊縛女体アルバムを作製いたしました。若々しい豊満な肉体を誇る長野良子、大塚啓子の二人の女性の美しさを最高度に発揮した縛られポーズの大胆奔放のかずかずを、画面いっぱい、所狭ましと活躍させました。特に迫力を増すためとグラビヤ印刷の効果をフルに運用する

ためにも、写真面を大きくしました。
加うるに清楚にして純情なフェイスと初々しい肢体の持主である五月亜紀子と新井マリ子両嬢の痛々しいばかりの可憐な緊縛裸身を以て誌面を飾りました。

緊縛フォト・アルバム

限定版第二号 豊満と清楚 内容

△美しき縛しめ (第四集) △

(一)、豊満をくびる……………大塚 啓子
(二)、胸と胴をくびった縄にもだえる女体……………長野 良子
(三)、グラマーの縄目……………長野 良子
(四)、むくむくと肥った肌に縄目も埋もれて……………長野 良子
(五)、豊満裸身の陶醉……………長野 良子
(六)、うっとりとした表情は、縄にか紐にか……………長野 良子
(七)、鼻をいためつける……………長野 良子
(八)、指にて鼻を弄ばれて恍惚とした表情……………長野 良子
(九)、荒縄の緊縛感……………大塚 啓子
(十)、とげとげとした荒縄が柔肌を痛める……………大塚 啓子
(十一)、黒と白の対照……………大塚 啓子
(十二)、白い晒と荒縄のケバとのコントラスト……………大塚 啓子
(十三)、責めに疲れて……………大塚 啓子
(十四)、責め抜かれてぐったりとなった女体……………大塚 啓子
(十五)、戯れの縄プレイ……………新井マリ子
(十六)、アパートの一室での緊縛プレイの一コマ……………新井マリ子
(十七)、襲いくる魔手……………新井マリ子
(十八)、恐怖のまざなし、黒い触手が迫ってくる……………新井マリ子
(十九)、首締め縛り……………新井マリ子
(二十)、のびやかな肢体が痊れんする首絞め姿態……………新井マリ子
(二十一)、猿ぐつわ非情……………新井マリ子
(二十二)、開股しばりの上に非情の猿ぐつわが……………新井マリ子

(二十三)、開股棒しばり……………新井マリ子
(二十四)、革の口枷が頬もくびれよと締めつける……………大塚 啓子
(二十五)、絶叫のワンカット……………大塚 啓子
(二十六)、縄目が埋もれるような凄惨な緊縛感の味……………大塚 啓子
(二十七)、痛さに喘ぐ……………大塚 啓子
(二十八)、責められて急所の痛さに思わず呻めく……………大塚 啓子
(二十九)、首縄と足縄……………大塚 啓子
(三十)、首に掛った縄と足の縄が女体を変える……………大塚 啓子
(三十一)、悶えても拘束された麗身は逸脱しない……………大塚 啓子
(三十二)、悶えても拘束された麗身は逸脱しない……………大塚 啓子
(三十三)、足首の縄目……………大塚 啓子
(三十四)、反りかえった足の指が縄目に可愛い……………大塚 啓子
(三十五)、二筋の縄がかくも美しい姿態を現すか……………大塚 啓子
(三十六)、誇らかな成熟の匂を十分に撒きちらす……………長野 良子
(三十七)、投げ出された肉づきのよい肢、足、脚……………長野 良子
(三十八)、全裸緊縛の羞らしい……………長野 良子
(三十九)、はにかんで見せた美しい全身のポーズ……………長野 良子
(四十)、両手両足を縛られて一本棒に晒られる……………五月亜紀子
(四十一)、両手両足を縛られて一本棒に晒られる……………五月亜紀子
(四十二)、清純な美しさが、この全身に漂っている……………五月亜紀子
(四十三)、晒の白布が鼻も口も一緒に掩って締める……………大塚 啓子
(四十四)、荒縄への誘致……………大塚 啓子
(四十五)、荒縄をさばいて次第に捉らわれる蝶々……………大塚 啓子
(四十六)、珍しく完全に噛まれた猿轡……………大塚 啓子
(四十七)、珍しく完全に噛まれた息苦しい猿轡……………大塚 啓子
(四十八)、厳しい縄目と息づまる猿ぐつわの烈しさ……………大塚 啓子
(四十九)、猿ぐつわと縄……………大塚 啓子
(五十)、猿ぐつわと息づまる猿ぐつわの烈しさ……………大塚 啓子
(五十一)、緊縛女体操縦法……………大塚 啓子
(五十二)、縛りに変化をつけられた女体はどこへ……………大塚 啓子

(五十三)、くねらす豊満女体……………大塚 啓子
(五十四)、瑞々しくて柔らかな女体が縄にくねった……………大塚 啓子
(五十五)、棒責めの序曲……………新井マリ子
(五十六)、両足首の両端に縛られて、さて……………新井マリ子
(五十七)、さあ、打ちのポーズ……………新井マリ子
(五十八)、素晴しき美身……………長野 良子
(五十九)、輝くような美しい裸身もあらわに……………長野 良子
(六十)、縄をはねかえす素晴しい女体の重量感……………長野 良子
(六十一)、情容赦のない縄は巨大な乳房をへしゃぐ……………長野 良子
(六十二)、開股しばりの表情……………大塚 啓子
(六十三)、開股しばりになった女の顔のアップ……………大塚 啓子
(六十四)、両肢を開けて縛り上げられたポーズ……………大塚 啓子
(六十五)、ぴんと一直線に伸ばして縛られた脚……………大塚 啓子
(六十六)、放置されて全身の痛さに耐えるシーン……………大塚 啓子
(六十七)、強盗侵入の構想……………新井マリ子
(六十八)、押し入った強盗は女を縛って転した……………新井マリ子
(六十九)、緊縛女体の鑑賞……………新井マリ子
(七十)、家宅侵入した賊の目的は美体の鑑賞……………新井マリ子
(七十一)、台所で縛られていたぶられるシーン……………新井マリ子
(七十二)、胸、臍、ウェストが縄によって捕捉……………大塚 啓子
(七十三)、くねらせた見事な臀部を捉えたレンズ……………大塚 啓子
(七十四)、後手高小手の美しさは素晴らしい……………大塚 啓子
(七十五)、柔肌を喰いちぎるようにくびるコード……………大塚 啓子

小説に現われた女の殺人

(山田風太郎忍法全集より)

黒田 寿

最近大好評の山田風太郎の作品を、十巻まで読むことが出来たが、たしかにすばらしいものだった。何故なら、美女たちが実にさまざまな方法で惨殺されてゆくのです。

殺人マニヤの私は、この作品の紹介にあたって、自分の空想がむやみと入り混じり、どこまでが原作にあることか、自分でもわからなくなってしまう。従ってこの一文を読ん



で、全集を買いもとめ、どこにそんなことが書いてあるんだと怒られても、私は責任を負いかねます。

十巻全部で登場する女忍者の数は三十八人に達し、その全部が必ず死んでゆくものだから嬉しい。彼女らが若く、且つ美しいことは言うまでもありません。

一、脇役たち

側室とか侍女とか、或は単に女たちと言うように、名前もつけられぬ組は、実に無造作に殺されてゆく。気を失っているうちに首をポロリと斬り落されるのは、最も好運な死に方で、一刀のもとに胴切りにされたり、袈裟がけ、或は唐竹割になるのもこれに次ぐ。

地下の密室に居る十数人の裸女が、次第に上から落ちてくる細砂のため、生きながら埋められる、と言うのは死に至るまでの苦悶と恐怖が長く続くだけ、こちらの想像もはてしなくのびるし、すばらしいシーンだが、本立の方はボタンを押しただけ。全く簡単なものです。

地面に垂直に立てた梯子に、追いたてられてのぼる美女。その周囲には剣や槍が、それぞれ刃先を上に向けておいてあるのだ。やがて力つきた彼女らは、花びらを散らすように

次々とおちてくる。喉や乳房や、おへそをグサリ、グサリと刺されて：最も喝采を浴びたのは、まさに刃をまたぐように落ちた女だった。彼女は特別の情をかけられ、直ちに細首をたたきおとされた。

次にお鶴とかおせんとか、一応は名前をもった女として登場するもの。彼女らも最後まで生きのびたものは居ない。忍者同志の争いにまきこまれ、本人は全く知らぬのに死罪獄門に処せられてしまうものもある。

湯殿のなかの側室が、忍者の投じた次第にふくれあがる物体のため、板戸に押しつけられて、遂には苦悶と恐怖の表情をいっばいに浮べたまま圧殺される。彼女の血汐は湯と共に流れ去ってしまった。

全裸にされ、全身に蜜をたっぷりとりぬりこまれ、蜂や蝶や蛾がその身体にむらがってくる。これも面白い責めだが、ここでは余計なヤツが現われて、彼女たちの首を刎ね、苦しみをとめてしまう。

精神的に痛めつけられ、とうとう自ら縊れてしまう女性も居るが、これも処刑としての或は殺人としての絞首でなくては私にはつまらない。

やはり忍者のため、冷凍マグロならぬ冷凍

美女とされるもの。ちよっと手をふれただけでこうなるのだから、いささかものたりない。同じく焼き殺されるものまたしかり。

全身の血を吸いとられ、魚の干物みたいになる美女も面白いし、或は殺し方としては単に「鳥の頸でもかき斬るように」喉を切られるものであっても、「あの世に捨てられた」という表現で生きてくるものもある。

しかし忍者以外の女性の最期で最もすばらしいのは、女体の刺身となる話ではないだろうか。將軍や殿様の前に出た美女が、一糸まとわぬ姿になったとみるや、まず両腕の、次いで両脚の肉がおち、やがて全身の筋肉や内臓が大皿の上に並んでゆく。生首がどうなったかは書いていないが、おそらく別の皿の上にチョコンとのったのであろう。

二、二軍選手

いくら忍者として登場しても、ごく簡単に殺されるものもある。一応は見せ場を作っているが、全員が最後まで活躍したのでは、話がいつまでたっても終らぬから、これは当然だろう。

但し、私のことだから、彼女たちの手柄はどうでもよろしい。問題はその殺され方で、いかに殊勲をたてた女忍者でも、あっさり首

を刎ねられたとあらば二軍に入れられるし、真先に死んだ女でも、その死にっぽりが私の気に入ればレギュラーとされる。

二軍に名を列ねるものには、喉や乳房を刺される平凡極まりないものから、下腹を切り裂かれたり、両脚のつけ根を刃でつきあげられたり、さては針金のような輪を頸にまかれ遠くから軽く引くと、首がポロリと落ちるものがある。

水中で格闘の末、無念にも敗れ去り、美しい四肢がつけ根から切り離されて、生首と合わせて六つの部分が、プカプカと浮きつ沈みつ流れてゆく。

妊婦も登場し、陣痛に苦しんでいる最中、敵に襲われ、その下腹部を真一文字に切り裂かれ、それがはからずも帝王切開と同じ意味となつて、赤児が生れでるといふ念の入ったもの。

女同志の決闘がただひとつしかないのはさびしい。大鎌をふりまわし、あと一歩で相手の美女の首を刈りとうとする寸前、背後にまわったもう一人の敵のため、白く柔かい首すじをぐいと絞められ、前方からはまるい乳房を短刀でグサリ。無念の涙をのみながら美しい首を敵に渡す。

切腹もある。もしかしたら山田氏は奇クのファンかも知れない。同僚に恥を与えられた美女が、一気に下腹部を衣類もろともかき切り、抜きはなつた刃を次に左乳下に刺してバツタリと倒れる。

もっとすごいになると、横一文字でなくタテに切り裂くのだ。股間に刃を刺しこみ、そのまま真上におへソのあたりまで裂きあげて相果てる。

マキビシと言う、忍者特有の四方八方に釘の突き出ている武器を、すっぱだかの女体に隙間のない程ぶちこまれる悲惨な最期。

忍法の種類について書いていたらきりがなし、この一文とは別なものだが、それにしてもすばらしい。ただもう少し女忍者の数をふやして、女対女により惨忍な争いを書いてもらいたかった。

“刃をその女のうなじに押しあて、一気に引き斬ろうとしたら” “背後に立っていた味方の女が忽然として切断され”

“彼女は屋根の上にひそむ敵に向って懷剣を投げつけると、見事に二本のスラリとした太股の奥深く命中し” “敵が落下すると同時に抜き放った刃は、彼女の乳房の間から下部まで真一文字に切り裂いた”

一体これは何でしょう。

三、ベスト・テン

彼女の全身を、ねばねばしたとりもち様のものがつつみこんだ。その力は強く、どうしても身体からとりはなすことができない。乳房についたものはがそうと手をふれれば、その手がピツタリとくっついてしまうのだ。首から上が無事だったことが、彼女にとってより不運となった。と云うのは、もし鼻口もおおわれてしまえば、十分位で窒息死したろう。彼女はそれから数時間後に、もだえ苦しみつづ息を引きとつたのだ。皮膚呼吸をさまたげられたために：

こんな殺しはいかがです。このほかすさまじい殺しとして股の間から一気に引き裂かれてしまうものがあるが、これは平凡すぎる。それでこれを変形し、縦に六つに、ちょうど六枚の花びらの様に裂いてしまうもの。

針せめて下腹に一本づつ刺しこみ、彼女の敵の名を画かれる。これなどは単なる苦痛を与えるだけでなく、精神的にも相当のものがあろう。

手足を大の字にひろげ、その手首足首に矢を射ちこんで、白壁の地上からはなれたところにハリツケにする。しかるのち下腹部に一

本。次にその上方のおへソに一本。更に左右の乳房に一本づつ。最後に喉に止めを射ちこんで晒しものとされる忍者。

彼女は二人の敵と必死の戦を続けたが、遂に力つき地上にくずれおちる。その首を討とうとかがみこんだ敵は、突然噴きだした熱湯を浴びて死ぬ。彼女は自分の血汐を熱湯と変える術を心得ていたのだ。だが彼女自身も、全身焼けただれて息絶えた。

ちよっとすごいじゃありませんか。径五寸ほどの鉄製のコマが、はげしく回転しながら、両脚を大きくひろげてふんばっていた美女にとびかかり、あつというまに彼女の下腹部から血しぶきがあがる。数分後この鉄のコマは、彼女の美しい肉体を粉々に飛び散らせてしまった。

あとにはひき肉の様なものが四方に残されただけ。こうなると前述の刺身どころじゃない。

人間の胃液は相等の消化力があるという。それ以上の力をもった分泌液を出せる忍者があつて、狙われた美女はこの液体のため、足から腰、おへソから乳房、そして首までドロドロにとかされてしまう。

女体の刺身、女体のひき肉、そして美女の

スー。あなたはどれがお好きですか。

実際に喰われてしまう女忍者も登場しなくてはならない。毒虫が目や鼻や口、その他の穴から侵入し、もだえ苦しみつづつ絶命してしまふ。或は飢えたる犬におそれ、哀れにも喰い殺されてしまふ美女も居るし、もっとすごいものになると、やっこの思いで倒した敵の忍者が、自らの上下の顎骨をぬきとって投げつける。この三十二枚の歯が彼女の下腹部に喰いつき、喰い荒してしまふのだ。それでも

彼女たちの骨はのこったらしい。

格闘となって水中に沈む。間もなく武運つたなく首を失った彼女の身体が、ポッカリと水面に浮かんでくる……というのではつまらないが、手足や肩や腰など、全身すべての関節をはずされて、ガタガタの肉塊となってしまうのだから興味をひく。首も勿論頸部関節からはずされて、グンナリとたれさがっている次第。

口をつぼめて息を吸うと、附近一帯が真空

状態になるという忍者。まるで人工かまいたちだ。これにたちむかった美女は、この一撃をうけて衣類が全部裂けてしまふ。衣類だけならよいのだが、下腹部の皮膚も裂け、内臓まで引き裂かれてしまふ。女体変じてザクロとなるわけだ。

以上目についたものをあげましたが、どんなにすばらしい作品かは、お読みになられた方はおわかりでしょう。

〔最新版〕 女体緊縛フォト五十選

B組五十集 大手札判印画紙(9×13種) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円

B1	全裸エビ責仰向け(関谷)
B2	逆エビ責め全裸像(水本)
B3	乳首ペンチ挟み(竹野)
B4	後手十字縛肩口上(梨花)

B5	足の裏擦り責め(竹野)
B6	おへソいじめ大写真(関谷)
B7	剃いだバタフライ(関谷)
B8	貴方に捧げた裸身(大塚)
B9	乳房責め絶叫苦悶(大塚)
B10	無防備双手吊り(絹川)
B11	豊満臀部エビ縛り(水本)
B12	一糸纏わぬ股間縛(水本)
B13	全裸亀甲股間縛(関谷)
B14	足踏付け二つ折り(大塚)
B15	尻突出しムチ打ち(関谷)
B16	手錠にもだえる(竹野)

B17	尻突出てエビ責め(水本)
B18	椅子開股鼻責触手(梨花)
B19	息もつがせぬ猿轡(竹野)
B20	投げ出した全裸(関谷)
B21	美しき尻部の露出(絹川)
B22	猿ぐつわ悦虐境(竹野)
B23	後手柱縛り脚線美(竹野)
B24	強制鼻挟水吞ませ(梨花)
B25	苦悶にねじる裸身(関谷)
B26	責めに気を失って(関谷)
B27	さアどうでもして(関谷)
B28	豊満乳房膨隆縛り(竹野)
B29	投げだされた女体(竹野)
B30	裸身をくびる麻縄(梨花)
B31	強烈縛りに悦ぶ(梨花)
B32	全裸逆エビ片脚拳(東浦)
B33	踏みつけマゾ境地(東浦)

B34	すべてをさらけて(関谷)
B35	ムチ打ち失神寸前(関谷)
B36	クリップ鼻挟み(絹川)
B37	台上的マゾポーズ(大塚)
B38	吊られゆく美体(絹川)
B39	拷問に無惨な美貌(梨花)
B40	マゾ女性の表情美(東浦)
B41	喰い込む股間縄(絹川)
B42	灸責めに悶える(梨花)
B43	犠牲台の人身御供(大塚)
B44	美肌無茶苦茶縛り(絹川)
B45	裸身に立つ蠟燭(大塚)
B46	手枷足枷大写真(四方)
B47	鎖に悶える足首美(柳初)
B48	蛇責めに柔肌栗然(梨花)
B49	鼻の玩弄恍惚境(大塚)
B50	女囚菱縄さらし(絹川)

贗作・悩ましのサデイズム

△森山美歌夫人に関する小品▽

芳 野 眉 美

J 日曜日午前三時 (1)

レースのふちどりと美しい長いネグリジェを羽織った美歌夫人が、Sと古城真を寝室に呼びつけた。

透明な薄地を幾重にも重ねた、まっ赤なネグリジェは、まるでフランス、ルイ王朝の貴婦人が、そこに立っているような錯覚にとらわれた。

「散歩のお時間よ」

と美歌夫人は真に云った。

「散歩ですか」

「そうよ」

時刻は、すでに午前三時を過ぎていた。

「散歩の用意をしましょう」

美歌夫人の瞳が黒水晶のように光った。

「服をお脱ぎなさい」

「――」

「不思議そうな顔をして」

「裸になるのですか」

「そうよ、犬の散歩ですもの」

「犬の散歩」

真はSは笑いながらうなづいた。女王様のおいつけ通りにしましょう。

服を脱いだSと真の首に、美歌夫人は犬の首輪をはめた。鎖は付いていなかった。

まっ黒なベビードールのネグリジェでベッドに寝そべっていたアリサが、二人のおかしな恰好を見て笑いこぼれた。

「真の顔ったら」

真は真立不動で天井をにらんでいたのである。Sの顔など見られるものではなかった。

「おねえさま、首輪に鎖は付けないの」

とアリサが美歌夫人に云った。

「鎖を引っぱらないと、犬の散歩にならないわ」

箆笥の抽出から、美歌夫人が小さな首輪を取り出して、指でくるくるまわしてみせた。

「鎖はこっちに付いているのよ、アリサ」

「可愛い首輪」

「——でしょう」

「それ、何処にはめるの」

「さあ」

美歌夫人が真の頬をしなやかな指でこづいた。

「何処にはめましょうか」

Sの顔を見ながら、真に云った。

「怒った顔って、好き」

「それから——もう一つ的首輪があるので、それは直径一寸位に締められる革製のもの。もちろん鎖付きですわ。それを何処にはめるかは御想像願います。とにかく、わたくしがSを犬のように這わせて散歩する時は、専らこの方を愛用していますのV

という美歌夫人の手紙を真は思い出した。

「困ったわね」

と美歌夫人が云った。

「この首輪、ひとつしかないのよ」

「お客様に権利をゆずるよ」

とSが云った。

「そうね、あなたはいつも散歩しているし」

美歌夫人のしなやかな指がのびた。

「四つ這いにおなり」

大小の犬の首輪を上半身と下半身にはめら

れた真は、がくつと膝を折って床に這った。

「アリサ、鎖を持って頂戴」

アリサがベッドから飛び下りて来た。

「鎖を強く引っ張っちゃだめよ」

面白がって真のうしろから鎖を引っばるアリサを美歌夫人はたしなめた。

「さて、もう一匹はどうしよう」

美歌夫人がSに云った。

「繃帯で代用したら」

とアリサが云った。

「繃帯」

「まけるでしょう」

「まけるわね」

美歌夫人は薬箱から繃帯を取り出すと、

「ちょっと持ってて」

とアリサに云った。

「いいわ」

アリサのすんなりした細い指がのびた。

「すぐ目を細める」

美歌夫人の白魚のような指は、繃帯を器用に巻きつけていった。Sの表情がこわばった。

長い繃帯は首輪と鎖の代用になったのである。

「そう歯をくいしばってでは、犬らしくな

いわ」

床に這いつくばった二匹の雄犬に美歌夫人が云った。

「犬はね、いつも口を開けて舌をだしているものよ」

「鼻をふさげばいい」

と楽しそうにアリサが提案した。

がんじがらめとはこのことだろう。Sと真の顔に、X字に目茶苦茶にかけなれた美歌夫人の腰紐は、二人の鼻を持ち上げ鼻口をふさいでいた。Sの両眼は完全にふさがれ、真の片眼も無惨につぶれていた。

口を開け、舌をだし、激しく息を吐く二匹の雄犬を、二人は手をたたいて面白がった。

「さあ、お散歩に行きましょう」

と美歌夫人が云った。

「お廊下がいいわね」

「廊下」

とアリサが叫んだ。

「マンションの廊下」

「そうよ」

「だって」

「誰かに会ったら困るって、云いたいんですよ」

美歌夫人はSの頭を足でこづいた。

「会ってもいいわね、あなた」
真の顔色が変わった。

「いやなの」

と真の顔を足で持ち上げた。

「いやなことないわね」

真は見える片目もつぶった。

「わたくしの、いいなりになるお約束ですもの」

二匹の雄犬は、二人の美しい拷問者に尻を蹴飛ばされ、革鞭で打たれながら、部屋からマンションの廊下に出た。

「誰かに会うか会わないかは、セームセームよ」

美歌夫人がSに云った。

「だめねえ、また壁にぶつかる」

「無理よ」

とアリサが笑いながら云った。

「おじさま、目が見えないのですもの」

「あら、そうだったわね」

マンションの廊下は幸いに無人だった。

が、突然、靴の音がマンションの静寂を破った。シートが真の全身をおおい、真は廊下に着くまわった。その背中にアリサが腰を掛けた。

靴の音が近づき、美歌夫人に挨拶する声が

聞こえた。

「お遊戯ですか」

低音の魅力ある声である。

「お楽しみですね」

近くのドアを開ける鍵の音がした。

「見られた」

とSが云った。

「一瞬、セーフ」

「大丈夫か」

「ハインサエティは、SMプレイに理解があるから、見られても大丈夫よ」

「びっくりした」

「刺激があっという間でしょ」

「汗でびっしょりだ」

「あとで、あの方を誘惑しておこうかしら」

「おいおい」

「背が高くて、たくましくて」

「——」

「若くて、それで、独身なの」

「アリサにも紹介して」

「わたくしが味をみてからね」

「ずるい」

「さあ、歩くんだよ」

革鞭のうなる音がした。Sが打たれたらしい。

シートをかぶされたまま、Sと真はなお前進することを強要された。

美歌夫人は二人を何処まで歩かすつもりなのだろう。

真は腹痛をおぼえた。緊張が長く続けたからだと思われる。冷汗が流れた。

階段を下りたとき、靴の音がマンションの静寂を破って近づいて来た。

K 日曜日午前三時 (2)

古城真が、二人の美女の猛攻に悪戦苦闘していた土曜日の夜、先輩のMはバー『焰の部屋』のせまい更衣室ですごしている。

椅子に腰掛けたMは、椅子ごとロープで固定されて身体を自由を奪われている。猿ぐつわはされていなかった。

Mの首には小児用のアブチャンのように、バーテン用の白いエプロンが巻きつけてあるので、すばらしいカッコとは云いかねる。

バーのにぎわいは、壁を通して更衣室にも聞こえてきた。が、Mは別に声を立てて助けを呼ぼうとはしなかった。

Mをロープで縛り、更衣室に軟禁したのは『焰の部屋』のマダムみどりである。

みどりは、後手高手小手などという芸術的

な高級な言葉は知らないから、Mを縛ったのも面白半分で、それこそ目茶目茶だった。新調の背広が泣こうというものだ。

A商事のベテラン営業部員として、会社の重要な客を接待している最中、客の常連のバーに招待されたのが『焰の部屋』で、高慢なみどりにMが一目惚れしたのは、Mの性格としては不思議ではなかった。

客を客と思わないような見下した冷たい話し方、ときたま浮かべるひややかな微笑、眉をきつとあげた鋭い眼でみどりに見つめられると、Mは思わず全身がぞくっとして鳥肌が立つ始末だった。

Mは接待用に『焰の部屋』を使い始めた。

一月たって、A商事の経理課から飲食費を受け取ったみどりは、Mをお茶に誘った。

「お話があるの」

近くの喫茶店でMに向い合ったみどりは、『焰の部屋』のホステスの中に、Mの好きな子はいないのかと聞いたのである。

「好きな子、か」

「寝てもいいのよ」

「リベート、というわけ」

「そうね」

無表情な顔でみどりは云った。リベート代

もすでにA商事に請求して受け取っているのだろう。

「別に寝たくもないな」

「うそおっしゃい」

「ママなら」

「私」

どうしてこの女は視線をそらせることをしないのだろうとMは思った。みどりはMをじっと見つめたままだった。Mの全身に鳥肌が立った。深い湖のような瞳だった。

「はつきり云って、女の子には興味はないんだ」

「そうね、いつも外の人に女を紹介しているだけの人だから」

「社命とあれば仕方ありませんよ」

「だから、私がMさんに女の子を紹介してあげると云うのよ」

「だから、ママなら」

「私は、だめ」

「ママを抱かせてくれなんて、ダイソレタ考えは持っていないですよ」

とMは云った。みどりがふっと笑った。

バーでは見せた事のない温い微笑だった。

Mの言葉がおかしかったからだけではないらしかった。みどりの微笑がMを勇気づけた。

「お願いがあるんだけど」

「お金がほしいの」

「とんでもない」

「女の子はいや、お金でもない、それじゃ、いったい何がほしいの」

みどりはやさしく云った。

「おこらない」

「何をおこれて云うの」

「おこらないと約束して下さい」

「へんな人」

「いいですね、絶対おこりませんね」

「ええ、いいわ」

「ママの URINE を飲ませて下さい」

「なんですって」

「ママの URINE が飲みたいんだ」

「わからないわ」

「谷崎潤一郎の『少年V』をお読みになりましたか」

とMは云った。

「選集を持っているわ」

「それなら、家に帰ったら『少年V』を読んで下さい。短編だから時間はかからない」

「——」

「終りに、英語ができます。英和辞典でひいて、その意味がわかったら、御返事を下さ



「い」
Mはテーブルを立った。
翌日、みどりから電話があった。
「驚いたわ」
「飲ませてくれますか」
「ほんとに飲むつもりなの」

「飲みますよ」
電話からみどりの笑い声が聞こえてきた。
「飲ませてくれますね」
「いいわ」
「今夜行きます」
「待って、せっかちな」

れへふ

「気が変わったら困る」
「大丈夫よ、たとえ召し上っていただきますから」
みどりは日時を指定した。
約束の日、Mがバー『焰の部屋』に現れたのは八時頃である。バーはかなり混んでいた。
ゆったりしたボックスが五つばかり、家庭の応接間のように並んでいる。ホステスは十四五人で、和服が多いのは中年好みのバーの性格のせいである。小さなカウンターに坐る客は少ない。かなり広いスペースをぜいたくに使って、サロンの雰囲気を十二分に漂わせている。
カウンターに坐ったMをみどりが見つけて近づいてきた。
「あら、おひとり」
その眼が笑っていた。
「約束ですよ」
「いいわ」
みどりの熱い息がMの耳をくすぐった。
「ほんとうに飲むつもり」
「そうですよ」
「更衣室で待っていて頂戴」
八時から閉店の十一時までの三時間、Mは

三回飲んでいる。

ハオンスタン・ブラーに注いだのを、みどりはMの頭を抱きながら、少しづつ飲ませてくれたのだ。更衣室は化粧室の奥にあった。

もっとも、一度はめんどくさいのか、Mの顔にかけて出て行った。

いつもはブランデーのみどりが、今夜に限って、

「苦しい、苦しい」

といいながら、ビールばかり飲むのを、客もホステスたちも不思議そうな顔をしていたが、みどりは笑っているだけで、その理由を話そうとはしなかった。

ホステスたちは、Mが更衣室に軟禁されていることを知っていた。それがリベールとであることは納得できなかっただろうが。

バー『焰の部屋』が閉店になって、Mは解放されたわけではなかった。

「明日は日曜日ね」

とみどりがMに云った。

「会社はお休だし、お店もお休だし、一日ぐらい、私のおトイレになってもいいわね」

L 日曜日午前四時 (1)

二匹の雄犬を連れて階段をおりた美歌夫人

は、ある部屋のドアを軽くノックした。

ドアが静かに開いて、にこやかに美歌夫人を迎えたのは、バー『焰の部屋』のマダムみどりだった。

細いレースをしなやかな肢体にぴったり合わせて、幾重にも重ねた豪華なレモンのネグリジェの下から、匂うばかりの肌がすけて見えていた。みどりは、細身のネグリジェの下には何も着ていないらしい。

「ようこそ、奥様」

「おじやましてよ」

ふたりの貴婦人の美しい花辨がきつく合わさった。

思いがけない女同志の接吻を、アリサは忙然と見つめていた。ジエラシイどころではなかった。

「アリサさん」

「はい」

「奥様からうかがっていますわ」

みどりはベビードールスタイルのアリサを抱いた。

「美しい方」

「メルシイマダム」

眼をつぶったアリサが唇をかすかに上に向けた。

「よろしいかしら」

みどりが美歌夫人に聞いた。

「よくてよ」

バー『焰の部屋』のマダムみどりのマンションは、会員制の深夜の秘密バーをかねていた。

ホームバーセットが居間の中央に飾られ、インスタントのバーに早がわりするわけである。ステレオ、電気冷蔵庫と設備に不自由はない。

秘密保持のため、会員は絶対身元確実でなければならぬから、『焰の部屋』の常連の一部に限られてはいるけれど、貸切りでないと濃厚なサービスができないというわけで、みどりの予約ノートに空白をみつめるのはむづかしい。

寝室もあり、浴室もあるバーであれば、全裸パーティーがおこなわれたとしても少しも不思議はないだろう。

ふたりの美しい客に引っ張られて、のそのそと入って来た二山のシートを見て、今夜ホステスをつとめるエリとマリはびっくりしたような声をあげた。

「なんですの、それ」

「なんだとお思いになる」

と美歌夫人が笑いながら云った。

「スピッツかしら」

「スピッツはあんなに大きくないわよ」

肩でループを結んだだけのシンプルなネグリジェを着た若い二人は、とてもチャーミングだった。エリはピンク・マリは淡いブルーで、みどりにならってネグリジェの下は何も着ていないらしい。

「椅子よ」

とアリサが二人に云った。

「椅子ですって」

「そうよ。生きている椅子、面白いでしょ」

「見せて」

「あとで」

「意地悪」

なごやかな雰囲気の中で夜明けのパーティーが始まった。

美歌夫人はシートをかぶせたSの背中に腰を掛けて、みどりに真の背中をすすめた。

「何になさいます」

とみどりがオーダーをきいた。

「スカッチウオーター」

とアリサが云った。

「大丈夫なの、アリサ」

「今夜ぐらい飲ませて、おねえさま」

「あきれた、ビールをさんざん飲んできたのに」

「もうさめちゃった」

エリとマリがオーダーを用意した。

「酔ってしたいことがあるの」

みどりの足元に坐ったアリサは、真の腰のあたりにもたれると、シートの下から真の汗で濡れた肌をまさぐった。

「奥様、Mにお会いになりますか」

とみどりが美歌夫人に云った。

「何処につかまえてあるの」

みどりは化粧室のドアを指さした。ふたり、の貴婦人は顔を見合せて笑った。

脚から胸へと太いロープでぐるぐる巻きにされた黒いサポーターだけのMが、白い便器の上に仰向けに横たわっていた。

Mの奇妙なサポーターは、みどりのストッキングだった。

「私専用のトイレにしようかと思って連れて来たのに、エリもマリも面白がって使うものだから」

「だって」

とエリが云った。

「あと始末だってしてくれるのですもの」

「エリのおトイレ、とても長いのよ」

とマリが云った。

「馬鹿」

ドアを開けたのが美歌夫人なので、Mは驚いたらしい。世にもなさけなさそうな顔をした。

「お久しぶりね」

と美歌夫人は人間便器のMに云った。

「みどりさんのお味はいかが」

「お友達だったのですか」

「マンションと美容室が同じなものだから、いつのまにかお友達になってしまったの」

「知らなかった」

「今夜のパーティーのことでみどりさんに電話したら、あなたのことを聞かされたのよ」

「お友達だけですか」

「それ、どういう意味」

美歌夫人の黒水晶のような瞳がきらりと輝やいた。

美歌夫人の両足がMの顔をはさんだ。

ゴージャスなまっ赤なネグリジェの裾がひるがえった。

(第四部・終)

☆ ☆ ☆

☆ ☆ ☆

【新版】 女体緊縛コレクト・フォト集

E組百花選

大手札印画紙 (9×13 ㎝) 焼付

各組一枚一組 (送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

E 1	全裸の悦虐プレイ (愛川)
E 2	仕置を受ける裸身 (大塚)
E 3	荒縄に苦悶する肌 (愛川)
E 4	ムチに耐える美肌 (関谷)
E 5	豊臀と豊胸しぼり (愛川)
E 6	捨身の後手観念像 (大塚)
E 7	足から眺めた裸身 (水本)
E 8	全裸エビ責尻強調 (関谷)
E 9	ハリツケられた娘 (大塚)
E 10	強烈後手高手小手 (愛川)
E 11	責め抜かれた疲労 (梨花)
E 12	逆エビにもだえる (大塚)

E 13	拘禁された美囚女 (大塚)
E 14	浴室に覗く股間縛 (愛川)
E 15	海老責に泣く足首 (大塚)
E 16	乳房強烈締めつけ (愛川)
E 17	牢獄で泣く縛り娘 (大塚)
E 18	美しき全裸股間縛 (大塚)
E 19	全身に溢れるマゾ (関谷)
E 20	ベッドにもだえる (関谷)
E 21	身体中に強烈な縄 (愛川)
E 22	放置された海老責 (東浦)
E 23	ゴム衣で縛られる (東浦)
E 24	ローソクで責める (大塚)
E 25	寝台の排便ポーズ (絹川)
E 26	足指先に漂う媚態 (関谷)
E 27	後手吊り正面裸像 (関谷)
E 28	嚴重な高手小手縛 (東浦)
E 29	女体の全部を晒す (愛川)
E 30	激しいムチ打の果 (関谷)
E 31	若肌も縄にくびれ (東浦)
E 32	投げ出した脚線美 (絹川)
E 33	脐中心の腹部緊縛 (梨花)
E 34	セーラー服の哀歎 (梨花)
E 35	赤いムチ痕の臀部 (関谷)
E 36	仰向けの囚衣の女 (梨花)
E 37	制服の女学生縛り (梨花)
E 38	悦虐にむせぶ若妻 (関谷)

E 39	痛打にくねる裸身 (関谷)
E 40	乳房に加える金具 (大塚)
E 41	鼻責めにあえぐ顔 (大塚)
E 42	あぐら縛りを拒む (大塚)
E 43	浣腸ポーズの裸身 (梨花)
E 44	激烈なエビ責苦悶 (大塚)
E 45	敷布の上ののびて (絹川)
E 46	鼻いじめのアップ (梨花)
E 47	柔肌に喰込む麻縄 (東浦)
E 48	縄にくびれる裸身 (東浦)
E 49	椅子に晒された女 (大塚)
E 50	脐そうじをされる (大塚)
E 51	荒縄のトゲに狂う (絹川)
E 52	火のついた煙草責 (四方)
E 53	踏みつけられた胸 (梨花)
E 54	裸身をゆだねた娘 (大塚)
E 55	手足猪吊りの美態 (絹川)
E 56	囚女の美しき緊縛 (絹川)
E 57	諦めた観念全裸像 (水本)
E 58	縄にもだえぬく姿 (絹川)
E 59	黒髪を吊られた女 (大塚)
E 60	女奴隷美しく悶ゆ (絹川)
E 61	袋の中の緊縛裸身 (竹本)
E 62	ビニール袋に蒸す (竹本)
E 63	亀甲型の雁字搦目 (大塚)
E 64	緊縛裸像の舞踏会 (絹川)
E 65	野外の後手宙吊り (梨花)
E 66	足首に鎖錠実施中 (四方)
E 67	室内の後手宙吊り (梨花)
E 68	雨装束の悦虐姿態 (梨花)
E 69	乳房いじめ踏つけ (大塚)

E 70	足の裏ハネ擦り責 (梨花)
E 71	乳首プライヤ挟み (竹本)
E 72	野外の逆さ吊り責 (梨花)
E 73	梯子責にあう美女 (梨花)
E 74	逆さ吊りに揺れる (梨花)
E 75	娘十六しぼり加減 (花坂)
E 76	踏みにじられた顔 (大塚)
E 77	逆エビニ反る足先 (大塚)
E 78	両手吊りのお仕置 (絹川)
E 79	責折檻に呻く若妻 (梨花)
E 80	豊麗を誇る正面像 (大塚)
E 81	食卓上の縛り人形 (大塚)
E 82	むしられる下着 (大塚)
E 83	月経帯の羞恥縛り (梨花)
E 84	寝台上的の若妻狂態 (関谷)
E 85	強烈全裸エビ縛り (東浦)
E 86	輝姿後手縛り吊り (東浦)
E 87	後手縛豊満臀部晒 (関谷)
E 88	黒髪いじめ凌辱図 (大塚)
E 89	令嬢後手高手小手 (絹川)
E 90	脐部乳房強調緊縛 (東浦)
E 91	責衣にくるまれて (東浦)
E 92	全裸逆エビ責め (水本)
E 93	ローソク乳首ゼメ (梨花)
E 94	全裸後手縛り閨晒 (関谷)
E 95	強打全裸のあえぎ (関谷)
E 96	肉体美の責衣ゼメ (東浦)
E 97	バンド二ツ折縛り (梨花)
E 98	全裸正坐縛り猿轡 (関谷)
E 99	豆しぼりの猿轡 (絹川)
E 100	強烈縛り脐いじめ (東浦)

女斗美ファンタジック・シリーズ

節子さんとのレスリング

(俊子の打明け話より)

芦 浦 素 舞 夫

〇〇〇〇〇

洋子さんが三月号に「冬の夜の女相撲」と題して私と節子さんのお相撲を発表された時は、私達は皆さんから散々冷かされて困りました。

「貴女達、ずいぶんお転婆さんね、驚いたわ。でも俊子さん、貴女って太ってるからやはり強いわ。節子さんに勝ったんですってね。節子さんは貴女よりずっと背が高いでしょう? それを首投げで投げつけたんですって? 呆れたわ!」

私なんか会う人毎に散々冷やかされたものです。でも、もともと茶目っ気の多い私はニ

ヤニヤ笑って済ませましたが、節子さんの方は、おしとやかな女性だけに

「節子さん、貴女は身体は大きいけど弱いからね。貴女よりだいたい背の低い俊子さんに負けたんですってね、それも首投げで投げられるなんて、みっともないわよ!」

弥次馬根性の強い連中にさんざんからかわれて、節子さんは顔を真赤にして弁解していました。

「だって俊子さんたら、しつこく私の首を捲くんですもの。わたしは、お相撲なんかしたくなかったのよ、無理にお相撲やらせておいて、本にまで発表するなんて! 洋ちゃんた

ら全くひどいわ!」

節子さんは、洋子さんのことを一時は、ほんとに怒っていた様子でした。ですから、私がかこれから発表するレスリングのことを知ったら、きっと、カンカンになって怒るでしょうね。実はあの数カ月後、私は節子さんと凄まじいレスリングをやりましたの。後で洋子さんに、そのことを話したら、是非見たかったって大変残念がっていました。洋子さんも小柄なくせにお相撲やレスリングが好きですわね。

そして、私に是非、発表しろって勧めるんですの、それで思い切って私の武勇伝を発表

することにいたします。

〇〇〇〇〇

それは八月の蒸し暑い夜のことでした。私は節子さんと二人で映画のナイトショウを観に行きましたが、その帰途

「ねえ、俊子さん。今夜、私の家に泊って下さらない？　今夜私一人なの、恐いわ、ね、お願い！」

節子さんのお家の人達が旅行されて、今夜は彼女一人でお留守番だと言うのです。

私はそれを聞いた時、内心「しめた」と思いました。あの冬の夜、洋子さんの家で節子さんとお相撲して彼女を首投げで散々苦しめてから、お相撲が好きになり、機会があったら是非もう一度、彼女とお相撲してみたいと思っていたのです。今夜は絶好の機会じゃありませんか？　私は胸がわくわくしてきました。でも私は何気ないふりをして

「いいわよ、でも母に断っておかないと心配するから、ちよっと私の家まで一緒に来よう」

「まあ、うれしいわ。貴女が泊ってくれたら安心だわ」

節子さんは、私の秘かな計画など知る由もなく、ほっとした表情です。それから私の家

に立寄り、途中アイスクリームなどお買物して私達が彼女の家に帰り着いたのは、すでに十一時過ぎてした。

「さあ、お上りになって。暑かったでしょう？」

節子さんは、いそいそと私を招じ入れ、一足先にハイヒールを脱いで上りました。すると節子さんの足が玄関の板の間にぺたぺたと音をたてたので、私は思わず彼女の足を見ました。節子さんの足の裏は長いことハイヒールを履いていたせいか、赤味を帯びてうす汚り、かなりべとついている様です。

節子さんはひどい脂足だったんです。

私は、ふと彼女のハイヒールを履いてみる気になりました。

「ほら、節子さん、貴女のハイヒール履いてみたら、踵は指が二本入るくらい余ってるわよ。でも横はずいぶん窮屈だわね」

私は節子さんの十文半のハイヒールに、自分の九文半の巾広い足を入れてみましたが、私の足の裏に彼女のべっとりした足の裏の感触が伝わりました。

「俊子さん、お止なさいよ。私のハイヒール汚れてるから……。そんなことしてないで、早くお上んなさいよ」

「ああ、貴方は脂足だったわね。道理でべとりしてるのね、フフフ……」

私は冬の夜のお相撲を思い出しました。あの時は真冬というのに節子さんの足の裏は、かなり汗ばんで汚れていたのです。まして今は真夏、素足でハイヒールを履いているのですから、蒸れてべとつくのも無理はありません。

「そんなこと、どうでもいいじゃないの」

節子さんは、顔を赫らめて部屋に入りました。私も彼女の後に従って座敷に入りましたが、私の頭の中は、これからやるレスリングのことで一杯です。

「暑いわね、銭湯に行つて汗を流して来ましょうか？」

節子さんが誘いましたが、私は

「もう十一時過ぎてるわよ、遅いから止しましょうよ、それより私は失礼だけど脱がせて貰うわ」

私は、さっさとシューズ一つになりました。私も行儀は良い方ですが、今夜は節子さんと二人きりですので遠慮は要りません。

「そお？　じゃ仕方ないわ、でも汗びっしょりで気持が悪いわね」

節子さんは、私が銭湯に行く気配がないの

で仕方なく、ブラウスやスカートを脱ぎはじめました。シュミーズ一つになった節子さんの一六〇センチの身体は、すらりとしています。細長い首、盛り上った乳房、よく切れたウェスト、大きなヒップ。

節子さんは身体全体からお色気を発散させています。女性の私でさえ思わず眼を見はる程でした。私は節子さんより二つ年下でしたが、とても彼女のお色気には勝てないと思いました。それほど魅力のある彼女でしたから異性との交際も多く、ロマンスの絶えない人だったのです。ほとんど異性との交際のない私にとって節子さんは羨ましい存在であり、時には嫉ましくなることさえありました。

おそらく洋子さんも私と同じ気持だったと思います。いつか洋子さんと話し合ったんですが私達が節子さんにお相撲やレスリングを挑むのは、心理学的に分析すると恋愛における私達の劣等感が力づくの復讐にデフォルメされたものだと思います。

私達は節子さんを力づくでやっつけて自己満足していたのかも知れません。

事実、力づくでは節子さんに勝つ自信がありませんでした。洋子さんは、あまりにも小柄だったため、大柄な節子さんには勝てませんでしたし

たが、私は絶対負けな自信を持っていました。

節子さんは、身長こそ私より三寸ほど高かったけれど、おしとやかな女性だけに力は弱く、私の方が肥えて体重もあり、力も遥かに強かったのです。

「俊子さん、アイスクリームが溶けるわよ。早くお食べなさいよ」

節子さんは畳の上に横坐りしてアイスクリームを私にすすめました。私は彼女の横に寝そべって、アイスクリームを食べ始めましたが、ふと、変な匂いがするのに気がつきしました。蒸れた様な臭い匂いでした。そうです、節子さんの足の裏の匂いだったのです。脂足の彼女は、ずっとハイヒールを履いていたせいか、足の裏がひどく蒸れていたのです。私は胸がむかむかしてきました。

「節子さん、貴女の足は臭いわね」

私は大袈裟に顔をしかめてみせました。

「ご免なさいね、いくら拭いたって、すぐべとつくのよ、私って、どうしてこんなに脂性なのかしら、いやだわ！」

節子さんは羞しそうに顔を赤らめて、足を引っこめてしまいました。

「ねえ、節子さん！腕相撲してみない？」

私は何気なく彼女に誘いをかけました。まさか、いきなりレスリングしようとも言えずこれはいわば誘いの水だったのです。

節子さんは暑いからと言って、最初の内はなかなか応じませんでした。が、あまり私がしつこく誘うので仕方なく畳に腹這いになって私と腕を組みました。脂性の彼女は、掌もじつとりと汗ばんでいます。節子さんの腕は私の腕よりかなり長い様でした。私はふと、洋子さんの言ったことを思い出しました。

足の裏と腕の長さは、ちょうど同じだそうです。つまり、節子さんの足の文数が私より大きいというわけです。でも腕の太さは私の方が、だいぶ太い様です。

さて、私は腕にぐっと力を入れて節子さんの長い腕を捻じ伏せにかかりました。

節子さんも顔を真赤にして必死に応戦しましたが、私の腕力にみるみる圧倒されて、遂に力尽きて捻じ伏せられてしまったのです。

「ああ腕がしびれたわ、俊子さん、貴女ってすごく力が強いね」

節子さんは、痛そうに手首をさすっています。それから続けて二、三回斗いましたが、節子さんは大柄な体格の割には力が弱く、私には一回も勝てませんでした。



「貴女にはとても勝てないわ、もう止ましよう。ほら、こんなに汗びっしょりよ」

節子さんは身を起して横坐りしてしまいました。もう腕相撲なんてこりごりと言った表情です。この調子だとレスリングなんて、とても応じそうにありません。

しかし私は今夜の、この千載一遇のチャンス逃したくありませんでした。だって、誰にも憚らず女性同士が取り組み合う機会は、めったにありませんものね。そこで私は一計を案じたのです。

「ねえ、節子さん、じゃ、これから二人で美容体操しましょうよ。私、こんなに太ってるでしょう、貴女みたいにスタイルが良くなりたいわ」

私は、節子さんに誘いかけてました。

「ホホホ、俊子さん、いま何キロあるの？」

「五十七キロもあるのよ」

「まあ、私よりだいぶ重いじゃないの。ちよっと太り過ぎね」

スタイルに自信のある節子さんは、太っている私に同情した様な顔をしました。私にはそれが反って小憎しく思えたのです。

「節子さん、畳に両手をついてごらんさいよ、私が足を持ち上げてあげるわ」

私は彼女を促しました。ほんとに言ったら、これは間違っていました。だってスタイルを良くするのに美容体操するのは、太った私の方が必要だったのですもの。でも美容体操はあくまでレスリングをやるきっかけを作る口実に過ぎなかったんです。

「私は結構よ、俊子さん、貴女なさいよ。私が手伝ってあげるわ」

節子さんは笑っています。まるで、自分はスタイルが良いから美容体操は必要ないと言わんばかりの表情です。私はそんな彼女が、ちよっとシャクにさわり、いきなり彼女の首筋を抑えつけて畳に四つん這いにさせようとしました。節子さんは私の荒っぽさに驚き、

「俊子さん、ひどいわ、離してよ！」

節子さんは畳に両手を突っ張って跳ね起きようとしてました。しかし私は、お構いなく右手で彼女の首筋を抑えつけながら、左手で彼女の右足首を掴んで引き寄せました。ちよっどレスリングのハーフネルソンのような恰好になりました。

「俊子さん、止して！ 苦しいわ！」

節子さんは悲鳴を上げています。

「節子さん、これからレスリングしましょうよ」

私は節子さんを抑えながら話しかけました。節子さんは驚いて跳ね起きました。

「冗談じゃないわ、この暑いのにレスリングだなんて！ レスリングなんて女性のするものじゃなくってよ！ 俊子さんってほんとにお転婆さんね。あの時も、無理矢理お相撲のお相手させられてひどい目に会ったわ。それに洋ちゃんたら皆に発表したりして、あんな羞しい思いしたことなかったわ！」

節子さんは顔を真赤にして、ほんとに怒った様子です。私は内心「まずかったな」と思いました。が、わざと強気に出ました。

「そお！ ごめんなさいね。私はどうせお転婆よ、貴女みたいなおしとやかな女性ではないわ、私みたいなお転婆が居ちゃご迷惑でしょうから、私は帰るわ！」

私も怒った振りをして帰る気配を見せました。すると果せるかな節子さんは慌てて私を止めにかかったのです。

「あら！ 俊子さん怒ったの？ 帰らないで！」

「じゃあ、私とレスリングしてくれたら、今夜は泊ってあげるわ、私ね、貴女とレスリングするのを楽しみにしてたのよ」

こうなると節子さんも、「いや」と言えな

くなったのです。

「俊子さんって、ひどいわ、そんなもくろみがあって泊って呉れたのね」

節子さんは恨めしそうに私を見詰めています。私は完全に主導権を握ったのです。節子さんとレスリング出来るうれしさと胸がわくわくしてきました。

「この前のお相撲は、五対二で私が勝ったわね。今夜のはレスリングよ、どっちか参ったって言うまで続けるわよ、さあ、始めましょうよ」

私は節子さんを急きたてながら早くも身構えました。節子さんも、今となっては断れず渋々立ち上りました。

「俊子さんて、しょうのないお転婆さんね、あまりひどく投げつけないでね。お願いよ」

節子さんは冬の夜のお相撲の時、私に首投げでさんざん苦しめられていたので、早くも予防線を張って来たのです。

「でも、本気でやらなきゃ面白くないわよ。貴女は私よりうんと背が高いんだから、負けてばかりいては、みっともないわ」

私は節子さんの斗志を煽るように言いました。こうして私達はいよいよレスリングを始めることになりましたが、ちよっとその前に

私達の体格を、くわしくお話しておきます。

	身長	体重	足の文数
俊子	一五一センチ	五七キロ	九文半
節子	一六〇センチ	五五キロ	十文三分

右の表でお分りの様に、節子さんは一六〇㎝の身長に対し、体重五五キロと、理想的なタイプなのに対し、私は確かに太り過ぎだったのです。

さて、いよいよ私達は八畳の部屋の中央で向い合って構えました。節子さんは腰を引き両手を前に出して私を近づけまいと警戒して完全な防禦の構えです。私は元気よく彼女に組みついて行きました。私は右腕を伸ばして節子さんの首を捲こうとしましたが、節子さんは首を捲かれるのを嫌がって頭を低く下げ部屋の隅に後退しました。私は構わず追撃し節子さんの頭を抑えつけ彼女の上に覆い被さる様に組みつきました。私よりだいぶ背の高い節子さんでしたが、私に上から組まれて仕方なく、頭を私のお臍の辺りに突込み長身を折り曲げて喰い下っています。私は右で彼女の首を抱え、左手で大きなお尻を抑えて、一気に押し潰そうとしました。しかし節子さんも必死に両脚を踏ん張って耐えるので思う様

になりません。私は押すとみせて、いきなり引き落しをかけました。この奇襲に節子さんもたまらず畳にがっくり両膝をついて四つん這いになってしまったのです。上から組みついていた私には節子さんの十文三分の細長い足の裏がはっきりと見えました。脂足の彼女の足の裏は汗と脂と畳の汚れで赤黒くなっています。かなり離れていても、蒸れた様な臭い匂いがプーンと私の鼻をつきます。節子さんは必死に私を跳ね返そうと大きなお尻をむくむくと持ち上げてましたがいていました。私ががっくり抑え込んで許さないで、暑苦しさ、遂に悲鳴を上げて降参してしまいました。この暑いのに、頭を私のお臍の辺りまで引き込まれ私の五七キロの体重で覆い被されたのですから節子さんが悲鳴を上げたのも無理ありません。節子さんはやっと身を起して乱れた髪をかき上げました。

「俊子さん、もう止ましましょうね、この暑いのにレスリングしたら死にそうだわ」

節子さんは肩で大きく息をしながら言いました。全身汗みどろになっています。

「何言ってるのよ、貴女大きな体してるくせに意気地なしね。さあもう一度やるわよ」

私は節子さんの手を取って無理矢理立たせ

ました。彼女も仕方なく、身構えました。私は再び右手で節子さんの首を捲こうとすると「俊子さん、お願い！ 首を捲くのは止めて！ 暑くって窒息しそうだわ！」

節子さんは、悲鳴を上げて逃れようとしませんでした。確かに彼女の言う通りです。誰だって首を捲かれるのは苦しいから嫌がるはずです。まして今は真夏、何もしないでじっとしてるだけで汗が滲んでくるのに、取っ組み合いのレスリングをやって相手に首を抱え込まれたら、全くたまったものではありません。でも私は背の高い節子さんの首を捲いて腋に抱え込むのが大好きなのです。

私は、節子さんが嫌って左手で懸命に防ぐのを委細かまわず強引に彼女の首を右腕で抱え込んでしまいました。その頃すでに私達は全身汗みどろになっていたのですが、特に多汗性の節子さんはひどく、全身から吹き出した汗が畳にばたばた滴り落ちていました。私の右腕に抱え込んだ節子さんの首も、汗でぬるぬるとして滑りそうです。

「俊子さんったらひどいわ、首を放してよ」

節子さんは抗議をしながら、頸を引き首をすくめて必死に私の腕から逃れようとしていました。

「節子さん、何言ってるのよ、首を捲くのは何も卑怯な手じゃないわよ。レスリングの立派な攻撃法なのよ、そんなに首を捲かれるのが嫌だったら、捲かせない様に防げばいいじゃないの！」

私もやり直しながら節子さんの首を右腕にがっちり抱え込みました。こうなったら金輪際離すもんですか。節子さんも仕方なく長身を折り曲げて私の太い腰に喰い下り、私の首投げを警戒しています。私は頃によしと、ぐっと一腰入れて首投げを打ちました。しかし節子さんは充分腰を落して喰い下っているため、あまり効果がありません。私は首投げを二、三回連発しましたが、さすが節子さんは大柄だけになかなか倒すことが出来ません。私はじっくり攻めることにして、節子さんに話し掛けました。

「節子さん、ヘッドロックよ。これが私の得意の手なのよ、どお苦しい？」

私は楽しくなってきました。だって日頃、私達がいささか劣等感を抱いている大柄な節子さんを一方的にヘッドロックで制しているんですもの……。私は言葉が続けました。

「節子さん、こうして並べてみると、貴女の足は大きいわね、十文半くらいあるんじゃない？」

いの？ 何とかの大足って言うわよ。」

私は節子さんの足元を見ながら笑いかければ彼女も負けずに言い返したのです。

「だって私は貴女より背が高いんですもの、文数も大きいのが当り前だわ、俊子さんの足こそ巾が広くって、不恰好だわ！」

なるほどそう言われてみれば私は肥えているため、足の中も広く、足指も短くてずんぐりしてお世話にも恰好の良い足だなと言えませんが。それに比べたら、節子さんの足は、九文半の私の足より足指も長く、ほっそりとした巾の狭い、細長い感じの恰好の良い足でした。

どうやらお互いの足の批評合戦は私の方に形勢不利の様です。しかし私も負けてはいません。

「節子さん、でも貴女は脂足じゃないの！臭くてたまないわよ」

節子さんはウィークポイントを衝かれ返す言葉もなく、悔しそうです。節子さんもしささか感情的になったのか私の太い脚を取って反撃してきました。私は足を掬われひっくり返りそうになり、左足一本で立ち節子さんの首にしがみついて耐えましたが、お互い纏れ合ったまま畳の上にとっと倒れたのです。そ

れから二人は畳の上を上になり下になりして揉み合いましたが、体重に優る私は、右で節子さんの首を抱えていたため、遂に彼女を抑え込むことが出来ました。こうして首固めで完全にフォールし、二勝目を上げたのです。

「節子さん、やはり私には勝てないわね。貴女は私より大柄なくせに弱いからね」

私は節子さんの斗志を煽るべく、わざと勝ち誇った様に胸を反らせてみました。

「言ったわね！ 今度こそ負けないわ」

果せるかな節子さんは憤然として立ち上りました。最初は私に無理にせがまれて渋々相手になっていた節子さんも、二回も私に負けでは、さすがに悔しかったらしく、やっと本気になった様です。こう来なければ面白くありません。

さて三度目の勝負は……。節子さんは気負い込んで私に組みついて来ました。背の低い私を一気に捻じ伏せようと懸命です。この節子さんの激しい斗志に私も圧倒されそうになりました。何しろ節子さんは私より三寸も背が高い大柄な人だけに、さすがの私もしささか持て余し気味でした。しかし私も斗志を燃やして彼女に組みつきました。私は例によって長身の節子さんの首を狙います。彼女は首

を捲かれるのを極端に嫌って左手で必死に防ぎ私達は手四つの体勢で掴み合いました。

節子さんの顔からすでに笑いも消え必死の表情です。どうやら私達のレスリングも本物になって来た様です。私達はお互いの肩を掴んで激しく揉み合いました。二人の体から汗が吹き出し畳にばたばた滴り落ちていきます。

夏の真夜中に若い女性同士が必死になって取っ組み合っている姿を、もし人が見たらきっと肝を潰した事でしょう。しかし私達は女性としての羞いも今は念頭になく、ただ相手を倒したい一心でした。女性特有の潜在した斗争本能をむき出しにして斗っているのです。さて私はやっとのこと節子さんの首を捲くのに成功しました。私の斗志が僅か優っていたのです。私はすかさず首投げを打ちました。節子さんは倒されまいと必死に腰を引いて耐えます。私は強引に首投げを連発し、節子さんの首を抱えたまま部屋の中を激しく動き廻りました。しかし節子さんも必死に耐えていますので、なかなか勝負がつきません。

私は節子さんの首を精一杯深く抱き込み、右足を彼女の左足に掛けて強烈な首投げを放ったのです。私の太い脚と節子さんの長い脚が激しく絡み合いました。節子さんは何か呻

き声を上げ必死に残そうとしましたが及ばず長身を大きく弧を描いて畳の上にどっと倒れました。私も勢い余って右腕で深く節子さんの首を抱えたまま、彼女の上にどっと折重なって倒れたのです。節子さんは乳房を私の体重で強く圧迫されて、「うむっ」と呻き声をたてました。

私はすかさず彼女を抑え込みにかかり首をぐいぐい締め上げました。節子さんの顔がみるみる苦痛で歪みます。長い脚をばたつかせてもがいています。必死に畳を蹴る度に、節子さんの十文三分の細長い足の裏の汗と脂が畳にくっつきとつきそうです。彼女の足の裏

は最高潮にべとついているのです。きつと鼻をつまみたくなる様な臭い匂いを発散させていることでしょう。私は右腕で節子さんの首を締めながら彼女の足の方を見ました。

節子さんの十文三分の足の裏は、私に首を捲かれていた彼女の苦痛を如実に物語るように畳の上で激しくもがいています。必死にばたつかせている節子さんの足が、抑え込んである優勢な私の足より大きいだけに、何だかよけい可哀想な気がしてきました。

私は右腕に抱え込んだ節子さんの顔を覗き込みました。彼女の顔は眼がつり上って苦悶の形相です。私は慌てて腕の力を緩めまし

た。節子さんはぐったりとしてしばらく起きられませんでした。やっと半身を起し、畳にうつ伏せになって肩をふるわせて泣き出しました。私に、またもや首投げで投げられた上、首固めに敗れて、よほどくやしかったのでしょうか。

それ以来、節子さんは私には口をきかなくなりしました。さすがお転婆の私も、大いに反省し、これからおしとやかな女性になろうと思っています。だってお嫁に行けなかったら大変ですものね。

(おわり)

【最新版】女体責写真五十粒選

A組五十集 大手札判印画紙 (9×13 糎) 焼付

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	七〇〇円
三十組三十枚	五〇〇円
四十組四十枚	三〇〇円
五十組五十枚	二〇〇円
一、	〇〇〇円
二、	〇〇〇円
三、	〇〇〇円
四、	〇〇〇円

A1	フミツケ汚辱縛り (新井)
A2	手吊り乳房責め (五月)
A3	ハリツケ猿ぐつわ (新井)
A4	全裸正面柱しばり (遠藤)

A5	亀甲強烈乳房縛り (遠藤)
A6	全裸手吊りムチ打 (遠藤)
A7	豊満乳房いじめ (遠藤)
A8	乳房責め股間縛り (遠藤)
A9	鼻責鼻梁いたぶり (遠藤)
A10	全裸後手高小手 (遠藤)
A11	膨隆臀部さらし (長野)
A12	全裸正面強烈縛り (長野)
A13	うねる緊縛裸身 (長野)
A14	色禪の開股しばり (長野)
A15	正面縛蛙股ひらき (長野)
A16	裸自慢縛りヌード (長野)

A17	正面アグラしばり (長野)
A18	正面大の字開股縛 (長野)
A19	遅ましき裸しばり (長野)
A20	荒縄縛豆絞り猿轡 (大塚)
A21	両手前縛り髪首絞 (大塚)
A22	両手吊り股間吊り (桜井)
A23	両手膝下しばり (関谷)
A24	疼れんする裸身像 (関谷)
A25	両股縄掛け開股縛 (大塚)
A26	正面裸身強烈本縄 (梨花)
A27	乳房晒し肉体自慢 (長野)
A28	責衣にはみ出る肌 (東浦)
A29	投げ出し全裸縛 (長野)
A30	捕われの全裸縛 (梨花)
A31	羞らいの全裸縛 (大塚)
A32	猿轡の全裸縛 (大塚)
A33	荒縄全身縛り豆絞 (大塚)

A34	盛り上る乳房縄目 (長野)
A35	亀甲本縄鼻いじめ (大塚)
A36	ムチ打悶えポーズ (関谷)
A37	椅子またぎ汚辱責 (東浦)
A38	縦縄股間縛り正面 (関谷)
A39	ゴム猿ぐつわ全身 (大塚)
A40	くさり乳房責め (長野)
A41	強制片足挙げ責め (大塚)
A42	正面乳房くびり縛 (関谷)
A43	鴨居正面ハリツケ (梨花)
A44	手吊りパンティ落 (東浦)
A45	白バンド後手吊り (東浦)
A46	豆絞り高小手呻 (梨花)
A47	裸縛り鼻いじめ (梨花)
A48	ガンジガラメ立縛 (愛川)
A49	亀甲本縄股間縛 (絹川)
A50	立木縛竹棒責め (桜井)

訊

問

(じんもん)

栗瀬長

傷害容疑者、松井明にかかる刑事裁判は、地裁戸田裁判長係で開かれていた。既に第一回、第二回の公判を終り、今日は愈々事件の核心にふれるものとして、被告人の情婦、いや、我々は被告人に多大の同情を寄せるものとして、婚約者と呼んでおこう、亘寿子が証人として喚問されるべく呼び出されていたのである。

今ここで、第一回、第二回の公判の模様を詳述するのは、徒らに睡気を催させるのみであらう。従って、ここでは今迄に判明した事件の概要を語っておくに留め、亘寿子への訊問によって、事件の核心、動機といったものを判断したいと思う。

事件は、昭和三十五年十一月十八日、中央線信濃町と四ッ谷の中間、信濃町寄りのガードで、夜十一時頃に起った。

即ち東邦物産株式会社々長南田健太郎(五十八才)が、暴漢におそわれ、下腹部、顔面頭を殴打され、重傷を負ったのである。偶々犯人が初犯であり、前科のないものの偶発的犯行はつかみ難いとの定説通り、一時は迷宮入りかと危ぶまれたが、被害者の意識回復と共に、(一時は被害者もその社会的地位に対する辱恥心から、なか／＼事件の核心に触れることを公表したがいなかったために、捜査は困難を極めたが、警察当局の執拗な追求に、遂に事情を説明したため、)ようやく犯

人と目される松井明を逮捕するに至ったのである。

ではここで、第三回公判に於ける、弁護人の証人亘寿子に対する訊問を掲げることによって、松井明が、南田健太郎氏に危害を加えるに至った所以が判明するかと思う。

(弁護人)

「亘さん、貴女が、被告人松井明を知ったのは何時ですか」

(亘証人)

「松井と私は同郷の幼なじみで、小学校は同級でした。私が、タイピストをしております時、銀座で偶然十数年ぶりに会い、以来交際を続け参りました。」

(弁護人)

「同郷といえますと?」

(亘)

「群馬県の松井田です」

(弁護人)

「タイプリストをしておられたとの事ですが、どちらで?」

(亘)

「東邦物産です」

(弁護人)

「ホウ—南田氏の会社ですね」

(亘)

「ハイ、そうです」

(弁護人)

「警察の調書によりますと、三十五年十二月に東邦物産をやめられて、以後、純喫茶、バー等を転々としておられますが、何故東邦物産をやめられたのですか」

(亘)

「南田社長とまずいことがあったからです」

(弁護人)

「具体的にどういふことですか」

(亘)

「意に添わなかったからです」

(弁護人)

「意に添わないでは分りませんね。これは大切な事ですから、もっとはっきりおっしゃって下さい。」

(亘)

「でも——。」

(弁護人)

「言いにくいようですが、何か肉体的な事でも要求されたのですか」

(亘)

「ハイ。二三回、お茶にさそわれたり、バーにお供したりする内に、今夜つき合わないかとか、手を握ったり、お尻をそっと——いやですわ——」

(弁護人)

「ここは公判廷です。真実をありのまま言つて下さい。」

(亘)

「ハイ、へんなことをされるようになりました。でも私は、断乎はねつけました。その中故意に——と思います——私だけ残業させられ——というのは、一字か二字のミスをとりあげて、訂正でなく、全文打ち変えるよう命ぜられ、それも終業近くでどうしても独り残らねばならないようにするのです。そうしておいて、社長と私だけになる機会を作つて

は、とうとう、一軒家を持たせるから、つき合えというような事をいうのです。」

(弁護人)

「それは、具体的にいえば妾になれという意味ですか」

(亘)

「そうだと思います。でも私は肉体交渉はありませんし、そんな事いやだときっぱり断りました。」

(弁護人)

「それで直ぐやめたのですか」

(亘)

「いいえ、そんな事があって、気まづくなっている内、社内の同僚——名前を言わなくてはいけませんか。」

(弁護人)

「言いたくなければ言わなくても結構です」

(亘)

「同僚で、所謂コールガールをしているのがいたのです。肉体的な事をせず、ただ映画やお茶のお供をしたり、ダンスをしたり、東京見物のお供をしたりしていれば、一晚数時間で二、三千円になるから是非やれ、自分の属している会は、その辺の桃色クラブと違って高級なのだからというのです。私も、両親を

失い、伯父伯母に育てられ、やっと東京で自活しているだけにお給料だけでは苦しいので、その同僚の言葉に従って、その会に行ってみました。会の模様を言うのですか。」

(弁護士)

「東邦物産をやめた動機について関係のあることだけで結構です」

(亘)

「会は規約のうるさい所で、電話で呼び出された時、指定の場所——大概喫茶店ですが——へ行ってお客様と落ち合って遊ぶのですが、大抵は、最後にホテルか旅館へ行こ

うと言われます。でもこの時が大事で何とかかんとかいって規定の時間、それは十二時となっていますが、約束の時間まで引っ張っておいて、それも、すぐ車の拾えるような駅前とか繁華街に近い所にいて、時間ですからと云ってサッと逃げるように分れてしまうので



す。そうでないと、きっとホテルなどに連れ込まれるからです。」

(弁護士)

「分かりました。貴女が東邦物産に勤務しながらコールガールになった事は分かりましたが、何故退職したのです」

(亘)

「それをこれから申しのべます。或る日、それは一昨年の暮近くだったと思います。会から呼ばれて、新宿の指定の喫茶店今はなくなって、キャバレーか何かになっていると思います。行ってみると、その人は何と南田社長なのです。私はびっくりしましたが、社長は今思えばあまり驚いた様子もなく、きっと私の行動を知っていて、わざと呼んだのではないかと思えます。私が何とか言い訳をして逃げようとした所今は個人の自由の時間だ

何も社長とタイピストと考える必要はない一緒に楽しく遊ぼうという訳で仕方なくお供しました。お定まりのキャバレーからバーへのコースです。バーを二、三軒歩く中、十二時近くなりましたので、もう帰ろうとすると、送ってゆくというのです。社長ですし、今日

は何も変な事をしないので安心したのがいけなかったのです。これが最後だというバーです。すめられるままに、いい気になってのんだカクテルに、恐らくバーテンと示し合わせて睡眠薬でも入れたのでしょうか。忽ち眠くなって分らなくなっていました。気がついてみたら、案の定、ホテルの一室、鍵のかかった立派な部屋で、もうどうする事も出来ませんでした。」

(弁護人)

「そこでどうしました。肉体を求められたのですか。」

(亘)

「求められたと言えば求められたのしょうが普通と違うのです。恥づかしくって」

(弁護人)

「大事な事ですから恥づかしからずに、はっきり言って下さい。」

(亘)

「ハイ、絶対に処女は奪わないから言う事をきけということです。処女さえ全う出来るのならと観念して、というよりも、気はついていても、さっきの睡眠薬らしいのがきいているのか、何だか気だるくて反抗する気力が起きません。されるままに、全部ぬがされて、パ

ンティだけにされてしまいました。すると社長は矢庭に縄をとり出して私の手足を縛るのです。思わずびくつきりして叫び声をあげると、タオルで猿轡をかまされてしまいました。身動きも、声も出せないようにしておいて、社長は、私の身体をニンコリとながめまして、社長は、私の身体をニンコリとながめまして、持の悪いこと、私は猿轡の下で呻きました。その中鞆から羽毛のようなものを取り出して腋下、横腹、足の裏など、一番くすぐったい所ばかり選んで擦るのです。そのくすぐったい事、苦しい事、今思い出してもぞっとします。やがて私は、冷汗を出してもだえ呻きました。やっと擦り責から解放されたと思った途端、何処にかくしてあったのか、しなやかな鞭が取り出され、うつ伏せにさせては背中といわず、お尻といわず、くまなくたたきまわります。力一杯ではないのでしよう、我慢できない程痛くはないのです。が、ピシーシ、ピシツという金属的な音が、いやが上にも私の神経にひきます。一打毎に、身をくねらせて、ベッドの上をのたうちまわる私に嗜虐を感じてか、だんだん鞭に力が入ってきました。でも、その晩はヒリヒリ痛みますしたが、翌日はもう何でもありませんでした。鞭

打ちで疲れたのか、社長もグッタリしてしばらく休んでいましたが、それからが大変です。縛った私の両足を持ちあげて、ベッドの頭の方につなぐのです。丁度赤ちゃんのおむつを取り替える時のような恰好にしておいて、とうとうパンティに手がかかります。約束が違えばかりに私は激しく身もだえしました。が縛られているので、どうすることもできません。君を傷つけやしないから安心したまえと言いながら、ピシヤピシヤむき出しの私のお尻をたたくのです。そして取り出されたのが浣腸器です。身動きできないようにしておいて、グリセリン浣腸をするのです。の、私は忽ち便意を催しました。でも男の前でどうして排便なんかできましょう。私は猿轡の下で声にならない声でトイレに行かせて呉れるよう哀願しました。でも声にならないもどかしさ、社長はそれを楽しみながら知らん顔です。遂に私はこらえ切れなくなつて涙が出てきました。浣腸の限界を知っているのでしょう、もう駄目だという瞬間、何時用意したのか、差込み便器があてがわれ、社長の手が私のお腹をグルグルと摩擦しはじめました。もうこうなっては我慢の限界を通りこして、とうとう、私の便は社長の眼前にさ

らされてしまったのです。私は死んでしまいたいような恥づかしさに、気が遠くなるようにグッタリとしてしまいました。便がきれいに始末され、やっと縄をとかれ、部屋続きのバスに入るよう言われた時は、さしも夜長の冬の夜も白々と明けそめていました。でも処女を奪われなかったのだけが本当に幸だったと思っています。」

(弁護人)

「そこで会社をやめた訳ですか」

(亘)

「そうです。もうとても明日から社長の顔を見るのが恥づかしくて、その日限り退職しました。送られてきた退職金は規定の倍位ありました。」

(弁護人)

「それから、どうしました」

(亘)

「会社をやめてしまつては生活できないし、コールガールでは不安定な上、こんな変った人にかかつてはたまらないので、就職するよう努力してみました。身寄りもなく、又その頃は割合就職難の時でしたので、新卒以外はなかなか就職できず、一時しのぎ位に思つて、喫茶店のウェイトレスになりました。こ

れは一番手つとり早いのです。ところが、どこでどうかぎつけるのか、恐らく興信所でも使うのでしょうか、一週間もすると、社長がやってくる、つき合えというのです。勿論私はことわりしました。すると、いやがらせにでしよう、わざとあたりに聞えるように、もうコールガールはしていないのか、とか、君はマゾだとか聞いているが本当か、などと聞くのです。お客さんも同僚も変な目でみるようになって、居たたまれず私はそのお店をやめました。止めては生きて行けないので、今度は神田のバーにつとめました。すると間もなく又しても社長がやってくるのです。最初はわざと私など眼もくれないようにして、散々のんで、チップもふんだんにはずみ、マダムにもバーテンにも信用をつけることを二、三回してから、客のこんでいる時を見はからってやって来ました。今日は私を指名して小声で又くどくのです。絶対にあんな恥づかしい目に合いたくはないので断乎はねつけますと、聞えよがしにマダムに言うのです。今女の子は前にコールガールだったらしい、わしの店の者がそう言うとした、どうだ今夜わしにつき合えませんか、といって大笑するので、いいお客と思ひ込んでゐるマダムにはコ

ールガールなんかしていた品の悪い女ということ、翌日からそこも首です。こうして行く先行く先をすぐかぎつけては、社長は先ず私をくどき、断られると、すぐ首にされるよう、コールガール、コールガールと呼ぶのです。」

(弁護人)

「事件の時、貴女は、どこに勤めていましたか」

(亘)

「その時は、信濃町の駅裏の小さなバーラムールにいました。」

(弁護人)

「その時の模様を話して下さい」

(亘)

「その晩は、マダムは故郷に法事があつて帰り、バーテンと私と二人きりでした。この辺は都心に近いわりに高級住宅街で、歓楽街とはやや離れており、宵の口はあまり客もありません。遅くなって、銀座や新宿でのんだ人が、はしごの最後に寄ってゆくので、十時頃迄は暇なのです。その日は会社の電休日だったもので、松井が夕方から来てのんでいました。幸にこんな小さなバーでは社長も発見出来ないとみえて、もう一ヶ月になるというの

に姿も見せません。今迄のいきさつを知って——勿論、松井にはあんな恥づかしい目にあつたとは具体的に言つてはいませんが、社長がいやらしい事を言う、妾にならないかというのを断ると、執拗に私をおいかけて、コールガールとか根も葉もない事を言つて私を店から追い出すという事は松井もよく知っています。松井は私の勤め先にきては時々飲みますが、飲みっぷりもさっぱりして金払いもよく、人なつっこいので、バーテンともすぐ仲よくなり、ここラムールでも、私の婚約者としてお客の中でもごく親しく鄭重に扱ってくれていました。そこへ社長が入ってきたのです。例によって例の如く、大げさな態度で、バーテンをつかまえ、最高のカクテルの要求です。上客とみてバーテンも愛想よく、親しげに松井にもカクテルをおごろうとします。あわてて私は松井を物かげに呼んで、あれが問題の社長だと教えました。にがにがしげにスタンドに戻った松井は、もう社長の呼びかけに返事もしません。その中例によつて、社長は私をボックスに呼んで、口説きはじめました。とつさに私は松井に助けを求めました。立ち上った松井、一瞬事態の推移を見極めるように瞳を大きく見開いた社長は、

矢庭に財布から一万円札を一枚ぬきとると、バーテンに投げつけるように差し出すや、大股に身を翻えすように出てゆくのと、その後を松井が追つたのと同時でした。外に二人が出たとみるや、急にバタバタという足音がして、それが急速に裏道の方に遠ざかっていったのは、社長が逃げ、松井がそれを追いかけて行つたに違いありません。あわてて、バーテンと私が外に出た時には、もう二人の姿は闇にのまれて見えませんでした。」

(弁護人)

「分りました。それから逃げる南田氏を追いつめて、被告人が、国電ガード下で殴打したわけですね。それにしても、貴女はどうして被告人に自首をすすめなかったのですか」

(亘)

「それっきり松井は私の店へ姿を見せませんし、その夜すぐ松井の下宿に行ってみました。故郷に帰つたきり松井は姿を見せなかったのです。私もいけないと思つても、あまりに社長がにくくて、いい気味だとは思つても同情は起きません。怪我させる事は悪い事だとは思いますが、私にはどうすることもできないのです。」

(弁護人)

「よく分りました。これで終わります」

続いて検事の反対訊問、バーテン、亘寿子のかつて勤めた店のマダム等証人の訊問が行われ、判決は次回となったが、大体同じような事が、検事、弁護人の論証の観点に従って行われるのみ故、ここでは省略する。

ただ最後に、二月十五日の新聞は社会面の隅にごく小さく次のように報じた事を附記するに留めたい。

『松井明に懲役一年、執行猶予三年』

「東邦物産社長南田健太郎氏襲撃事件で起訴されていた松井明(二三)にかかる刑事裁判は、二月十四日、東京地裁で戸田裁判長係で開かれ被告人松井明に懲役一年、但し執行猶予三年の判決を下した。松井が初犯であること、日頃の行動が健全なこと、一方南田社長にも松井の婚約者に対して、非礼なる言動のあったことが、心証をよくしたものと思われる。なお、双方共上告はしない模様である。」

(おわり)

☆

☆

血に咲く花

(殉国勇女伝)

——女性男装シリーズ——

田 島 直 士

一九××も年の瀬に迫ったある夜、北満洲の日本軍、S師団の兵舎から一団の騎馬隊が闇をついて出撃した。総勢は十人、凍てついた地面に乾いた蹄の音を響かせて緊張した空気を生み出していた。やがて、遅れて昇った月の光が、一行の姿を白く照らし出した。いずれもカーキ色のマントの下に、同色のぴっちりした軍服、拍車の光る長靴、軍帽をきちんと着けた凛々しい青年将校たちだった。思いつめたようなひきしまった表情の中に、けいけんな殉教者達にのみ見受けられる安らかなさも感じられた。若い、皆二十才前後の若者

たちだ。この澄み切ったような清純な美しさはどうだろう。汗くさい筈の軍服からはおよそ縁遠い、甘美な香料の匂いさえ漂うようだ。軍帽の下に見える瞳はまつ毛が長く、優しそうな感じだったし、唇にもほんのりと紅みがさしている。そういえば、思いなしか軍服の上から胸のあたりがややふっくら盛り上っているようだ。そう、この一群の騎馬将校たちは皆、うら若い乙女たちなのだった。では、この厳寒の中を完全武装して、この乙女たちは一体何処に何をしに行くと云うのだろうか。

やがて、一行は山の麓の点々とする民家の灯に近づくと、一斉にひらりと馬から降り、軍刀を握りしめると先頭の乙女を中心に円陣を作り、何かを打ち合せはじめた。低い声で話し合い、うなずき合うと、一人一人が白い手袋を脱いでお互いの手の甲に唇をつけ合った。一瞬、乙女らしい感傷的な雰囲気 flowed した。

「まるで卒業式のあとみたいだわ」と先頭の乙女は呟き、睨を閉じた。白い頬に涙が一筋流れた。だが次の瞬間、追憶からさめた彼女は過去をふり切るように、厳しい表情に戻る

と呟えた声で

「前進！」と云って軍刀を抜いた。後の九人も軍刀を抜き、美佐子に従って足音をひそめ、麓の民家をめざして一步一步進んでいった。

× × ×

その前の年の、やはり十二月末のことだった。奉天の日本領事館では、戦時とはいえ、数日を残すだけとなったこの年を送り、新年を迎える準備で若い館員たちは浮足だった。中でも来春早々に結婚をひかえた隅田悦夫官補は、東京にいる許婚者、大河内美佐子と正月の三カ日を過ぎす許可を得て、明日内地に向かうことになっていた。知らず知らずに頬に浮かんで来る微笑をかくす事が出来ず同僚たちから「おい、おこれおこれ」とからかわれていた。

美佐子は、父が伯爵で貴族院議員、現在、華族や上流階級の子女が行くG学院の女子部の最上級生で、来春卒業と同時に悦夫と華燭の典を挙げるようになっていた。

背のすらりと高い、細面、中高の華やかな容姿の美佐子は、人並みすぐれた成績と、この学院の特技である馬術の腕前で、学院の花形であり、皆から姉のように慕われていた。

丁度、父直敏の友人である満洲駐在領事の沼田省吾の娘、陽子と無二の友達同志（他の友人はSだという評判さえあった）だったことから、沼田から部下のTS大出の秀才、隅田悦夫に紹介されると、お互が惹かれて、順調に話は運んだ。そして、沼田の満洲赴任と共に悦夫も内地から着任したのだった。

「さあ、君はいよいよ明日は、フィアンセのもとに帰るのだね、今夜はゆっくり寝みたまえ」

沼田が、悦夫の肩を叩いた。もう十時だった。

「ええ、でもこの書類だけは整理しておきます」と答えてペンを置いた。

その時、突然電灯が消えると同時に、雷光のような光が部屋を横切った。と見る間にガラスのこわれる音がして、一群の人間が口々に喚きながらなだれ込んで来た。明らかに××語だった。

「お前達は何者だ。日本領事館と知って侵入したのか」

と、流暢な××語で悦夫が尋ねた。だが相手はそれに答えず、機銃を乱射しはじめた。驚いてかけつけた館員たちの中には弾を受けて倒れる者がある、傷つく者がある。さながら

ら生地獄の様相だった。沼田や悦夫も拳銃で応戦したが、相手は五十人をこえる人数、捕えられてしまった。やがて暴徒たちは二人を馬に縛りつけると疾走し、三十分もたった後ある林の中に二人を連れこみ、立木に縛りつけた。その林にはかがり火が焚かれて、これらの暴徒達はその囲りにたむろしていた。明らかに××国のバルチザンであった。その中の鬚の黒い、兇暴な表情をしたのが首領のニコライだった。彼は二人に、

「お前達は日本軍の秘密書類を預かっている筈だ。それを渡して貰いたい」と脅かしたが沼田らはあくまでも黙り通した。すると、その小屋の中から一人の男が出て来た。熊のようなニコライと並ぶとすんなり小柄だったが、厳しい、噛みつくような調子で、甲高い声で話すのを聞いて、二人は、これは女性で、ニコライの情婦のニーナである事を知った。バルチザンの中でも最も兇暴なこの一味は、ニコライよりもニーナが実際上の指揮をとっていたというよかった。一つの主義に身を挺するということもあったにはあったが、ニーナの持ち前の残酷さで、この一味は殊更に兇暴化し、反対勢力をふるえ上らせていたのだった。しかも、このニーナはまだ

十三、四才の若い女であった。そして、栗色の柔い髪の毛、純白のすきとおった肌、吊り上り気味の青い目、つんと高い鼻、真紅で薄い唇の、見るからに勝気で濃艶な美女だった。今、彼女は白い毛皮の帽子に黒鞆皮のコート、揃いの乗馬ズボンに、やはり黒皮の太い胴の長靴をはいて、すらりと立っていた。手には、よくしなる鞭を、腰には細身の長身の長剣を帯びている。二人の方に激しい情熱的な流し目をくれたが、これは、犠牲者を血祭りに上げる前の品定めのものであることを知らない者には、二人を強く愛しているように見えただろう。

「お前たち、覚悟はいいね、わたし達の要求を断ったらどうなるか知ってるね」

と、唇から火を吐くかと思われる調子で云うと、鞭をひゅっと鳴らした。悦夫は火が身体の上を走ったような感じがした。二度、三度。十度ばかりくり返されようか、ニーナの身体がしなると鞭は非情に二人の体からみついた。

「私達は平和を望んでいるのだ。侵略の野望を持つ××国に、国を売るわけにはいかん」

沼田領事がきっぱり云った。

「畜生」とニーナは頬を紅潮させると、すら

りと剣を抜き、いきなり沼田の眼を抉った。迸る鮮血にもだえる姿を見ると、ニーナは益々刺戟を受け、恍惚とした表情で悦夫の右肩からななめに一太刀与えた。二人のものがく様子に喜々として長靴を鮮血の中に踏みこみ、一切り、二切り、切りつけた末、拍車で腹部を狂気のように蹴りまくった。やがて、二人は息絶えた。見るもみじめな姿だった。

二人の死体は、翌日の夕方、近くの川に流れていた。日本領事館の虐殺事件に対してただちに出兵されたが、完全に敵対国でない××国に対して国際法上、如何ともなしがたかった。

× × ×

翌年三月の、まだうすら寒い奉天の駅に美しい娘たちが十人ほど到着した。いうまでもなく一人は領事館襲撃事件で、女首領ニーナの手で惨殺された隅田悦夫の許婚者、大河内美佐子であり、もう一人は沼田領事の娘の陽子だった。他の八人もそれぞれ、射殺された館員の娘や恋人や若妻だった。皆、沈んだ表情のうちに決意の色を漲らせ、そうした心のあり方を象徴するかのように黒い喪服か、それに準じたものを着ていた。

この十人の女性たちが大陸をおとずれた理

由は、自分の肉親や親しい人たちの霊をとむらうと共に、これらの人たちが身を捧げて来た大陸に、女性として奉仕をしたいというものだった。こうして健気な願いを聞き入れた日本の領事(沼田の後任者)はさしあたって北満のS師団の看護に従事してもらうことになったのだった。お嬢さん育ちの人たちが殆どなので、こうした激務に耐え得るだろうかど案じる者が多かったが、献身的な働きぶりに加えて気品の良さ、優しさが将兵たちを感激させ、士気を鼓舞した。師団長のS少将も彼女たちを掌中の玉のように大事にした。

ところで、彼女たちのこの渡満の本当の目的はなんだったのか、看護員として挺身するというのは余りにも思いつきに過ぎたし又、父や夫や恋人たちの慰霊のためならいつまでも大陸にとどまる必要もあるまい。

× × ×

大河内美佐子が、日本領事館の虐殺事件を知ったのは事件の翌々日だった。予定の日になっても帰らない悦夫を案じていると電報がとどいた。ただ「スミダエツオサンガナクナラレマシタ」という電文だったが、やがて外務省から詳しい連絡が入った。そして、沼田陽子が眼を泣きはらして駆けこんで来た。父

や母も悲嘆にくれたが、美佐子は何かを決心したような様子で、きつと唇を噛んでいた。そして「お姉さま！」と泣きくずれる可憐な陽子を強く抱いて、唇に軽く自分の唇をあてた。

その翌日から美佐子は行動を開始した。外務省で調べた遺族のもとに行き、自分と同年輩の人たちを集めた。それらは犠牲者の娘たちであり、妹であり、恋人たちであった。こうして集まったのが十人だった。美佐子はこれらの人たちに今度の事件のあらましを説明した。そして、こうして苦しみながら死んでいった自分たちの肉親や愛する人たちの復讐をすると共に、日本の外憂をとり除く助けになるために、身を挺すること、そのためには若い女性という有利な立場を利用して、日本軍にも先ず安心させることが出来ることなどを述べ、「生死を共にすることの出来る人だけ自分についてきてもらいたい」と呼びかけたところ、一人の脱落者もなかった。

美佐子は、この十人と一緒に更に馬術の技を磨くと共に剣道や柔道も身につけることにした。いずれも一流の師範についたので、皆上達が早く、殊に美佐子は軍人の最強者にも劣らないと折紙がつけられる位だった。こうして、見た目には華やかで美しく、可憐な、すぐにも社交界に出て行けそうな若い貴婦人たちが、同時に熟練な騎士であり、練達の剣士であるという奇蹟が起こったのだった。やがて三月末、G学院で卒業生総代として卒業スピーチをして最後の花を飾った美佐子は、妹のような陽子をはじめ、同志九人と共に満蒙の地に來たのだ。

× × ×

看護員としての生活の合間に、彼女らは無論密かに馬術と剣術の腕を磨いていた。なぜ剣術や柔術はやって、射撃の訓練をしなかったかという、襲撃は夜襲、肉迫戦ときめて居り、その方が相手の虚をつくことになると思っただけだった。

ある日、同志の一人がニーナを首領とするバルチザンが又もやこの地に移って来るらしいという情報を得た。この時にそなえて美佐子は斬り込み隊の制服を作る事にした。「死へのウエディング・ドレスよ」と彼女は冗談を云った。まず全員の寸法をとって、G学院時代に乗馬服一式をあつらえた東京テーラーに注文した。日本陸軍のものと同じ体裁で、所々に改良を加えた軍服を、ずっと上質の布地で作らせ、長靴も特製の軽くて堅牢なもの

をあつらえた。又、軍刀はそれぞれが布団包みに深く秘めて持って來た家伝来の物を持ち美佐子は悦夫の片身の備前長船の名刀の小振りを使うことにした。

いよいよ決行の日が來た。バルチザン達は兵營から三里離れた山麓の民家に寝泊りして居り、酒宴で酔いつぶれていることがわかった。総勢は五十人、一人が五人という計算だった。奇しくも悦夫たちが殺された日から丁度一年目だった。十時に兵營が消灯されると乙女らは死装束に身をかためた。花恥かしい乙女たちの中には鏡に写る軍服姿の自分に消え入りそうな気持になる者もいたが、同時に女の自分が勇敢な男に变身していくような頼もしい気持にもなった。女たちは顔も薄化粧した。美佐子は、父のフランス土産のとして置きのコティの香水を体にしみこませた。こうしたせい沢は、今のようの場合にふさわしくないようでもあったが、この死がこれまでの生、すべてに匹敵する以上、最も相応しいとさえ思われた。軍服を着終って、短かめにカールさせた髪の上に軍帽をかぶり、軍刀の柄をぐいと握って鏡に向かうと、我ながら天晴れな若武者ぶりだった。十九の娘ざかりはこの日のために用意されたかのようなだった。

陽子は、美佐子のこの姿を見ると



乙女らの指揮官だった。次に控えた関門は首

「まあ、お勇ましい、お姉さま！
むしろお兄さまと呼びたい位だわ」と頬を紅らめた。
陽子も白いふっくらとした顔に軍帽がよくうつって、宝塚歌劇の生徒のように可憐な騎兵姿であった。
「あなたも、素敵よ」と二人は抱擁し合った。頬がほてって燃えるようだった。頬を寄せ合うと甘い息の匂いが二人の間に通い合った。何時死んでもいいような幸福感だった。だが時間を失ってはならない。

美佐子は十人の

尾よく馬を得て衛兵の目を逃れ、兵営を抜け出すことだった。馬は騎兵将校たちのものを借りることにした。日頃から馴れていたもので馬達はおとなしかった。衛兵は、可哀そうだったが美佐子が当て身で眠むらせることにした。こうして十人は無事兵営を出ることが出来たのだった。

× × ×

馬からおりた一行は打ち合せがすむと、樹に馬をつなぎ、マントを脱いだ。そして軍服の上に白だすきをきりりと締めた。美佐子は先頭に立つと軍刀を抜きはなち、民家まで息をひそめ、身を据めて前進した。宴会は終って居り、バルチザン達は寝についているらしく家は静まり返っていた。先頭的美佐子は体をドアにぶっつけた。ドアが中に飛びこんだ。続いて後の九人も美佐子にならった。赤々と灯のともされた部屋には荒くれ男たちが淫らな恰好で寝ていた。中には情婦か酌婦か、女と抱き合っている者もいて、美佐子たちの侵入には気づかなかった。美佐子は、しっかりと足取りでつかつか大股に一人の男のそばに近寄ると長靴で軽く足蹴にした。何やらぶつぶつぶやき、見苦しく寝返りを打った男が血走った目をあけたが、咄嗟のこ

とで声も出なかった。あわててそばのピストルに手をのばし、美佐子に向けて発射した。

しかしピストルが火を吹くのと、美佐子の右手から氷の刃が走ったのは同時だった。男は獣のような物凄い断末魔の叫び声をたてると手を虚空に伸ばして血の海の中で醜くのたうっていた。最初の犠牲を冴え冴えとした表情で見ると美佐子には勇気がこんこんと湧いて来た。銃声と叫び声に目を覚ましたバルチザン達は寝呆け眼の中に、自分達をとり囲む、白刃を持って軍服に凜々しく白だすきをした、若い襲撃者の姿を見てすっかりおびえてしまった。そして、半裸のまま銃にも手が伸ばせず、あたりの棒や懐にのんだあいくちを掴んで血迷って応戦して来た。いくら敵が多勢でも一応相手にこちらの存在が判るまでは攻撃をしないというのが、武士道というものだ。美佐子は信じていた。一歩進むと凜とした声で、流暢な××語で叫んだ。

「我々は昨年の暮、お前達に殺された日本領事館員の娘や妻や恋人である。日本の習慣に従ってカタキウチのため斬りこんだ。日本を脅やかす卑怯な敵としてお前たちを生かしておくことは出来ない。女達は、抵抗しない限り非戦闘員と見なすが、抵抗すれば容赦しな

い！」

気怏れした相手も、こちらが女達と見ると組みし易いと見たか、勢いこんで応戦して来た。「傷をつけずに生捕りにしろ！」と好色そうに赤ら顔をほてらせる者もいた。しかし日頃鍛え上げた乙女たちの技には敵せず、半数が不様になぎ倒されてしまった。そして、情婦たちの中には勇敢に乙女たちと渡り合う者もいたが到底相手ではなく、忽ち逃げ去った。残る二十人あまりも乙女たちの大奮戦で倒された。中でも美佐子の奮戦振りは荒ふる神のような凄艶さだった。一人の男の胸板を貫いた剣尖がその後の男を倒したと見るや、彼女の背後に迫った敵を振り返りざま袈裟がけに斬り伏せた。白いたすきは朱に染まり、刀の柄は血でぬるぬるした。滑りやすい血糊の上を長靴で踏みしめて、逃げる敵を追っては斬り、政め寄せる敵を迎えては斬った。陽子も、日頃の女らしさとは打って違って機敏に立ち廻り、敵を斬り伏せた。

しかし、美佐子たちの目ざすものは、手下のバルチザンたちでなく、ニコライと情婦のニーナだった。屍のうず高い室内をさがし廻っていた時、突然廻っていた時、突然、窓の闇から銃声が響いて数人の乙女が朱に染ま

って倒れた。助けに駆け寄ろうとした乙女たちにも又、弾丸は浴びせられた。そして美佐子と陽子とをのぞいた味方は全部倒されてしまった。歯がみるみる二人の前に銃を擬したニコライと黒い皮服を着た厄病神のようなニーナが憎々しげに笑いながら立っていた。ニーナは美しいだけによけい冷酷な感じだった。

「お前達の負けだな！ 命はもらったようなものだが、悪いようにはせん、俺が可愛がってやる」と、ニコライがせせら笑って近づこうとする。美佐子が叫んだ。

「命が惜しいとは思わぬ。お前も首領ならあたしと一騎討ちをしてほしい」

「死に急ぐものではない」

とニコライがなだめようとすると、ニーナが眉を逆立てて云った。彼女は嫉妬心から、ニコライが妙な仏心を出すのを我慢できず、早く二人を始末したかったのだ。

「この女のいうことももっともだわ、ニコライ、腕比べして見ない。お前はいい女を見るとすぐ鼻の下を長くしちゃうんだから」

けしかけられたニコライは、不承々々、長剣を取った。さすがに太刀風は鋭い。美佐子は突きをよけて、後に飛びのいては手許に

飛びこんで胴をねらおうと試みた。二人の呼吸がまざり、男はうっとりしたような表情になり、時折触れる美佐子の感触を楽しんでいるようだった。美佐子はこうした相手の隙を見すまして太刀を横にないだ。この時、銃声、

がひびいた。ニーナの射ったピストルが狙いがはずれてニコライの太刀を落した。一歩踏みこんで斬ろうとした美佐子は、相手が武器を落したと見るや自分も刀をすてて組みついて行った。体は、男に比べると小兵だが柔

縛られた美女ばかりの超豪華アルバム

限定版
写真集

美しき縛しめ

第三集 略号「美3」
頒価一〇〇〇円（送共）

一般書店売りは一切いたしません。直接天星社へお申込み下さい。

美人モデルの縄にあえぐ姿態が、両面特アート紙にギッシリとグラビヤで印刷されて、皆様のお求めを心からお待ちしております。内容は次に掲げた百二十態の写真で、いずれも今まで一回も発表されたことのない、とっておきの秘蔵品ばかりです。

◎緊縛女体百二十態 △本誌優秀モデル総登場の写真集▽

樹間にさらされる（絹川）
豆しぼりの猿ぐつわ（絹川）
縄目と裸身の羞らい（長野）
後手首に喰込む縄目（梨花）
荷造り縛り人形（大塚）
バンド着用しぼり（遠藤）
替ゴム猿ぐつわ虐め（東浦）
ゴム布に包まれて（梨花）
椅子利用エビ縛り（東浦）
厳しき銅絞（絹川）

輝く白肌をさらして（関谷）
荒縄黒皮フンドシ（大塚）
野性的な緊縛模様（絹川）
全裸のいましめ（愛川）
白晒六尺フンドシ（遠藤）
百CC浣腸器責め（大塚）
荒縄のトゲに喘ぐ（大塚）
両手吊りさらし（桜井）
M女性の本領発揮（梨花）
足錠をつけられる（四方）

美貌を踏みつける（絹川）
悦虐の園にさまよう（水本）
若肌に襲う白ロープ（若原）
蚊群の襲うにまかせ（絹川）
きびしき縄目に喘ぐ（加茂）
麗しき裸身の縄目（絹川）
猿ぐつわ黒フン縛り（愛川）
あえぐゴム布嵌口（大塚）
美しい顔をなぶる（梨花）
飛び出す双丘と後手（長野）

術の心得のある彼女は、やがて男に馬乗りになると組み敷いた。そして、腰に差していた短刀のさやを払うと喉元深く、柄も通れと突き刺した。どっと溢れ出る血汐の中でニコライは呻き声をたてて息絶えていった。一方ピストルでニコライの助太刀をしようとしたニーナは陽子から利腕をとられて失敗し、今丁度発止と刃を打ち合せているところだった。陽子の父の両眼を抉った長剣は、陽子の胸に向かって蛇のように執拗に突き出された。それを横に払って防戦する陽子との間に女同志の激しい感情が火花を散らせた。一閃突き出された長剣があわれ、陽子の胸板を貫いたと思ったが、陽子の体は軽く地を蹴って飛び上り、次の瞬間ニーナは美しい顔を真向唐竹割りに断ち割られて地面にくず折れた。

× × ×

夜はそろそろ明けそめようとしていた。朝の光の中で死体は赤黒く積み重なっていた。最後の銃撃に倒れた乙女たちの顔は、しかし晴れ晴れとしていた。

美佐子と陽子は手分けして乙女たちの遺体を川から汲んできた水できれいに洗って自分たちのコンパクトで化粧を施してやった。そして、自分たちも血に染まった軍服を脱ぎ、

首繩胴縛り股間縛り(絹川)
 被虐に耐えた表情(水本)
 生首フオート(新宮)
 祭壇のささげもの(大塚)
 パンプス開股しぼり(大塚)
 越中フンドシ緊縛(大塚)
 飛びだした双丘(加茂)
 塩水を無理に飲ます(大塚)
 胸部と臍窩の魅力(遠藤)
 臍窩を狙う蛇の舌(梨花)
 顔枷の装着中(四方)
 鼻孔ゼムピン責め(絹川)
 鼻孔から薬液注入(大塚)
 豊軀にまつわる黒繩(若原)
 ピンクカバーと豆絞(絹川)
 斬首処刑フオート(新宮)
 両手首吊りさらし(大塚)
 後手足首逆エビ縛り(梨花)
 丈なす黒髪(大塚)
 責衣からのぞく乳房(大塚)
 美貌放心の表情(梨花)
 後手強烈しぼり(梨花)
 従順なるマゾの発散(竹野)
 手錠足錠首くさり(四方)
 白晒六尺フンドシ(大塚)
 ガンジガラメの縄目(絹川)
 首繩胴絞め股間縛(桜井)
 引き回される裸身(絹川)
 豊胸を彩る茶の繩(大塚)
 捕われの女学生(竹花)

被虐のマゾ女性(東浦)
 大きな猿ぐつわ(竹野)
 可愛い足首(絹川)
 黒髪なぶり(大塚)
 喰い込む柔肌に繩(大塚)
 裸身に投げたタオル(加茂)
 緊縛の優美ポーズ(絹川)
 くわえた赤い花(絹川)
 エビしぼり正面(梨花)
 美貌美身の緊縛(大塚)
 首を締めるくさり(絹川)
 手吊りのけぞり姿態(桜井)
 乳首に咬みつく蛇(大塚)
 後手縛りと臀部(絹川)
 ピンクの腰巻さらし(東浦)
 重圧に耐える表情(大塚)
 強烈アグラしぼり(絹川)
 ボリウムの誇り(桜井)
 鏡にうつす裸しぼり(山路)
 惜しみなく晒す裸身(大塚)
 ゴム帽子麗身晒し(梨花)
 首絞めに苦しむ(大塚)
 麗身をもだえさす(絹川)
 猿ぐつわの苦悶(加茂)
 黒繩にもだえて(大塚)
 全裸の手吊り責め(大塚)
 ゴムの猿ぐつわ(絹川)
 汚れた繩と輝く白肌(絹川)
 手首足首椅子しぼり(梨花)
 あえぐ夫人の表情(関谷)

首吊りのプレイ(大塚)
 後手縛り猿ぐつわ(絹川)
 電光に肌は映えて(梨花)
 噛まされる猿轡(東浦)
 柔肌高手小手(梨花)
 高手背高しぼり(水本)
 後手小手股間縛り(絹川)
 柱後手縛りにて(山路)
 下げられたズロース(梨花)
 十文字しぼり(桜井)
 木洩れ陽に白き肌(絹川)
 叫ぶ捕われの乙女(大塚)
 汗まみれの被虐(梨花)
 洋服タンスに吊る(大塚)
 全裸にてもだえる(関谷)
 黒繩地獄(四方)
 るせつの裸身(梨花)
 セーラー服を縛る(梨花)
 首繩から膝繩まで(大塚)
 高々と上った後手(梨花)
 くびれた胸と腹部(大塚)
 カクテルドレスの女(絹川)
 浣腸責め(大塚)
 首のくさりに悶える(絹川)
 黒のズロース(絹川)
 破られたズボン(梨花)
 正面立姿全身縛り(大塚)
 くさりに捕捉される(山路)
 亀甲型股間しぼり(大塚)
 長襦袢と腰巻(館)

馬にかけたバッグから白いシャツと晒し木綿を持って来て、上半身の白い裸身にまず晒し木綿を巻いた。白いシャツに着換えると二人はここで強く抱き合った。ほのかなぬくみが伝わり、豊かな乳房同志の触れ合いが二人を一つにとけ合せてしまう。

「悦夫さん！ いよいよ貴方のおそばに参りすわ！」

「パパ、陽子はお役目を果たしたわ！」

二人は呟いたが、本当に愛し合っているのは、自分達二人以外にないように思われてきた。

「今日は二人の結婚式なのだわ！」

やがて、二人は腕をほどくと東の空を見つめて、今しも昇ってくる朝日に一礼し、長靴のまま正座した。

氷のように冷めたい光をたたえた短刀を握るとまず美佐子がシャツの上から一気に腹に突き立てた。鮮血が迸り出た。

「さあ、陽子！ あなたも！」と苦しい息の下から叫ぶと陽子もほえんで美佐子にならった。二人は苦悶に身をよじらせたが、それに耐えて十文字に腹を屠した。そして、言切れる前、「大日本帝国万才！」と叫んだ。さわやかな朝の光が二人の遺体にふりそそいでさながら二弁の梅の花のように見えた。

【告白】

私の理想の女性像

田村清彦



歌舞伎の三姫というのは、「祇園祭礼信仰記」の雪姫と「鎌倉三代記」の時姫と「本朝二十四孝」の八重垣姫のことです。しかし、私は、これら三つの劇題に対して、いま一つ「中将姫古跡松」を加えて、歌舞伎の四姫と称したいという気持っています。

このうち、雪姫は、金閣寺の庭の桜の木に繋がれますし、また中将姫は、雪のつもった庭で雪責めに遭わされます。気品が高く優雅しくて美しいお姫さまが、盛装のまままで縄で縛られる姿は、なんとすばらしいものなのでしょう。

そこに流れる雰囲気は、あるときは、はっと、息をのむような妖美さに溢れたものであり、あるときは、美しい女性への憧れに胸のときめきを覚えるような甘美なものであります。昇華された性的快感が、見る者の全身を突っ走ることもあります。

美しい女性が美しい振り袖姿で現われたとき、それを眺める側の女性たちもまた、一種の満足感と歓びを感じ得します。さらに、その美しい女性が盛装のまま後ろ手に括られるときには、それを眺める側の女性の胸のなかをしみじみとした愉悦と感動の血潮が、ひそかに波打って流れるのではないのでしょうか。彼

女は無意識の裡に、自分自身を、その被縛の姫君の立ち場に置いて、その立ち場と融け合っているのかもしれない。

歌舞伎の姫君に限らず、映画やテレビドラマや芝居のなかで、優にやさしい乙女が胸高帯の着物姿で捕えられ、そのふくよかな胸と背高に組み合わされた両の手首に縛しめの縄目を受け、その長い袖が美しく揺れる場面に出くわしたときには、女性はいつも、そういった反応を、起しているのではないのでしょうか。まして、男性の私であれば、そういう反応が、なおさら強いということは当然なことでありましょう。

ところで、私は、つぎのような場面を夢みる者です。

第一は、現代の娘さんが、長い袂の着物に帯を上品なお太鼓に結び、両手を後ろに回されて括りあげられていくという、その過程における正坐のポーズの流動美です。そのばあい、白い細引きやピンクの腰紐や緋の扱帯を手に持って彼女の後ろに立っている人も、和服姿の乙女であることが理想です。

第二は、やはり振り袖姿の現代のお嬢さんが高手小手に縛られたまま、後ろかから四筋

の縄尻を取られて、うなだれて歩いていく姿です。このばあい、被縛女性の縄尻を取る人も、やはり、振袖姿の乙女であってほしいと思います。

第三は、豆絞りの日本手拭いで猿轡をはめられ、柱のまえに端坐している姿です。胸高の帯揚げと長い振り袖がいつその艶麗さを感じさせてくれるでしょう。

この三つのいずれの被縛女性も必ず目を伏せていることが大切だと思います。これら三つの情景の挿し絵や写真を見ることが、私の無二の楽しみなのです。そういう絵や写真に接しえたとき、私は心から嬉しくなり、胸のときめきを感じます。

私は、三十四才のきょうまで、撫で肩で、くびが細長く、着物がよく似合い、和服をこよなく愛し言われるままに従順に縄を受け、「立ちなさい」と、言われれば素直に立ちあがり、「歩きなさい」と言われれば素直に歩き、「坐りなさい」と言われれば素直に坐るような、若く美しい女性にめぐり会いたいと願って生きてきました。言わば、今日的、雪姫さまや現代的、中将姫さま——それが、私が恋いこがれてやまない女性の理想像なのです。完全に雪姫さまの役柄になり切って、私

の目を楽しませてくださるような、踊りの上手な女の人が、この世におられないものかと私はいつも空想するのです。ただ私は、和服姿の楚々として清らかな女性をこの上なく愛しますが、芸者風の日本髪は好きではありません。私は日本趣味豊かな現代のお嬢さんに憧れているのだということになりました。

ともあれ、過去十数年かん、KKを愛読してきた私が、誌上で笛地佐渡氏や牧高志氏や岸本青柳氏や葉村佳子さんのことを知りえたことは幸福だったと思います。これらの方々は、私の好みに類似した好みを持っておられるからです。けれども、ヌードの女体を好むのが健康な男性の心理なのだとすれば、この私の心理は、残念ながら、異常だと言うのはありません。私は、われながら、まことに奇妙な嗜好の持ち主だと思っています。

なお、女性のヘアスタイルとして、最も清楚で、最も女性的で、最も魅力的なそれは、アップに結い上げた髪型だと思います。被縛女性を後ろから見たとき、愁いを含んだ、その衿足の美しさは格別感じられます。私の理想の女性像は、アップスタイルの黒髪に、和服を繊細に着こなした折りめ正しい現代の乙女なのです。



〔続 篇〕

〔第二回〕

美津子の美容を受持っていたズベ公の説明によると、椅子に固定した美津子の上半身の美容マッサージがおわり、次に下半身の美容にかかるべく、寝台の上へ乗せようとして、縄を解いて、椅子から立たせたその瞬間、美津子は脱兎のように素早く走り出し、ドアを開けて逃亡したというのだ。

美津子の脱走

銀子があげた手を降ろそうとした時、土蔵の表戸がいきなり開いて、美津子に全身美容を行っていた葉桜団員の二人が血相を変えて飛びこんで来た。

「大変だ、美、美津子が逃げやがった」
「何だって！」

密室の内の葉桜団員達も驚き、一せいに立上ったが、一番うろたえたのは吉沢である。

今夜、美津子と結婚式をあげることになっていただけ、また、それが先程からの楽しみになっていただけに、吉沢は、眼をつりあげる。

「馬鹿野郎！ 美津子を逃がしゃ、俺達もおめえ達も只じやすまなくなるんだぞ。」

朱美が、それを聞くと、声を立てて笑う。
「裸のまま何処へ逃げようというのさ。きつと、屋敷の中か、庭のどこかに隠れているのに違いないさ。あわてる事はないよ」
つづいて、銀子も、

「表門も裏門も、ちゃんと錠がかかってるんだろ。なら、うろたえる事はないさ。」
だが、吉沢は、とにかく、ひっ捕えてくる

と、土蔵から出て行こうとするので、朱美、それに、悦子、マリ、その他、森田組のやくざ数人が、手分けして、逃げた美津子を追う事になった。

「奥さんと京子嬢のショウは美津子をひっ捕えてからさ。ま、それまでのおあずけという事にしておこう」

銀子は、そういつて、田代と森田の方を見る。

「大声を出して、塀の外へ救いを求めたりするとまずいことになるぜ。早いとこ。見つけ出して来な」

と森田は吉沢にいった。

吉沢達が表へ出て行くと、京子は、柱に固定されている素肌を必死に悶えさせて、

「美津子っ、逃げるのよ！、命がけで逃げるのよっ、二度と二度と捕まっちゃいけない！」

と、大声をあげる。

「うるせえ」

川田が、京子に近づくや、ぴしゃりと京子の頬を平手打ちする。

「つまらねえ事をいわず、その洗面器にとどかす事が出来るかどうか、よく狙いをつけておきな」

川田は、そういいながら、破廉恥にも、静子夫人と京子の間に立ち、洗面器に向かって放尿し始めた。

「へっへへ、どうだい。こういう風に景気よく飛ばさなきや駄目だぜ。どうだい、奥さんうまいもんだろ」

川田は得意になって、静子夫人の美しい横顔を見るのだった。

やがて、川田は、田代や森田、銀子、それに森田組の幹部達と人の字の形に固定されている夫人と京子の前に円座を組み、一週間後にせまったショウの綿密な打合わせを始めるのだった。

鬼源も加わり、彼のアイデアが披露されると、田代も森田も、それは、傑作だ、と手を打って喜ぶ。

常規をいっした、その着想が夫人と京子の耳に入り、二人の美女は、顔面真っ赤にして嫌々をするように首を左右に振り、すすり泣く。

「おや、奥さんも京子嬢も、そのアイデアには嬉し泣きして喜こんでいるぜ」

川田は、ふと首を上げて、二人の美女を眺め、そんな風ないい方をするのだ。

「それにしても、まだ、小娘はつかまらねえ

のかな。吉沢の奴、何をしてやがるんだ」

森田がいささか不安になってきたらしく、吉沢に手伝って、美津子を見つけ出そうといひ出した。もし、美津子が、この屋敷の外へ逃げたとなると大変である。田代も森田も壊滅する事になってしまう。

田代も不気味になってきて、森田の意見に賛成し、懐中電灯を取り出して来ると、川田をうながし、土蔵の外へ出て行くのだった。

静子夫人と京子は、無事、美津子が、この地獄屋敷から逃亡に成功する事を心から祈っている。ここより救出されるか、更に地獄の責苦に合うか、それは、美津子の逃亡の成功不成功にかかっているのだ。

「美津子、どんな事があっても逃げるのよ、絶対に捕まっちゃいけない」

京子は、口の中で何度も祈るようくりかえすのだった。

望み破れて

必死になって廊下を走り、階段をかけ降りた美津子は、キッチンルームの中へ飛びこみ、大きなテーブルの隅へ身を沈めた。

ハアハアと激しく肩で息をしながら、美津子四囲の気配をうかがった。

二階からかけ降りて来た追手達は、美津子が庭園の方へ逃げたと思つたらしい。大声をあげながら庭へ飛び降り、あちらこちら点検しながら、奥の竹藪の方へ向かつて行く。

一時的とはいえ、追手の眼をごまかせた事に美津子はほっとした。無我夢中で、ここまですべて逃げたものの、一片の布も身にしていない我身に気づき、美津子は、乙女の本能でハッと両手を交錯するようにして乳房を抱き立膝をして、その場にちぢこまってしまふ。身を覆う一片の布地でも欲しい美津子であつた。

一片の布を求めて、美津子は体をくの字に折り曲げ、再び廊下へ出る。近くの部屋を開けて、中へ入った美津子は、寝台の上のシーツに眼を止め、走り寄ると、そのシーツを剥いで、自分の体に巻きつけた。そのまま、窓を開けた美津子は血走った思いで庭へ降りた。裏門から、表へ逃げ出そうと思つたのであるが——美津子は、ギョツとして足を止め素早く縁の下へ身を伏せる。森田組のやくざ達が数人、裏門の前にたむろし、キヨロキヨロ周囲をうかがっているのである。

縁から再び家の中へ入り、美津子は足音を忍ばせて、玄関の方へ廻ってみたが、そこは

すでに葉桜団のズベ公達が固めている。「こんな手間をかけやがって。美津子の奴、ひっ捕えたら、うんとヤキを入れてやろうじやないか」

といっているのは、朱美のようだ。

美津子は鳥肌立つ思いで二階へあがった。あちらこちらで、美津子を探すやくざやズベ公の足音がしている。

あのいまわしい吉沢のガラガラ声が聞こえて来た。姿を隠している美津子に対し、吉沢は、どなっているのである。

「美津子っ、いくら逃げようたって無駄だ。

観念して出て来な。これ以上、手間をかけやがると、ひっ捕えてからたまらねえ恥しい責めにかけるぜ！」

美津子は、体を硬化させて、壁にぴったり体を押しつけ、息を殺した。

心臓もはりさけんばかりの恥しい責めは、これまで散々かけておきながら、なお、これ以上に恥しい責めにかけるぞとおどす吉沢、美津子は恐怖に眼がつりあがり、足が、がくがく震えるのだった。

進退極まった美津子は、もはや逃げ場もなく、三階へあがって行く。

そこで、美津子はふと光明を見出したの

だ。廊下の隅に電話がある。そうだ。あれで外部と連絡をとり、救援を頼めばいい。

美津子の顔に生気が出た。

電話のある所まで、かけつけた美津子は、素早く受話器をとる。美津子の脳裡には、とっさに、ボーイ・フレンドの村瀬文夫の電話番号が浮かび、ふるえる指先でダイヤルを廻した。

村瀬文夫は、ある大学の附属高校に通っている学生で、美津子とは小学校が同じ、つまり、幼馴染なのである。

「文夫さん、美津子なの、お願い助けて！」

美津子は、文夫が直接電話に出て来たので嬉しさと懐しさめいたものが、胸にこみあがりどっと涙があふれ出る。

文夫の方でも驚いたに違いない。三日も、姿を消していた美津子から突然に電話がかかって来たのだから。

「ど、どこにいるんだ。美っちゃんっ」

文夫の声も、興奮にふるえているようだ。美津子は、この地獄屋敷が、地理の上では東京のどのへんにあるのか、わからない事に始めて気づき、うろたえる。

「そ、それが、一体、ここはどこなのか、わからないの。田代という悪魔のような男の住

んでいる大きな家なのよ。ね、お願い、私達死ぬより辛い目に合わされているのです。助けてっ、文夫さん、助けてっ」

美津子は、血走った気分で必死になって、受話器に向い叫ぶ。

受話器の中の文夫の声が、

「田代、なんという人間だ。田代だけじゃわからない、美っちゃん、落着くんだ！」

その途端、美津子の握っている受話器がさつと横からひったくられた。

「あっ」

美津子の顔から、さつと血の気がひく。

朱美、悦子、マリの三人が、魔女のようにらんらんと眼を光らせて、何時の間にか美津子を取囲んでいたのだ。

受話器をひったくった朱美は、ふるえる美津子を押しのけるようにして、受話器にこういった。

「もしもし、いつも、美津子がお世話になりました——私、美津子の姉の京子でございます。実は、美津子は何だか近頃気がおかしくなり、今、ある精神病院に相談に参っているでございますが——」

それを聞いた美津子は逆上したように、「嘘よ、嘘なのよっ、文夫さん、助けてっ」

と叫び、朱美の手から受話器をひったくろうとする。それを、マリと悦子がさえぎり、美津子の体を抱きすくめるようにして、その場へ押し倒し、組み敷いてしまう。

朱美は、そんな美津子を冷ややかに横目で見ながら、更に電話をつづける。

「美津子の病気の事で、貴方にぜひ御相談したいと思うのですが、お越し願えないでしょうか。本人のため、あまり、世間へこの事を口外したくないので、どうか他の人には内密にしてお越し願いたいです。え、お姉さんと御一緒においで下さるのですか。はあ、お姉さんならかまいませんが、その他の人には絶対口外なさらないようお願い致します。では一時間後に新宿駅前にお越し下さい。病院の医師と看護婦がお迎えに参上致しますから——はあ、よろしくお願い致します」

朱美は、ほっとしたように電話を切った。

「姉も美っちゃんの事を心配しているので、一緒に連れて行くってさ。とにかく、この姉弟を始末しなきゃ、こっちの首が危いよ。全く面倒な事をしてくれたもんだよ」

朱美は、舌打ちしながら、悦子とマリに、床へ押しつけられている美津子の尻のあたりを足で蹴った。美津子は顔を床に押しつけ激

しく体をふるわせて号泣している。

「一時間後に新宿駅へ来るって、その二人は何処からやって来るんだい。姐さん」

マリが聞いた。

「四谷だよ。村瀬とかいったわね、え、美津子？」

朱美は、美津子の髪の毛をつかんで、顔を上へこじあげて聞く。

マリが小首をかしげるようにして、「四谷の村瀬といやあ、あの村瀬宝石商の事じゃないかい。そら、銀座で大きな店を出している村瀬宝石店さ。たしか、家は、四谷にあると誰かに聞いた事があるけど、もし、そうなら、こいつあ、すごい儲け口が転がりこんで来たようなものだよ」

悦子が、朱美と一緒にあって、組みしっている美津子の頭髪を激しくひっぱって訊問を始める。

「さ、美津子、白状しな。村瀬というのは、村瀬宝石店の事なのかいっ」

美津子は、髪をつかまれ、キリキリ首を左右に振り廻され、ぴしゃりと横面をズベ公達にひっぱたかれる。

「あ、悪魔、鬼、貴女達は、な、なんというなんという恐い人なの！」

美津子は、憎悪のこもった瞳をズベ公達に向け、血の出る程、唇を噛みしめる。

「どうやら、凶星らしいわね。となると、私達、村瀬の息子に連絡をとってくれた貴女にむしろ感謝したい位だわ」

悦子は、手をたたいて喜ぶ。

「さ、美津子、お立ち。吉沢の兄貴が、カンカンになって、貴女を探しているわ。ふふふよく謝つて、二度と逃げるなんて量見の起らぬようウンとヤキを入れてもらう事ね」

朱美と悦子は、美津子の両腕をかいこむようにして、立上らせる。

「さ、歩きな」

マリに背を突かれた美津子は、身を包む、たった一枚のシーツを、両手でしっかりと押さえるようにし、屠所にひかれる小羊のように、体をかかめるようにして歩き出すのであった。

朱美とマリは、両手を口に当てるようにして、大声で叫びつづける。

「皆んな。美津子が捕まったよ！」

「出ておいで皆んな。美津子をひっつかまえたよ」

絶望の涙

土蔵の戸が開き、美津子探索のため、あっちこっちに散らばっていた森田組のちんぴらそれに葉桜団のズベ公達が、キャッキョウ笑いながら戻って来た。

台の上に相変らずの形で、固定されている静子夫人と京子はハツとして首をあげる。

やくざ達やズベ公達が陽気に笑い合っているのを見て、一縷の望みも遂に断ち切られてしまった事を二人の美女は感じとった。

川田は、顔中しわだらけにくずして、静子夫人と京子の間に立ち、

「へっへ、奥さんも、京子嬢も安心しな。

美津子嬢が捕まったよ。これから、吉沢兄貴達に二度と逃げ出さねえよう色々意見されいよ／＼女になるって寸法さ」

それを聞くと、京子は、ギクと体をふるわせ、がっくりと首を落して、すすり泣き始めた。静子夫人も同様、絶望に眼を閉じ、小さく嗚咽する。

「お、奥様——」

京子は、泣きじゃくりながら、静子夫人の方を見、もう駄目ですわ、と一切の望みを断ち切られた観念した表情を作るのだった。

「京子さん——」

静子夫人も、美しい顔を苦痛にゆがめる。

川田は、せせら笑いながら、

「それがよ。静子夫人、全く妙な因縁じゃねえか。美津子が電話で救いを求めた村瀬という若僧。それは村瀬宝石商店の息子なんだ。

俺は以前よく、お前さんのお供で村瀬商店まで車を運転したっけな。ダイヤだの真珠だのお前さんは村瀬商店からよく買っていたものだ。村瀬のいいお得意さんだったじゃねえか。今夜は、そこのお坊ちゃんとお嬢ちゃんが、こちとらのわなにかかるってわけさ。まあ一つ、これからは仲良くしてやってくんねえ」

田代が上機嫌で、それにつけ加える。

「村瀬商店の息子の方は知らないが、娘の方は、俺も二、三度見た事があるよ。ある化粧品会社の美人コンテストに一等入選した事もある八等身の大した美人だ。たしか、小夜子とかいったな」

静子夫人も京子も、固く眼を閉じたまま、もうこれらの悪鬼共に反抗する気力も失せたよう、がっくり首を落している。

「さて、そろ／＼時間だから、社長、わっしは医者に化けて、村瀬宝石の坊っちゃん、嬢ちゃんをここへお連れして参りますからね。ま、静子夫人と京子嬢のショウでも御覧にな

りながら、待っていておくんなさい」

葉桜団のズベ公二人が看護婦に化けて、川田と一緒に行動する事になった。

「まあ、お前の事だから、ドジを踏む事はねえだろうが、大きな仕事だ。慎重にやってくれよ」

と森田が念を押す。

川田は、笑顔でうなずき、ズベ公二人を連れて身支度にかかるべく、外へ出て行った。

「さて——」

銀子は、口にしていた煙草を捨てて、静子夫人と京子の方へ向き直る。

「さあ、これで何事も万事好都合に行くってわけよ。じゃ、そろそろ奥さん、さっきのつづきを始める事にしましょうね。私達も、すっかり、酒の酔がさめてしまったわ」

田代、森田、それに森田組のやくざ達、元の位置に腰をおろして、酒盛りのつづきを始めるのだった。

「さあ、奥さん、京子嬢、発射準備はいいかい」

銀子は、くすくす笑いながら、二人の美女のかなり前方へ洗面器を二つ配置する。

「いいね。一滴でも外へ洩らしたりすると、承知しないからね。はい、よく狙って、用意

——始めっ」

二人の美女は、その行為を演じるかわりに激しく首を振って、号泣し始める。

「畜生、まだ、あたい達を馬鹿にする気なのかい。」

銀子は、台の上へかけあがって、夫人と京子の横面を、はげしくひっぱたき、ガスライターに火をつけ、二人のお尻に交互に押しつける。

「あつ、あつ、嫌、あつ」

夫人も京子も悲鳴をあげて、白い肉体を悶えさせた。

「まだ、私達にさからうなら、二人とも、今度は、お尻に火をつけるからね」

銀子は、ガスライターの火を消すと、もう一度、くりかえす。

「発射用意——さあ、よく狙うのよ、的を」

静子夫人と京子は、激しく泣きじゃくりながら、眼を開き、前方の洗面器を見つめるのだった。

「発射はじめっ」

美津子の覚悟

美津子は、朱美達に、再び、美容室へ連れ戻され、そこで、吉沢と対面、逃亡を計った

事に対する、お仕置を受ける事になったのである。

「美津子、よくも、俺に赤恥をかかせやがったな。精神を入れかえてやる。覚悟は出来るだろうな」

吉沢は、美津子に蛇のような眼を向ける。

美津子は、シーツを胸に抱きながら、恐怖に体を硬化さし、じりじり後ずさりする。

美容室の一隅では、すっかり全身美容の終った佳子が寝台から降ろされ、ズベ公達の手で、ハート型になったピンク色のバタフライをはかされている。

「佳子をごらん。段々と私達に素直になってきている。ああいう風に素直になってくれりゃ私達だって、優しく出るわよ。早く、あんたも、姉さんゆずりの、その強情な性質を直してくれなきゃ困るわ」

朱美は、おろおろしている美津子に向かって、そんな事をいうのだった。

佳子は、バタフライ一枚を身に許されただけで、頭の上から、薄いヴェールを、やはりズベ公達の手でかけられる。そして、前手錠をガチャリとかけられるのだった。

「手錠の鍵は、あんたのハズバンドがお持ちよ。さ、密室へ行って、ママのショウを見、

それから、お床入りにしましうね」

ズベ公達は、くすくす含み笑いしながら、そんな風に佳子にいい、肩に手を廻すようにして、引き立てて行く。佳子は、もう一切をあきらめてしまったよう伏眼をして、ズベ公達のされるままになっているのだった。

佳子の姿が消えると、朱美は、再び、美津子に眼を向け、冷やかな調子でいう。

「佳子は、聞き分けのいい娘になってきたから今のように恰好のいいバタフライをはかせてあげただけど、貴女は、当分、何も体につけさせてあげられないわ。さあ、そのシーツをこっちへ返すのよ」

朱美は、美津子のまわっているシーツの端をつかんで、ひっぱったが、美津子は、ハッ



とし、本能的に固くシーツを抱きしめて、後退するのだった。

朱美は、舌打ちして

「本当に、この娘は、甘く出るとつけあがるわね」

つき当りの壁に背を当てて、おろおろしている美津子を見て朱美は吐き出すようにいう。

じわじわと迫って来た朱美、悦子、マリ、それに吉沢達に、美津子は恐怖に歪んだ顔を

向けて、必死な思いをこめていう。

「お願いです。もう二度と逃げようなんて致しません。ですから、村瀬さんを誘拐するのだけはやめて、村瀬さんに危害を与えるのだけは、かんにんして、お願いです」

救援を頼もうとした村瀬文夫が、逆に森田組の手で捕えられ、数々のむごたらしい責めを受けるのではないかと想像すると美津子は気が狂いそうになる。自分はどういう目に合っても、村瀬文夫を巻きぞえにしてはなら

ぬと、美津子は必死な気持ちで、迫って来る吉沢を見、哀願するのだった。

「そんなにまでいうなら、村瀬宝石の息子や娘を誘拐するのは見合わせようじゃないか。何も、それほど、危い橋を渡る事もないからね」

朱美は、吉沢の顔を見、意味ありげにウィンクして、そんな事をいうのだった。村瀬文夫を助けるも助けられないも、もう川田とズベ公二人は、村瀬姉弟と約束した新宿駅前に向け出発しているのである。

そんな事とは知らない美津子は、自分は如何になっても、何の関係もない村瀬文夫を、この連中のわなから守らなければならぬと悲痛な決心をしたのである。

「私、私は、どうなっても、かまいません。村瀬さんには、お願い、悪い事はしないで下さい」

美しい黒い瞳を、哀切的にまばたきながら吉沢とズベ公に哀願する美津子である。

「よし、じゃ村瀬のお坊ちゃん達は、見逃す事にしよう。大変な獲物なんだが、お前がそんなに頼むなら仕方がねえ」

吉沢は、煙草を口にして火をつけながら、わざとらしく、おだやかな口調になっという

のだった。

「ほ、ほんとうですか、ほんとうに村瀬さんには――」

美津子は、涙のにじんだキラキラする黒眼を吉沢に向け、必死な気持ちになっという。

「そのかわり、今後、吉沢兄貴やあたい達には絶対服従だよ。いいね」

朱美が念をおす。

美津子は、観念したように眼を閉じ、小さくうなづくのだった。

「じゃ、元のままの姿になるのよ。」

朱美にそういわれて、美津子は、必死になっって抱いていた両手を解き、シーツを脱ぐ。

「借りていたものを返す時は、ていねいにたまなくちゃ駄目じゃないの。近頃の女学校じゃ、お行儀は教えないのかしら」

シーツが床へ落ち、それと同時に、両乳房を手で覆って、その場に小さくかがみこんでしまった美津子を、冷ややかに見たマリがいった。

美津子は、すすりあげながら、そっと手のぼし、シーツをたたみ始める。ぴったりと両腿を閉じ合わせて、消え入るように小さくなっって正座し、シーツをたたんでいる美津子を一人のやくざと三人のズベ公は囲むように

して眺めていたが、美津子の仕事すすむと、朱美は次の室へ行って、頑丈な麻縄を持ち出して来た。

「さ、胸をはって、両手を背中へ廻すのよ。しっかり縄をかけてあげるからね」

美津子は、一切の望みが断ちきられた悲しさを噛みめるようにして、固く眼を閉じ、静かに白い陶器のようにすべすべした両腕をうしろに廻す。

朱美、マリ、悦子の三人は、そんな美津子の周囲に腰をかがめ、背中に廻している美津子の両手首を荒々しくつかんで、がっちりと交錯させ、ひしひしと縄をかける。

あまった縄尻は前へ廻され、美津子の白桃のような柔かい乳房の上下を、きびしくしめあげるのだった。

「さっ、立って、吉沢兄貴に、心から詫びるんだよ」

朱美は、ぐっと美津子の縄尻をひいて、彼女を強引に立上らせると、傍の柱に美津子の背を押しつけ、別の縄をつかって、固定してしまった。

必死になっって、両足をぴったり閉じ合わせ顔を伏せようとする美津子。再び、生まれたままの姿にされて、その全部を恐しい吉沢の

前にさらさなければならなくなった美津子は恐しさと口惜しさに、齒をキリキリ噛みならしている。

「お嬢さん、あんた、吉沢兄貴に、妻になります、と宣誓した事を忘れちゃいけないよ。あたい達は、あんたを可愛いお嫁さんに仕上げる義務があるんだ。あたい達にさからったりすると、村瀬の件や娘が、ひどい目に合うだけじゃなく、竹籬の奥の密室にいる、あんたのお姉さんの命まで危くなるんだよ。いいわね」

朱美にそういわれた美津子、もう反撥する気力もなく、うなづくのであった。

マリがニヤニヤしながら、うなだれている美津子に近づいて、ゆるんでいる美津子の黄色いヘア・バンドをちゃんとしめ直してやり

「吉沢兄貴は、あんたの御主人なんだから、これからは、あなた、と呼ばなきゃ駄目よ。ふふ、ねえ、ちよっと、こういう風にいつて吉沢さんに甘えてみな」

マリは、美津子の耳に口を当てて何か、ささやく。

美津子は、顔面真赤にして、のけぞるように顔をそらせる。

「あたい達のいう事には、絶対服従の約束だったわね」

と、悦子は、冷酷な眼つきになって、美津子の太腿の肉をつねりあげる。

美津子は、胸から喉元にこみあがってくる火の玉のような屈辱をこらえながら、マリに強制された言葉を、唇をわなわな震わせながら眼の前に立った吉沢に向かって口にするのだった。

「あ、あなた——早く、早く美津子を、女、女にして頂戴。美津子、もう、これ以上、待つのは嫌、ねえ——あなた——」

朱美も、マリも、くすくす笑い出す。

悦子は笠にかかって、美津子の横に立ち、「あんたの美しい体の色々な部分を御主人に説明するのよ。美津子のお鼻、美津子のお口という風に、一つ一つ教えてあげるの。わかった？」

悦子は、そういいながら、美津子の鼻先を指でつつく。

「さあ、教えて頂戴。これ何というの？」

美津子は、もうどうともなれ、といった捨鉢な気持で、ズベ公達のみだらないたぶりの中に身を投げこんでいった。

「——美、美津子のお鼻」

悦子は、満足げにうなずいて、

「じゃ、これは？」

と美津子の花びらのような唇をつつく。

「美津子のお口」

「そう、全くきれいな歯並びね。真珠のような歯とは、この事だわ」

悦子は、指先で、美津子の可憐な唇を上下に押し開き、光沢のある真白な歯を感心したように見つめる。

「じゃ、次は首の下に移って、これは、何ていうの？」

悦子は、両手を開けて、いきなり、その両方をわしづかみにした。

「うっ」

美津子は、眉を寄せて、激しく首を振る。

「いわなきゃ駄目よ。いうまで、こうするわよ」

悦子の両手は執拗に動き始めた。

「あっ、い、いいいます——美、美津子のおっぱい、おっぱいですっ」

美津子は、絞り出すような声を出す。

「じゃあね」

と悦子の指は移動する。

「やめて、もう、かんにんして！」

「何いってんのよ。こんな事、何でもないじ

やないの」

悦子の指は、美津子の臍の上で止まった。

「さあ、お嬢さん、これは、なーに」

美津子は、脂汗を額に浮かべ、唇をわなわな震わせた。その個所を口にしないと、悦子の指先に力が入るのだ。

「——美津子の、お、お、おへそ——」

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

予約申込者月毎増加中です

毎月確実に二十五日発売！

○現在本誌はいろいろの事情で全国末端まで円滑に配本できませんので、所により非常に入手困難だと思えます。毎月確実に御入手されるためには、是非直接予約お申込み下さるようお願い致します。

○予約御購読なさるには、予約購読料を天星社（大阪阿倍野局私書箱第十四号）宛お払込み下さればよろしいのです。

○本誌の送料、包装代などは、すべて当社にて負担いたしますから、読代のみ御送金下さい。予約購読料は一月分一冊三〇〇円三月分三冊九〇〇円、半年分六冊一八〇〇円、一年分十二冊三六〇〇円です。

ズベ公達も、吉沢も、吹き出して笑う。

「ふふふ、さあ、あと一つよ」

「ああ——」

美津子は、次に、悦子が口に出させようとしている個所の想像がついて、狂気したように首を振って、許しを乞う。

「さあ、教えて頂戴、ここは美津子嬢の何と

○予約お申込みの方には、毎月二十日頃、印刷完成と同時に、外部から見えないよう嚴重包装の上確実に発送いたします。

○予約お申込みの際は、新規、継続にかかわらず、何年何月号から何力月分予約とはつきりお書き願います。

○予約金が切れました節は、封筒の上に、「本号にて前金切」の判を捺印いたしますから継続お払込み願います。その際でも何月号からと、お書き添え願います。

○送り先は、心ず楷書で、肩書（何々方又は何々社内）などがあればお忘れなくお書き願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになりたい御方は、お受けとりに行かれる局を指定下されば、その局留として発送いたしますから毎月二十五日過ぎに局へお出向きの上、お受けとり下さい。局での留置期間は十日間です。その月中においでになれば、いつでもお受けとりになれます。

いうところなの？」

美津子の足元に小腰をかがめた悦子は、狂乱の美津子を下から眺めて、含み笑いをするのだった。

「嫌っ、嫌っ、知らない、知りませんっ、ああ——」

美津子は、真っ赤になった顔をのけぞらせるようにして、嗚咽する。

「いえなきや、いえるようになるまで、悦子に責めさせようか」

朱美が美津子のあごに手をかけて、ぐいと美しい顔を正面に向けさせ、涙で、キラキラ光る黒眼を頼もしげに眺めるのだった。

マリが、朱美にいう。

「そりや姐さん、無理だよ。こんな純情なお嬢さんが、そんな処の呼び名を、はつきり知ってる筈はないじゃないか。優しく教えてやって、いわせなきや駄目だよ」

それも、そうだね、と朱美はうなづいて、ちらと吉沢の方を見る。

「御主人から、教えてやんなよ」

吉沢は、ニヤリと顔をくずし、美津子の横に立つ。

「ふふふ、お嬢さん、そこはだな。こういう風にいうのさ」

と、美津子の耳に口を寄せ、吉沢は何か、ささやくのだった。

「ああ——」

吉沢が口を寄せている美津子の耳たぶまで朱に染まる。

女として、まして、けがれを知らぬ純真な乙女として、死んでも口に出来ない言葉が、吉沢の口から耳の中に流れこんで来たのだ。

美津子は、体全体を火柱のように熱くして激しく泣き出す。

「わかったね。じゃ、お嬢さん、大きな声ではっきりいって頂きましょう」

悦子が立上って、美津子にいった。

そこへ、銀子が、入って来る。

「何をしているだよ。今、密室の方じゃ、静子夫人と京子嬢のすばらしいショウが始まっているんだよ。早く見に来ないと終ってしまいうじゃないか」

あ、そうだったつけ、と朱美は舌を出し、「ところで、銀子姐さん、奥さん達の洗面器ショウはどうだったの、ふふふ」

銀子は、朱美の出す煙草を口にしながら、「あんな所まで、とどくわけがないじゃないか。全部、床へたれ流しさ。それで、実演がすんだら床を汚したお仕置を鬼源が改めてす

るんだとさ」

「鬼源さんも、なかなか精が出るわね」

と、朱美や悦子が顔を見合わせて笑う。

「さあ、美津子嬢にも、姉の実演を後学のために見せてやろうよ。引き立てな」

銀子は、煙草を床に捨て、足で踏み消しながらいう。

「それがね。このお嬢さん、また、つまらない事で、駄々をこねるのさ」

と、朱美は、銀子に説明し始める。

銀子は声をあげて笑った。がすぐ、身も世もあらず、すすり泣いている柱を背にした美津子に向かい、キツとした表情になって、

「あんた、そんな事いえないようでどうするの。あんたも、やがてはお姉さんと同様、立派なショウの花形スターになって頂くからね。そんな、つまらない事、口に出来ないようじゃ困るわよ」

と、縄にしめあげられている白桃のような乳房を指ではじく。

「それがいえたら、お姉さんの素ばらしいショウを見物して、吉沢さんと甘く楽しい一夜が過ごせるのじゃないの。幸せな人よ、貴女って。さあ、もう強情ははらないわね。明日の朝になりゃ森田組大幹部、吉沢夫人だもの

ね。堂々と貫録を示して、大声で、いわなきや駄目よ」

銀子は、たて板に水を流すよう、ペラペラとしやべりまくる。

さ、も一度、始めよう、と悦子は、再び、美津子の足元に身を沈め、わざとらしい甘ったるい声を出すのだった。

「ねえ、お嬢さん、ここは貴女の何という所なの」

美津子は、紅生姜のように真赤になり、歯を喰いしばった表情をつづけている。

「仕様がないうね。じゃ、責めるとするか」

悦子の言葉に、美津子は、ギクと体をふるわし、

「待って、待って——いいいますいいいますわ」

美津子は、堰をきったように泣きながら、

「そ、それは、美津子の、美津子の——ああああ……」

再び、号泣し始めた美津子のすべすべした肩を揺すぶりながら、朱美は、

「美津子の——だけじゃわからないよ。はっきりいわないか」

美津子は、泣きじゃくりながら、崖から身を投ずるような気持で、吉沢に教えられた言葉の口にするべく、もう一度、唇を開くのだった。

(未完)

「奇譚三十九夜物語」 完結記念

『わが体験を語る』 座談会

文責

辻村 隆

出席者

大阪 箕田京二（奇ク編集長）
大阪 塚本鉄三（カメラマン）
東京 四馬 孝（挿絵家）
和歌山 新宮明夫（愛読者）
岐阜 水野 弘（愛読者）
三重 瀬沼四郎（愛読者）
大阪 長田 実（愛読者）
大阪 糸島 博（愛読者）
奈良 三隅良信（愛読者）
司会 辻村 隆（スバル氏）

オブザーバー 三十九夜ドクター氏外六氏
日時場所 八月二十三日（日曜）
和歌山市奥和歌浦K氏別荘

箕田京二氏の挨拶（省略）

辻村隆より各人の紹介（省略）

（座談会の記録はテープレコーダーにてとつたものを辻村隆文責にて、内容の露骨な個所及びプライバシーに亘る面をカットして集録しました）

.....

辻村「錚々たる方が沢山おられますので、誰方から喋って戴こうか迷いますが……新宮さん如何ですか？」

新宮「何しろ皆さんと違って、家内一人をあれこれと対象にしておりますから、いつも余り変りばえしません。ここに持参しましたフォト（二十数枚のフォトをとり出して回覧）は裏に番号を打ってありますが、或る設定を

して撮ったものです。某国の女スパイが女子大生に扮してスパイ活動を続けていたが、学友に怪しまれて憲兵隊に逮捕され、取調べを受けたが白状しない。遂に晒し責め、蠟燭責めにより羞恥に耐えられず白状し、死刑の判決をうける。文明の世とはいえ、スパイに対しては昔乍らの斬首刑が用いられ、処女であるため特に非人に犯させた上、首は竹槍に刺し抜かれて目抜通りに晒され、首なし屍体は同様放置された」と、まあこんな設定です」

新宮「ええ、このうち(3)の連行のシーンは前手縛りで手錠をはめられ、非人に連れられて行くのですが、これは『奇ク十月号』の奇ク



新宮明夫氏提供フォト

サロンの五九頁に掲載済みです。それに(9)の刑場連行のシーンは御覧の様に、全裸で高手小手ですが九月号の「奇クサロン」五七頁のフォトは下半身をカットしてのりしました。八月号「奇クサロン」六三頁は22の竹槍串差しの正面です。番号順に説明しますと(1)が逮捕で、三つ編白ブラウスにスカートの女学生が

胸縄後手の腰掛姿(2)はパンティ一枚になっての緊縛(3)は連行(4)(5)が全裸後手胸縄の柱縛り開股横木固定です。(6)(7)が右に同じでローソクを御覧になった様にたらしいております。(8)が判決で高手小手で坐っております。(9)が刑場連行で発売済みのもの(10)(11)(12)が本日ぬけておりますが、これは女学生を非人が犯すところで、これはどうも私が照れ臭いので抜きました。(13)(14)斬首で、薙に坐す女に処刑人が抜刀、ついで大上段、最後に刀身首筋へ女のけぞるシーンです。(16)(17)は地上に転がる生首(18)(19)は首なし屍体の腹部と背面(20)は処刑人生首を毛髪をにぎって持上げる。(21)(22)は串ざし生首の正面、ロング、(24)(25)は晒し首と、こうなっています」

箕田「この連続シーンのうち、生首の二カットを、七月号のグラビヤの最後の頁にのせた筈ですよ(箕田氏手許の奇クのバックナンバーをとり上げて七月号を差出す)」

新宮「あッ、そうでしたね。すっかり忘れていましたよ。これは(21)と(25)ですね」

水野「しかし実に丹念ですね。私も生首を撮ったが、漠然とやって見ただけですよ——」

新宮「なかなか。七月号の生首のフォト、

到底私の及ぶ処じゃないですよ——」

辻村「生首許り続きますが、それじゃ水野さん、ここらで少し——」

水野「何かと公用私用にとられて、フォトを撮る暇がないのですが、偶に意慾が湧きますと、私も新宮さんと同じく、女房のみを相手に撮る時があります。奇クサロンに発表のものは既に数年前のもので、最近バラバラ事件からヒントを得て、段ボールづめの生首フォトをとり、このワンカットは、私の通信と共に、奇クサロンの十月号に発表しました。生首以外にも、夫婦のSMプレイのフォトは沢山とっておりますが、何しろ今迄は当地の本屋でも売ってありましたので、万一それで私の妻の事が知れると、狭い土地なので都合悪かったのですが、近頃一般書店より奇クが影を潜めたので、妻も大分積極的に協力する様になり、緊縛のフォトも漸次発表しようと思っております。(水野氏夫人の緊縛フォト二枚取出して廻す) 御覧の様に、私は貧弱な男ですが、妻は相当ポリウムあって後手が廻らず、完全な後手緊縛は出来ませんが、妻としては精一杯私に協力してくれておるのですが……この席上で申上げる事は、生首も切腹も処刑も、すべてはサジスチックな願望の変型

ではないかということです。新宮さんの場合
どうか知りませんが、私は今申した生首、切
腹、処刑も撮った反面、妻の逆吊りや緊縛を
気が向けば随分とっております。奇クへの投
稿が、偶々、新宮さんの処刑フォトに刺激さ
れ、その生首フォトの素晴らしさに、私は新
宮さんにお近づきになりたいとの余り同好者の
意思表示を生首フォトでした迄です。幸い親
しく文通出来、今日こうしてお目にかかれた
のは何よりの喜びですが……」

新宮「私の最近のフォトは、いわば水野さん
の模倣に過ぎません。教えられる事ばかりで
すよ」

水野「とんでもない……」

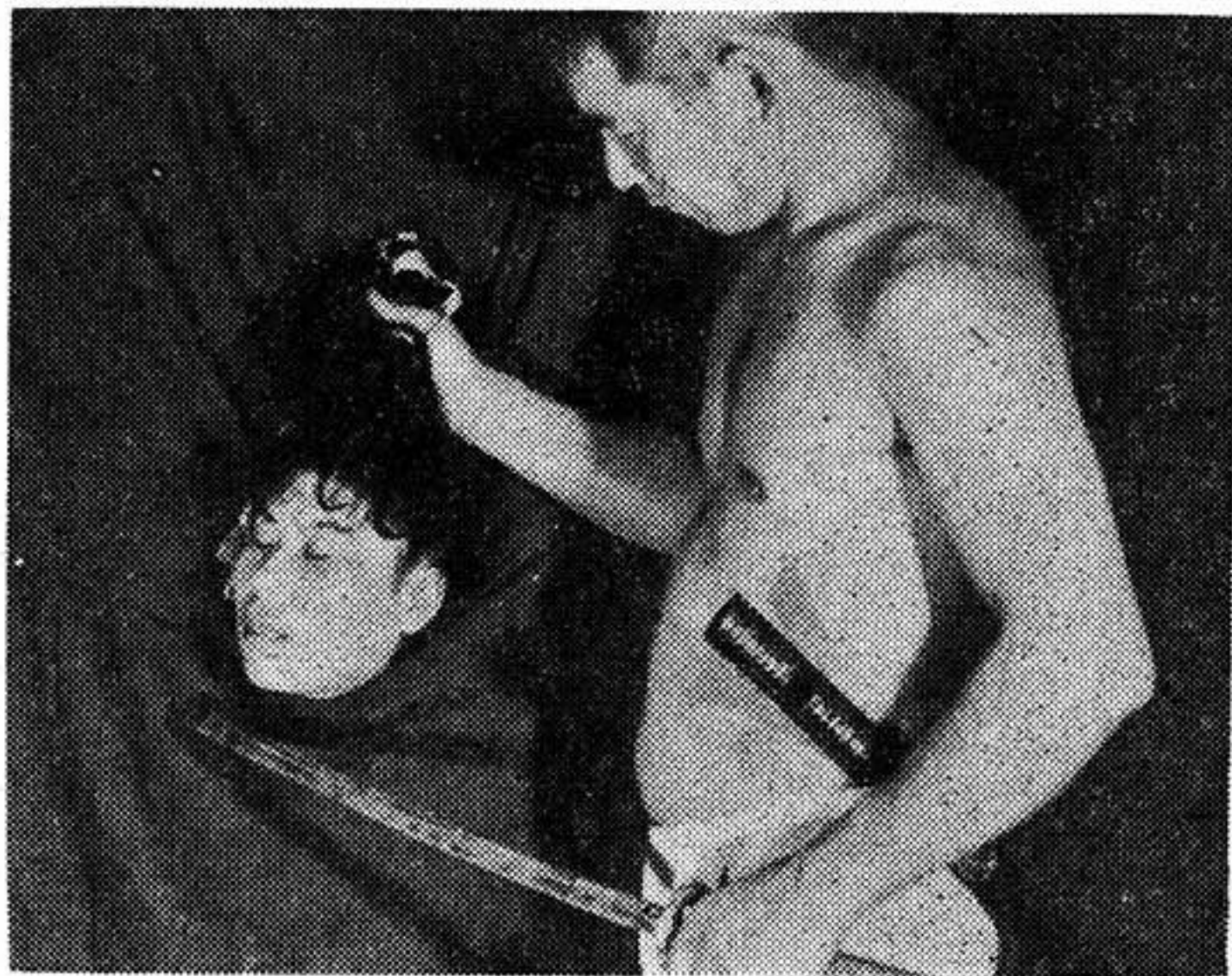
辻村「夫婦プレーの話が出ましたが、長田さ
んは最初に敢然と奥さんのフォトを奇クに提
供されましたネ。何月号だったかしら？……
……」

長田「五月号です。最初は随分躊躇したので
すが、猿轡もはめていることだし、はっきり
した妻の顔も判らないので、思いきって五葉
送りました。そのうち二葉が掲載されたので
すが、私もあの二葉は最も気に入ったフォト
で、流石に、編集部は目が高いと感心しまし
た」

箕田「長田さんはその後のお便りによると
色々パンティや、責具をつくっておられる
そうですが、それについて何か——」

長田「ええ、東京にニューポート社と云う
のがあるのですが、最初はストリップのパ
ンティやバタフライ、それに変り型のブラ
ジャーや女性の下着類専門だったのですが
私が進言しましてネ。それを契機に、SM
ニユースを出す様になり、責めを加味した
下着類を次々と発表する様になりました。
例えばパンティの前がファースナーで開く
ものとか、いぼいぼのついたブラジャー
とか、嵌口臭をかねたゴムマスクとか、女
を後手にして袋式にはめこみ編み上げる赤
い紐付手袋とか、好奇なものを売り出して
おります。私は美しく責めたいと云うのが
趣旨で、女性のもつ美を壊すような責めは
反対です。その代り、責具はいろいろ自家
製でつくります。帯革や尾錠や鳩目を買っ
てきて、革の手枷、足枷、首枷をつくるの
です。これをつくる時の醍醐味は、つくった
ものでないと分らないと思います」

四馬「私は今の長田さんの女性の美を壊す責
めに反対という気持がよく分ります。挿絵は
写真と違って構想が自由ですから、どんなポ

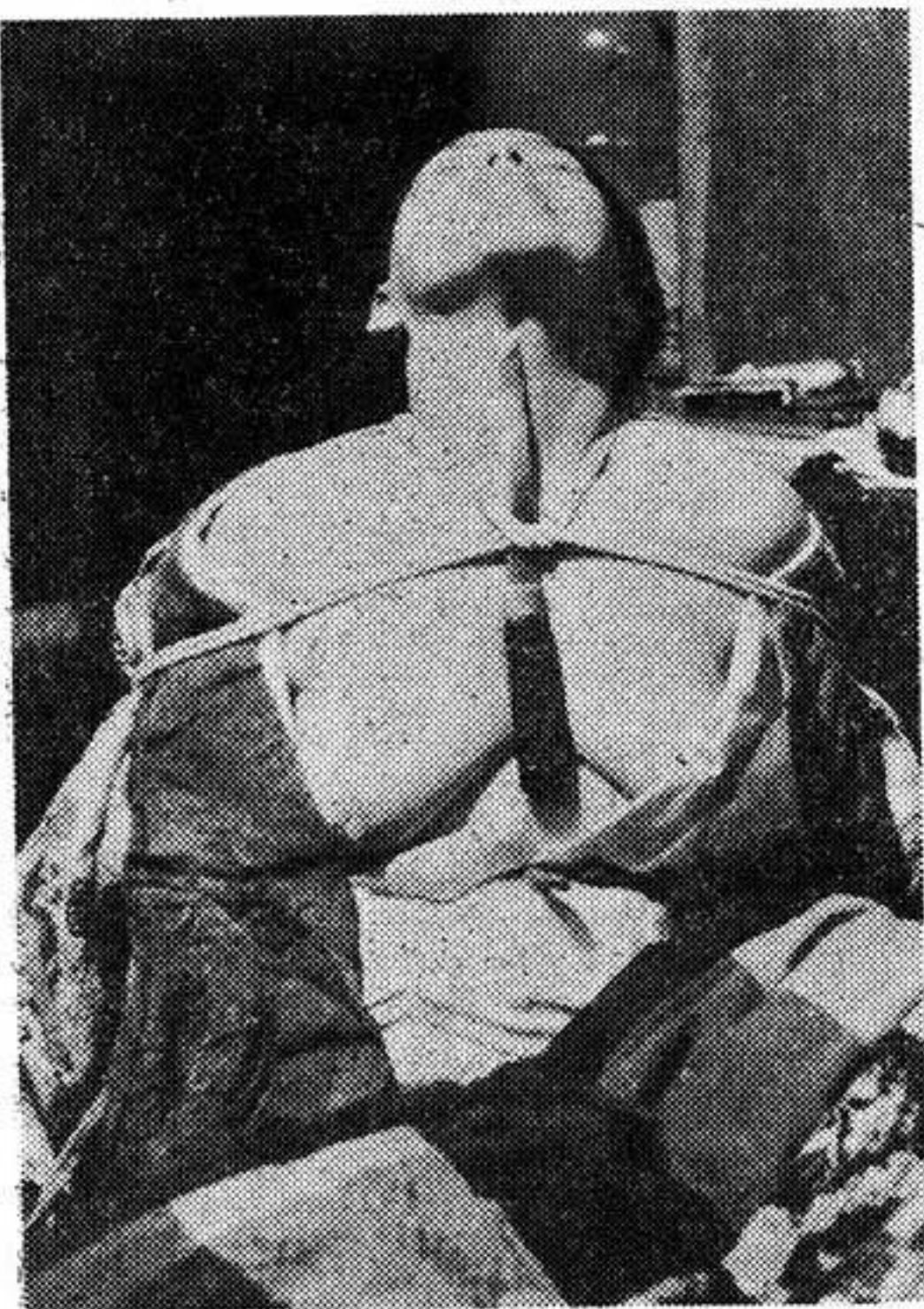


新宮明夫氏提供フォト

ーズも可能です。いつか辻村さんから、私の
挿絵の女性の顔が類型的であると指摘されま
したが、私は先日手許の奇クを最初からずっ
と改めて見直しましたが、一概にそうとも云
えないと思うのです。絹川文代さんの美しさ

をとった絵もありますし、又私が梨花悠紀子の美しさに魅かれた頃の絵はも一度御覧になつて戴くと分りますが、梨花に似せております。髪かたち、容貌はその時代時代の流行の変遷に応じて変えているつもりなのですが、やはりどうしても多少は類型的にならざるを得ません。それが私の持味である以上は——大家の岩田専太郎の挿絵ですら、女性の顔は矢張り岩田氏独自のものですから已むを得ないでしょう」

水野弘氏提供フォト



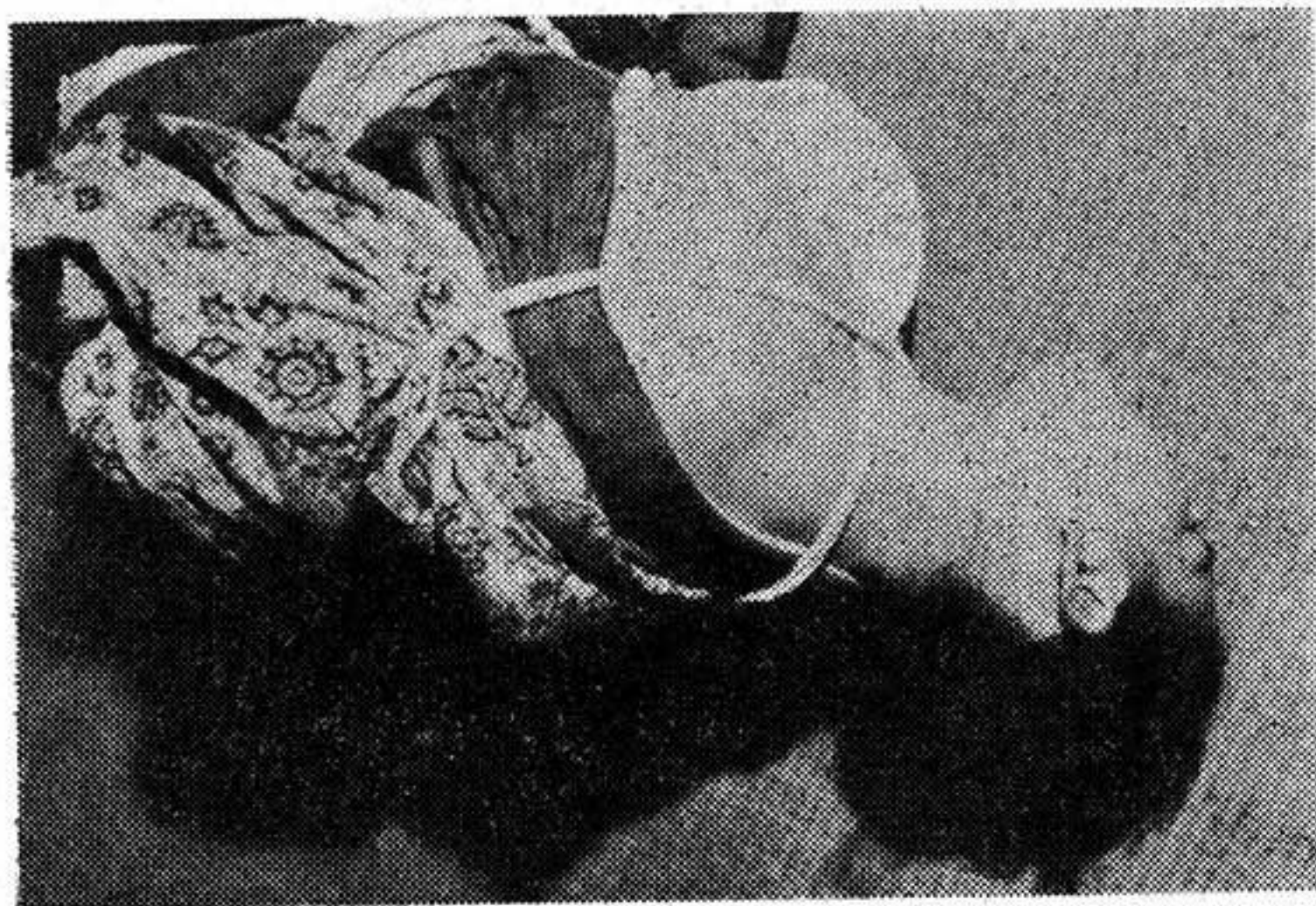
うのは、私も先日奇クを整理していて、梨花の出始めた暫くはあつと思う位四馬さんの絵が梨花に似ていましたものね。今後、梨花に変わる素晴らしいモデルが奇クをにぎわす時は四馬さんの似顔はきつとそのモデルに似ると思いますよ」

四馬「いやどうもどうも。今日はこんな論争をするつもりじゃなかった——。先程の長田さんの話を横取りしちゃって……。私も絵のモデルに東京でかなりの女性を縛って来ましたが、絵描きのプライドとでも申しますか、

フォトは全然とっておりません。私の趣味は、美しい女に屈辱を与える。鼻をひん曲げたり、縛った女の体を鏡に写して見せたり……。しかし、女性のもつ美を破壊することは決してないのです。女はどこまでも美しくあってほしいのです。その為には、刃で肌を傷つけたり、灸をすえたり、刺青をしたり、そんな女の肌の美しさを損なうサド行為は好みません。仮りに灸を据

える時の、その刹那の快樂はいいとしても、美しかるべき女の肌がその為に一生残る灸跡は、爾後の責めには幻滅以外の何ものでもないと思います。どうも口でうまくいえないが夫婦プレーなど、特に私の持論が当てはまる

水野弘氏提供フォト



長田実氏提供フोट



のじゃないですか——。一旦傷つき、損なわれた体は一生元には戻りません。一時の衝動の余り過激に亘って妻の顔を傷つけたとしますね。併しそのコッポンがさめた時、夫は妻の損傷に淡い悔恨を残し、それが一生傷の時妻はプレイに対して恐怖感を抱き、協力しなくなると思うのです。SMプレイは煎じつめていうと、プレイによって妻の美を愉しみ、プレイによって妻のよさを再認識するのではないのでしょうか……」

もうプレイではありません。私は妻を縛る場合でも、度々、痛くないか——と声をかけます。成程妻の限界ギリギリまでは行ないませんが、絶えず顔色を窺がって居ります。鞭打ちにしても、妻の快楽がともなう時は痛みが快楽に変わりますが、気が乗らない時は、少しの鞭打ちでも痛がります。これは夫たる私の努力が足りない時です。愛咬やつねりも痛く感じない時、それは鞭打ちにもいえるのです。そして妻の逆吊り、又肉に喰い込む緊縛に私

三隅「四馬さんのお考えは卓見したプレイの見識です。私達夫婦プレイの場合、私はいつも妻をいたわり乍らプレイしております。プレイの最中こそ、最も冷静な判断が必要だと思うのです。一歩危まれば妻は危険な状態にある——そんな時、衝動の尽に走ればこれは

は見とれます。妻を改めたいとおしく感じる瞬間です。だから四馬さんの仰有る様に、妻の体に一生消えぬ傷跡をつけることはプレイの本質ではないと思います。それは醜くくなり、やがてそれが、自分がこしらえた癖に、その醜くさにいやになるときがくるからです……」

（三隅氏の話は夫婦プレイの相当きわどい点がありますので大幅に抄録しました。不悪）辻村「その点、糸島さんのフोटやプレイは又綺麗ごと過ぎるくらいですね——」

糸島「（フोटを三葉提出し乍ら）ボクの場合綺麗ごとというより、撮ったネガの出どころがないでしょう。この程度なら一般のカメラ店に出したって差支えないからで、本当はもっともっと撮りたいのが本心ですが……」長田「糸島さんはいつ頃小説を奇巧に発表されたのですか——」

糸島「恰度一年位前で『男のサドと女の愛』って題だったかな——。兎も角ボクは幸福な男だ、二人の女に愛され、プレイが出来てなんて、自己陶酔的な勝手な文ですよ——」辻村「本当の話なんだって……」

糸島「多少は色をつけていますが殆んど事実です。今も時につき合っていますが、このフ

オトもB子です……でも近頃は青木順子に夢中で、彼女のかかっているミュージックの尻ばかり追い廻しています……」

水野「青木順子って云うと……」

辻村「私は先日、糸島さんから連絡戴いて、それじゃ一度見ようと京都に出掛け、遂に会見の上縛るところまで行きましたが——ストリップ界にあって、新劇めいた要素をもったデュエットで、マゾ願望の女性なんですよ。

この会見記は、私の「カメラハント」に書き

ましたから読んで下さい、青木順

子のことは糸島氏、三隅氏の両氏

から連絡いただいた成果で、この

点でお二人に本当に御礼申さねば

なりません——」

箕田「瀬沼さんは妊婦に興味をお持ちで少し場違いだけど、何か話して下さい……」

瀬沼「私が三十六年十二月号に始めて妊婦マニアとしての進言を投稿し、それが実現して、市販では不可能かと思われた妊婦フォトの分譲を手にする事が出来、改めて箕田さんの御努力に感謝している次第です。恰度二十七年頃でした

でしょうか。奇クが大判から今の型になり、

カストリ雑誌から脱却して、風俗誌めいた体裁を持たれる様になった頃、羽村京子さんが「狂い咲くカンナ」で前人未踏の浣腸というテーマに手をつけられ、爾来十二年、今では相当多数の浣腸マニアが投稿せられておられますが、私はその時の羽村さんの文に魅かれます。一つは、彼女が私と同県の三重である事も親近感を昂めて、それ以来奇クの文中では羽村さん一辺倒でした。蛙腹とかA感覚とか羽村

糸島博氏提供フォト



さんの新語が、他の人々によっても使われ出した頃、彼女が女性乍ら、妊娠という事に興味をもっている事をしり、私の潜在していた妊婦への興味は急に高められました。安原さゆりさん、児玉昌子さん始め、田中美佐子さんに到る妊婦フォトはすべて分譲して貰いました。しかし、何か物足らぬものがあるのです。分譲の限界点でしょうが……。これ以上を奇くに望むのは無理としりつつ妊婦に憑かれた私を満してくれるものがあれば、すべてを擲うってでもそれを探求して行きたいと思うのです」

三隅「瀬沼さんの「メロンのヴィーナス」をよんで私は田中美佐子の分譲フォトを送ってもらいましたよ……」

水野「私も——。生首か妊婦を好むなんて可怪しい話ですが、やはり男なら妊婦には興味をそそられるものですね。私の場合、生首のフォトの一部分を分譲に提供したので、そのお礼代りに箕田氏より送ってこられたのです……」

辻村「それにしても最近、羽村京子のもものが少ないですね。私も彼女に随分啓蒙され、私の書いた浣腸ものでは、相当彼女に厄介になっているんです。確かに淋しいですよ。瀬沼

さん辺り、三重県同志で文通はありませんの？ 一月号の「夢の中の妊婦」では、かなり羽村さんに陶醉しておられる様ですが——」

瀬沼「いいえ、でもね、羽村さんは夢で生き私の幻の中に生きているのです。絶えず……。私はだから、いつも羽村さんを自分の心の中であれこれと創造しております。恐らく羽村さんとはレールの並行線の様に一生逢えないかも知れませんが、又レールの様にたえず私の心の中で並行して生きているかも知れません。羽村京子は私の心の中に住む、ニンフであり、ヴィーナスであるかも知れません」

辻村「私にとっても、彼女は私の心を妖しく掻き乱したニンフでしたよ。公開のラブレターを交換した頃から、随分長いつき合いだったが、どうした事か、今年の四月頃よりバツタリ音沙汰がなくなった」

三隅「所詮謎に包まれた女性なんですねー」

長田「塚本さん、最近関谷富佐子さんはどうなったのです。それと近頃、グラビヤが少しマンネリズムに思いますが——」

塚本「どうもそれを云われると辛い——（塚本氏頭をかく）関谷さんは奥さんで、モデルでもなし、別段御不自由もしていच्छらない。気が向かされると先方から申してこられ

るが、こちらがどんなにやいやい頼んでも、御都合が悪いと来られない。それじゃこちらもそうそう向うの都合には合してもおられないので今の処、暫らく御無沙汰です。しかし機会があれば、いつ何時又撮ることがあるかも知れません。モデルがマンネリ化したことは私も認めます。しかし、この頃段々憶効になりましたね。数年前の様な、埋もれた女性を発掘して飼育していた頃のあの熱意は薄れた様です。何故薄れたか——皆さんには分つて戴けると思いますが、私が如何にファイトを燃やして撮っても、それが近頃の状態では殆どグラビヤにのらない。みなオクラなんです。オッパイはいけない。おしりのわれ目が見えてはいけない——オヘソはかくしてくれ……。これで何が撮れますか。分譲フォトで半分生きますが、それでは本意ないのです。モデル料は上る一方だし、撮るフォトは低下の一途です。道楽じゃなく、一応プロとして撮る私の場合、これじゃ意慾の薄れるのも当然です。それに十年撮っていると、どんな緊縛ポーズをとらせても、どれも一度はとつた様な気がして、人間の考える可能性のポーズなんて似たりよったりです。箕田さんとも相談して、この規制の厳しい当分の間、泣か

ず飛ばずでいるしか仕方ないねと、話し合っているのですが……。まあもう少し御辛抱下さい。きっとそのうち、あッという様なのをお目にかけますから……。第一、辻村君だって以前の様に梨花や東浦を発掘してくれた時の様な意慾がない。彼にも多少ハッパをかけておいて下さいよ——皆さん……」

辻村「お鉢がこっちへ廻って来たね。いろいろ話が弾み出して、喋り出せばお互いにキリがないと思うのですが、このあと撮影会を計画していますので、こゝろで打上げて最後に皆さんから奇クの方への御希望なり苦情なりを一言ずつ仰有って戴けませんか——」

長田「私の会社の東京本社の部長クラスのところへ『ハリウッド・エア・メール』なる、新手的ヌードフォトの売込み戦術が、オリンピックを控えて舞い込むそうですが、何でもカリフォルニア州を中心にした一帯で、差出人が『クララ』とか『ジェーン』などとなまめかしい女文字でくるのです。私はヌードには興味ないのですが、アチラものはバラエティに富んでいて、ヌード以外に、いろいろの責めをとりいれたフォトがある話で、中でも『ラバー・ガーメント』という、全裸にゴム合羽をきせ、緊縛した特殊写真など、奇クに



も手を廻して、是非掲載して欲しいと思います。十六ポーズで送料共二ドルといいますが、円にして八百円足らずです。新しい下着や責道具を、それから研究したいと思うの

糸島博氏提供フォト

です」

新宮「今の塚本さんのお話で、グラビヤフォトの苦心はよく分りましたが、全裸必ずしも必要でないと思うのです。私如一ファンすら、暇を見てはハリツケ柱や、生首台、槍など責め道具を作っているのですから、こちらでひとつ、本格的な処刑用具をつくられて正式な拷問シーンや、処刑、責めのいいものを写して欲しいと思います」

水野「私も同感です。伊藤晴雨の販売機関であった粹古堂からは、随分時代考証した処刑や拷問フォトが出ておりました。もつとこの面で力を入れて戴きたいと思うのです。先日大塚啓子さんをモデルにしたフォトに、火炎りの構想や、木馬、はりつけ等のシトンがありました。何だか周囲が雑然としておりました。おききする処によるとやはりファンの方がつくられた責具との事です。これなど、百パーセントに利用され、乱れ髪かカツラをつけて、時代色ゆたかな、生首、切腹、処刑などを切望するのですが……」

糸島「辻村さんの三十九夜物語は随分楽しく読みました。私は奇クをバラバラにしてグラビヤ、読者通信と、それぞれ綴じて製

本してありますが、三十九夜物語も十八夜以降一冊にまとめてあります。続三十九夜を期待しますよ。それと小説なんかの内容の挿絵がもう少し内容にピッタリしたい絵を希望します。一寸誌中の挿絵はお粗末に思いますが……スミマセン」

瀬沼「今後とも妊婦のニューフェイスを切望します。又浣腸フォトにも、最近日本で初めて発売された携帯用ビデ（洗滌器）「シャイ・レディ」など、どしどし新製品を使ったフォトを分譲願いたいと思います。ええ、何でも元大映女優で、歌手の小畑実の元夫人の薫ゆたかさんがアメリカのSHYの日本の代理店として売出しているそうです。申込者は二十才のB・Gが圧倒的だそうです。漫画家の岡部冬彦氏が、ビデで用便のあと洗ったら、スカツとして大変気持がよくなったなんていっています。コンパクトですから、携帯便利で将来、同好の方にも利用価値が広いのじゃないんですか——」

三隅「夫婦プレイの最初は、兎も角自分の妻が一番身近で頼み易いので始めるのが動機ですが、矢張り若い女性とか、違った異性とプレイして見たい気持は私だけではなく、通信で知り合った方すべてお持ちです。奇クには

決して迷惑かけませんから、夫婦SMプレイの同好者は、何らかの方法で、今後共全国的に広く手を取り合って行きたいと思っています。先日横浜のFという方ですが、夫婦プレイをやろうと仰有って来たので、御返事したところ、妻は恥かしがっていけないが、自分一人でゆくからSMプレイの相手の女性を世話してくれとの虫のいいお便りでした。冷やかではなく、夫婦生活とエンジョイする意味に於て、真面目な文通をしたいと思えます」

四馬「編集部から、余りあれもいけない、これもいけないという制約を受けると筆が段々

萎縮して描けなくなるのです。箕田さんの石橋を踏む気持ちも分るのですが、パーッと思い切って、自分の持っている構想を思い切り描いて見たい——と、近頃つくづく思うナ」

辻村「私の三十九夜物語」だって、どれ程削除されたか知れません。しかし編集部の手堅い方針で、我々安心して書けるのです。ヒドイところは削ってくれるだろう……そんな安易な気持ちがいけないのですが、武智鉄二の『紅閨夢』だってストーリーに不可欠なシーンをも含めて、上映時間にして二十分以上も削られているそうです。難かしい時代だから

お互いに自重してやってゆき、この奇クをいついまでも稀少価値のある雑誌として存続していてももらいたいと思うのです。どうも箕田さんの代弁見たいになりましたが、今後共皆さん、よろしく御交誼の程お願いしたいと思います」

………

座談会は一時間四十分。そのうち各氏の言葉を主として抄録しました。これより休憩のあと、午後三時より撮影会に入ります。モデルはホステスのA子、B子です。

「緊縛野外撮影会」

辻村 隆

万一、モデルがうまく見当らなかった場合を考慮して、各人の案内には、撮影会をやることを通知しなかった。撮影会ときいて、切

齒扼腕したメンメンも多く、こうした場合を予想してカメラ持参のメンバーは、長田実氏と糸島博氏のお二人、それに退屈男の一行の

うちで、ライカ氏とパイプ氏、加えて、塚本氏と私の六人であった。あとの連中は指をくわえての見学ということになって、私はカメラを持たぬ人々から随分恨まれた。箕田さんと四馬さんは御存知だったが、最初から撮る意志がない。

二千坪の庭園は緑に覆われて、古墳の跡あり、池あり、泉水ありで、申し分がない。

A子とB子はあらかじめライカ氏から因果を含められていたのか、それともモデル料を相当はすまれているのか、案外素直に脱いで

バスタオルを体にまきつけ、素足でベランダから庭園に降り立って来た。

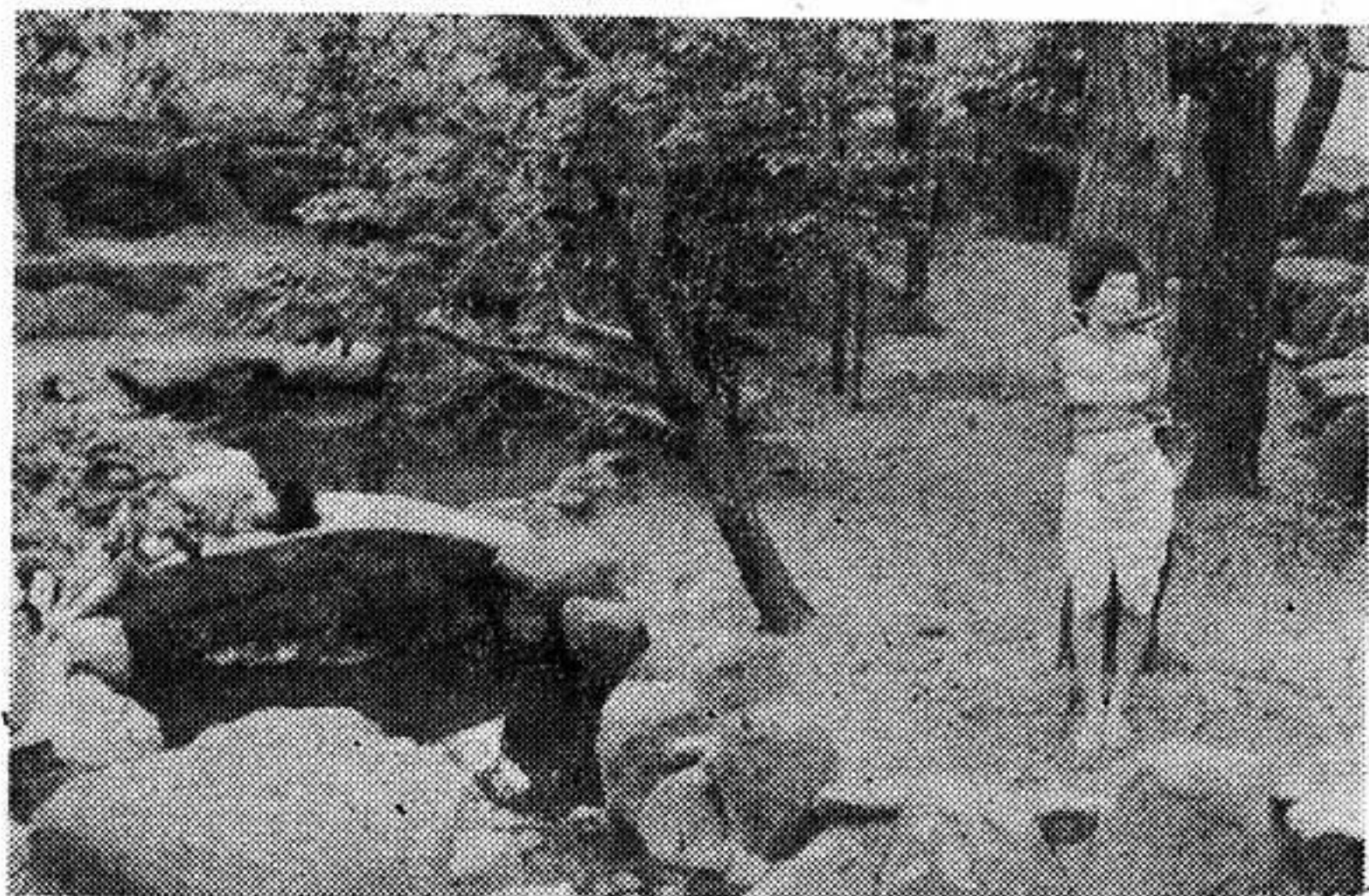
A子は背は少し低いがボリリュームがある。二十七、八才ぐらいだろうか——。B子は痩せ型だがライカ氏の耳打ちによると、かなり飼育したので、相当の緊縛に耐えられる筈だ

と仰有る。

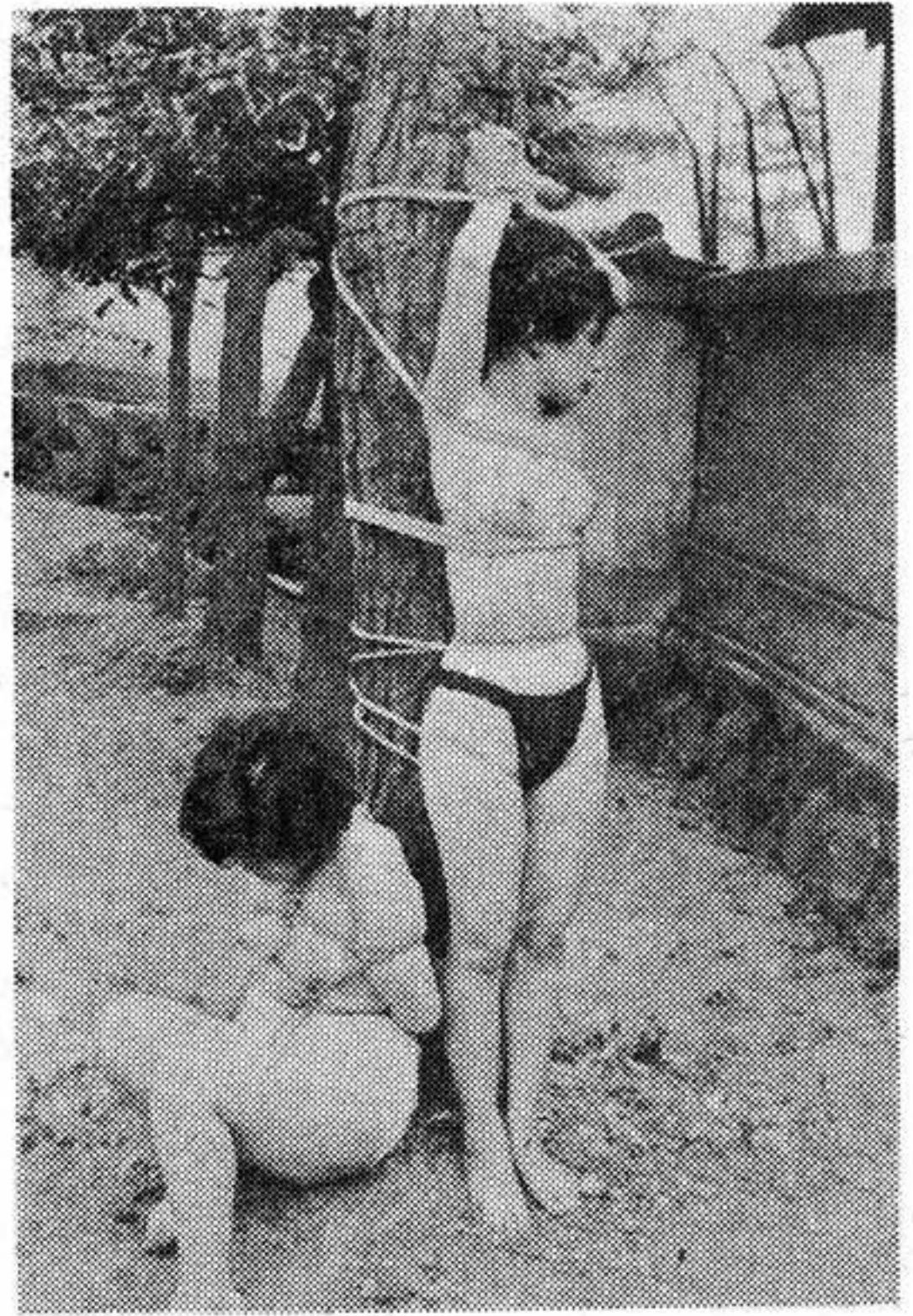
カメラマンが多いと、どうも照れて、誰も手を出さない。誰かやってくれるだろうとお互いが牽制し合っている恰好である。

結局私がつけざるを得なかった。泉水の池に掛った石橋に、先ずA子を縛って転がし、二米許り離れた松の立木にB子を縛りつける。衆人環視の上だから、オーソドックスでパンティ着用は勿論である。日もかげり写すのにはもってこいの日和である。数人のカメラが一斉にパチリパチリと集中する。塚本さんがB子に近づいて、縄で口辺がくびれる程猿轡をはめた。池のほとりが一通り終って一同はぞろぞろと移動する。移動の間にも、誰かのカメラがその状況を撮っている。

古墳の洞穴の前で、B子を吊り下げることになったが、さて大岩を越して、吊り下げる縄を結ぶところがない。忽ち二、三人が応援を買って出て大岩に横手からよじのぼると、縄を握った。下でB子の体を二人がかりでかかえ、よいしよと掛声と共に差上げると同時に、上で縄を引くと、軽量のB子の体は軽々と宙に浮く。カメラを撮る私達はラクだ。ブラ／＼と宙吊りに揺れるB子目指して一斉にシャッターの放射——。この時の緊縛は長田



氏と水野氏とドクター氏である。うまく縛ってあるのでかなりの時間耐えられる。それでも流石に五分以上も経過すると、B子の唇から、微かな呻きが洩れ出した。岩上の三人が手をゆるめると、ズルズルとB子は石におり立つ。



A子の方はどちらかと云うと羞恥心が強いのか、又、こうした緊縛に馴れていないのか、一つ協力的でなく、何か渋々つき合っている感じがした。勢い私達は飼育されたB子をよく使う事になる。

海に面した鉄扉の前でA子、庭園の石だたみに転がったのもA子だが、ここでA子とB子と二人を分けることにした。

A子はライカ氏、パイプ氏、糸島氏などと広間の方へ、B子は私と塚本氏と長田氏の組がとる。見学の連中は、七分三分でこちらが多い。矢張り塚本氏や私に幾分期待をかけら

れておられるのだろうか。

「逆吊りを是非やってほしいですネ——」

新宅氏の発案で、さらばと、母家の前のくすの大木に逆吊りする事に決めた。

身の軽い長田氏が樹によじのぼって突き出た太い枝に滑車をとりつける。塚本氏は準備してきたボロボロの破れたズボ

ンをB子にはかせて大木の下に連れてくる。

新宅氏と水野氏とワイン氏の三人が縛り役、先ず直立したまま犂々と縛り、吊す縄を背、腰を通して足許で結ぶ。三人がB子をかき上げると、私と瀬沼氏が綱を引張る。塚本氏はリーダー格で、太った体を庭石におろし、ニヤ／＼と私達の作業をみつめている。

B子の体はスル／＼と足許から上にあがり頭が地上を離れること二米の位置で、私達二人はしっかり綱を繋ぎ止めた。三人がB子の体を離すと、見事な逆吊りがそこに現出した。

B子の頬が徐々に紅潮してくる。早く／＼とお互いがせかし乍ら、右往左往して、この素晴らしい逆吊りのシーンを、一枚でも多くフィルムに納め様と、一同カンカンである。

「く、くるしいわ……降して……」

B子の口から嘆願が洩れた。よし／＼と私が縄に近づいて解こうとすれど、もう一枚、もう一枚で、座敷のA子を縛った俵放ったらかして、かけつけた連中が、しきりにとり出す。辛抱強いB子だが限界はきている。

「は、はやく降してったら——」

遂にB子は怒った様に叫んだ。今は躊躇すべきでない。私達は一斉にかけより、忽ちB子を地上に引き降した。彼女の胸は弾み、大きく喘ぐ吐息は、口中がカラ／＼なのか、心持ちなまぐさく匂った。

B子の休む間、一同はA子に蝟集した。廊下での柱縛り、普遍的な縛りが、次々と一同の手で縛りを変えて続けていった。その度毎にA子はライカ氏の視線を窺い、にこりともせず義務的につづけていた。

B子の気分が治った様だった。彼女に課する最後の仕上げの様に、水野弘氏が突飛でもない思いつきを提案した。

「あのブロックを石抱き責めにさせたら如何

です。岩の上へ座らせてやるんですが面白い
と思いますよ——」

一寸危惧したが、変った事は忽ち衆議一決
する。B子を岩の上に正座させて、先ず一枚
膝上にブロックをつむ。

「大丈夫？」

私が訊ねるとB子は黙ってうなづいた。

更に又一枚。二枚、三枚、四枚と積み上げ
て最後の四枚目になると、既にブロックの高
さはB子の胸を越えて、顎に届きそうになっ
た。一同の視線に等しく感嘆と悦楽が走る。
何と忍耐づよいB子だろう。ブロック四枚の
重さを、岩の上の正座でヒシとこらえて呻き

声もらさない。一分、一分半——B子のひ

たいに脂汗がにじみ始め、顔色が蒼ざめてき
た。バラ／＼と私達はかけよって、一人一枚
づつ、忽ち四枚のブロックを膝より降した
が、B子はしばし立上れず、フラ／＼と前に
のめりそうになった。抱きかかえるようにし
て、皆で岩より降り、よかつた／＼と口々に
B子をねぎらい乍ら座敷に抱えるようにして
戻った。恐るべき忍耐力である。

「いいフォトが撮れたよ。分譲にどう？」

塚本氏が箕田氏に囁やいている。

「いいネ。樟の木の逆吊りと、古墳の吊り、
それにこの石抱きは、一寸得難いシロモノだ

よ。分譲にしよう——」

(B子が木村洋子として分譲写真に書き出さ
れた事は、奇クの読者なら、御存知と思いま
す。A子の方は知りませんが——)

時間は午後五時を過ぎていた。人々はそれ
／＼の地へ散らばって行く時間は迫ってい
る。瀬沼氏と水野氏は既に少し前に帰ってい
った。ドクター氏ワイン氏の姿も見えない。

大阪の連中は、ナイロン氏とパイプ氏、箕
田氏の車に分乗して帰阪する予定——。四馬
氏は大阪でもう一泊するハラらしい。最後に
もう一度、お互いの健康を祝して、乾盃して
別れたかったが、昨日につづく長い時間はそ
れを許さず、私達は跡片附けもそこそこに別
荘をあとにした。

これ程の多人数が一堂に会する事は、そう
そうあるまいと思い、私は車にゆられ乍ら、
無事に終会した疲れがドツと一時に出て、い
つしか、泉佐野市辺りから仮寝の夢を結んで
いた。三十九夜のメンバーが、クラブの一室
で談笑し、緊縛フォトが退屈男達の頭上へ、
数限りもなく、ヒラヒラと舞い落ちてくる夢
を——。

(B子すなわち木村洋子は塚本氏のモデルと
なってその後、数度強烈なものを撮っており
ます。蛇足乍ら)

緊縛写真と悦虐絵画満載の超弩級版

臨時増刊 写真と絵画 文献 特集号

直接お申込を 定価一部五〇〇円(送共) 略号(文献)

◎サド、マゾ、フェチ、女体切腹、女体浣
腸、フェチ、女斗美、女相撲、とあらゆる
趣向を網羅した本特集号は、今後二度と発
表できない特殊文献を集録しました。

◎文字通り「文献誌」としての真価を発揮
しました本特集号は、発売以来マニヤの方

々の座右の宝典として非常な人気で書店の
店頭から姿を消してしまいました。特に直
接申込用として発行所に確保しました分が
ございますから、未見の方は何卒この際略
号(文献)とお書きの上、お申込下さい。
一部定価五〇〇円(送共)です。

ガン作・マニヤのノート

濡れにぞ濡れし

芳野眉美

A 柳美那

武智鉄二脚色監督の『紅閨夢』（第三プロ作品松竹封切）は、前作『白日夢』と同様くだらなかつたけれど、救われたのは柳美那の豊満な肉体がおがめたことである。

「色気で圧倒されるような身体だよ。乳房のわきにホクロがあるのも印象的だな」

アサヒ芸能七月廿六日号武智監督談。

眼の大きい、肉感的なふっくらした顔立ち、は、私好みの美女だから、芸者あがりの妻の役の柳美那が「浴槽の魔女」の中で、画家の夫（後藤陽吉）の顔を足で踏むシーンは最高だった。

床に仰向けになった夫が、
「顔を踏んでおくれ」

とせがむと、

「こうですか」

と云いながら、柳美那がシラタキを夫の顔に落とすところは、おもわず鳥肌が立った。

シラタキといいコンニャクといい、その感触はわかるけれど、柳美那が夫の顔に浴びせているような錯覚にとらわれたとしてもかわないんじゃないかしら。

シラタキに埋もれた後藤陽吉の顔を、柳美那のまっ白な素足が踏みつける。口を踏んだとき、椅子から飛び上がりたくなった。

このシーン、ほんの数秒。残念でした。

武智鉄二は、やはり谷崎潤一郎とは異質で谷崎の世界を理解することは出来ない人なんだと思ったね。

原作は谷崎の『過酸化マンガンの夢』だそうだけど、映画とあまり関係なさそうだ。

七月三十日『東京新聞』夕刊によると「紅

閨夢」は情緒的なエロをねらったホームドラマだそうです。監督がそうおっしゃったのだから、ホームドラマなんでしょう。

柳美那、フロの中に全裸で三十秒も息を殺してもぐったので、

「裸は苦にならなかったけれど、息ができなくて死にそうだった」

ロケ地を提供した人の話によれば、

「女を風呂の底にしずめて、男が足の方から順々に踏みつけていく残酷なシーンがあるんです。ヒドイもんで、子供にはとても見せられませんな」

てなことになる。『平凡パンチ』八月廿四日号。

このシーンでは、逆に、後藤陽吉が柳美那の口のあたりを踏みつけている。

柳美那。花柳流名取り。身長一五八、バス

ト八八、ウエスト五四、ヒップ九〇。二十二歳とはとても見えないよ。

「最初はおことわりしたのですが、再三たのまれたので、ついに決意しました」

そうです。有難う御座居ます。

B 原田福子

梶山季之の長編推理小説「囃」の女主人公。

光文社カッパノベルスより。

(1) 『男買い』の四頁

「今夜……私は、あなたをかうの。気が向いたら、これから買わせていただきます。いいこと?」

「ぼくを……買うんですって?」

「おいや? いやなら、どうぞ帰ってちょうだい」

(中略)

「今夜は、あなたは私の奴隷よ」

「よろこんで、奴隷になります」

「そう。では、裸になりなさい」

原田福子は、ベッドに腰をおろしたまま、

たばこをふかして、その色白の、二十五歳の青年が、洋服をぬぎ、ワイシャツをぬぎ、下着一枚になるのをじいっと見つめている。

(中略)

「お取りなさい」

二度目の声に、彼はあきらめたように、下着をとった。

「こんどは私の番ね。足袋をぬがせて!」

福子は、命令口調だった。

(中略)

五枚コハゼの、足首の上までを蔽っている足袋であった。踊りのとき、用いる特別製の白足袋である。

「とったら、足にキスなさい」

鈴江博は、思わず女の顔を仰ぎみた。

原田福子は、あの例の、謎めいた妖しい微笑をたたえて、大きな瞳をキラキラ輝かせながら、彼を見おろしている。

「キスするのよ。いやなの?」

鈴江は、おそろおそろ唇を近づけて、足の甲に押しつけた。

「指をなめなさい」

「え?」

「足の指をなめるのよ。私のいうことがきけないの?」

(2) 『さようなら』の四頁

その顔には、昨夜、鈴江博をロープでしばり、背中から血がでるほど鞭打ったときの、あの狂態ぶりは感じられない。

(3) 『機密情報』の一頁

福子は、長襦袢ごと、肩からすべらせるようにして、着物をぬいだ。すると水色の腰巻だけになった。

「ああマダム」

(中略)

「はい、それまでよ……。こんどは、足の裏から!」

福子は、男の頬に思いきり平手打ちを食わせると、妖しい勝ち誇った笑いを浮かべて、ベッドの上に体を静かに横たえた。

(4) 『空買い』の四頁

女装した鈴江博は、いつか△赤と黒▽で買求めたコルセットを締め、真紅のナイロンパンティをはき、カラストッキングをはいている。顔は、化粧されてあった。むろん、かつらもかぶっている。

だが、手のほうは後ろ手に縛られていた。そして床の上に、芋虫のように転がされているのである。

(中略)

先刻から、もう一時間近く、彼は福子から苛められていた。鞭打たれ、たばこの火を押しつけられ、そのあげくに、両手を縛られて太腿を歯で噛まれ、そして血が滲むまで長く

鋭い爪を突き立てられているのである。

(中略)

「さ、目を瞑って、口をおあけ」

やっと爪を立てるのをやめると、優しく福子は言った。

「口を、あけるんですか……」

「そうだよ」

鈴江は、言われるとおりにした。また、彼女の甘酸っぱい唾液でも、口に入れられるのだろうと思ったのだ。

だが、その予想は違っていた。

なにやら浴衣の裾をまくるような音がしていたかと思うと、次に顔の上に、なにか物体がゆっくり近づいてくるような気配がした。そして、ある独特は匂いを放ったものが、近づいてくる。

彼は目をあけ、とたんに悲鳴をあげた。

梶山季之の作品にはSMFをあつかったものがかなり多いので興味があるのだけど、御



本人はどうなのか私は知らない。

C トップレス

七月廿二日東京新聞夕刊『ふだん着のニューヨーク』に

「恥も外聞もなく……トップレス売れ行き好調」

とあって、

「A夫妻のプールサイドパーティで、皆着る

ことに申し合わせたのよ。私だけが着なかったらけむたがられるわ」

「何のことはない、パンツにサスペンダーをつけた、小さな男の子の半ズボンのようなスタイル。パンツがハイウエストで、みぞおちのあたりまでできているから、水着で隠す総面積はビキニより大きい。ただ、乳房を丸出しにする大胆さが物好きの女性連にアピールするものらしい」

「プライベートビーチや、自家用プールでは露出派が続出している」

「とにかく売れていることは確か。写真をとろうと思って数軒、婦人服店を回ったが、どこも売り切れでただいま注文中」

とすさまじく。

「ファッションとあれば何でも飛びつこうという連中が大勢いる。ハイソサエティの婦人たちが、たいていのことはしっくしてあきあきしたから、何か新奇なことで気晴らししようというのが動機」

そんなところでしょうね。心理学的にいくと、

「トップレスを着る女性は露出症か自己陶醉

症。露出狂の分は大胆な露出によって人目をひこうとする。ナルチシストの方はしんから自分を美しいと思い、裸をさらすことによつて世の中に美の恩恵を与えるものと信じ込んでいる」

どっちも同じことだ。とにかくアメリカの女性が裸になりたがるというお話。

七月十八日東京新聞夕刊『世界短信』によると、

「最近、米ロサンゼルス市の中心街のある服飾店のショーウィンドウに水着姿のモデルがおず／＼と現われるやたちまち黒山の人だかり。というのも着ていた水着がいま話題のトップレス。千人ほどの群衆（ほとんど男ばかり）は画家のモデルをしているフェリシア・コンプトン（二二）が乳房もあらわにふり向いて手を振ったりおじぎをするとガラスに鼻を押しつけんばかりながめていた」

七月十三日号平凡パンチ『パンチジャーナル』によれば、

「ブラジャーなし、ストラップだけのオッパイまる見えという女性用水着の水着ショーがさきごろロサンゼルスでおこなわれたが、モデル嬢は、軽犯罪法にひっかかり逮捕された。ところが、このモデル逮捕事件がかえっ

て絶好の宣伝となり、ロスやハリウッドでもこの水着（二千ドル）を売る洋品店があらわれた。ただし、使用してよいところは、自家用プールとヨットのなかだけ」

とあるから、アメリカでも軽犯罪法に触れることは触れるんですよ。でもねえ、二千ドルとはね。

アメリカばかりでなく、トップレスは全欧州を席捲した。

アサヒ芸能八月二日号の「世界のアングルパリのトップレス熱」は、クレージーホースサロンのアランベルナルダンがデザインしたトップレスを、最も美しいバストのモデル嬢に着せて開かれた。トップレスがショーの舞台に登場した最初のものであるという。

美的感覚ゼロだね。

ビキニスタイルのほうが、どのくらい美しいかわからない。

ところが、日本でも「トップレス水着発表会」があったんですね。

八月五日午後、東京赤坂のゴールデン赤坂に於て、公演中の「トップレスエロチカ」の中の一シーンでした。

志摩夕起夫の感想「舞台上ヌードと一緒にや、あまり感激しないね」

あたりまえだよ。八月六日スポーツニッポン。それでも写真は綺麗だ。

ところでその日本なんです、七月廿一日東京新聞朝刊によれば、

「やっぱり軽犯罪に——警察庁」

とある。法治国だよ、日本は。

「女性の胸部をまるだしにするトップレス水着について警察庁は二十日（これを海水浴場などで着ることは軽犯罪法に触れる）この結論を出し、各都道府県警を通じメーカー、販売業者に警告するように通達した」

残念でした。

「警察庁は法務省、最高検と話し合った結果（刑法のわいせつ罪にはあたらない）にしても、海水浴場など公衆の面前で着用することは……」

いいですか、ここが大切、

「……（けんおの情）を催させると——意見が一致、軽犯罪法的一条二十項に触れるという結論になった」

御苦労様です。けんおの情とは名文だ。

「一般にたいしてはトップレス水着を海水浴場などで着用すると、軽犯罪法によって拘置または千円未満の科料になる」

わかりました。

続いて七月廿五日の朝刊に、
「外人客に一枚売れただけ」
とあって、

「気の早い東京のデパートにもお見えした矢先だった。日本橋のデパートで外人客が一枚買ったというのがただ一つの実績で、あとは各デパートをもさっぱり。お客の反応も思ったほどでなく」

と日本女性はやはりつつましい。

「警察庁から販売をさし控えるように協力してほしいという注意がきたし、一応現在は売り場から引っこめた」

水谷良重の意見「美しいものだからといっても、むき出しにしたんじや夢がないわ。着物を着た人がひよっとした拍子にスネをのぞかせたりすると、ドキッとするようなイロ気があるけれど、あの効果が絶対大切」

吉行淳之介「今まで、すでに乳首を出すか出さないところで露出してきているんだから、そんなに胸にこだわるのはおかしいんじゃないかな」

文化服装学院小池千枝デザイナー「トップレスはプライベートなプールなどを持つ人たちが着るもので、公共の浜辺などで着て歩く



のと根本的に目的が違うわけですが、はたして胸まで出して焼く必要があるかという疑問ですね」

以上、七月八日東京新聞朝刊「限界ぎりぎりにきた水着」より。

野末陳平「僕の知ってる娘でモデル養成所に通ってる子など、ことし高校出たばかりなんだけど、きれいだというと、ペロツと見せるからね。羞恥心より発表欲のほうが盛んになってきたんだよ。若い人は日本人でもすばらしい乳房になってきたんだし、羞恥の必要はないんだから、いまだき見せない娘さんは自信がないということなんだね」同感。

淡路恵子「滑稽で、男性の気を惹くどころか逆効果じゃないの。全然魅力ないわね。ビキニがいいと思うのは、オヘソが出てるところよね。オヘソのところまでへこんで、また下のほうへ少しづつふくれるでしょう。その起伏があるからそれから先への興味が生まれるんだけど、オッパイにしたって、まるっきし出しちゃったんじや魅力よりかえって醜悪よね」同感。

炎加世子「紐二本では、美を強調できないわ。脱ぐなら脱ぐ、そうでなかったら、何も見世物めかしてお乳だけ見せるなくて。脱ぐ気になる相手だったら、何もごていねいに紐など背負ってることないでしょう。宣伝に（屋内で）といっているけれど、あたしは、家

でなら日光浴は素っ裸でするわ」

そうです。そのほうが美しい。

以上アサヒ芸能七月十九号「まぼろしの乳房に寄せる真夏の妄想」より。

浅草座の沢ゆりかが試作品のトップレスを着たフォトがあった。

八月十日号、平凡パンチ「パンチジャーナル」によると、

「フランスでは、（ただし若く美しい女性に限る）という条件のもとに、トップレス水着が許可された都市があるそうだ」

ほんとだったらしいけど、フランスじや遠すぎらあ。このはからい粹なこと。

全世界にセンセーションを巻き起こした発端は、ロサンゼルスデザイナー、ルディ・ガンソンソックがファッション風刺のつもりで面白半分の一つだけ作ったのが、意外に反響が大きく、方々から注文が殺到してしまった結果とのこと。

なんだかんだわい／＼云っているうちに、夏は終っちゃったよ。

私といたしましては、申し分ばかりの布を細いヒモで止めたような、うしろから見れば、オヒップの割れ目が少々見えるような最大限に露出したビキニスタイルが好きで、プ

ラジャーのヒモをはずして胸もあらわに寝そべり、背中を焼いている図なくてこたえられねえと思います。

夢があるよ。

胸をはだけた水着の最後に、ローマのデザイナー、リア・ピアセンチニがデザインしたのを紹介しておきます。

ジッパで胸もとが開閉できる水着で、ジッパは胸からウェストまでついている。

ワンピース型のオーソドックスな水着の改良型だが、これを皮でつくったら面白いとは思いませんか。後手に緊縛したとしても、前は無防備だし、いたずらできるよ。

ジッパでなしに、ボタンでとめてあった水着を都内のプールで見た。ペッティング用かしら。

とにかく、夏は楽しいね。

D 某月某日

(1) プレゼント

その手紙は簡単だったが、美しい女文字で書かれてあった。

「田舎で求められないような変ったパンティの新しいものをお送り下さいましたなら、私のほうからも汚れたパンティをお送り致します」

す」

一週間して、赤いナイロンパンティがプレゼントされた。汚れていた。

「私の写真を同封しました」

二葉の写真が笑っていた。

その夫人の手紙には、若い男性を責めながら飲ませたいとあった。

(2) 期待

「わたくし、ものすごいSですの。ネクタールを飲ますのを好んで居ります」

女文字の手紙には弱い。

「夫には毎日お茶代りに飲まして居ります」

特に夫人の手紙は悩ましい。

「でも、毎日同じ人では物足りません。いずれ東京の方へ行く事もありますから、その時は、ゆっくり心いくまであなたにネクタールを差し上げます」

手紙の終りに、

「まだ見ぬ奴隷へ」

とあった。

(3) Urinate

妊娠しているのかと思ったが、そうではなかった。巨大な乳房が胸部だけでなく、腹部に垂れていたのである。小児の頭より大きな両の乳房だった。

乳房があまりにも異様だったので足を止めてしまったといっている。

「遊ぶの」

とその女が云った。まだ若い。

安物のブラウスもスカートも汗とほこりで汚れていた。足も真黒だ。

女が案内した旅館は、気味が悪いほどべとついていた。二階の三畳の部屋は、天井といわず壁といわず雨の染でそまり、畳はぼろぼろで、なめくじがいないのが不思議なくらいだった。

部屋の真中に、薄いきたない敷布団が一枚置いてあった。

梅雨で、しとくと降り続いた雨が、夜になって急に強くなり、風も吹き荒れた。

「泊ろうよ」

と女が首に手をまわしてきた。

「あなただけでいいわ」

幼稚なセリフだった。女を抱く気にもならなかった。

部屋に入るなり、この女に、ついてきたことに後悔していた。すでに興味は薄らいでいた。金だけを渡して帰ろうかと思った。

女のいいなりに金を渡すと、女はさっさと裸になった。その女の汚れた下穿きが目につ

いたとき、はじめて興奮した。帰るのをやめた。

「いつ洗濯した」

「ええ」

「これさ」

脱ぎ捨てたパンティを指でつまんだ。

「忘れた」

「こう汚れちや、洗濯のしようがないな」

「明日新しいのを買うからいいわ」

「捨てるのか」

「そうね」

窓を開けた。外に投げるつもりらしい。

「もらっておくよ」

「——」

「いいだろう」

「どうすんの、そんなキタナイもん」

「君の記念さ」

「記念」

「おかしいか」

「お金をよけいにくれたからいいわ」

そう云うと、開けた窓にひよいと乗り、しやがんだ。

そして、下の大通りに向かって勢よく放尿した。おもわず、

「待て」

と女に叫んだ。

「大丈夫よ」

と女は云った。

「大雨よ。誰も通っていないわよ」

「そうじゃないよ、もったいないからさ」

「もったいない」

「外に捨てるなら、俺がもらおうよ」

「もらう」

「そう、俺が飲んでやる」

「——」

「おかしいか」

「面白いわね」

と女が云った。

「飲ませてくれるか」

「いいわ」

女はさっさと薄い布団に仰向けになった。薄いベニヤ板の壁を通して、隣室から女のかすかなうめき声が洩れてきた。

(おわり)



女体切腹資料

分譲品

血紅使用、腸露出

女体切腹シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

大塚 啓子 略号(せい12)

血紅切腹絶命ポーズ

大手札四枚一組 四〇〇円

梨花悠紀子 略号(せん)

血紅切腹祭壇の女体切腹

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(せぬ)

禪裸女血紅切腹

大写真連続迫力フォト

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(おお)

血紅使用苦悶表情悦楽

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(くえ)

肉体美裸身切腹写真

大手札五枚一組 五〇〇円

長野 良子 略号(なせ)

女体切腹態

大手札二枚一組 三〇〇円

細川アヤ子 略号(ねは)

女体自刃態

大手札三枚一組 三〇〇円

細川アヤ子 略号(ねに)

血紅使用血塗れ下腹

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(わい)

殿中の自決

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(わこ)

切腹美態から絶命へ

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(わは)

豊満に挑戦

大手札五枚一組 四〇〇円

東浦ひかる 略号(えん)

介添切腹

大手札四枚一組 四〇〇円

甘木 春子 略号(あか)

腹を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(やい)

下腹に刺す刃

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(やお)

柔肌を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(やえ)

浣腸関連フォト

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かく)

百CCの浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かな)

浣腸責の極

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かむ)

浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

梨花悠紀子 略号(れち)

強制浣腸三態

大手札三枚一組 三〇〇円

絹川 文代 略号(きか)

イルリガートル

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

梨花悠紀子 略号(いるり)

太い浣腸器

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かふ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 三〇〇円

遠藤百合子 略号(ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 三〇〇円

絹川 文代 略号(ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 四〇〇円

大塚 啓子 略号「るい」

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(るは)

浣腸プレイ

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(ほは)

進ばしる液

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(ほい)

浣腸後排便

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(へき)

便意苦悶像

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(へか)

S
M
カ
メ
ラ
・
ハ
ン
ト「刺青の美
女を縛る」

めぐり合った謎の女

辻 村 隆

モデル志願の女性

「辻村君、十月号で『女性モデル募集』をやったろう。今のところ応募者はこの四名なのだが、君すまんが当たってみてくれんか」

編集長から、そう言われて手渡された四通の手紙を開いてみる。東京、神奈川、愛知、大分の計四通である。大阪は勿論その近辺は一通もない。東京の応募者は二十四才、神奈川が二十才、愛知が二十二才、大分の志願者は二十八才である。とにかく返事を書くため文面を読んでみることにする。

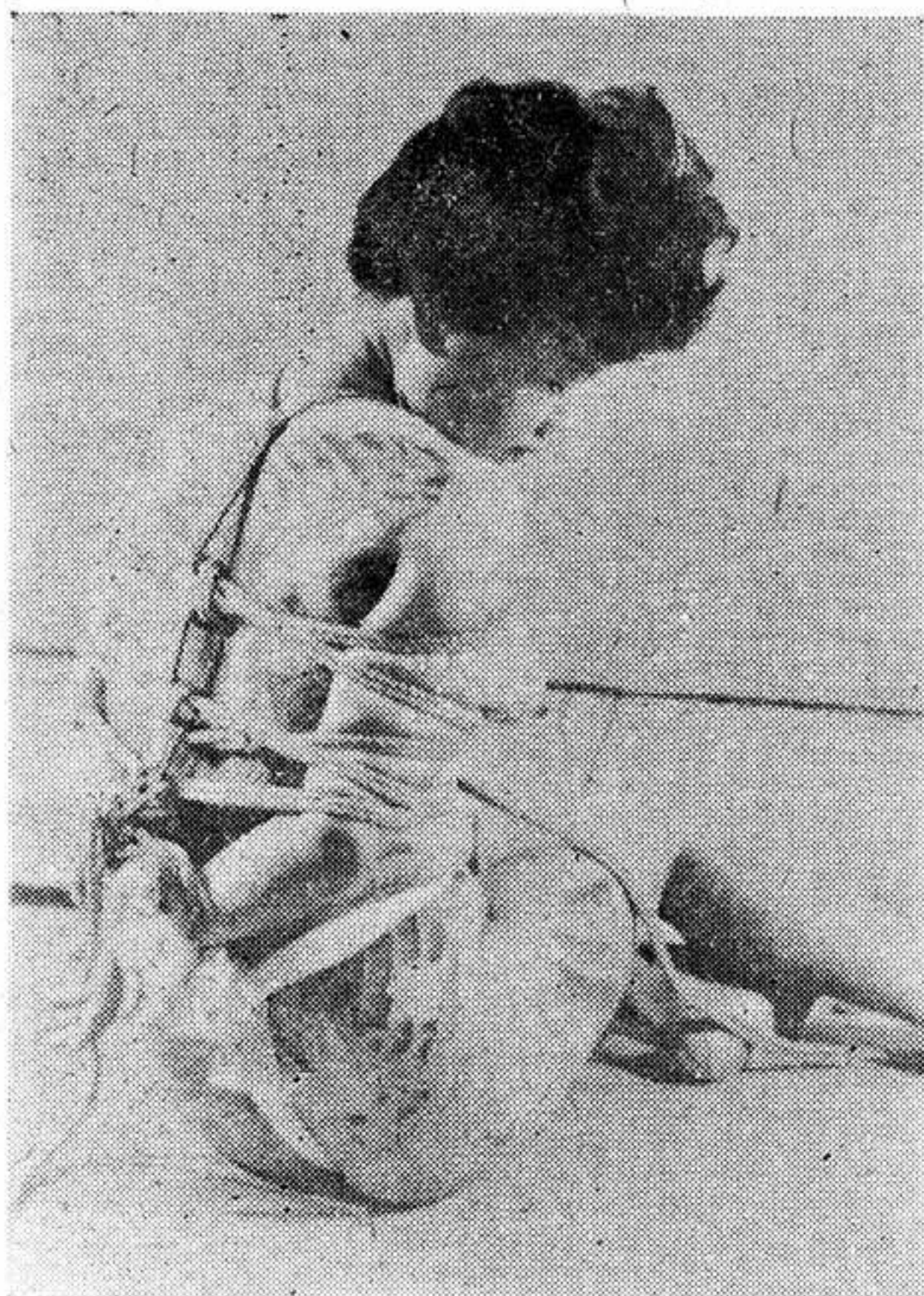
東京都 森中小夜子(仮名)

秋田に住んでいた頃からの愛読者。でもその頃は実家が田舎でうるさいため、雑誌を保存してゆっくり味読することが出来なかったが、今春上京して或る会社に勤めに出て、一人でアパート住居をするようになってからは誰に気兼ねすることなしにバックナンバーも取り揃えて熱心な愛読者となる。地理的に離れているので、どうかと思うが、もし事情が許すならばモデルになってみたい。絹川文代さん、大塚啓子さん、梨花悠紀子さんなどの写真を自分に置き換えて、いつも縛られカメ

ラに身を晒している自分を空想している。可否に拘らずお返事をほしい。とある。

神奈川県 宮原静子(仮名)

ある有名電機メーカーの分工場に勤める事務員。奇ク十月号の「女性モデル募集」の広告を見て矢も楯もたまらず応募する。高校を卒業した頃から、緊縛モデルになるのが夢だったが、家には両親が健在でそれもならず、近くの会社へ勤めに出た。しかし、どうしても自分の夢が実現したくて、むずむずしていたところ、はからずもモデル募集の広告を見たので、応募した。私は緊縛モデルになりた



いのです。と、はっきり書いています。そしてもし遠くてダメならあきらめますが、大阪まで飛んでゆきたい気持です。と結んでいる。小型の写真同封。丸顔の可愛い顔立ち、背は余り高くないようだ。勤務先の電話番号の書いてあるところは、東京の森中小夜子さんと同様である。

愛知県 山原清子（仮名）

住所は局留で、この手紙だけ速達である。

奇ク十年來の愛読者。はじめの頃は読んだり見たりしているだけで、モデルになろうなんて夢にも考えても見なかったが、最近一身上の境遇の変化で、モデルになってみようという気持が起った。それは背中一面に玉取姫の刺青をしているので、銭湯へ行くこともできず、どうしてもバス付のアパートを借りる必要があり、その費用を捻出するためにも、刺青を入れた肌を提供しようと思う。というのである。職業は

芸妓。花柳流の名取り。第一回の旦那が奇クの熱心な愛読者でその人の感化でSMに理解を持つようになったというのだ。刺青もその人の懇願で十五才の秋から三年がかりで彫ったもの。その旦那が四十才で急死してから流転の生活

を送る。

と大体そういった文面である。この手紙だけ、一方的に落ち合う日時場所、目印が指定してあり、それに対する返事のみ速達の局留で出すようにと結んでいる。

大分県 土生園子（仮名）

二十四才のとき一度嫁したが、半年位で性格が合わず協議離婚し、その後実家に帰って近くの工場に通っているが、田舎では出戻り娘といわれて肩身が狭く、それに近々一人の弟が結婚して嫁を迎えるので尚更、実家には居辛い。なんとか都会へ出て一人で働きたいのだが、貯えもなく旅費さえ不自由なので、もし、モデルとして雇ってもらえるのなら若干の旅費支度金を送ってもらえないか。宿舍食事衣料の面倒を見て頂けるなら、自分は若いときから苦勞を続けているので、どんな辛いことでも辛抱できるつもりだ。と、大体そういうった要旨で写真の封入はない。

私は早速四通の返事を書いて投函した。勿論私の最も興味を持ったのは、愛知の山原清子さんである。と、いうのは私は生来女性の刺青に対して異常なまでの関心を抱いていたからだ。一度でもよいから、若い女性の肌から彫られた刺青に接してみたいと念願していた

のだ。それが彼女は二十二才の若さで背中一面の彫り物というのだから、私個人の興味本位から考えれば千載一遇のチャンスというべきであつたらう。

謎の女と逢う

九月十四日、月曜日。空はやや雲が多く京都の上空には雨雲らしい黒雲が一面に掩っていた。豊中インターチェンジから新装なった名神高速道路へ入った私は、時速一〇〇キロの快速で車を走らせていた。近鉄の特急で大阪名古屋間が片道七五〇円なのに、名神の通行料が豊中、一宮間が一三〇〇円なのはなんとも痛い。それに片道のガソリンは、どうしても二五リットルは必要だ。しかし、今日は荷物がかさむので仕方がない。

琵琶湖を左に見て大津インターチェンジを過ぎたあたりから車はぐっと少くなる。今日はウィークデーのせいか、走っても走っても車には会わない。最低五〇キロ最高一〇〇キロ制限道路だが加速がつくと一一〇キロ、一二〇キロにスピードメーターがぐんぐんと上がる。しかし両側の景色が離れているので案外スピード感はない。

彦根、米原、関が原と瞬く間に過ぎて、長

良川、木曾川の橋にさしかかると新幹線と立体交叉して併行に並んで走る。丁度試運転の夢の超特急が割合おそいスピードで通過していった。尾張一宮で名岐国道へ入り一路名古屋市へ。目指す名古屋城は左手に見える。

打合せた通り山原清子さんとは、無事落ち合うことができた。私の車の特徴とナンバーを知らせてあったので、彼女が目ざとく私を見つけてくれたのだ。指定の場所へ私が徐行して入ってゆくなり、和服姿の彼女が車の脇に寄ってきた。挨拶もそこそこに、助手席に彼女を乗せるや、予約してあった〇〇観光ホテルへ向った。

地下駐車場へ車を放り込むと、荷物を持ってエレベーターで五階の客室へ。十帖と六帖と四帖半の三間続き、汗を流したいという彼女を浴室へ送っておいて、私は冷蔵庫からビールを出して先ず咽喉をうるおす。

カメラ、ライトの準備ができたところで化粧を直した彼女が現れて又ビール。話し好きと見えて聞きもしないのに、初めての旦那のことや刺青をした頃のことなどを話しはじめる。ぼちやぼちやとした丸顔は、ちよつと三原葉子に似ているなアと思いながら、ビールを見事にあふる口元を見ていた。

ほんのりと目の縁が桜色を帯びてくると、一層饒舌になってきた。奇クは大分以前から読んでいるらしい。私の書いた『奇譚三十九夜物語』もよく覚えていて、相当前に発行した雑誌のストーリーを話すところを見ると万更うそでもないらしい。今二十二才で十年来の愛読者というのは、どうも年が合わないじゃないか、と茶化すと、小学校のときから読んでいたというのだから参ってしまった。

モデルの名前でも、絹川文代、愛川悦子、大塚啓子、梨花悠紀子とはっきり覚えていて割合古い号のグラビヤに載っていた写真のポーズなどを言いだしたりするのは、どうやら古本屋で買ったバックナンバーの知識と見たがどうだろう。しかし、第一回の旦那に十五才で落籍されたというのだから、奇クの愛読者だというその旦那が、旧号を保存していたことも考えられる。喋ることでは人に負けない私だが、今日は専ら聞き役に回った。それほど彼女は休みなしに喋りつづけた。サドとかマゾとかいう言葉が彼女の可愛い口から飛び出すとき、それはありふれた世間話のなんでもない語彙にすぎない感じを与えた。

「辻村さん、私、貴方だから、こんな話まで話すのよ。普通の人だったら、とても話せ

ないわ」

と言って、女の生理に関するきわどい話まで羞らもなく口にした。今日はじめて顔を合した二人だが、十年の知己のように共通の話題が豊富だった。

私は準備ができたことを告げて、やおら立ち上り、撮影場所に当てている十帖の間に入った。適度に冷房がきいていて快適な室温を保っている。私はライトを全灯ONにして露出計を被写体に擬した浴衣に当てた。

凄い刺青に驚く

彼女は何のためらいもなく、羽織っていた浴衣をぱっと脱いだ。

すっと壁に向って立った彼女の背中から臀部、太股のつけ根にかけて、藍と朱を使った玉取姫の紋柄が、花の咲いたように見事に展開していた。私は思わず「あッ」と驚嘆の息をのみ、カメラを持つ手に知らず知らず力がこもった。

見事だ。——そう思った。

はじめて見た若い女の肌の刺青。肥り肉の餅肌いっばいに丹念に彫られた青と朱のまんだら模様。それは紙に書いたものでも絹に描いたものでもない。

生きた人間の肌へ、それも、ぴちぴちと張りきった若い女性の柔肌にじかに針で彫り込まれたものなのだ。

生きた女の肌のカンバスに、一生消すことのできない図柄が、絢爛と今、目の前に咲き誇っているのだ。

皎々たるライトが照らし出すその焦点に彼女の刺青の肌が輝いていた。

私はポーズをつけるのも忘れて、刺青にピントを合せて、忽ち数枚シャッターを切っていた。これがカラーだったら、一層美しいだろう。彼女は今まで自分の刺青を写真に撮らしたことはないといっていたので、この写真は値うちものに違いない。女性の刺青マニヤにとっては垂涎の貴重品だ。

刺青のヌードを撮って、六尺褌、黒褌と撮ってゆくうち、私はもう夢中だった。持ってきたありとあらゆる縄を総動員して、後手高手小手に、腕にめり込めとばかり力いっぱい縛り上げた。立たし、座らし、転がした。

どんなに厳しく縛っても彼女は悲鳴を挙げなかったし、又私も休まなかった。どうせ人に見せられない身体だから、どんなに縄の痕がついたって構わない、本当は荒縄が好きなのだが、と言ったが、折悪く私は荒縄の準備

をしていなかった。

刺青の痛さに耐えてきた彼女のことだから縄で縛られる痛さ位は平ちゃらだろう。そう考えると、私はどうしようもない、いらだたしさを覚えた。Sを自任する自分ながら、このとき程歯がゆい思いをしたことは嘗てなかった。フィルムを入れ換える時間さえ、もどかしかった。

ライトの熱気で彼女の肌はじっとり汗ばみ、縄でくびれた二の腕には、ぶつぶつと玉の汗がうかんでいる。うっとりした表情。もう四十枚ばかり連続で撮っているが休もうと言わぬ彼女。私は四本目のフィルムを装填すると、ふっと吐息をいれて腰を下した。

「ねえ、煙草を吸わして！」

それでも縄を解けと言わぬ彼女。私は殊更意地悪く縛ったままで口にピースをくわえさせて火をつけてやる。

——縛られたままで煙草を吸う刺青の女——三文小説のような題だな、とその時思っただけ。シャッターは切らなかつた。ライトを消して、奇妙な休憩の時間。

刺青と豊満な肉体

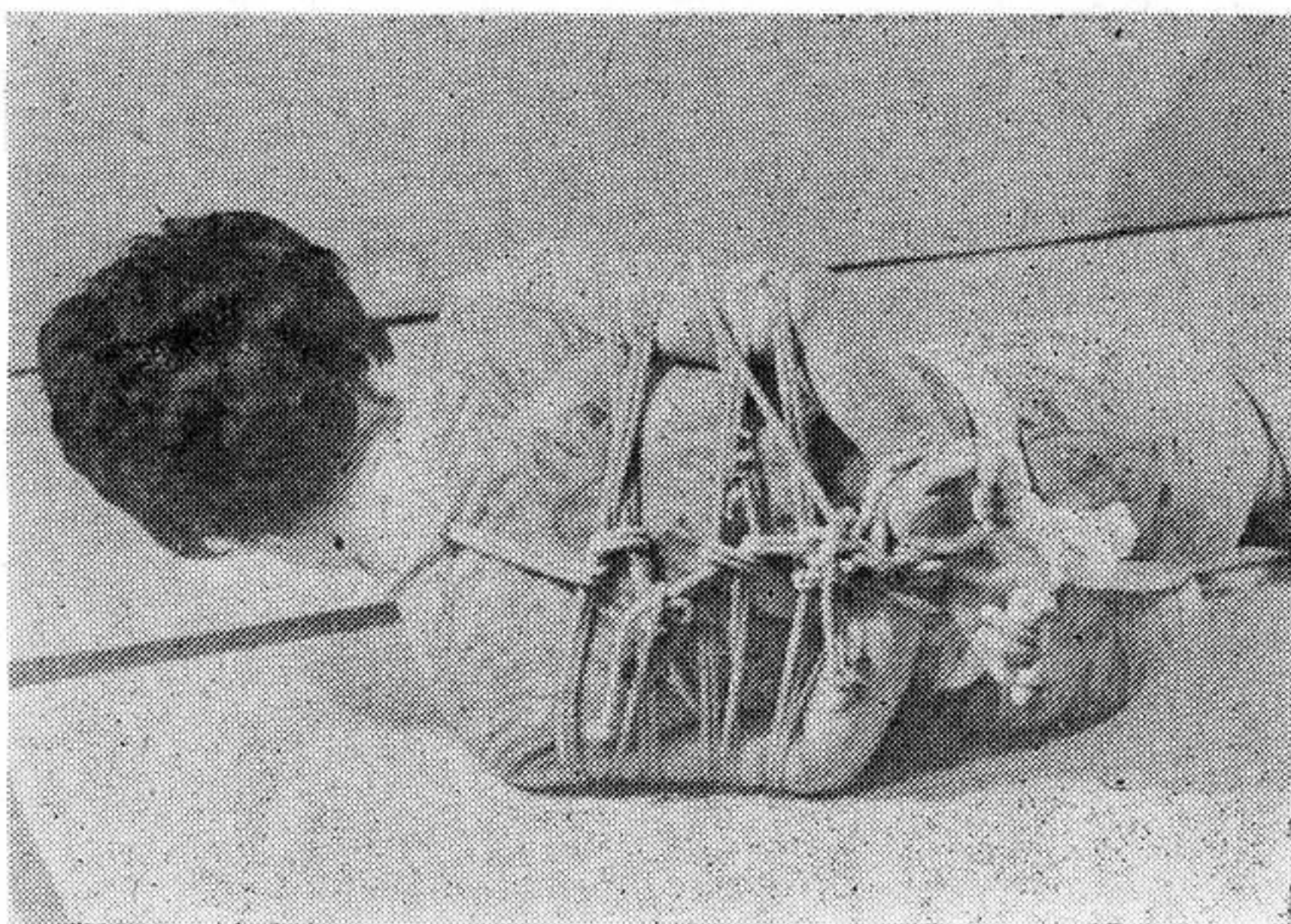
時折り、稀に銭湯や温泉の浴場なんかで同

性の刺青姿を見ることがあったが、大抵はもう六十過ぎの爺さんだ。若い頃は立派な彫り物だったか知らないが、痩せて皺だらけの背中や般若がしかめ面をしているところなんかは、見事なんているもんじゃない。哀れというか、みじめというか、若し消せるものなら消してしまいたいと本人も思っているんじゃないか、と思うくらい、むしろ醜悪の感じを受けるのが関の山だ。

若い女のむっちりした肌、彫り師もこのような場合は最高の意欲を湧かすという。現在二十二才の彼女、しかし、この刺青を彫ったときは何年前か前だそう。一生消すことの出来ぬ刺青を真白い肌いっぱい彫るということは、余程の決心でないと出来ないと思像すると、サジスチックな妄想が湧いてくる。

だが、目の前に縛られて転っている彼女からは、一向にそんな感じは起ってこない。

乳房はむっくりと大きい。豊満な肉体である。少々なことでは、へこたれないスタミナ



を秘めているエネルギーな肉体である。年齢は若い、世の中の裏も表も知りつくしたような逞ましい態度。でも、背伸びをしているような微笑ましい感じでもない。

私はこのポリウムのある肉体を、もっともっと酷くいじめてやりたい気持ちにかられた。鴨居に両手吊りもしてみた。しかし、彼女の全体重を完全に吊り上げる手だてはない。乳房も潰れてしまえと、何重にも縄をかける。「私は最初の旦那にも、二回目の旦那にも、三回目の旦那にも縛られたことがあるから、辻村さんの縛ることの上手なのは、よくわかるわ。ほんとにお上手ね」

と、賞められているのか、けなされているのか、わからぬ言葉を吐かれると、凡夫のあさましさ、なんとか素晴らしい縛り方をやってみなくてはと、山原清子という試供品を目の前にして、悪戦苦闘する。

どんなことをしても痛いと言わない。どんなに縄の痕がついても構わない。こんな女を前にして、流石の私も手をこまねいた。背面一面に大きくひろがった玉取姫の刺青が、私の眼前に立ちふさがって、せせら笑っているように思えて仕方がない。憧れの的だった女の刺青。若い女の肌に彫られた刺青が、私の手を痺れさせ、私の頭を狂わせてしまったのか。刺青の魅力、刺青の魔力が、いつもの私をなえさせていた。

私は足で踏みつけながら、力まかせに縄を

かけていった。乳房は瓢箪のように、くびれむくれ上った。足を挙げて彼女を仰向けにころがした。私の視界から刺青の肌は消え去りそして、真白い肌だけの彼女が、そこに転っていた。もう刺青の魔力は、彼女にはないのだ。あるのは、拘束された白い肉体が、つきたての餅のように転っているだけだ。

カメラを捨てた私は、狂気のように彼女の脇腹を両手で驚掴みにしていた。白い肌が真赤に紅潮して指あとがくっきり残るのもかわず、力一杯抓り、掴み、捻った。

私は初めて彼女の悲鳴を聞いた。

慌ててカメラを捉った私は、その表情をキヤッチすべく焦点を合した。しかし、カメラを向けた時は、一瞬の表情が消えていた。

カメラを置いて、脇腹をぐりぐり抓り、表情の出たところで急いでカメラを持つ。何度も同じ動作をくりかえすうち、いつの間にか責めに専念している自分を発見して愕然とした。いつの間にか、知らず知らずのうちに彼女の誘導にかかっていたのだ。

自然に自己のムードに相手を引きずり込んでゆく女。妖しい魅力を発散して相手を自己薬籠中のものとしてゆく謎の女。観音様の化身もかくやと思わせる神秘と猟奇。

カメラを諦めた私は、この刺青の女を両足の下で踏みにじっていた。痺れるようなサジスチックな感興に満たされつつ、これでもかこれでもか、と呻めき続ける彼女を踏みつけてやまなかった。刺青の玉取姫は私の足の下で転々と逃げまわった。悦虐に喘ぐ彼女の素晴らしい表情は、遂にフィルムに印することは出来なかった。只、ライトの熱気で汗みどろとなった彼女の顔が印象的だった。

消え去る謎の女

激しい責めのひとときが過ぎて、縄を解かれると、す早く身仕度を整えた彼女は、持参した商売道具のかつらを携えて、うまそうに煙草をくゆらせていた。

何事もなかったような平静な態度。あの見事な刺青さえ見せなければ、至極平凡な娘さんなのだ。言葉つきさえ大人しく変ったように感ずるのは、私の先入感のしからしむるところだろうか。

撮ったフィルムは、六六判十二枚撮りで八本。それに彼女の希望で刺青の背中だけをカット・フィルム一枚撮りで三枚。写真に撮られるのは初めてだという彼女。自分の刺青を写真にして持っていたのだそう。でも、

モデル度胸満点の彼女、初めてカメラの前に立ったモデルで、このように気のおけないのは珍しい。刺青の好きな人があったら、写さしてもよいという彼女――。

エレベーターで地階の駐車場へ下りて、そこから車で道路へ。外はすでに黄昏にたゆたう紫色のベールが低くたれ込めていて、退勤時の人達が街路を右往左往している。今日はじめて落ち合った場所へ車を走らせていると彼女と逢っていた数時間が、まるで長い長い月日の経過のように思われてならない。

今日の昼前、彼女が私の車のドアを排して乗り込んできたのが、何か数年、或は十数年前のような気さえするのだ。それほど、この数時間は充実した時間だったのだろうか。SとMの相反した性向が、放電のように火花を散らし、そして遂に中和してしまったのだろうか――。

私のひとりよがりの夢想を打ち破るように彼女の言葉が飛び込んできた。よくよく自分のことばかり、よく喋る女だ。次から次へと身の上話を飽きもせず語ってくる。

「では、ここで……」

彼女は歩道の人混みの中に入っていた。私は彼女の後姿をいつまでも見送っていた。

娘 相 撲 物 語

海 野 美 津 男

「あーあ、疲れた！ 試験なんてどうでも良

かったという気持だなあ」

「そうねえ、何だか此の頃はひとつも面白う
無かね。夏休みは良かったなあ」

二学期末の試験勉強をしていた里敏江と上
園綾子は、畳に身を投げ出すようにして寝こ
ろんだ。

「来春はもう卒業ね。つまらんなあ」

「また夏休みの時のように、お相撲取って思
いっきりあばれてみたいな」

「でも、できるかな？ 卒業したら」

彼女達は、海のキャンプで漁村の青年の相
撲を見たのがきっかけで、夏休みの一カ月近
く、三人の友達を誘い女ばかりで相撲の稽古
をして過ごしたのだった。

× × ×

里と上園は、O村の中学を出てこのK高校
に入り、仲良く間借りして三年間を送ってき
ていた。夏休みに入って直ぐ、彼女達は仲良
しの三年生と一緒に、高校生活最後の夏を楽
しく過ごそうと、海のキャンプをした。

九州の東海岸は、広々として雄大だった。

黒潮はあくまでも青く、うねりは大きな白波
となって浜に砕けた。娘達は喚声を上げて砂
丘を駆けおり、白雲の湧く沖へ向かって拔手
を切った。小さな漁村にあるそのキャンプ場
は人気も少なかったので、娘達は思い切りあ
ばれる事ができた。

楽しい夕食のあと、彼女達はキャンプ・フ
ァイヤーを囲んで合唱をしていた。すると、

近くの漁村の青年達であろう、七、八人のグ
ループがその傍へやって来た。青年達は、女
の声色を使ったりして娘達を冷やかしていた
が、やがて、すぐ近くの砂の上に円くなって
腰を下ろすと、相撲を始めた。

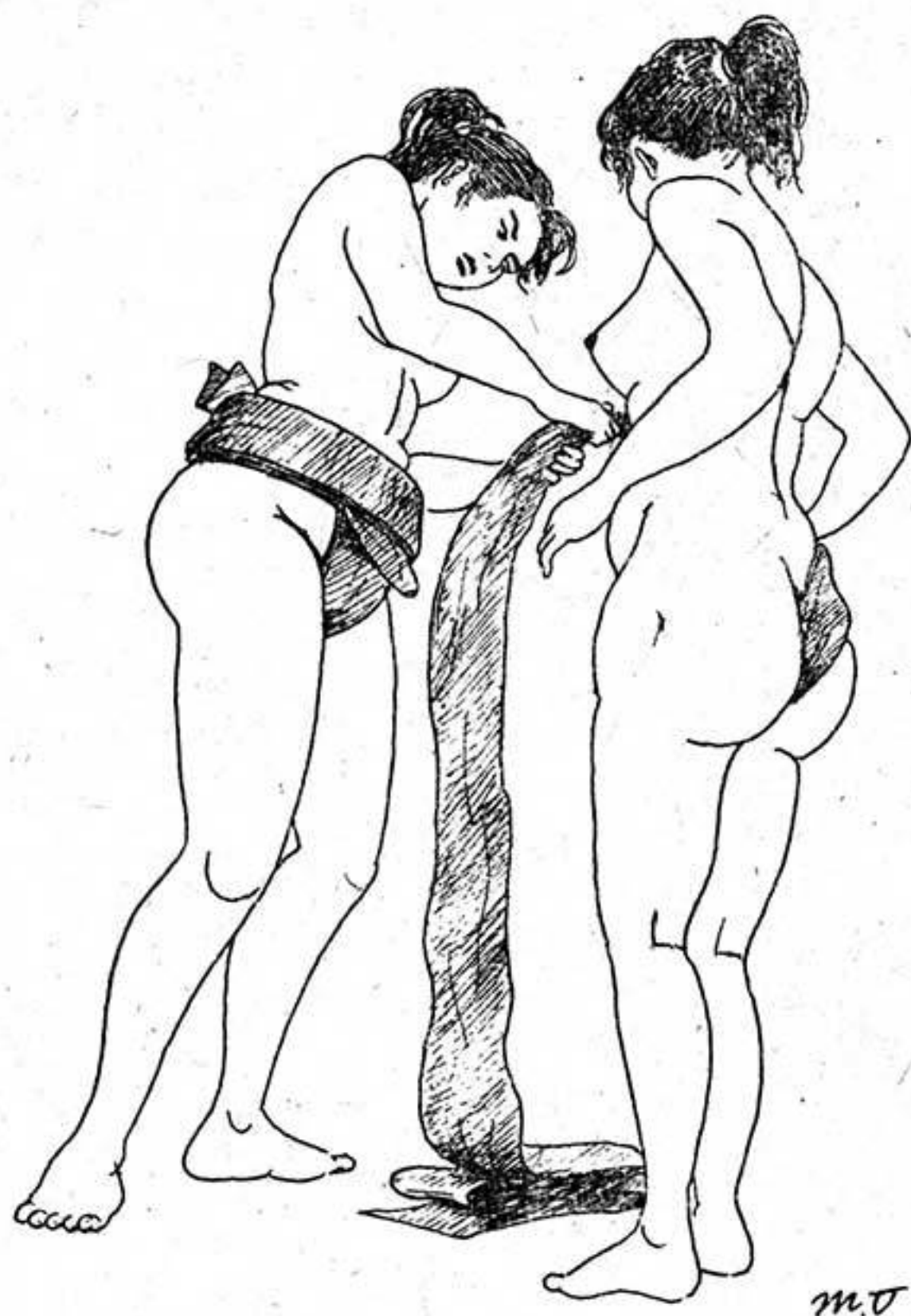
娘達は、冷やかされて口惜しかったので、
最初のうちは彼等を見無視していたが、真剣に
相撲を取っている若者の方へ、段々と関心を
向け始めていた。

キャンプ・ファイヤーが燃えつきた時、里
は「みんなで見物しようや」と言い出した。
二、三の者は「あんな青年にかかわり合はん
方が良か」と反対したが、里は「漁村の青年
てあんなにっていて、案外純情なのよ」と言
ってサッサと青年達の方へ行だったので、みん

なもついて行った。里と上園の育った村は漁村であつたから、二人は漁村の青年の氣持が良く分つていた。

彼等は確かに純情で、しかも恥かしがりやだつた。「おなごに見物されとると恥かしかなあ」などと言って、自分等が坐つていたゴザに娘達を坐らせた。そして、一層張り切つて相撲を取つた。

或る者は六尺褌を締め、或る者はパンツの上からバンドをしめ、恰好は様々だったが、



何れ劣らぬ逞ましい肉体をぶつけ合つての相撲は見事だつた。カンテラの光に照らされた赤銅色の肌からは汗が飛び散り、海で鍛え抜かれた筋肉はモリモリと動いた。娘の中には思わず溜息をつく者も居た。誰にともなく、「氣張つて」声を上げる者も居た。

稽古が終る頃、若者と娘達はすっかり打ち解けていた。娘達は、冷やしておいた西瓜を持って来て御馳走した。そして、長いこと仲良く話し合つた。夜も更けて、青年達は「朝

が早いから、ごめんな」と腰を上げ手を振り乍ら歸つて行つた。娘達も「またね!」と手を振つて、夫々のテントに戻つて行つた。

里と上園は、そのままテントに戻るのが惜しい氣がしたので、浜へ出た。月は無かつたが、星が美しかつた。二人はひんや

りとした砂の上に寝て、暫らく黙つて星空を見つめていた。

ふと、上園が言つた。

「私、相撲見ていたら、何だかワクワクしてきて仕方なかつた。何故かなあ?」

里は

「私も何だか、体じゅうがカッカしてきてしもうた」

と言つた。上園は

「私、もう十八だから、男性の身体を見ると昂奮するのかな? それだけじゃないような氣がするんだけど」

と、体を起した。里も起き上つた。

「うん。女だから『女ごころ』はあるさ。でも、もっと違う氣持じゃないかな」

「どうして?」

「私ね、相撲見てるの氣持良かったし、あの人達と話しても楽しかった。けど、そのくせ何だかしゃくな氣も湧いて來たんだ。男の人はあんなにしてあられるのに、女は何かと言つて『おなごらしくせえ』でしょう。それがしゃくだったよな」

「男は羨やましいって、私も思ったな」

「小さい時は、男も女も一緒くたになつてあつたのにね」

「そうだった。あんたはいじ悪をした男の子に組みついて砂の上に押し倒した事があったよね。私も隣部落の女の子と取っ組み合いのけんかをしたっけ」

二人はまた、砂浜に寝ころんで黙ってしまつた。暫らくすると、里がむっくり起き上つて上園の腕をぎゅっとつかんで言った。

「綾ちゃん、どうだろう、私達思い切つて相撲取ってみない」

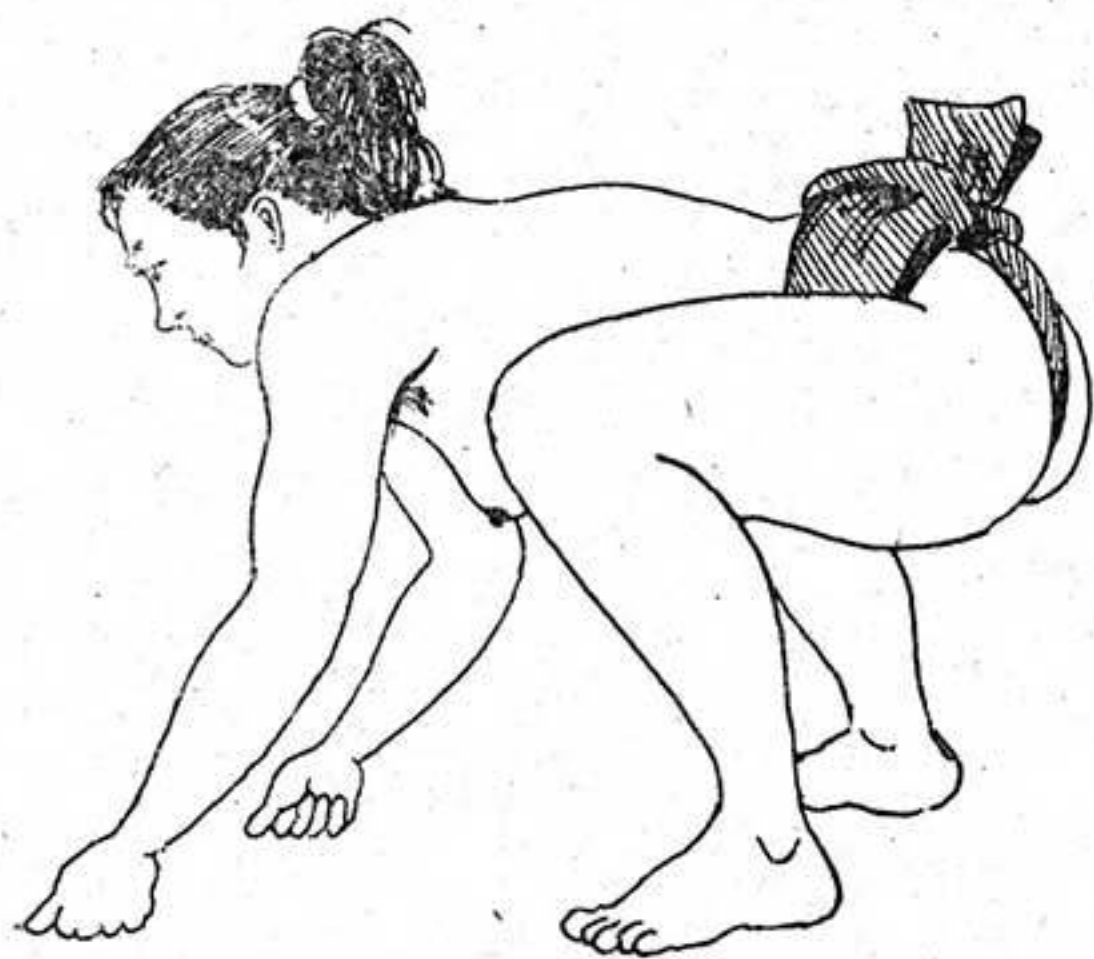
上園は、暫らく考えていたが、

「私、まさか自分が相撲取るって事は考えてなかったけど。そうだ、ワクワクしたのは自分も男と同じようにやってみたいと思ったからかもね。きつとそうだ。よし、やってみようか」

と言つた。

二人の相談は決まつた。

彼女達は「二人だけではつまらんから」と友達を誘う事にした。里は、「両親の仲が悪くて面白くないから、夏休みも帰らん」と言つていたA町出身で体操選手の、小倉和子を誘つた。小倉は、通学生松野幸子を誘い、上園は、二年の時から柔道を習っている水野久子を誘つた。



場所は、里の親類の家が、一家揃つて都会へ出て空家になっていたもので、そこを借りる事にした。期間は、八月一杯までの一カ月と決めた。それぞれの親は「最後の夏休みを、勉強や水泳で楽しく過ごしたい」と言う娘達の願いを許した。

五人は、七月の終りにその家へ入つた。そこはお詠え向きの場所だった。K市や、里の出身のO村などからは大分離れていたので親達がわざわざ訪ねてくる気使いは殆ど無かつた。その家は、漁村の外れの小さな丘の上に

あつた。海にのぞむ西側の広い庭先を除いたほかは高い石塀で囲んであり、庭で相撲を取つても、誰にも気付かれる心配は無かつたし隣家も遠かつた。

五人は、家の掃除や、生活に必要なものを準備し終ると、相撲の稽古をどうやるか話し合つた。

「帯を締めて取ろうか」とか「水着でいいのではないか」など、いろいろな意見が出された。だが、一番無口で大人しく、里に「あの人大丈夫だろうか」と心配させたほどの松野が、「一旦相撲を取ると決めたからには、思い切らなければいけない」と言つたので、みんなは、本式にまわしを締める事にした。

土俵にも迷つた。土や砂では肌を痛めるような気がしたからだ。「水着でやれば心配は要らなかつたんだけど」と水野は言つたが、小倉が「待って。マットの上でやったらどうかしら」と提案した。そこで、小倉が町のスポーツ店に行き「体操の練習に使うから」とマットを運ばせた。そして、帆布を買つてマットを並べた上から覆う事にした。俵に当る部分は、別の帆布を丸めてボロ布をつめこみ円く縫いつけた。マット土俵の周囲には、川の砂を運んで敷きつめた。

松野は、稽古の方法にも詳しくあった。「私
お相撲見るのが小さい頃から好きだったし、
兄さんが選手だったから」と彼女は言った。
稽古時間は朝のうちの二時間と決め、均斉の
とれた身体にしたいと、体操と水泳も欠かさ
ない事にした。

まわしも縫い上がり、稽古は四日目の朝か
ら始める事になった。

「思い切ってやろう」と話し合っていたが、
いざ、まわしを締める段になると、みな何だ
か胸がときめいてくるのだった。言い出した
本人の里も、一番元気者だった筈の水野も何
かモソモソとしていた。その時も、学校では
一番大人しかった松野が先頭を切った。彼女
は黙って何もかも脱いでしまうと「誰か手伝
って」と言って、まわしを締め始めた。水野
が「ようし！ 私もだ」とかけ声をかけて服
を脱いだのでみんな笑った。緊張はそれで解
けてしまった。

五人は、マット土俵の上で四股を踏んでみ
た。里が「稽古に入る前に、誰が強いかな、と
にかく取っくんてみようよ」と言った。上園
がヨシノと里に組みついていった。上園は
里の首に腕を巻き、里は上園の前襟をつかん
でもみ合っていたが、上園が足をからませて



里を倒した。五人は交わるがわるぶつかっ
た。それはまだ相撲とは言えなかったが、娘
達は夢中で組み合った。

夏の陽は朝早いうちでも強い。一週間も経
つと、それまで、くっきりと娘達の肌につい
ていた水着のあとが薄れ、そのかわり、まわ
しのあとが白く残った。

最初のうちは、思い切って当れず、何とな
く腕をつかみ合ったりしていた相撲ぶりも、
二週間も経つと、ドーンと頭からぶち当って
いく相撲に変わった。基本からみっちり稽古し

た五人は、それぞれの得意技を持つまでにな
った。力もほとんど互角だった。

松野に低く当られ、ジリジリと寄せられると
殆どの者が土俵を割った。しかし、五〇キロ
で背も低い里は、身体の動きが素早く、彼女
に立ち上りうまくさばかれ、右を入れられる
と、五六キロもある松野も、しばしば土俵の
外に投げ倒された。五三キロの上園は左四つ
が得意で、下手投げと内掛けで相手を良く倒
した。水野は、松野に次ぐ五五キロの体での
寄り身と、柔道で鍛えていたせいか、投げ技
に強かった。一番長身で一六三センチある小
倉は、上手投げと外掛けが得意だった。体重
は四九キロで一番軽かったが、負けん気が強
く、彼女に突っ張られると大抵の者がたじろ
いだ。

八月も終りに近づくと、娘達は一層張り切
った。倒されても投げられても、勝つまでは
同じ相手につかかっていて稽古した。三回
続けて水野に負けた小倉が、四回目にも寄り
倒されると、組みついたまま離れず、土俵の
外で砂まみれになって取っ組み合うという事
もあった。

しかし、そうして斗う事が、娘達にはたま
らない魅力になっていた。もう、あと幾日も

ないと思うと、彼女達はさびしかった。そこで稽古時間も段々と伸びていった。

そして、夏休みもあと三日、相撲が取れるのも明日までという日。彼女達は、一カ月の総決算をする事にした。総当りの相撲を五回戦までやって、星の数で順位を決めようというのだ。

その相撲は、「負けるもんか」という気持ちに、「もう明日までだ」という気持ちが加わっ



て、それまでにはないはげしいものになった。中でもはげしかったのは、三回戦の時の、水野と小倉の取組だった。立ち上がりざま、小倉は水野の頬を張ったので、水野も負けじと張り返し、猛烈な張り手の応酬になった。みんなは、二人の眼が血走ってきたので、けんかになるかと心配したが、小倉が相手の隙を見てサッと左を入れたのでホッとした。

今度は、お互いに一步も引かぬ四つ相撲になった。両者とも相手のまわしをつかんで、ぐいぐいと引いてがんばった。体重で劣る小倉は、長引くのを恐れたのか、強引に上手投げを打った。だが、まわしがずり上っていて力が入らなかった。小倉はまわしから手を離すと小手投げに出た。水野が足を踏張ってこらえると、二回、三回と続けて投げに出た。しかし水野は良くこらえ、土俵上は再び四つ

相撲になった。二人とも汗が次々と吹き出し、まわしの前袋までじっとりと濡らすほどだったが、渾身の力をこめてがんばった。しかし、体力で劣る小倉は、疲れが出たか、水野にジリジリと寄せられ、遂に寄り倒された。みんなは一斉に拍手を送った。

娘達は、星を奪われれば次には直ぐ奪い返して、互角の相撲を続けた。四回戦が終ると星の数は、不思議にも全く同じ八つつとなったから、最後の五回戦は、一つ一つが一層はげしいものになり、彼女達の心には、勝つ事以外に何もものもなかった。

里と上園の取組では、里のまわしが解けなかったが、注意する声も里の耳には入らず、上園を打ちちゃりに敗って始めて気付くほどだった。

五回戦の星は、松野が体力と粘りで、上園が気力と技で三つづつ上げた。水野は二勝取ったが、里と小倉はさすがに疲れが出たのか一勝づつだった。五人は、一位と四位の決定戦をやる事に決めた。

四位決定の、里と小倉の取組は、小倉がはたきこんで簡単に決まったが、一位決定戦は技と力の大相撲になった。

松野は、静かな眼でじっと上園を見た。上

園は、落ちついたその態度を見て、一瞬「負けるかな」と思ったが、気を取り直して仕切りに入った。

立ち上がり、意外にも松野は横に飛んだ。上園はよろめいたが、良く立ち直って松野にぶつかっていった。土俵上は、頭と頭をつけての押し合いとなった。お互いに相手の腕をしっかりとつかんで差し手を許さなかった。もともと筋肉質と言える上園の身体は、一カ月の相撲に鍛えられ、見事なものになっていた。松野も、豊かな肉付きの中にかくされていた筋肉を見せて、二人は押し合った。

早い事勝負をつけようとした上園は、松野

アイデア募集

本誌のグラビヤ写真並に口絵、代理部の分譲品等に出来る限り広い範囲の趣向を取り入れたいと思いますので、御希望のアイデアは、御遠慮なく、どしどしと御申出下さい。採用の分は写真又は原画を贈呈いたします。詳細な説明又は略画を添布して下さい。一層結構です。

(編集部)

につかまれていた腕をふり放すと、突っ張りに出、隙をねらって右を入れ、下手投げに出た。松野は動かず、右四つのまま、二人は長い事動かなかった。水は入れない事にしていたので、五分の間、その姿勢は崩れなかった。二人の汗はマット土俵を濡らした。松野はじっと相手の疲れを待った。上園の唇がゆがみ、外掛けに足をからませてきた時、松野はぐっと寄って出た。上園は土俵際で投げを打って廻りこみ寄り倒そうとしたが、松野は大きく打ちやった。上園の身体は砂の上に飛んだ。

最後の日、娘達は勝ち抜きをやった。五人抜く者は中々出なかった。いつの間にか昼になっていた。五人は、庭先の松の木蔭にまわしをつけたまま寝ころんだ。涼しい海の風が汗まみれの娘の肌に快よかった。

里が「あー、スカッとした」と言っただけ腕を空に向かって突き出した。上園が「私達、とうとうやったわね」と言った。水野が、里に「誘ってくれて良かった。裸でぶつかる相撲って柔道より好きだな」と言った。

上園は小倉に「あんた、案外強かったね」と言った。小倉は、額に手をかざしてまぶしそうに空を見ていたが「素肌のぶつかり合い

って、何かジーンとするね。でも、何より相手に勝つっていう気持は何とも言えない」と言った。

娘達には鼻血を出したり肌をすりむいたりした事も、今は、何か誇らしい思い出になっていた。娘達の心には、精一杯斗った爽快さと、女としてやれるところまでやった満足感で一杯だった。

× × ×

「あの青年達どうしているかなあ、あの人達に私達のこと話したら驚くだろうね」

「何とかして、私達、もう一度やってみたいね」

「ニュージージーランドじゃ、国技のラグビーが女にできない事はない」って、主婦が中心になってラグビーをやり始めたんだって。久子がテレビで見たそうよ」

「へえ。それじゃ、いつか私達も、日本の国技の相撲を女が堂々と、みんなの前で取れるようにしたいね」

初冬の夜は、大分更けていたが、二人の話は尽きなかった。

これから、この娘達の相撲がどのように進展してゆくか、楽しみである。

(おわり)

狙われた和装の娘 大手札十二枚一組 略号「一〇〇〇円」 愛川悦子	強烈エビ責め 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 水本茂美	ゴム衣緊縛 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 水本茂美	バンド開股 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる	バンド責め 大手札五枚一組 略号「五〇〇円」 東浦ひかる	夫人の表情 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 関谷富佐子	後手吊り足挙縛り 大手札五枚一組 略号「五〇〇円」 東浦ひかる	二つ折りエビ責め 大手札五枚一組 略号「五〇〇円」 東浦ひかる	足挙げ椅子責め 大手札五枚一組 略号「五〇〇円」 東浦ひかる	吊り打ち 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 関谷富佐子	股間縛法悦境 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 絹川文代	踊り子緊縛 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 絹川文代
責め衣 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 大塚啓子	猪吊り 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 梨花悠紀子	足挙開股責 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 梨花悠紀子	緊縛女体撮影風景 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 大塚啓子	〇フェチ資料の部〇	白晒六尺褌 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 遠藤百合子	白晒六尺褌 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 遠藤百合子	黒褌の女 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 遠藤百合子	黒褌の女 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 遠藤百合子	相撲褌を締め込む 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 遠藤百合子	変形六尺褌 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 細川アヤ子	六尺褌開股 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 細川アヤ子
六尺フンドシ 大手札五枚一組 略号「四〇〇円」 東浦ひかる	六尺褌の女性像 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 関谷富佐子	レインコートの拘束 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 大塚啓子	ゴムフェチ 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 梨花悠紀子	バンドを脱ぐ女 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 遠藤百合子	月経帯縛り 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 遠藤百合子	相撲褌着用 大手札十一枚一組 略号「一〇〇〇円」 大塚啓子	股に喰い込む黒フンドシ 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる	股を開いた黒フンドシ 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる	バンド晒し 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる	バンド足挙げ 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる	バンド見せ 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる
白フンドシ 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 大塚啓子	黒フンドシ 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 大塚啓子	ゴムぐるみ人形 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 東浦ひかる	ゴム包みの束縛 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 東浦ひかる	ゴムと女体アップ 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 東浦ひかる	パリスバンド前開き 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる	パリスバンド縛り 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる	携帯用白バンド 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる	サカエ軽便型バンド 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる	パリスSSバンド 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる	パピアバンド 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる	サカエバンド 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる

南方アブ随筆

女

と

臍

南方佳男

○

「M子ちゃんのお臍は、いま締めているベルトの下にあるかね、上にあるかね？」

会社のミスNO1という彼女に、こんな質問をしたら、怒るとも怒らぬともなく

「バカ…南方さんたらすぐ図に乗って…」

といって肝心の答をしてくれなかった。

お臍の位置がわかるということは、女性にとって、ちよつと都合の悪いことがあるらしい。彼女の場合、そのことを知ってかどうかはわからないが…。

高校生の妹が、友だちから調べてくれたデーターによると、お臍の位置は次のようなこ

とになる。

高校生たちがはくような、ごくありふれた市販のパンティ（ショーツといったほうがよいのか、その言葉はよく知らないが）を着けた場合、調査の対象となった二十五人のうち二十三人までパンティの中にかくれたそうだ。

それをさらに綿密に調べるため、腹を突き出すようにそり返えらせてみると、その二十三人のうち十九人は、こんどはパンティからお臍がはみ出してしまったという。



大映「十七才の狼」霧立はるみ（右から二人目）

先日、女性対象の週刊誌（名前は忘却）にことしの美人サイズを書いていたが、その中にお臍の位置はデルタの先端から垂直に上に計ってほぼ二十七センチとなっていた。この数字は私のデーターと表現方法こそ違ってい



「世界詐欺物語」 浜 美 枝

ても、同じようなものである。

ところで妹のやつ、ごていねいにも、もう一つ調べてくれた。

それは中指をお臍に当てて、小指をぐっと広げて下に延ばすと小指の先がちょうど女性の分岐点の先端に当たるということである。

本当かどうかさっそく妻の体で確かめてみたらぴったりだった。

ということは、お臍の位置が、普通サイズのパンティからはみ出すほど上にあればソレ

も上にあり、少々動作をしてもパンティから飛び出さないほど下にある人は、下についているということだろう。

ミス会社の彼女が、答えてくれなかったのも偶然かも知れないが、そんなことを連想してのことではなかったらうか。

○

ことはトップレスなどという水着が現われたせいか、開放的な装いには消極的な日本の女性もやや前進して、セパレーツの水着が

かなり進出したようである。

週刊誌の表紙やグラビアに若い人気女優や歌手たちの水着姿が数多く登場したが、その中でもセパレーツ水着が多かった。

またこれに比例してお臍の見えるビキニ水着もふえている。浜美枝、霧立はるみ、中川ゆき、十和田翠、緑魔子などの常連はもちろん、最近ではザ・ピーナッツ、こまどり姉妹、梓みちよのお臍を紙上で拝見できた。ただしこまどり姉妹の場合、同じビキニ水着をつけているのに、お臍の見えるのは一人だけそれが姉さんだか、妹さんだか、私には判断できない。瓜二つのお二人だが、やはり違うところはあるものだといった感じである。その点、ピーナッツのお二人は、同じような形のそれを、きれいさっぱりご披露してくれている。

○

ごく最近、映画のことで大変嬉しいショックを受けたのは、大映の清純演技派の藤村志保がエロティズム売り物というだけの娯楽作品「眠狂四郎女妖剣」で、全裸となったことだ。

ことはすごくヌードが映画界に登場したし、松竹の「白日夢」「紅閨夢」といった作

品まで飛び出した。また日活の「肉体の門」東宝の「女体」Ⅱいずれも同じ内容Ⅱのようなサディズムとエロティズムを必然的にとり入れた文学作品もあった。さらに猟奇的なムードを加えた東映「くノ一忍法」では、中原早苗、芳村真理、三島ゆり子などが堂々とヌード演技をみせるそうで封切りが待たれたりする。「眠狂四郎Ⅲ」もこの「くノ一Ⅲ」もまあ類似作品なのだが、「くノ一Ⅲ」に出演する女優たちはすでにセミ・ヌードの経験者たち。三島ゆり子だって、かつて大島渚監督が「天草四郎時貞」をとったとき、当時木内三枝子という芸名だったが、上半身ヌードで水責めの拷問を受ける妊婦の役を演じてまんざらの素人ではない。

ところが藤村志保の場合は、彼女の女優としての成長過程からみて、ちよっと異色すぎるヌード出演だ。しかもアサヒ芸能十月四日号グラビアにその撮影風景が載せてある。真正銘の全裸である。お臍もちゃんと真っ正面と斜め左から大きく写っている。逆三角形と扇型の中間のような形。あまり恰好はよくないが深々とへこんだ感じ。それに彼女の体自体がお世辞にも素晴らしいとはいえないだけに痛々しい。でもこれは女優という仕事が斜

陽のいまの映画界では、これほど厳しいものになったという証拠でこれからは単に「演技派だ美人だ」という条件だけでは通用しなくなるのではなからうか。そうなるのもっともって大女優といわれる人達のヌードセミヌード出演も、きっと増えるに違いない。

○
その一つの現われというのではないが、東宝映画「甘い汁」で京マチ子がお臍をみせてくれそうだ。

彼女の場合、すでに、数年前に大映作品の「鍵」で経験済みだし、すでに年齢的にも魅力はないが、これだけの大女優すら脱ぐべき

東京映画「甘い汗」京マチ子



ときは脱ぐ時代となったのだとしみじみ知らされる。(参考までにスチールを同封)

また映画初出演でいきなりお臍をご披露した「十七才の狼」Ⅱ大映Ⅱの霧立はるみ、「二匹の牝犬」Ⅱ東映Ⅱの緑魔子などの新人が売り出していることも、今後の女優のあり方がまえを示すもののような気がする。もっぱらこれまでスレスレのスタイルでお

脐をかくしていた大映の藤由起子とか東宝の水野久美、星由里子、松竹の倍賞千恵子、鰐淵晴子、榊ひろみ、日活の松原智恵子、浅丘ルリ子、東映の三田佳子なども、いつまでもいまのままではすまなくはすまいか。

東宝の浜美枝など四力国合作映画の「世界詐欺物語」でビキニスタイル（同封のスチール参照）になったときは、相当に勇気が必要だったらしいが、それくらい二、三の作品におしげもなくお脐をみせてくれている。私もつい最近再映館で「君も出世ができる」Ⅱ東

宝Ⅱで拝見したが、小さく浅くあまり恰好よいお脐でないのに、奇妙に愛嬌のよさを感じた。一度脱げば女性は度胸がつくものだ。

というところで、これも最近の週刊誌で浅丘ルリ子のビキニ姿をみた。ところが残念なことにあきらかにお脐の出ている短いパンツなのだが、肝心のお脐とは対面できなかった。しかし浅丘もこんなスタイルをするようになったから、近い将来に私の夢をかなえてくれそうだ。

さてTV界の方は私はあまりよく知らない

が、この方面でもタレント達がよく脱ぎはじめたらしい。

最近の作品で磯村みどりがビキニ水着になったものがあるそうだが、私は残念なことになそれを知らない。地方ならおくれればせに放映することもあるので、もしご存知の方があれば、その作品名やもようを教えてくださいたいから幸いと思う。

書いていううちにとりよめのない一人よがりの内容になってしまったが、悪しからずお許しを乞う。（おわり）

臨時増刊号・・・愈々残部僅少・・・

悦虐小説と悦虐写真特集号

本誌全盛時代の昭和二十七年から昭和二十九年にかけての「悦虐小説」の傑作をすべて網羅して、本特集号の第一集から第五集（但し第一集、第五集は残念ながら売切れしました）までの五冊に収録いたしました。従って、「悦特」の五集によって、当時の代表的なS小説をごらんになることが出来ます。更にグラビヤ口絵としては、華麗な緊縛女体を、ふんだんに掲載しました。未入手の方は是非この際お求め下さるようお待ちいたします。

第一集「女体緊縛特集」（売切）

第二集「悶悦姿態特集」定価三〇〇円 略号「悦二」

第三集「嵐を慕う蝶」定価三〇〇円 略号「悦三」

第四集「拘束美態特集」定価三〇〇円 略号「悦四」
第五集「緊縛風景一二〇態」（売切）

最近刊行本誌特集号限定版案内

○臨時増刊「写真と絵画」文献特集号

定価 五〇〇円 略号（文献）

○臨時増刊「花と蛇」小説、絵画、写真、特集号

定価 五〇〇円 略号（花）

○限定版「美しき縛しめ」第三集

頒価一〇〇〇円 略号「美3」

○限定版【豊満と清楚】写真集

頒価一〇〇〇円 略号「限二」



私は地方の一都市に住む愛読者です。読者の期待と世評の制約とで、編集部の方々の御苦労もさぞかしと察せられます。私の住む都市にも数軒の書店があり、従前は毎月、貴誌の姿を見ておりました。が、ここ数カ月以前からは、すっかり影をひそめ、入手が非常に困難になってきました。この調子だったら、もう一般の人の目に触れることもなくなるのではないかと考えます。しかし、私共愛読者に

としては何とも淋しいことです。自分は今立派な三十才になる大人だと思いいながら、淋しい気持ちをかくしきれません。これでは、さぞかし読者も減るのではないだろうかかと心配し、折角長い間かかって、ここまで同好者の方々の心を一つにまとめてこられた貴誌の苦労も、水の泡になるのじゃないかと考えたり、本当は取り越し苦労かもしれないが、あれこれ考へさせられます。こんな草深い田舎に離れて住んでいる私なんかはいくら心配したって、屁のつっぱりにもならないでしょうが、遠く離れた空から貴誌の健在を心からお祈りいたします。何だか、前おきが大変長くなってしまいました。が、先日十一月号を入手。今までに変らぬ威容で安心しました。「花と蛇」の続篇が再び連載になり、その第一回が掲載になったことは、双手をあげて快哉を叫ばずにはおれません。以前の休載になるようなことなく、連続発表下さるよう団先生にも編集部にもお願いしておきます。「深夜の市長」や「青木順子」の記事など今月号も面白く読ませていただきました。次号に期待してペンをおきます。(新潟県八蒲原渉)

奇ク愛読者の諸姉へ一言御挨拶申し上げます。小生皆様方同様に云われず一人悩み続けている男性です。最近フト書店にて奇クを発見、ページを開くと同時に小生が永年夢に画き抱いていた光景があり／＼と展開されているではありませんか。そう、これだ奇クだと早速買求め、喰入る様にして見られずにはおられません。そしてこの光景が実際に目前で展開されたら、どんなに幸福な事だろうと思いました。一度ゆっくり味わってみたいと思う衝動にかられてペンを走らせました。女性の自由を奪い思う存分いじめたいじめ抜いてやれたら、これこそこの世に生を受けて、最上の幸福に陶醉出来る時ではないでしょうか。又小生をしてM的行動に出させても、これ又小生の願望する所です。縁あって諸姉と一日貴重な体験が得られる事がありましたら喜びの一日とでも題して赤裸々な体験を発表させて頂きたいと存じます。時には都会の砂塵を避けて静かな温泉郷の一室にて心ゆくまで陶酔の一日を創造されんと望まれる全国の奇特な女性マニア、是非御連絡下さい。待望して止み

ません。(東住吉区八G・HV)
○ 小生は二十七才の独身眼鏡屋です。奇クの読者通信を見るたびにあの手に手紙を出そう、この人に出そうと思いはしますが、どうしても決心がつかず、今日までずっと誰かとお友達になりたくてたまりません。但し文通のみですが、女性の方男性の方お便りくださいませんか。S・M両方ですが、最近では四分・六分の割です。絵を書く事が好きで、さし絵の勉強もやりました。まだ／＼拙い画ですが文通にかならず同封致します。この言う所が悪いとか、こんなのを描いてほしいとか、意見か注文かを強く言ってもらえれば互いに面白く続くのではないのでしょうか。コレクション等交換しあいませうか。なるべく地方の方でないとう都合が悪いのですが、御便り御願ひ致します。尚最初のみ住所は奇クの編集部に発送願ひします。便箋に住所を書き密封の上別封筒で送ってください。絵がうまくなりましたら貴殿のアイデアで描いて奇クに応募しましょう。この雑誌には読者の絵が掲載されず、さみしく思っております。東雪枝様、横溝

さま、御手紙願えませんか。(東
京都八佐藤真夷)

編集部様、次の文を読者通信に
載せて下さいませ。私は女性の方
との交際を望んでおります。女性
の中でこの文を読んで問い合わせの
方がありましたら、その方の住所
氏名を記してお手数でも私の所へ
連絡して下さい。その時は必ず手
紙でお願いします。それに勝手な
お願いで申しわけございませんが
必ず女性の方に限ります。男性の
問合せには絶対対応しません。まだ
こわいんです。男性の方は……。男
の方が私の所を尋ねてまいる事
のないよう編集部の方からは絶対問
合せた方には直接住所をしらせな
いで下さい。この点は女性の方の
問合せも同様です。女性の方の問
合せがありましたら、その方の住所
氏名をお願いいたします。もしそのよ
うな方がありましたら、私の方か
らお便りを出し、直接交際をお願
いしようと思います。——私は今
ひどい便秘になやんでいます。お
なかがパンパンにはってしまいま
した。無理ありません。十日も
お通じがないんですから、どなた
か浣腸して下さい方はございませ
んか。お年寄りの方に聞いた話で

すが、お通じがない時は、おなか
をよくもんで、その後におへその
両端や下腹にお灸をすえるとよい
そうです。多少あついそうですが
私、がまんします。お灸をおなか
にすえて下さる方はございませ
んか、又、最近お通じがないせい
がよく人前でおならが出てしま
す。これも、お尻にお灸をすえ
る事でなおるでしょうか、お願い
ばかりで申しわけありません。もし
私の願いを聞いてくれましたら、
かわりにあなたにもイチジク浣腸
をしてあげましょう。もし御希望
なら、お灸も。二人だけで楽しい
プレイをしましょう。でもお相手
は女性の方にかぎりませう。(東京
都北区八西原アサ子)

小生貴誌の熱心な愛読者です。
殊にグラビア写真の美しさには、
いつも心から魅せられています。
毎月読了すると、トジである針金
をはずしてバラバラにし、グラビ
ア頁だけを別に揃えて一冊のアル
バムにしております。今では相当
の厚さになり、どしりと手がたえ
のある立派な本になっています。
時折取り出して眺めるのを唯一の
楽しみにしております。最近のグ
ラビアで大活躍をしておられる大

分譲品御注文の栞

○代理部の分譲品は、すべて前金
にて御注文願います。直接の訪問
並に代金引換はお断りします。

れば、その御指定の局に局留とし
てお送りします。別に局からは通
知がありませんから、局へ出向か
れて、お名前をいってお受取り下
さい。局での郵便物の留置期間は
十日間です。十日間を過ぎると差
出人へ返戻されます。

○御注文金は、現金書留(封筒は一
枚三円にて局が売っています)小
為替、定額小為替(小額のときは
御便利です)振為(用紙は郵便局
にあります)切手代用(十円、二
十円、三十円、四十円などの切手
で、絶対紙にはりつけないでお送
り下さい)等を御利用願います。

○御注文の宛先は大坂阿倍野郵便
局私書函第十四号、天星社です。
(私書函番号を明記するように依頼
されましたので右の通りお願いし
ます)

○尚、御注文の際、もし代品とし
て第二希望品がございましたら添
記頂けますと、万一分譲中止、品
切などのとき迅速に処理できて助
かります。

○分譲品の新しいものは、毎月号
の誌上で『新版案内』として発表
しております。又、古くなりまし
たものは漸次打ち切りにします。

○御注文の宛先は必ず楷書ではっ
きりとお書き願います。肩書きが
ございましたら、それもお忘れな
くお書き添え願います。

○御注文者の御氏名は絶対に他へ
洩らすようなことは致しません故
御安心下さい。

○金額にして五千円以上のフォト
をまとめて御注文の際は金額に応
じて優秀フォトのサービス品を贈
呈させていただきます。

○局留にてお受取り希望の方が増
えてきておりますが、せいぜい御
利用下さい。御注文の際、お受取
りになりたい郵便局名(特定局で
も結構)とお名前(仮名にて可
なり)と市販の認印なんかを準備した
方がよい)とを当方へ御連絡下さ

○送料は日本国内に限り、すべて
当方にて負担させて頂きます。但し
速達並に書留それに外国便は、実
費御負担下さい。

○局留にてお受取り希望の方が増
えてきておりますが、せいぜい御
利用下さい。御注文の際、お受取
りになりたい郵便局名(特定局で
も結構)とお名前(仮名にて可
なり)と市販の認印なんかを準備した
方がよい)とを当方へ御連絡下さ

○局留にてお受取り希望の方が増
えてきておりますが、せいぜい御
利用下さい。御注文の際、お受取
りになりたい郵便局名(特定局で
も結構)とお名前(仮名にて可
なり)と市販の認印なんかを準備した
方がよい)とを当方へ御連絡下さ

○局留にてお受取り希望の方が増
えてきておりますが、せいぜい御
利用下さい。御注文の際、お受取
りになりたい郵便局名(特定局で
も結構)とお名前(仮名にて可
なり)と市販の認印なんかを準備した
方がよい)とを当方へ御連絡下さ

塚啓子さん、小生の大好きなモデルさんの一人ですが、あの長くて美しい髪を短く切ってしまったのは、非常に残念に思っております。毎月買い求めて先ず眺めるグラビア頁は、思わず小生の胸をおどらせる新鮮な魅力です。インクの香と共に、いつまでも忘れることができません。すでに不惑の齡をかさねている小生ですが、貴誌こそ老生の回春の書として、いつまでも愛読してゆくつもりです。どうか、今後共益々発展されるよう祈ります（静岡市八の場進）

○
今回ナースのために、雑誌「看護技術」七月号の「排泄特集号」が出ました。これは純粹に治療技術のための学問的な文献ですが、浣腸愛好者の一読をおすすめします。（東京都渋谷区恵比寿東二ノ二、メジカルフレンド新社発行、二〇〇円）浣腸の学問的原理は慈恵医大第二生理の杉浦耀子先生が又実際については聖路加看護大学講師の三上知子氏が角読されていますので、その項だけ読みたい方は、先生方へ別刷をお送りいただくようお願いしてはどうでしょうか。又、医学書院器械株式会社から（東京中野桃園二）新案浣腸

〔代理部新版分譲品一覽〕

全裸脚拳姿態 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (てい)	全裸アゲラ縛り 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (てへ)	全裸屈伸縛り 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (てほ)	六尺禪の変形姿態 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (てに)	蹲踞と拍手 大手札二枚一組 略号 (二〇〇円) 長野良子 略号 (てり)	鬼面と接吻する 大手札二枚一組 略号 (二〇〇円) 長野良子 略号 (てち)	強烈エビ責め 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 松本アサ子 略号 (まと)	裸身に羞らう 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 松本アサ子 略号 (まつ)	女賊捕縛 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (へい)	女賊処刑 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (へは)	全裸緊縛姿態開陳 大手札四枚一組 略号 (四〇〇円) 遠藤百合子 略号 (ゆり)	鼻をいたぶる
浣腸をする女 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 遠藤百合子 略号 (ゆか)	バンドを脱ぐ女 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 遠藤百合子 略号 (ゆお)	月経帯のまま縛り 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 遠藤百合子 略号 (ゆす)	豊満を切り裂く刃 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (ほふ)	鎌腹を切られる女 大手札二枚一組 略号 (三〇〇円) 愛川悦子、田中芳代 略号 (らく)	咽喉笛を刺される女 大手札二枚一組 略号 (三〇〇円) 愛川悦子、田中芳代 略号 (らみ)	血紅使用 斬られる女 大手札七枚一組 略号 (七〇〇円) 絹川文代 略号 (らふ)	雲齋の相撲フンドシ姿 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 東浦ひかる 略号 (ろみ)	凄んだ女賊スタイル 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (へに)	バンド、ゴム見せ 大手札五枚一組 略号 (五〇〇円) 東浦ひかる 略号 (へみ)	浣腸を施される女 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (ちら)	煙草責めの裸身
淫らな長髪の流れ 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (ろも)	ふり乱す長髪の流れ 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (ろめ)	縄目に悶える夫人 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 関谷富佐子 略号 (ほく)	髪を引き回される夫人 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 関谷富佐子 略号 (ほむ)	自ら施す浣腸 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (ちぬ)	浣腸器を弄ぶ女 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (ちり)	写真の中に悶える 大手札四枚一組 略号 (四〇〇円) 大塚啓子 略号 (けよ)	写真に埋れた裸女 大手札四枚一組 略号 (四〇〇円) 大塚啓子 略号 (けお)	フンドシ姿の魅力 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 栗本ミチ 略号 (ふの)	フンドシ姿の羞らい 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 栗本ミチ 略号 (ふへ)	フンドシの前後左右 大手札四枚一組 略号 (四〇〇円) 栗本ミチ 略号 (ふな)	フンドシの変った姿

カテーテルが発売になりました。注入中肛門を圧迫固定するもので流出のないことと、大量注入が可能なことと、入れた長さが正確に分るようになっていきます。十五号カテーテル附三〇〇円（〒七〇円）使用経験の発表を望みます。（東京都渋谷区N看護学院内八佐東雅枝）

私は時々貴誌に投稿するNOS E及びANUS（もちろん美女の）のファン。近頃見聞した胸がどきどきするような件を二、三紹介します。一、「紅閨夢」で絵描きが仰向けにおしたおした女の鼻孔へチューブから絵具をしばりこむ。二、週刊朝日の八月のどの号かに載った開高健氏の人間ドックの記事のうち、ANUSからバリウムを詰めこまれたり空気ポンプで腸に空気を入れるだけ入れられ栓をしめたまま医者に忘れられ苦しくて泣きわめく或る女優の話。三、アサヒグラフの九月のどの号にある「奇蹟の人」の有馬稲子のメーキャップのアップ写真、鼻孔の中までメーキャップしてあるのが、はっきりわかる。四、婦人週刊誌（何だったか忘れた）に出た玉緒の出産の話「入院すると、

大手札三枚一組 三〇〇円 栗本ミチ 略号（ふに）	前開き、ゴムオシメカバー 大手札十二枚一組 一〇〇〇円 大塚啓子 略号（しま）	前開き布製防水オシメカバー 大手札十二枚一組 一〇〇〇円 大塚啓子 略号（しな）	全裸の切腹悦楽（1） 大手札四枚一組 四〇〇円 大塚啓子 略号（ひた）	全裸切腹悦楽（2） 大手札四枚一組 四〇〇円 大塚啓子 略号（ひと）	乳房しばり 大手札三枚一組 三〇〇円 長野良子 略号（うは）	鼻責めと緊縛 大手札五枚一組 五〇〇円 大塚啓子 略号（うい）
木馬責三態 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚啓子 略号（もく）	椅子責めの果て 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚啓子 略号（いす）	哀婉 血紅切腹 大手札五枚一組 五〇〇円 大塚啓子 略号（るな）	双胸の強調縛り 大手札三枚一組 三〇〇円 長野良子 略号（そう）	動感海老責地獄 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚啓子 略号（とう）	色禪の開股縛り 大手札三枚一組 三〇〇円 長野良子 略号（いふ）	鼻責めのアップ 大手札三枚一組 三〇〇円 栗本ミチ 略号（いな）
膨満 正面縛り 大手札三枚一組 三〇〇円 長野良子 略号（へな）	血紅切腹絶命態 大手札三枚一組 三〇〇円 絹川文代 略号（ちの）	血紅美女の切腹 大手札三枚一組 三〇〇円 絹川文代 略号（ちた）	オムツ着用フオート 大手札七枚一組 七〇〇円 大塚啓子 略号（むね）	バンド着用開股ポーズ 大手札三枚一組 三〇〇円 東浦ひかる 略号（つん）	マニヤ全裸緊縛フオート 大手札三枚一組 三〇〇円 栗本ミチ 略号（いな）	

いきなり大きい浣腸を三十分おき位にさせられちやって……」五、八月七日「鼻の日」に都内某デパートで鼻の無料診断、相当の美女が鼻鏡を深く挿しこまれ、グッと拡げられて顔をしかめている。（隣のイスでしかと見物）等々。（東京都八花田生）

貴誌十一月号、実に愉快に読みました。その中、辻村隆氏のカメラ・ハントで『青木順子』の記事は、身近かに感ずると共に、小生

も是非同嬢のショーを見たいものだと思いました。次号にでも十一月中、どここの劇場に特に関東、東京に出演する予定が判れば是非記事として予報下さい。（東京都中央区八東京在住一ファン）

秋風と共に十一月号落手。心楽く拝読致しました。青木順子様の舞台の記事興味深く読ませて戴きました。若し名古屋の他にも御出演なさる様な事があれば是非是非拝見させて戴きたいものです、若

し機会がありましたら向井、青木御両人と語り会いたいです。『青木順子後援会』も発足の由承りましたが、若し此の様な集いが出来るのでしたら是非一枚御加え下さる様御願い申し上げます。今迄のレパトリーを更に更に色々な記事を参考として益々新しいMS劇を形造されます様祈ります。又門田澄子様、滋賀の安田様、外ではあく迄紳士的に内では心ゆく迄MSプレイをと願って居ります。小生縛り、吊り、鞭、乳房いじめ

木村洋子

完全逆さ吊りフオート

分譲

大判判印画紙焼付三枚一組

一〇〇〇円 略号(さつり)

樟の枝にとりつけた滑車に、綿ロープをきりきりと巻きつけ、引き上げられた木村洋子は、両足を上に頭を下にした完全な逆さ吊りだ。足先が滑車につくと、頭から地面まで一米はあいた。引き縄を樹の幹に止めると、逆さ吊りになった女体は、一本の縄を中心として、ゆっくりと回転を続ける。

カメラはアングルを変えて四方八方からシャッターを切る。この三葉は、アングルもポーズもバックも皆違ったもの。その惨酷さのため口絵には使用できませんので特に分譲品として提供します。久々に放つ真に本格的な責めらしいムードに満ちたフオート。Sマニヤの方はどうぞ御一覽を。

ネクター、クリスター、其他色々好みは御座居ますが、お互の好みは尊重し会って楽しくプレイする事を御約束します。小生三十才、医師、身長一、六米、体重六三kgという処SM共に経験を持ちますので、貴女の方の様な方と御会する事が出来たら、どの様にか嬉しい事でしょう。今から様々の夢を描きながら、その夢の現実になる事を心から願って居ります。(愛知県知多郡八和気田一V)

九月七日、貴誌十月号をようやく買い求める事が出来ました。八月二十二日より北陸へ出張して七日帰阪したばかりです。小生は以前広島に起居致しておりましたが広島でも奇クを見つける事は久し

くなく、此の度の出張(長期はめったにないのですが)でも、仲々つける事が出来ませんでした。私共のいわば隠れた同好の志は、全国うらうらに在る事でしようが、奇クの入手困難をこれほど知らされた事はショックでした。何とか以前の奇クの様子に、どこの店頭にも……という事にはならぬのかと我が事ならず残念がる次第です。……というわけで投稿がいささか遅れた次第ですが、十月号に小生の拙文が、いざ活字で載りおるを見るに、全くこれほどいい表わし方を知らぬかったかと恥じる事しきりです。十月号では大阪市と記載しましたが、尼崎に住いし、我社尼崎工場の製品を大阪本社に勤務しながら販売しております。

その為大阪市内及び阪神間の交通は自在ですが、十月号の拙文をおわびするとともに、再度M女性の出現をお待ちします。尚、中川芳子様、貴女に対するアイデアを御希望の様ですが、一般的にいつて貴女の羞恥心を誘発さす事を、それらの行為に對する願望を育ててやる事です。先ず、初步の者を飼育する段階は、一、(露出訓練、二、奉仕訓練(この中には封建的な男尊女卑の傾向ばかりでなく男性に對する愛撫教育なども含まれますが感覚的に種々考慮の余地があります)三、接触訓練(たとえばテーブルの上に両手両足を開いたままのせられ、あらゆる部分をくすぐられたりつねられたり、あるいは鞭打たれたり、その他の方法で刺激されて被虐感や羞恥心を感じずる場合です。こんな時刺激をたかめる方法として縛りなどかつかわれるわけです)以上の場合の小道具としては日常我々の手もとにあるごく普通な品物、例えば、ブラシ、バイブレーター、絵の具、鏡カメラ等使い方によって、いくらでも貴女方を夢中にさす事が出来ます。従ってプレイのアイデアについては無限だといつてさしつかえありません。具体的な事につい

ては、私と同じS族が連絡するでしようからよく御分析なさい。近在のM諸姉妹方々、一度文通、御交際願ひ度く、小生が住所は編集部に届けおきます故御問合せ御送簡下さる様御願ひします。(尼崎市八浅丘V)

○ 小島寿子様。本誌十月号で貴女を知りました。僕はつい分前から貴女の様な女性をさがしておりましたが、やっと貴女を知ることが出来ました。僕は残念なことは東京に住んでおります。貴女は芦屋附近の方と申されておりますが、僕とお会して下さいませんか。もちろん僕の方からそちらへ行きま。僕は二十五才です。貴女より三才年上です。どうか小島さん、僕と会って下さい。そして夢の様なプレイをしませんか。又これからはずっと文通をつづけませんか。貴女の住所をお知らせ下さいませんか、僕の住所は編集部へ問い合わせして下さい。貴女から御手紙がききましたらすぐ大阪へ行く日付をお知らせします。ただ一つお願いがございします。封筒の差し出し人名を森恒紀としておいて下さい。僕は前から女性を縛りあげてみた

てなりませんでした。その要求を小島さんが満足させて下さいますことを心から願っております。貴女が僕とお会して下さいましたら僕は貴女の満足の行く様に縛らせていただきます。僕の要求は、縛ることによって美しい女性をみい出すことです。ですから全裸姿はあまりすきではありません。僕は貴女を水着姿とか、ファンデーション姿で縛って見たいのです。ひもはごつくしたのではなくモメンのひもで高手小手に縛ったり股間縛にしたり、足も美女らしくゆ

うがな姿で縛ってあげます。そして猿ぐつわは、あなたの身に付けているナイロンストッキングで口にはめてあげましょう。小島様、貴女からの御手紙を心長くお待ちいたしております（東京A・T・H生▽）

私の邸は建物も庭も広いので下男を一人置いていますが、年末にはやめるので、どうせ雇うのならマゾ男を下男にしたいと思ったわけです。冬は除雪、マキ割り、夏は草取り、庭の手入れその他雑用

一切。四畳半をあてがい食付で月一万円ぐらいやるつもり。下男の条件は徹底的にMであること。年令は問わぬが、清潔で肉付きの良、一人のいいおっとり型。神経質は嫌い。又働き者で大工仕事も少しは出来る男。私の気が向いた時には、昼夜を問わず私のS的気分を満足させるために奉仕させる。神酒は勿論のこと、私の夫やMの愛人に命じて拷問させてやる。真面目な真実である私の望み故、中途半端な空想的な、すぐ音をあげるマゾ男はお断り。社会的には作

業服を着て下男の仕事を目にやれるマゾ男でないと駄目。志願者の人数が多かったら半年契約も可。希望者は写真、履歴書同封の上編集部回送で手紙をくれる事、私は母と夫と三人家族。（北海道△雪国の女王▽）

私は昨年の十二月はじめ、木枯しの吹く寒い日。寝ながら何か雑誌でも、と考へて入った書店でフト貴誌を手にしてからやみつきとなり、それ以来、ずっと愛読をつづけております。最近女性の方の

本誌既刊号在庫一覧

注文殺到！お申込みはお早く

本誌既刊号在庫案内

○左記一覧表のうち、定価の記してあります分は、只今在庫しておりますから、御注文次第お送りいたします。
○送料は当社にて負担いたします故、読代のみお送り下さい。
○昭和35年5月号以前の号は、全部売切れとなり在庫はございません。

在庫雑誌及び定価

昭和35年6月号（定価三〇〇円）
昭和35年7月号（定価三〇〇円）

昭和35年8月号	（売切）	（定価三〇〇円）
昭和35年9月号	（売切）	（定価三〇〇円）
昭和35年10月号	（売切）	（定価三〇〇円）
昭和35年11月号	（売切）	（定価三〇〇円）
昭和35年12月号	（売切）	（定価三〇〇円）
昭和36年1月号	（売切）	（定価三〇〇円）
昭和36年2月号	（売切）	（定価三〇〇円）
昭和36年3月号	（売切）	（定価三〇〇円）
昭和36年4月号	（売切）	（定価三〇〇円）
昭和36年5月号	（売切）	（定価三〇〇円）
昭和36年6月号	（売切）	（定価三〇〇円）
昭和36年7月号	（売切）	（定価三〇〇円）
昭和36年8月号	（売切）	（定価三〇〇円）

昭和38年4月号	（売切）	
昭和38年3月号	（売切）	
昭和38年2月号	（売切）	
昭和38年新年号	（売切）	
昭和37年12月号	（売切）	
昭和37年11月号	（売切）	
昭和37年10月号	（定価）	一〇〇円
昭和37年9月号	（売切）	
昭和37年7月号	（定価）	一〇〇円
昭和37年6月号	（定価）	一〇〇円
昭和37年5月号	（売切）	
昭和37年4月号	（売切）	
昭和37年3月号	（定価）	一〇〇円
昭和37年2月号	（定価）	一〇〇円
昭和37年新年号	（定価）	一〇〇円
昭和36年12月号	（売切）	
昭和36年11月号	（定価）	一〇〇円
昭和36年10月号	（定価）	一〇〇円
昭和36年9月号	（定価）	一五〇円

水野弘氏提供

女体切腹フォト

今般水野弘氏の御厚意により二十数葉の貴重なネガを拝借することが出来ました。その中、誌上公開を憚るものを特に分譲品として頒布することにいたしました。

女体切腹の介錯

大手札三枚一組 三〇〇円

略号(せは)

上半身肌ぬぎとなった豊麗な美女が、白布を敷きつめた上に正坐して覚悟の切腹を敢行する。背後にまわったフンドシ一本の介錯人大刀一閃、女の細首に打ちおろされんとする介錯の瞬間を、三枚の連続写真にてごらんいただけます。

妻の切腹プレイ

大手札三枚一組 三〇〇円

略号(せは)

通信も数多く寄せられているのを拝見し心づよく思っております。私は、まだやっと一年にも満たない新参の読者でございますが、どうぞよろしく。二十三才になる家庭の主婦でございます。主人が建築技師で朝は早く、夜も比較的おそいので、読書の機会はたくさ

首桶に落ちる首

大手札三枚一組 三〇〇円

略号(せは)

大きくハ首桶Vと書いた桶を前にして、いさぎよく死の坐に就いた美女。この豊満な裸身も幾許もなくして、身首を異にして果てるのである。介錯人の大刀はか細い首に押当てられ、女は健気にも自らの下腹に刃を押し当てる。うう、と苦痛にあえいで、前に首をさし伸べるや、白刃は首筋に振り下ろされ、哀れ美女の生首は首桶の中へ……。

んあるので今まで何かにつけ、単行本や雑誌を読むことが多かったのですが、貴誌を拝見してからは何だか自分の目がひらけたようで毎月楽しく読ませていただいております。旧号も読みたくてたまらず外出した折には、古本屋を探してみるのですが中々見つかりませ

ん。やはり変った月号のを読んで自分の空想のよすがともしたいのです。主人は真面目な仕事本位の人で、いづれ独立するのだといって休日返上で働くばかりで余り私をかまってくれません。どなたか文通だけでも。こんな私にいろいろ御教示下さる方はございませんか。私たちは結婚後二年半で、まだ子はございません。誌上でよく夫婦SMプレーのことを拝見しますが、私にとっては夢のようで、余りよくわかりません。夫に話すると笑われそうなので、話しておられません。なんとなく今の生活が物足りなく思われて仕方ありません。今まで何の経験もありませんので告白するようなこともありませんが、読むことは大好きです。「花と蛇」は増刊で拝読しました。今まで読んだどの小説よりまして感激しました。これからああいっただ特集号を出して下さいようお願いします。(兵庫県八滝野茂子V)

○ 中川芳子さん。淀川を距ててつい目と鼻の先、貴女の様な理解のある方を探し求めて三十有余年、満されぬ想いを胸に秘め一人淋しく過して来ました。十月号で貴女

のお便りを拝見して貴女ならきつと物心つく頃より三十年サディズムに芽生育って来た私の夢を耽美な悦虐の妖花でいろどって下さると信じております。実際の体験は未だありませんが、強烈な海老縛りにあえぐ貴女の妖艶な姿態、クスグリ責めにのたうつ女体の妖しい美しさ、其の他逆さ吊り、逆海老責め等々、毎月グラビア誌上に乱舞する諸嬢の悦虐美の妖姿を未だ見ぬ貴女の麗姿におきかえていつつきるとも知れぬ見果てぬ夢を追っています。誌上での御連絡、心待ちしております。(大阪八新庄淑彦V)

○ バンドマニアの皆様お元気ですか? 最近すっかり御無沙汰します。奇ク誌上で数多くのバンドマニアの男性、女性の御発言を毎回大変楽しく拝読し切り抜き、全部集録いたしております。仕事に非常に忙しく仲々充分に月経帯を楽しむ事が出来ないのが残念ですが、幸い或る親切な方の知遇を得る事が出来、私のバンド着用やズロースオシメカバー等の着用写真を現像焼付けていただく事が出来大変立派な写真を作っていました。モデルが悪いの

で人様には恥かしくてどうかと思
います。奇クから分譲写真とし
て、男性着用に云う写真もなく、
機会のない方は御困りと存じま
す。よろしければ奇クを通じ御申
越し下さい、御送り申し上げま
す。十月号 読者サロンに掲載の
「フェチファン」の願いを書かれ
たPQ様の御希望を読んで思い立
ちました次第です。どうぞ御遠慮
なく御申越し下さい。最近或るバ
ーでなじみのコケティッシュなホ
ステスと白日夢等の話から男性の
マゾやフェチの話になり、大変話
がはずみましたが、以前から手頃
の相手と思ひ色と金の両方の欲で
盛んにモーションをかけていた彼
女は私がその方面の趣味をもつて
いると気付き、此の頃「ねえ、貴
方の好きな様にくくって上げたり
私のパンティーやバンドを上げて
もよい事よ」と抗し切れない搦手
から誘惑を始めて来ました。些か
押され気味です。全国のパンドマ
ニアの皆様、親しく御意見や御話
を御聞きたく存じます。男女を
不問ず文通いただける方、奇ク誌
で御返事下さいませ。(山口県徳
山市八安田隆夫V)

小島寿子様。中川芳子様。貴女

の読者通信拝見致しました。私は
KK誌を愛読しはじめまして二年
程になります。二十六才になるM
傾向の男子ですが、女性のムチ
打、緊縛等に興味のあるもので
す。貴女のような方とMSプレイが
出来たら楽しみです。御互に温い
気持で研究し話し合ってプレイ出
来る様な方向にもっていかれたら
思いますが如何ですか。御都合を
本誌、読者通信にてお待ち致しま
す。(神戸市兵庫区八牧野博V)

○

十月号の社告および団先生の
「花と蛇」に寄せる嘆きの一文を
読み、その節の制約が日毎に厳し
さを増し、ついに、小説や挿絵の
描写にまで具体的制限を加えるま
でにいたったことを知り、激しい
怒りと、悲しみを心の底から覚え
ます。本質的なものへの追究や検
討もせず、ただ単に俗悪とか、
エログロとかいう名目のもとに権
力をかりて弾圧をはかるその筋の
無理解に腹立しさを感じます。月
に一回発行される奇クの発売日を
心待ちにしている読者は私一人で
はありますまい。私たち読者もこ
の弾圧に屈してはいけないうととも
に、奇クの編集部のみなさん、大
変むずかしいこととはお察しいた

しますが、どうか、万難を排して
奇クだけがもつ、また、奇クでな
ければ味わえないその主体性を失
わずに、工夫を重ね(文章におい
ては伏字を使用するなり、挿絵に
おける全裸場面は背面にしたり、
またはその部分を空白にして読者
が勝手に書き入れることができる
ようにするなどして)創刊以来の
編集方針と目的をいささかも曲げ
ることなく、貫ぬきとおしていた
だきたいと衷心よりお願いいたしま
す。十月号では「奇クもこれで私
とお別れか」と淋しく思っていた
のですが十一月号を手にし続「花
と蛇」を一読して、私一人のき憂
であったことを知り、大いに感激
した次第です。よくぞこの制約下
に、ここまで掲載できたものと、
永遠に信ずることのできる奇クに
深く、深く、感謝いたします。い
まの私にとって「奇クが花と蛇で
あり」「花と蛇が奇ク」でありま
す。毎号の読者通信においては必
らず「花と蛇」を礼讃する便りが
のっており、私は大いに意を強く
しております。とくに畑藤さんの
提案など、まったく心楽しいもの
であり、まったく同感です。この
ように私たち「花と蛇」ファンは
たとえどのような拙ない文であ

女相撲と女斗美

女相撲組打ち

相撲マワシ着用
大手札印画紙焼付
八枚一組 八〇〇円
略号(すか)

女相撲投げ業

相撲マワシ着用
大手札印画紙焼付
八枚一組 八〇〇円
略号(すね)

禪裸女の争斗

白晒六尺フンドシ着用
大手札印画紙焼付
五枚一組 五〇〇円
略号(めん)

禪裸女の寝業

白晒六尺フンドシ着用
大手札印画紙焼付
五枚一組 五〇〇円
略号(めき)

裸女相搏つ

白晒六尺フンドシ着用
大手札印画紙焼付
八枚一組 八〇〇円
略号(えく)

うと、勇気をもって、奇ク編集部を、そして団先生を激励しなければならぬと痛感しました。ただ欲をいうと、前作臨時増刊のように、なぜ、挿絵を四馬先生にお願いしないのでしょうか。美貌と肉体美とはおよそほど遠いむしろ醜女に近い現在の挿絵は、折角の団先生の麗筆を、そして団先生の真剣なご努力を冒瀆するものです。いまの挿絵ならぬ方がよいと極言いたします。また静子夫人も京子も全裸であるはずであり、人の子で縛られてははずです。こういう場合、責められる二人の美女は上半身だけ描き、銀子や朱美が満面に笑みを浮かべながら洗面器を手にしている図などになっている図などにして、文章と相違しない留意が必要だと思ひます。最近号の四馬先生の口絵が、すべて子供っぽくなったのは一体どうしたことかと疑問に思っていた矢先だけに、四馬先生の嗜好に変化が起きたのではないかと心配でなりません。女学生や可憐な少女をSの対象とすることは避けたほうが、私は賢明だと思ひます。理由は別に述べなくてもお察しいただけと思ひます。四馬先生は、臨時時代の責に返って下さいますようお願い

いたします(東京八佐土浩志) 美しく強い存在には、生れつきその存在に隷属して御主人となられた方を、より一層美しくすべく苦しみ奉仕するように定められた弱いあわれな存在が、必ずあるものと信じて居ります。民主主義、自由主義などという表面だけの偽善的平等が一般化する以前には、美しく強い者が貧しく弱い者をほしきままにしたいがために極く自然な日常茶飯の出来事でした。そして当然のことながら、人前をばはかる必要はなかったのです。しかし、今は過渡的な暗黒時代です。有光令子様のような、人間の中でも女王となるべき方が、奴隷を一頭もお持ちにならず、しかも御自分の奴隷として、生まれついたり者達の同意を得てやと一、二頭の家畜をお飼ひになることが出来る等、ああ、考えただけでもお痛ましい限りです。私共奴隷として、生まれついたりしたものにも、おそれ多いことですが、同様の苦悩があります。それは、仮にもせよ、本来口にすべきでない人間の方々と同じ食物を食べ、又双肩にお乗り頂く筈の女王様のお呼び出しがないことです。そして、おそろし

新しい分譲品

女子斗争場面写真

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

大塚啓子、玉田美佐子

略号(のわ)

フンドシ一丁の二女が豊麗な裸身を惜しげもなくむき出しにして組んずほぐれつの大格闘。若々しい肉体の躍動が手にとるように眺められる快心のフォト。

二女格闘場面写真

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

大塚啓子、玉田美佐子

略号(のか)

全身汗みどろとなつて、お互いに相手の乳房や鞭を掴みあつて必死になつて戦う女斗美のシーン。

全裸正面切腹姿態

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚啓子

略号(のみ)

今や身にまとう何ものもかなく、柱にもたせかけて、壮絶なる女体切腹を敢行する啓子の正面像。

切腹に悶える裸身

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚啓子

略号(のそ)

柔肌をキリキリと切りさばく女体切腹の壮絶な雰囲気。苦痛に悶える裸身の美しい曲線。全裸になつて演ずる啓子の切腹シーン。

浣腸と便意の苦悶

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 遠藤百合子

略号(のけ)

一〇〇CCの浣腸器でパンティを押さげた百合子が自らの手で浣腸を施し、やがて押し寄せてくる激しい便意に、身をくねらし腹をおさえ苦しむ有様。

強烈エビ責め

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 玉田美佐子

略号(ねむ)

足の指が全部反りかえつてしまふほど厳しく縛りあげた足首を背中との後手首と連結して、ぐいぐいと締め上げれば、全裸の美佐子はう、う、う、う、と思わずうめいて全身を疼れんさすのだった。

後手首の高縛り

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 玉田美佐子

略号(ねへ)

きっちり合せて括りあげられ、た後手首が首筋近くへ高々と吊り

いもので間違った時代認識から世間を気になさる女王様のお聞きになる両のおみ足は、私共の数に較べて本当に「せまき門」なのでございませ。御足下に召される者は極く運のよい、マゾ奴隷に限られて居ります。有光令子様、貴嬢の奴隷には、是非、この私奴をお飼いで下さいませ。私は女王様の御勤め先である丸の内に極めて地の利のよい場所に居ります。しかし、今の私の居場所は、本来あるべきせいそく地ではないのでございませ。貴女は幸いお気付きになりました。「おかしいわ、たとえお部屋の中にしろ、私が自分の足で歩く必要があるのかしらって」「おトイレまでわざ／＼立って行くなんてナンセンスよ、それに私がこうやって食べたものをそのまま捨てるのも国家の大損失だわ、そうだった日本経済のためにも、私の食べたものは一人一頭分にしないでちやあ、あつ良いことがあるわ、お食事をする間、奴隷を椅子兼用のおまるにして置けばいいんじゃない、なあんだ、どうしてこんな当り前のことに今まで気が付かなかったのかしら」そうです、そのとおりでございませ。私の本来の居場所は、貴嬢様のおみ尻の下な

のでございませ。今日まで馳せ参ぜず仮の姿とは云え、人間の方々と並みの生活を送って居た私の罪をお赦し下さいませ。でも幸い、私奴はまだ二十七才、女王様のお召しが掛った今日という日まで、つがいにもならず一匹だけで暮して居りました。もし編集部の方々にものあわれを感じて、この申し出を読者通信欄に載せて下さる方が居られても、女王様のお目に留まるのは十一月の末か十二月の始めかと存じます。御主人様、十二月の第一火曜日と第二火曜日午後六時に帝国ホテル（日比谷側正面より入って右側）ガーデン・バーにお越し下さいませ。……やっと当り前の身分が定まりました。令子女王様はもう御不自由なさなくて済みます。お腰掛けになるお椅子、お好きなところへ歩ませる馬、いつでもお気軽に御用をお足しになる移動トイレが、すべて兼用の一匹で整いました。私奴もいつも安心して暮せます。いままでも軽すぎた肩の上には貴嬢様のふくよかなおみ尻にお寄り頂けました。今日まで怠けて過した私には、訓らされるまで、幾分重過ぎます。始めのうちは苦しい息をつくかも知れませ。何故なら私

あげられて、身動きできない全裸の女体が、縄目の痛さに転々として床の上をころがりまわる。

椅子またぎの責め

大手札印画紙焼付

モデル 三枚一組 玉田美佐子 略号(ねと) 三〇〇円

一糸まとわぬ肌をひしひしとまといつく高小手のきびしい縛しめ。両股を大きくひろげさせられ無理矢理椅子をまたがされた美佐子は白い肌を真赤に染めて素直に晒らされるのであった。

血紅切腹決定版

大手札印画紙焼付

モデル 十枚一組 大塚啓子 略号(れは) 一〇〇〇円

女体切腹のポーズをとって既に定評のある大塚啓子が、今までの経験を活かして演ずる血紅切腹の決定的な一組十枚の中、そのどれをとっても、悉く素晴らしい迫力をもつてマニヤの皆様の胸に飛び込んでくること必至の切腹シーン。豊富な血紅を使用しました。

血紅切腹凄惨姿態

大手札印画紙焼付

モデル 十枚一組 大塚啓子 略号(れみ) 一〇〇〇円

短刀によって下腹を真一文字に切りさばいてゆく有様を血紅によって次々と経過をあらわし、全身

をうねらし、四肢を痙れんさして悶えるさまを刻々と描写した凄惨な女体血紅切腹の連続写真。

黒フンドシを誇る

大手札印画紙焼付

モデル 三枚一組 達藤百合子 略号(くわ) 三〇〇円

百合子の豊麗な裸身にきりりと美しいアクセントを添える黒フンドシ。臀部に喰い込む黒フン。

高压空気浣腸

大手札印画紙焼付

モデル 三枚一組 大塚啓子 略号(むい) 三〇〇円

高压空気ポンプによって、シューシューと送り込まれるエヤー。

浣腸場面大写真

大手札印画紙焼付

モデル 三枚一組 大塚啓子 略号(むは) 三〇〇円

臀部から三種の浣腸器に至るまで大写真で鮮明に捉えられました。

施される浣腸

大手札印画紙焼付

モデル 三枚一組 大塚啓子 略号(むろ) 三〇〇円

各種の浣腸器で他人から施される女体浣腸の大写真。

の瘦せ首が御主人様の太股の間でお締め頂いているからです。私は始めのうちきつとひどい下痢に悩まされるでしょう。何故なら貴女様の下さる餌にまだなじめないからです。でも私奴の肩も胃も息づかいもすぐに今までより生き生きとしてくるに違いありません。家畜の本分にあった暮しが、そうさせずには置かないでしょう。私奴の名前は「ペン」とお名付け下さい。貴嬢様の使役用、愛玩用として、いささかなりとも便利にお飼いい頂けるよう誠心こめて、又女王殿下のお便所ともなり上がり度い。真心をこめて、伏してお願ひ申し上げます。東京登録奴隷、現在飼主不明将来有光令子所有「ペン」より

○ 十一月号も前川氏不参で淋しい思いをいたしました。雪崎氏提供の女相撲絵、それに娘相撲の読物はたのしくよませていただきました。それに通信でも小生の投稿に対するおたずねもあり喜んでおります。何分生来の悪筆故、採用ならなかったとは思いますが、これにこりず裸女血斗のイメージを思いつくままに、投稿して参ります。その中、どれか採用になれば

皆様の御目にかかることがあるかと存じます。娘相撲文中のさし絵が近來になくよいものでした。たくましい農村の娘のふんどし一つの姿の美をあらわして余りあります。云うまでもなく女のふんどしの魅力は必要な所のみをかくし、夜の下着のように余分なところまでかくさないことです。特に若い女性の美しいお尻の双丘をわってきりりと結び上げられた「ミツ」のある後姿、ウエストをきゅっとしていてるところはふんどし一つの女性美に一段とアクセントをつけております。色は黒に限ると云う方も居られますが、私は黒の他にやはり女は女らしく緋朱等の如き赤系統のもの、又茹子紺、江戸紫、それに緋も紋縮緬のものも考えてよいでしょう。それに髪はプロの女力士のような力士髷もよろしいが、女性本来の島田髷銀杏返し、かたはず等の姿にあこがれています。美々しく結い上げた日本髪のおふんどし一丁の女の姿は正に倒錯美の極と信じています。「文献」の中の「御前相撲」の如く、日本髪のお女性のそれも度々描いていただきたいのには私とても同様の願ひです。特に「紅閨夢」のスター柳美那、美千代両女史をふ

んどし一本の姿にすれば全く素晴らしいでしょう。武智氏も案外このような作品を企画されるのではないかと思っております。本誌に対する批判が方々で起っています。が、それを皮肉る如き「紅閨夢」「白日夢」のヒットは近來にない快挙で、世の識者に対する痛烈な一矢として喝さいを送ります。最近ふとした機会に知人を通じてふんどし一つの裸女の無惨模様を描いて下さる方を知りました。目下ドラクロワの名作「サルダナパールの死」それにルーベンスの「アマゾン女兵の戦」を参考にこの両名作を日本化して描いてもらうことにしました。いずれもふんどし一つの女達の血みどろな無惨図絵にはあんしてもらいます。機会あれば皆様の御高覧に供したく思っています。(女斗彦)

○ 女性読者の皆様、始めてつたない便りを御目にかけます。皆様のよう美しい文章が書けませんので御読みづらいと存じますが悪しからず。私は女性の皆様に私のお臍をいじめて頂きたいのです。私には誰も相手の方がありませんので何時も奇巧の写真や映画雑誌のピンアップガールの前で一人お臍

新宮明夫氏提供

処刑場面写真

絞首刑

大手札二枚一組 三〇〇円
略号(るく)

引廻しと晒

大手札二枚一組 三〇〇円
略号(るに)

磔

(はりつけ)
大手札三枚一組 三〇〇円
略号(はみ)

晒

(さらし)
大手札三枚一組 三〇〇円
略号(さら)

絞首刑

大手札三枚一組 三〇〇円
略号(こけ)

晒台の生首

大手札三枚一組 三〇〇円
略号(のく)

斬首の瞬間

大手札三枚一組 三〇〇円
略号(のき)

斬首処刑場面

大手札二枚一組 三〇〇円
略号(くし)

女相撲四十八手

(1)

大手札六枚一組 八〇〇円
モデル 木村洋子、大塚啓子

略号(すは)

女相撲四十八手

(2)

大手札六枚一組 八〇〇円
略号(すむ)

女闘立術の応酬

大手札六枚一組 八〇〇円
略号(すち)

立術の攻撃場面

大手札六枚一組 八〇〇円
略号(すた)

寝業の女レス

大手札六枚一組 八〇〇円
略号(すほ)

女闘連続場面

大手札九枚一組 一〇〇〇円
略号(すく)

をいじめられる空想をしております。何方でも結構ですから私のこのお臍をいじめて下さい。若し直接御手を下すのが御嫌でしたら、私が自分で自分のお尻やお腹を鞭打ったり、お臍にローソクを立ててフラダスのようにお尻を振ったりするのを見て下さるだけでも結構です。又お写真を取って下さっても構いません。私は女性の方にいじめられたいとは思いますが肉体的に只苦痛を与えられるだけの残酷な責めには堪えられそうもありません。あくまでプレイとして楽しみたいと思います。こんな趣味の女性とお互いに責め合う事が出来たら、どんなに素敵な事でしょう。何方お手紙下さい。貴女もいろいろと私のお臍の責め方をお考えになって御命令下さい。貴女のその御命令通りに必らず致します。そしてそのありさまを写真とお便りで御報告致します。では御返事をお待ちします。なお居所は編集部にお届け致してあります。

(三重県△TII生△)

編集部並びに愛読者の皆様、如何お過しですか、お伺い申し上げます。私は一年程前ある古本屋でふと通りすがりにK誌を見つけま

した、その時の胸のときめきは忘れられません。顔を赤らめながらやっとの思いで買って、その店を大急ぎでとびだしました。それから毎月始めての時と少しも変らない思いで購入しております。私の好きなのは、夫婦あるいは恋人の間のSMプレイです。残酷極まりない責め嫌いです。ですから「花と蛇」「宇宙のどこかで」あるいは切腹に関する記事などは好きであります。お互いの意思が通じあい、理性と愛情のあるプレイができたなら素晴らしいだろうと思います。でもきつと実際に縛られたり鞭うたれたら、快感どころか嫌になってしまうかもしれません。本を読んだり、頭の中であれこれ空想しているだけのMだろうと思います。女の心理って、我ままです。リケイトで複雑です。こんな心理をよみとって下さる男性の方文通していただけないでしょうか。私は現在田舎から出てきて妹と二人でアパート生活をしているオフイス・レディです。(大阪市△井手雅子△)

九月号を始めて書店にて買い求めたものです。私と同じ様な慾望を持った方々の多い事を知って大

新作マゾ・フォト

(新人モデル)

人間馬の調教プレイ

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まの)

足舐めの奉仕と強制

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まわ)

股責めにあう顔面

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(また)

縛られて翻弄される

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まひ)

踏みにじられる顔面

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まな)

肩車に奉仕する青年

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まは)

玩具にする縛り人形

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まて)

首を太股にて絞あげる

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まや)

変うれしくなりました。今後共愛
読したいと念じて居ります。扱読
者通信にて東京世田ヶ谷区の清水
二郎様私に奉仕して下さい。私事
年令二十八才、体重四五キロ、身
長一五六センチ。私の体重ならば
馬も犬もつとまると思います。と
いうより、絶対に奉仕なさい。命
令します。貴男の通信を読んで約
半月考えましたけれど、どうして
も貴男でなければなりません。貴
男にきめてからずいぶんやみま
したけれど、この通信を借りて貴
男の会社の方の住所及電話番号を
教えて下さい。手紙又は電話にて
連絡をします。時間は、なるべく
ならば夜分の方が都合がよいので
す。貴男の思い通りの最高のプレ
イをやって差上げます。(東京都
△下原八重子△)

福岡の誌友の方々に、読者通信
で、お呼びかけします。読者通信
の諸氏が、東京や大阪に多くて仲
々九州の方々に眼にかかれな
のは残念です。それでも、店頭
にはK・K誌がたくさん並んで
半月程の間には売り切れてしまっ
ているようですから、愛読者は多
数存在していると考えてよいので
しょう。私は、生来のMです。S

女性と結婚したいと思っておりま
す。この稿をお読みの方で、Sと
Mを理解下さった上での結婚に関
心をおもちなら、半年程の御交際
をお願いしたいと思ひます。私は
三十二才の男性、公務員、月給四
万二千円、身長一米六十三、体重
六十二Kg。S女性の方の御好意
で、御召しがあれば、すぐに応じ
られます。馬にでも、椅子にでも
便器にでも、貴女の思いの通りに
御奉仕致します。ただ一つだけ、
SとMであるのは、夜だけで、昼
間は勤めもありますから、おゆる
しを願ひます。博多の地にも、必
ず素晴らしいサジスチンのおられ
ることを信じています。御連絡は
この通信が誌上にのった日から、
毎週土曜日の二時から二時半まで
東中州の日活ビルの九階のロビー
に、テレビをみながら、週刊現代
を横において、御待ちしております。
「貴方なの？」と、おたずね
下されば、その時から、女王様と
奴隷の六カ月間のテストをはじめ
て下さってけっこうです(福岡市
△中田竜一△)

秋冷の候、奇クの皆様には、お
元気でご活躍のことと心よりお喜
び申し上げます。さて、待望の東

刺青女体関連写真

華麗なる玉取姫の刺青を背中か
ら臀部、太股に至るまで一面に施
した山原清子さんの文藝的価値豊
かなフォトを、好事家、文献蒐集
家、マニヤの方々に分譲いたしま
す。時節柄誌上グラビア掲載を憚
かられますので、何卒印画紙焼付
にてお求め願ひます。

黒ふんどし入墨姿

大手札印画紙焼付
三枚一組 略号(くの) 三〇〇円

日本髪 of 全裸体に細身の黒ふん
どしをきりりと締め込んだお嬢さ
んが、ぐっと黒ふんどしの喰い入
った双丘を突き出して、その魅力
的なポリウムのある肉体を誇示し
ています。日本髪と入墨の肌と黒
ふんの三つの要素の美しさ。

黒フン媚態の魅力

大手札印画紙焼付
五枚一組 略号(くな) 五〇〇円

これまた又日本髪にて、すっかり
着物を脱ぎ去り、きりりと締めた
黒フンドシ一本の豊満な肉体で背
中や臀部の入墨や股に喰い込んだ
黒フンドシを十分見せながら演じ
る婀娜なしどけないポーズ。

黒禪背面模様

大手札印画紙焼付

三枚一組 略号(くこ) 三〇〇円

洋髪で黒フンドシをきっちり
締め込んだ清子嬢の入墨の美しい
背面をふんだんに見せています。

黒フン手吊り責め

大手札印画紙焼付
三枚一組 略号(くり) 三〇〇円

両手首を揃えて鴨居に吊られた
黒フンドシ一本の女体が爪先立つ
てくるりくりと回転するところを
前、後側面の三つのアングルで見
事な肢体をごろんにいれる。

全裸入墨姿態

大手札印画紙焼付
三枚一組 略号(いれ) 三〇〇円

刺青マニヤの方々に並に文藝的
コレクションしておられる方のた
めに清子さんに素裸になつてもら
って入墨の隅から隅まで、とくと
ごろんにいれます。

晒六尺フンドシ

大手札印画紙焼付
三枚一組 略号(ろと) 三〇〇円

日本髪——清潔な白のふんどし
が殊の外、朱と青の墨に美しいコ
ントラストを示しています。

白六尺一本の姿

大手札印画紙焼付
三枚一組 三〇〇円

京オリンピックもいよいよ開幕。各種目にわたって、女子選手の活躍が期待されていますが、残念ながら、女子柔道や女子レスリングはありません。まして、相撲を国技としている我が国において、女性の相撲がないのは、何としても残念なこと。そこで、ちよつと興味のあるのは、さきごろテレビの海外だよりで紹介された、ニュージーランドの女子ラグビーのことです。ニュージーランドはラグビーを国技としているそうで、国技であるラグビーなら、女性がやっても、いいはずだと、同国の女性たちが始めたのだそうです。試合は、激しいタックルの応酬や、取っ組み合いをやって、男子選手顔負けの勇ましい奮闘ぶりでした。これによつても、その国の国技なら、その国の女性たちがやっても別に不思議なことではないわけです。我が国でも、最近の女性の体格の向上はめざましいものがあります。このあたりで、国技である相撲が女性の間に取り入れられてもいい頃だと思えます。しかし、それはシヨ一的な女相撲や、女子プロレスではなく、健全なスポーツとして、普通の女性の間で行われるのが望ましいのです。女子高校相撲

選手権、女子大学相撲選手権、実業団女相撲、社会人女相撲、ひいては町内対抗女相撲大会など、想像するだけでも楽しいではありませんか。しかし、単に、空想の域を出ません。現実の社会では、女相撲など到底、実現しそうにありません。そこで、私は女相撲への欲望を、空想の世界に求めるのです。そして、それは全くの空想とはいへ、そこに登場する彼女たちは私の知っている実在の女性たちなのです。私は、彼女たちを意のままに取り組ませて相撲をとらせ楽しんでいきます。空想とはいへ、顔見知りの女性たちです。ので、実感が湧いてきます。これは、女相撲を楽しむ一つの方法ではないかと思えます。マニアの皆様も、お知合いの女性で一度お試しになられては如何でしょうか。では、奇クの今後のご発展と読者の皆様のご健闘をお祈りしてペンを置きます。(熊本八芦浦素舞夫)

瀬川さんの「湖畔月影抄」に敬意を表します。流暢な文章と堅実な考証は教養豊かで力量のある作家のものであり、その少年少女の切腹という主題の特異性が、奇クに多い素人作家(わたしを含めて)

略号(ろに)
洋髪——坐り、中腰、立ち、いずれも入墨の背面と白いフンドシの尻への喰い込みを中心素晴しい美しを狙いました。

白禪後手高手小手

大手札印画紙焼付

三枚一組 略号(ろし) 三〇〇円

ぎゅうぎゅうと力まかせに縛り上げた二の腕から後手首、首縄、只でさえ大きな乳房がむくれたようにくびれている。

日本髪全裸強烈縛

大手札印画紙焼付

三枚一組 略号(いら) 四〇〇円

可憐な高島田で可愛い顔の清子嬢だが、背面一ぱいには見事な入墨。そのアンバランスに對して全身にぎりぎり巻きつけた蛇のような縄。両の足首にまで肌を喰い入る縄目。真白い肌が紅を刷いたように色づいて、ふるいつきたいように美しい。身動きのできない身体を蹴倒せば、海老のように全身を曲げて喘ぎ、呻めき、そして恍惚とした表情になる。

洋髪全裸強烈縛

大手札印画紙焼付

三枚一組 略号(いこ) 四〇〇円

豆絞りの猿ぐつわをかまされた清子嬢の全裸身に、きびしく捌か

れる高手小手の縄目。入墨の美と緊縛姿態の美を最高に發揮しつつ女体責めのムードをむんむんと発散させ、写真の中から香わしい女臭と吐息の洩れだしそうな緊迫感あふれる傑作です。

日本髪全裸股間縛

大手札印画紙焼付

三枚一組 略号(いさ) 四〇〇円

入墨に映える全裸身に、乳房も潰れよとばかり強烈な縄が二の腕と胸、後手を締めつけている。更に胴もくびれる腰縄、股間縛りとS的ムード溢れる素晴らしい緊縛姿態が、この三枚のフォトに結集しています。殊に、島田髻の全裸身は、稀少価値も満点です。

可憐島田髻全裸縛

大手札印画紙焼付

三枚一組 略号(いみ) 四〇〇円

これは又まことに可愛い島田髻のよく似合うお嬢さんです。可憐さ、餅肌の麗しさはよくわかって貰えると思います。全く美しい裸身です。でも、その豊満な裸身には刺青が見事に彫られていて、お添えものまでついていて、このエッセントリックをごらんになって下さい。

◎ 女性モデル

◎ を募ります

○本誌では、口絵写真並に限定版用或は分譲写真用の女性モデルの方を募っております。

○誌上発表支障の方は、限定版又は分譲用フォトに出演していただきます。又、助手介添若しくはプレイのみ出演御希望の方でも結構です。

○出演或は参加御希望の方は、編集部宛御照会下されば、報酬その他詳細お返事の上、お打合せいたします。応募の方の秘密は厳守いたしますから御安心の

うえ応募下さい。

○緊縛写真御希望者は勿論のこと女相撲、女斗美、切腹、浣腸などを初めとして、Mフォトのサジスチンとして出演ご希望の方など特に歓迎します。

○本誌の充実のため何卒奮ってご応募下さい。余暇を利用してのご参加でも差支えありません。特に妊婦フォト撮影可能の方は遠近に拘らずご連絡下さい。

天星社編集部

のように、作品がなんとか読まれるための支えになっているのではなく、文学に新しい分野を開拓しようとする文学者の真摯な努力を見るのです。人格そのものである文体のゆかしさが文才と教養とを美しく潤して、奇クの数少純文学作品として輝き匂っています。匿名で投稿された既成の閨秀作家かも知れませんが、またあるいは男性の方かも知れませんが、愛読した者の一人としていつわらぬ感想を迷べさせて頂きました。(福田久文)

佐々木耳環鼻環生様、奇ク十一月号にて通信を拝読したM七〇生です。先輩？は間違いないければ、昔？女房の指が平気で通るとか、ミリは忘れましたが、意外に鼻孔の同好者が居るのには吃驚りします。私は小さくて駄目です。先輩は恐らく軟骨を外科医に依り切除したと判断します。私も最初に突き刺す方法が下手だったかも知れませんが、事実軟骨が有る故、私の拡大工作は不可能です。現在は考案した栓を挿入し縮小防止をしてい

ます。肉体が生きている以上当然ですが、先輩は孔をその俤にして居られますか。例えば五ミリにして完全に栓を抜けば最小一ミリ位に残ると思います。プレイ用に鼻孔を作りました。一度栓を取り焼いた火箸を孔に入れ孔の周囲を焼きました。二、三時間は堅く白い孔になりましたが、すぐ元に戻りました。其の上化膿してしまいました。私は現在或る個処に孔を第三者に容赦なく工作されたと考えています。鼻孔と併用又は単独に鼻に吊り梁に手足鼻をして狸吊りを最少器具で最大の効果？鼻環で鎖止めし手足を後で括くる鎖逆括り責め、こんな事は邪道でしょうか。就中S女性に施されたらMの最高と思います。先輩は鼻孔用の種々の責め器具も揃ってる事でしょう。出来る事なら中間の都市に同好の士が集会を開いては。そしてお互いに孔の大きさの比較、器具の研究、実物展示孔工作法及び器具薬品、実施伝授。その際私でよければ喜んで献身致します。奇ク通信でお待ちします。(名古屋△M七〇生▽)

大宮町の中川様。貴女の投稿を見て出来れば御逢いし共に話し合

い、そして御互の悩みを解決する事が出来たらと思ひ御便りする次第です。小生三十五才になる中企業に勤めるサラリーマンです。そして一度でもよいから若い美しい女の人を縛り高手小手、逆えび、えび責等で身動き出来ぬ様にして美しい鼻をいじめ乳房責を又浣腸責をして見度い、そして縛られた美しい姿を心ゆく迄眺めて見る事が出来たらと思ひ居りますが、今迄一度としてその様な機会に恵まれる事なく今日迄悩み続けて居ります。此の様な僕です故、貴女の求められるアイデアなるものも浮ばず、甚だ頼りない有様ですが一度御逢い下さい。そして二人して語り合いそして新しいアイデアを生み出して、御互に満足出来る様にしましょう。少し早目に御知らせ下されれば平日でも少々遠い処へでも喜んで行きます故誌上に御知らせ下されば連絡先等は編集部へ御知らせ致します。(布施市△中村哲夫▽)

初めてお便りします。私はKKを愛読しまして丁度七年になります。一度は読者通信で皆様と仲良しになれる事を希望してまいりましたが、生れつき筆不精がわざわざ

いして一度も便りを出さないで皆様方の声を拝読していました。私はSM両方ですが八、二位でSの方が好きです。当年三十五才の農村青年です。私は同年位の純情なこれから私の好きな様に飼育出来る様なMの方をさがしていました。九月号の大阪市の中川芳子様の投書を読みまして、こんな人があるのかしら、と何回も読みました。嬉しさが十なら、こわさが一位でしょう。とうとう便りを書く気になりました。どうかあつかましいですが私と交際して下さい。大阪迄も出張します。私のアイデアとしまして、こんなのかしら「高手小手あぐら縛り」きつと体が動かないのと痛いので、責められる気分は満足出来る事と思います。大道具はありませんが小道具は大分揃っています。九月上旬過ぎになりましたので稲刈りも一段落しました。読書の秋、良い便りを誌上で待っています。(千葉県八根本通雄V)

個性のある編集で着実に発行されていきます奇クに、いつも関心を

いただいています。当市にも四軒もの書店で奇クは販売されています。たのに、今は近所の養料品店兼業の一軒をのこすだけとなりました。それだけにいっそう奇クの特異な存在が守られねばならぬと思っています。そういう私は購読者として気ままな方で、せっかくの文献資料をもっと大切にそのつど集めておくべきだったと悔むことがしばしばです。そして一方では奇クとの出会いからもう十数年もの年月がたっています。これに、深い感慨をおぼえさせられています。さて今日はそんな私のお願いですが、同封の封書を水野弘さん(十月号の奇クサロンに記事の出ています)に御回送下さいませんでしょうか。水野さんと文通したいと思つてのことです。お忙しいところ、まことにすみません。が便宜をおはからい下さい。(秋田市八海原利夫V)

小生奇クの愛読者です。現在毎号直送してもらつて購読しています。浣腸に特に興味を持っております。愛読者になったきっかけは、もう

次号(一月号)は十一月二十五日に発売いたします

大分昔の事です。羽村京子さんの「狂い咲くカンナ」を読んだからの事です。貴社が発行された浣腸の写真、絵なども大分蒐集しました。今までに、特に印象の深かったものをあげますと、最近では「花と蛇」の文章と、その挿画、古いものでは十年程前に浣腸シリーズとして頒布された五枚一組の内、下着一枚の女性が、腰の上まで捲られ、お尻をこちらに向けて男性の手でリスリンを挿入されているところ。モデル嬢の上向きになった顔の表情、割れ目を押しあけている男性の手。嘴管が明らかに肛門へはいっているのが分るその構図など実にすばらしいものでした。もう一度あのようなのが出ないものかと期待しています。なお、私は四馬考画伯のファンで必ずしも浣腸物でなくても、画伯の画には心を惹かれるものが多々ありました。最近では「泣け泣け蟬」のグラビアなど実によかったと思います。画伯の絵は一時あまりリアルな感じを出そうとしてか人物(女主人公)の顔が少し醜い感じになっていました。最近では又綺麗な顔の女性が描かれるようになって嬉しく思っています。やっぱり主人公の女性は美人である

方がよいように思います。それから以前誰かが指摘されていましたが、画伯の浣腸面の浣腸器の描かれ方が、すこしお粗末なように思えます。御自身マニヤでないからかも知れませんが、少くとも浣腸の絵では浣腸器が大切な役割を果すはずですから、その点にももう少し気をくばっていただけたらと思います。画伯の麗筆がますます冴えて今後更にマニヤを喜ばせて下さる事を期待しています。なお別便で小生の描いた拙い浣腸画をお送りしました。これは友人(某薬品問屋の主人)から聞いた実話をもとにして描いたものです。同じ絵ですが色の薄い方があとで描いた方です。これは某製薬会社が顧客達を招いて行なった新しい浣腸薬(業務用)テストの光景です。モデルは、同社きつての美人であるうら若い未婚の女子社員。彼女は文字通り一糸纏わぬ全裸の姿で診察台上に仰臥させられ、台の上には最後に引き剥がれた純白のパンティが投げ出されています。絵は私の空想によるものですが、あくまで実話をもとにしたものです。世間には案外同好者が多いものだという感を深くしています。(大阪市八蛇野丸雄V)

五十万円懸賞原稿募集

先月号で五十万円懸賞の原稿を募集しましたところ、いち早く数篇の応募原稿が送稿されてまいりましたが、残念ながら入選作品として掲載するに耐えるものは見当りません。引続いて募集を継続いたします。秋の増刊にふさわしい佳作をお寄せ下さるようお願いいたします。

賞　金

一	席	各	拾	万	円	一	名
二	席	各	五	万	円	二	名
三	席	各	参	万	円	五	名
四	席	各	壹	万	円	十	名
五	席	各	五	千	円	十	名

愛読者原稿募集

△体験、告白、手記△

どなたにも一つや二つの思い出とか、体験とかいったものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるもの。たとえばどうか皆様の真実の叫びを、しどし文字にしてお寄せ下さい。採用篇には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

△創作、小説、物語△

御自分の描く夢をまとめて

規　定

- 一、本誌の読者に提供するに適當したS・Mを中心とした創作、小説などのフィクション。告白、体験、手記、或は論説、意見など形式は問いません。S・Mの他、フェチ切腹、浣腸その他特異な趣向のものも大いに歓迎いたします。
- 一、すべて未発表の自作に限ります。
- 一、枚数は原稿用紙五十枚以上のこと。
- 一、締切は別に定めませんが、入選作品は翌月号に発表の上、賞金を呈します。
- 一、応募原稿には「懸賞作品」と赤エンピツにて肩書きして下さい。

天星社編集部

下さい。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。

△(映画、雑誌)通信△

映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下さるようお願いいたします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

△レポートマニヤ通信△

新聞記事等で関心をお持ちの事項或はマニヤ各傾向の本誌に対する通信をお寄せ下さい。本誌二月分贈呈します。

◎尚、以上の五項目の採用原

△読者通信△

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に対する希望や御意見、感想、思い出話、或いは読者相互の交歓文通、応答などをお寄せ下さい。

△奇クサロン△

奇クサロン向きの短文、マニヤ通信、写真絵画などを募ります。文章は原稿用紙三枚まで。採用篇には薄謝進呈します。

☆本誌御購読の栞☆

一月分(1冊) 三〇〇円△送共△
三月分(3冊) 九〇〇円△送共△
半年分(6冊) 一八〇〇円△送共△

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価三〇〇円

十二月号 (第十八巻第十三号)
(通刊第一九七号)

昭和三十九年十一月二十日 印刷
昭和三十九年十二月一日 発行

編集印刷兼発行人 箕田 京二
大阪阿倍野局私書函第十四号

発行所 天星社

(振替口座大阪五〇〇四二番)
(昭和三年四月二日第三種郵便物認可)
(国鉄大局特別扱承認雑誌第一二二二号)

☆代理部分譲品について☆

○代理部分譲品は本誌に広告してある分は全部在庫しておりますから、略号明記の上お申込み下さい。尚、分譲品の詳細は、目錄を御請求の上ごらん願います。
○既刊雑誌の旧号は別項の通り在庫していませんから、売切れぬ中御注文願います。
○口絵写真の複写転載は固く禁じます。